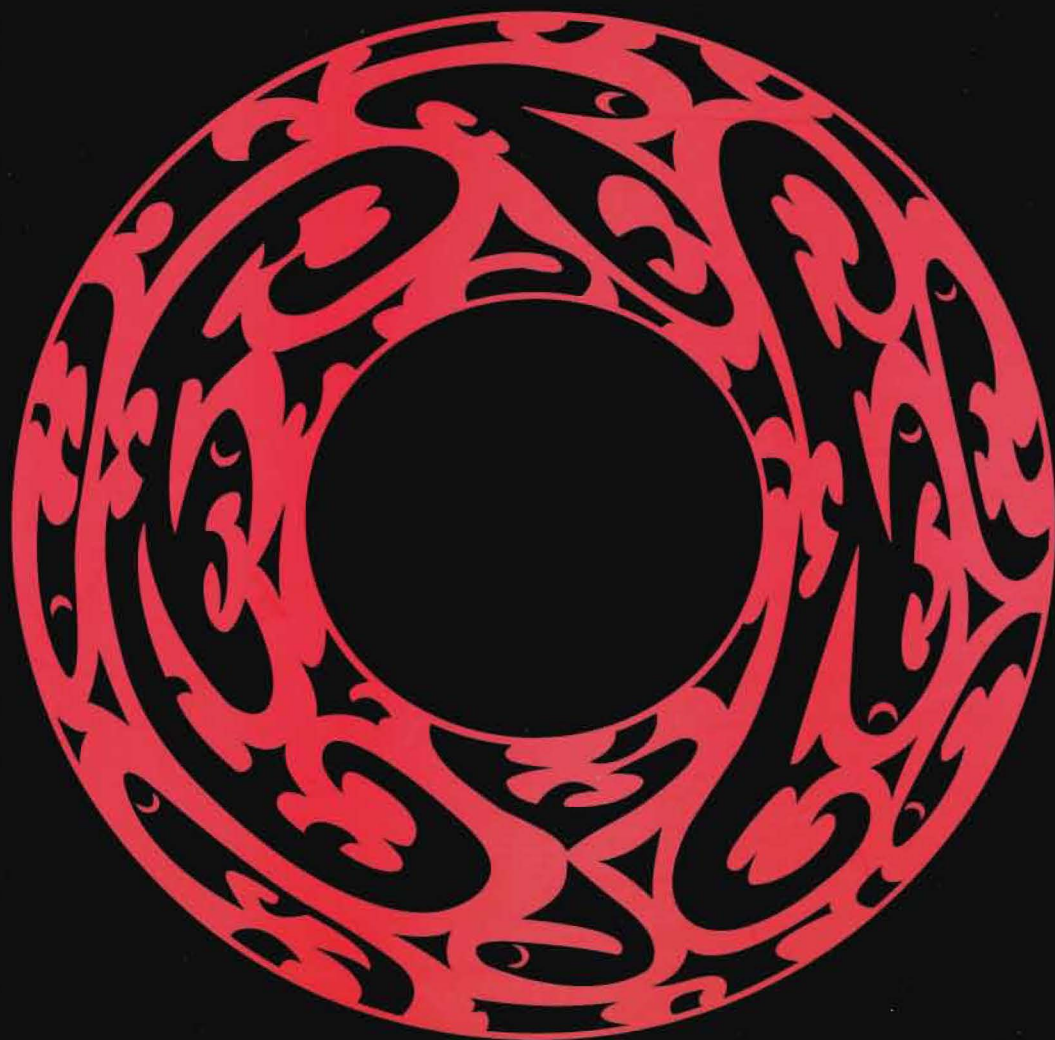


# 亀ヶ岡文化雑考集

(付・研究報告索引)



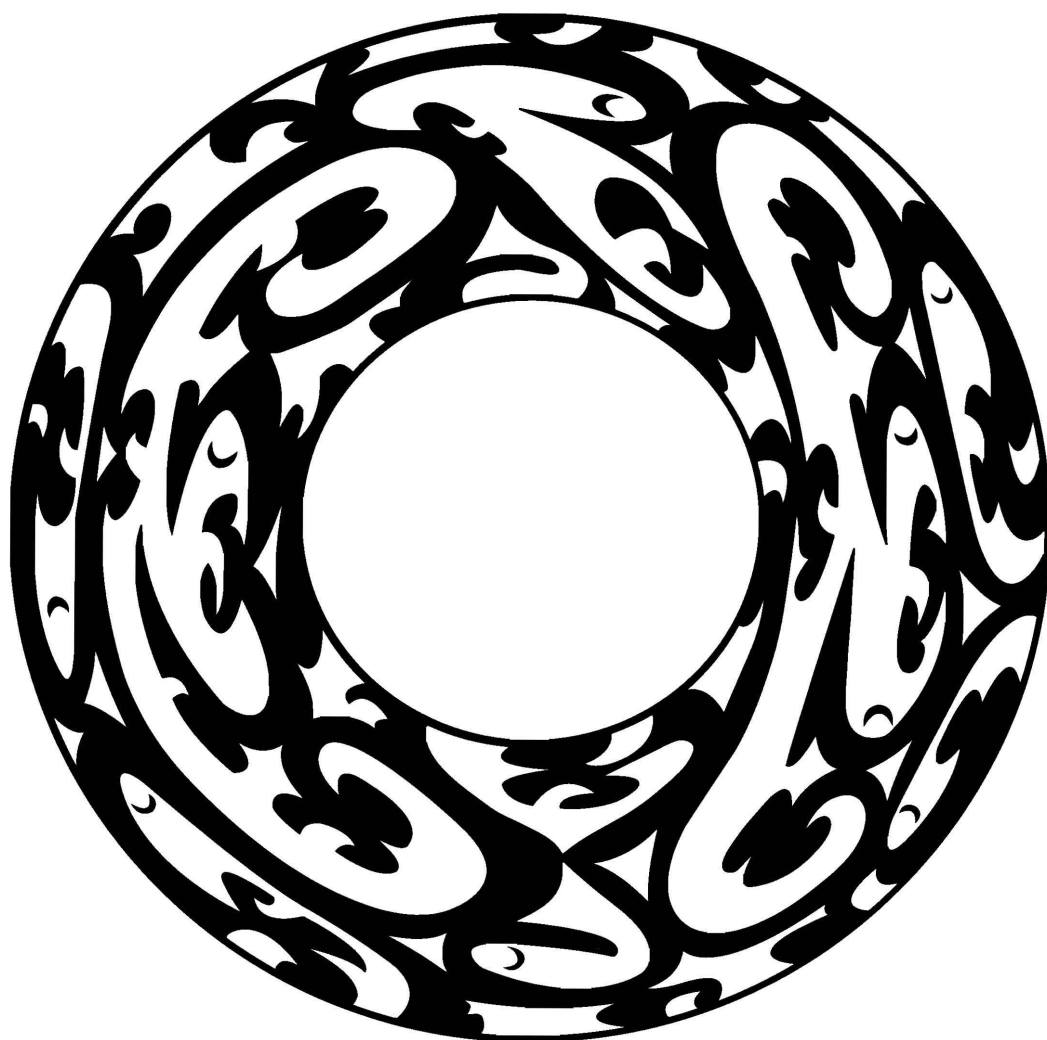
頑張れ！亀ヶ岡文化

弘前大学人文学部附属 亀ヶ岡文化研究センター

(弘前大学人文学部 日本考古学研究室研究報告7)

# 亀ヶ岡文化雑考集

(付・研究報告索引)



頑張れ！亀ヶ岡文化

弘前大学人文学部附属 亀ヶ岡文化研究センター

(弘前大学人文学部 日本考古学研究室研究報告7)



## はじめに

人文学部の校舎の改修にともない、日本考古学実習室は教育学部や総合教育棟の小さな教室に分散して間借りし、その上、日本考古学研究室も使用できなくなった。実習室の引っ越しで、藤沼や学生が作成した遺物の実測図・拓本・写真、遺物の集成・出土遺跡の一覧などを整理してみると、その中にはただ捨て去るにはもったいない資料が含まれていた。藤沼も途中までまとめていた論文がいくつかあったので、学生と相談すると、学生は自分たちの作成した実測図もあるので何らかの形でまとめたいという。しかし、考古学ゼミの今年度の最重要課題は、昨年度の夏に調査した青森県三戸町の杉沢遺跡の発掘調査報告書の作成と刊行であったので、その付録としていくつかの論文・資料紹介を加えることにした。杉沢遺跡の報告書は、執筆しているうちに大部のものとなり、付録としていくつかの論文や資料紹介を加えることは不可能になった。そこで論文や資料紹介を独立させて「亀ヶ岡文化雑考集」(研究報告7)として刊行し、それにこれまで刊行した研究報告の文字索引・実測図索引を付け加えることにした。一年間に本を2冊作るなんて、まさに定年退職を前にした暴挙である。これで定年ギリギリの3月末まで朝から夜遅くまで学生と一緒に忙しき毎日をおくることになった。

「亀ヶ岡文化雑考集」には、地域社会との連携を考え、亀ヶ岡式土器の文様を徹底分析し、デザイン化を試み、津軽の伝統産業である津軽塗りになどに応用できないか、なども取り上げた。また、魍魎魍魎が乱舞する暗闇の世界に立佞武多の遮光器土偶を登場させ「頑張れ！亀ヶ岡文化」と檄を飛ばした絵も登場する。

日本考古学研究室の研究報告第1集は平成15年度に刊行したので、今回の研究報告を加えると、5年間に7冊刊行したことになる。財政のきびしいおり、図や写真の多い本を刊行できたのは弘前大学の学長や人文学部長を始めとする各方面からの応援があったからである。研究報告の題名を発行順に掲げてみよう。

第1集 『亀ヶ岡文化遺物実測図集』	平成15年度
第2集 『青森県東津軽郡平舘村今津遺跡発掘調査報告書』	平成16年度
第3集 『ミニ特別展「亀ヶ岡文化の世界」図録』	平成17年度
第4集 『亀ヶ岡文化遺物実測図集(2)』	平成17年度
第5集 『亀ヶ岡文化遺物実測図集(3)』	平成18年度
第6集 『青森県三戸郡三戸町杉沢遺跡発掘調査報告書』	平成19年度
第7集 『亀ヶ岡文化雑考集(附・研究報告索引)』	平成19年度

以上の研究報告の表紙には図を入れて、その下に「頑張れ！亀ヶ岡文化」と銘打ってきた。この研究報告7の完成とともに定年を迎えることができると思うとなんとなく嬉しい。

なお、第7集『亀ヶ岡文化雑考集』の刊行には平成19年度の学部長裁量経費などを使用した。

平成20年3月

弘前大学人文学部日本考古学研究室

弘前大学人文学部附属 亀ヶ岡文化研究センター

弘前大学大学院地域社会研究科

藤沼 邦彦

## 目 次

はじめに

江戸時代の文献に見る亀ヶ岡遺跡 藤沼邦彦…………… 1 頁

亀ヶ岡文化の遺物の紹介

－弘前市薬師遺跡・五所川原市観音林遺跡・三戸町杉沢遺跡、東松島市里浜貝塚－

宮本明日香・五十嵐 愛・佐藤夏子…………… 15 頁

亀ヶ岡文化の土偶（附、仮面）の紹介

－岩手町高梨遺跡・八幡平市長者屋敷遺跡・つがる市亀ヶ岡遺跡・弘前市薬師遺跡など－

赤坂朋美・秋山真吾・藤沼邦彦…………… 21 頁

平川市唐竹出土の十字形土偶について

藤沼邦彦・萩坂華恵…………… 35 頁

東北町田の沢(3)遺跡出土の壺

藤沼邦彦・佐藤千絵…………… 41 頁

無地という用語について

藤沼邦彦…………… 47 頁

亀ヶ岡文化における彩文土器

藤沼邦彦・秋山真吾・赤坂朋美…………… 49 頁

青森県五戸町大久保遺跡出土の縄文中期の顔面付土器

藤沼邦彦・栗原 徹…………… 69 頁

蓑虫山人の「陸奥全国神代石古陶之図」と青森新聞の「第二回弘前博覧会縦覧の記」について

藤沼邦彦・深見 嶺・工藤清泰…………… 79 頁

亀ヶ岡文化における岩偶について

澤田恭平・藤沼邦彦…………… 105 頁

亀ヶ岡式土器文様のデザイン・図案集

藤沼邦彦・須藤真由美・赤坂朋美・五十嵐 愛

宮本明日香・佐藤千絵…………… 115 頁

亀ヶ岡文化と亀ヶ岡式土器（最終講義抄）

藤沼邦彦…………… 141 頁

索引（弘前大学人文学部日本考古学研究室研究報告 第1集～第7集）

五十嵐 愛・宮本明日香・佐藤千絵

立花晃一・藤沼邦彦…………… 149 頁

## 江戸時代の文献に見る亀ヶ岡遺跡

藤沼 邦彦

亀ヶ岡文化の名称の由来になった津軽の亀ヶ岡遺跡は、江戸時代からすでに数多くの土器が出土するところとして著名で、各種文献にも色々な形で登場する。とくに有名な文献は、中谷治宇二郎によって詳しく紹介された『永禄日記』といわゆる『菅江真澄遊覧記』である。このほかに弘前藩の人々が書き残した膨大な古文書の中にも、亀ヶ岡遺跡出土の土器に関する記事が散見する。また、その出土品（土器・土偶）は江戸まで運ばれ、文人の好奇心をくすぐり、古物収集の対象となっている。したがって、江戸の文人たちの随筆にも亀ヶ岡遺跡の出土品が登場することになる。全国に数多く存在する縄文遺跡のなかで、江戸時代のうちに土器などの採集を目的に発掘がおこなわれた可能性があるのは亀ヶ岡遺跡だけであろう。ここでは、江戸時代の文献を中心に、①亀ヶ岡遺跡に関する江戸時代の文献にどんなものがあるのか、②縄文土器に関する最古の記録といわれる館野越本『永禄日記』の元和九年条の再検討、③考古学史における菅江真澄の業績、④江戸時代の人々が亀ヶ岡遺跡とその出土品をどのように考えていたか、⑤亀ヶ岡遺跡や出土品に関わる人々の交流関係、⑥江戸時代に於ける亀ヶ岡遺跡の意義、などについて順不同で考えてみたい。

なお、小論を書くにあたって、中谷治宇二郎・清野謙次・成田彦栄・内田武志・村越潔・福田友之などの先行研究を参考にさせていただいたことを明記しておきたい。

### ○ 亀ヶ岡遺跡の概要

亀ヶ岡遺跡は、青森県つがる市木造町館岡字亀ヶ岡にある。青森県津軽半島の西南部に位置し、西海岸（日本海岸）沿いに延びる館岡丘陵から津軽平野につきでた標高20mほどの舌状台地を中心に、その南北の谷地までおよぼ広大な遺跡である。日本海までの距離は、屏風山丘陵を越えて、直線にして約4kmである。低地にはクルミやトチノミの殻を大量に含む泥炭層が発達し、土器や石器のほかに籃胎漆器など植物質の遺物が数多く出土している。

亀ヶ岡遺跡は江戸時代から多数の土器が出るところとして知られ、津軽地方には亀ヶ岡遺跡を中心とした出土品を集め、楽しむ好事家が出現し、彼らのもとから土器や土偶が江戸まで送られた。明治に入っても、この状況が続くことは明治13年の第2回弘前博覧会の出品目録や蓑虫山人の描いた『陸奥全国神代石古陶之図屏風』などからよく分かる。また、考古学・人類学の勃興期をむかえ、東京人類学会が結成されると、古くから多量の出土品が知られていた亀ヶ岡遺跡は、遺物収集期でもあった人類学・考古学の恰好の標的となった。とくに、明治22年に東京大学の佐藤伝蔵によって大規模な発掘調査が低地を中心におこなわれ、遺跡の内容や成因、大量の遺物について詳細な報告がなされると、亀ヶ岡遺跡は考古学界における不動の位置を占めることになる。その後、しばらく、大学・個人による学術調査はなされていないが、個人研究者やコレクターによる遺物採集、それらに供与するための地元民による発掘がさかんに行われ、優品は東京人類学会雑誌に絵入りで紹介された。その結果、他の遺跡で出土した土器であっても、亀ヶ岡遺跡出土の土器と似ているものは、亀ヶ岡式土器と呼ばれ、その型式の土器を使用する文化も亀ヶ岡文化と呼ばれるようになった。

昭和3年に県による仮指定、そして昭和19年に近くにある田子屋野貝塚とともに国の史跡に指定された。地元の展示施設として、JR五能線木造駅の近くに「木造町縄文住居展示資料館カルコ」、遺跡の近くに「縄文館」があるが、ともに学芸員などは配備されておらず、課題も多い。

なお、亀ヶ岡遺跡の代表的な学術的調査は、①明治22年の若林勝邦、②明治28・29年の佐藤伝蔵、③昭和25年の三田史学会、④昭和48年の青森県教育委員会、⑤昭和55～57年の青森県立郷土館による

もので、それぞれ報告あるいは報告書が刊行されている。

### ○ 館野越本『永禄日記』の登場

亀ヶ岡遺跡は、「奇代之瀬戸物ほり出し候所也」として日本考古学史にデビューする。この魅惑的な文章が登場するのは『永禄日記』という稿本で、それを最初に紹介したのは、中谷治宇二郎の「東北地方石器時代遺跡調査予報」（中谷1929）であるが、『日本先史学序史』（1935）で、さらに詳しく述べられている。これには青森市にある三内村の遺跡も登場する。あまりにも有名な文章であるが、館野越北畠家蔵のいわゆる館野越本の『永禄日記』からその部分の原文を取り出してみよう。

一 元和九癸亥年正月元旦天氣能

○ 二日弘前下鍛冶町火事、

○ 近江沢御城築之事相止、此所城下ニ相成候ハ、亀ヶ岡と可申由」此所より奇代之瀬戸物ほり出候所也。其形皆々かめ之形ニ而」御座候。大小ハ御座候へ共、皆水ヲ入ルかめニ而御座候。昔より多ク出候所也。」昔何の訳ニ而此かめ多土中ニ有之事不故知候。其名ヲ取て」亀ヶ岡と申候也。又青森近在之三内村ニ小川有、此川より」出候瀬戸物大小共ニ皆人形に御座候。是等も訳知レ不申候」

内容は中谷の紹介文とほぼ同じであるが、中谷は下線の部分を「何々沢にて」とまちがって読んでいる。また、中谷は、近江沢城の造営工事で土器が出土したように解したため（中谷1928、1929、1943）、多くの研究者がそのことを引用するが、原文をみても分かるように、造営工事で土器が出土したとは書かれていない。原文を要約すると次のようになる。

①元和9年（1623年）近江沢での城の造営が中止になった。

②この城が完成したら亀ヶ岡城とよばれる予定であった。

③亀ヶ岡からは、みな「かめ」の形をした大小の「奇代之瀬戸物」が昔から多く掘り出されている。

④亀ヶ岡の土中になぜ多数の「かめ」があるのか不明である。

⑤土中に多数の「かめ」があるので、亀ヶ岡とよばれるようになったのである。

⑥三内村にある小川から瀬戸物がでるが、大小共にみな人形である。何故かは分からない。

中谷は、『永禄日記』のこの記事について、「石器と共に埋没してある先史期の土器は、何れの国にあっても最近世まで人々の注意を逸し勝のものであって、それが古記録に現れると云ふ様な事は極めて稀であった。然るに我国にあっては、土器が特に豊富であると云ふ事実があったにしても、十六世紀の最初、即ち石器が近世再び人々の認識に上がったよりも一世紀以前に、偶然とは云へ既に記録されていたのである」と評価し、「是は一つの不思議な事実である」とまで述べている（中谷1935）。これによって、『永禄日記』は縄文土器に関する最古の記録として認定されるにいたり、芹沢長介の『石器時代の日本』（1960）をはじめ、磯崎雅彦「亀ヶ岡式土器研究小史」（1977）、勅使河原彰の『日本考古学史』（1988）、福田友之の「亀ヶ岡文化の世界」（1991）などに引用されてきた。

### ○ 館野越本『永禄日記』の検討

この「不思議な事実」について最初に疑問を抱いたのは、青森市在住の研究者、成田彦栄であった。成田は『先史学序史』の引用する『永禄日記』の記事に興味を持ち、所蔵する『永禄日記』三種と比較して見たところ、この記事が館野越北畠家蔵（館野越本とよぶ）の『永禄日記』にのみあって、他の写本に収録されていない事を発見し、流布本が一樣でないことに気がついたという（成田1955）。さらに成田は研究を進め、原本に近い『永禄日記』は、山崎家で家記として書き継がれて来たものを、山崎立朴が整理、清書したもの（いわゆる東京本など）で、完成したのは安永7年（1778）であろうと考えた。中谷が云うような弘前藩の記録ではない。この系統の写本の元和九年条を見ると「去年七月中旬殿様十三御一見之為御出にて、亀ヶ岡御見立有、此所元ノ名近江沢と申し候。普請惣奉行森内



左兵衛、大湯彦左衛門。然処今年御在江戸ニ而御延引、其内ニ一国一城之外城築停止ニ御座候而、御止被害成候」とある（復刻版『永禄日記』みちのく双書第一集）。幕府の一国一城制のため、亀ヶ岡城の築城を停止したことは書かれてあるが、亀ヶ岡や三内村での瀬戸物発見の記事は書かれていない。

また、同じ立朴が編集・清書した館野越本の『永禄日記』は、亀ヶ岡や三内村などの土器についての記事が入るなど、他の『永禄日記』とは相当内容が異なる部分があることから、成田はこれを別本として尊重すべきであろうと考えた。成田は、はっきり書いてはいないが、館野越本の『永禄日記』にある亀ヶ岡遺跡や三内遺跡の記事は、当時の記録に基づいたものではなく、山崎立朴が新たに加筆した可能性があると考えていたようである。こうした成田の指摘によって、『永禄日記』館野越本の「（亀ヶ岡）此所より奇代之瀬戸物ほり出候所也」云々の記事の再検討が、村越潔や上野武などによって行われるようになった。

村越潔は、館野越本の『永禄日記』を直接調べ、元和九年条の原文を初めて写真で紹介し、これまでの釈文に若干の違いがあること、近江沢城と亀ヶ岡遺跡は、直線にして約1300メートルも離れている、などの点を指摘した（村越1970）。また、『平山日記』や『津軽一統志』には、亀ヶ岡城の築城に関する記述はあるが、土器発見に関する事柄がみられないとして、この部分は「立朴が風説を聞いて、編集時に挿入したのではないと思われる」とした（村越2001）。

また上野武は、立朴がそのころ（寛政の頃）津軽に逗留していた菅江真澄と親しく交際しており、二人の間で亀ヶ岡や三内村で出土する土器について話題になったことが反映しているとし、三内村に関する記述が、館野越本『永禄日記』と真澄の『栖家の山』とで内容がほぼ一致しているのは、館野越本『永禄日記』の土器出土の記事が、立朴による補筆であることを推定させる有力な証拠となるとした（上野1983）。上野のこの指摘は重要である。寛政8年3月15日に、真澄は初めて館野越（現板柳町）に住む医師である立朴宅を訪れるのであるが、二人は意気投合し、すっかり親しくなってしまう。その後も、真澄はしばしば立朴宅を訪れ、会えば夜遅くまで話し込んだり、病気の時も立朴宅に逗留したりしている（森山1972）。また、真澄は、三内村で土器・土偶を見る約2ヶ月前に立朴に会い、亀ヶ岡を訪ねる約20日前にも会っている。勿論、その後も親しく交流している。こうした状況の中で、古物に関心のあるこの二人の間で、亀ヶ岡の土器や三内村の土器・土偶について意見が交換されないはずがない。上野の推測通りであろう。とくに三内に関する館野越本と『栖家の山』の記述は、(1)小川（古堰の崩れ）から出土品があること、(2)土偶（人形、人の頭・仮面の形）を取り上げているなど、きわめて類似性のある内容となっており、二人の間で意見交換があったことを推定することができる。おそらく館野越本に亀ヶ岡や三内村で出土する土器について加筆されたのは、二人が頻繁に交流していた寛政8、9年ころであろう。

なお、明治20年頃描かれた蓑虫山人の『陸奥全国神代石古陶之図屏風』を見ると、土偶の絵の脇に「瓶ヶ岡所獲 館越村北畠氏有」と書き込みがある。北畠氏は、館野越の山崎氏（中世に浪岡城に代々居住した北畠氏の子孫。津軽氏に憚って山崎氏に改姓したという）のことで、明治15年に願い出て、名族の姓である元の北畠に復姓したものである。この土偶をいつごろ誰が入手したのか不明であるが、北畠家（山崎家）に土器や土偶に関心をもつものがいた事を示すもので、これが立朴であってもかまわない。

立朴が、館野越本の元和九年条に、亀ヶ岡で土器が出土することを付け加えた真意は、「この城がもし完成していたなら、縁起のよい亀ヶ岡の地名をとって亀ヶ岡城下と呼ばれる予定であった。その縁起の良い亀ヶ岡という地名は、地中から形も大きさも様々な焼物が沢山出るところから、付けられたのだ」といいたかったのであって、けっして「元和九年に焼物が発見された」とか「お城を作る工事で沢山の焼物が出た」とかは言っていないのである。原文をよく読んでみよう。「此所より奇代之瀬戸物ほり出候所也」以下の文章は亀ヶ岡という縁起のよい地名の由来を説明するためだけのもので

あることが分かる。

なお、工事が中止となった亀ヶ岡城跡は、つがる市（旧木造町）亀ヶ岡字近江野沢にあり、土塁や空堀に囲まれた郭などがよく残っている。亀ヶ岡遺跡は、亀ヶ岡城跡の北東にあり、その距離は約1300mあり、重複することはない。また亀ヶ岡遺跡では築城工事が行われたような痕跡は見られない。亀ヶ岡遺跡の現状に詳しいつがる市教育委員会の佐野忠史もそのような痕跡を見つけることができないという。したがって、考古学的観点からも「お城を作る工事が亀ヶ岡遺跡までおよび、そのため沢山の焼物（土器）が出た」ということはあり得ないのである。

結論として、館野越本『永禄日記』の元和九年条の土器・土偶の記事はその当時書かれたものではなく、寛政8、9年に書き加えられた可能性が大きい。したがってこの記事をもって縄文土器に関する最古の記録ということとはできない。

### ○ 比良野貞彦と亀ヶ岡遺跡に関する最古の記録

館野越本の『永禄日記』にある亀ヶ岡や三内村出土の記事が、山崎立朴によって寛政8、9年ごろに加筆されたものとすれば、亀ヶ岡遺跡に関する最古の記録は、現在の所、佐藤伝蔵が『東京人類学会雑誌』に紹介した比良野貞彦の箱書きとなる（佐藤1900）。この箱蓋は、坊間にて得たとあるから、町中の古道具屋で見つけ出したものであろう。箱書きは蓋の裏面になされたもので、内容は次の通りである。

「弘前府西百余里有邑曰館岡、山中往々出陶器、形固不一皆奇古可愛矣、其沈淪乎地中星霜悠久不知幾年所也、山去海濱數十里、豈蠻舶之所載來、被颱風覆没、山海變遷而在此土中歟、然為耒耜所破形全者幾希、予偶得一則珍藏焉、天明三年秋九月 外濱 野貞彦」

箱書きの内容をまとめると次のようになる（方角、距離については事実誤認や誇張が含まれている。距離については無視した）。

- ①弘前城下の西方にある館岡村の山中からしばしば陶器が発掘される。
- ②その陶器は、形が様々で同じものがなく、すべて珍しさ・古さの点で愛でるべきところがある。
- ③陶器は、地中に深く埋もれて、どのくらい悠久な年月が経過したか分らない。
- ④（むかし）外国船が陶器を載せて海岸にやってきて、台風にあつて転覆したのであろう。
- ⑤今は、地形（海山）が変化して、ここに埋もれているのだろうか。
- ⑥発見されても、鋤にかかる為に完全な形のものは稀である。
- ⑦私（比良野貞彦）は、たまたま完全な形のもの1個を得ることができ、珍藏している。

陶器が発掘される館岡村の山中は、亀ヶ岡遺跡を指し、陶器は縄文土器と考えて良い。「外濱 野貞彦」は比良野貞彦のことで、外濱は彼の雅号である。ここで注目すべきは、遺跡の成因（陶器が土中から沢山出る理由）を(a)陶器を載せた外国船が台風で沈没したこと、(b)それが地形の変化で館岡村の山中に埋もれている、と考えていることである。この資料は単なる箱書きにすぎないが、亀ヶ岡遺跡やその出土土器に関する最古の記録であるとともに、亀ヶ岡遺跡の成因を考えた最初の記録として重視すべきである。箱蓋を発見した佐藤は、箱の中身については全くふれていないので、すでに中身は失われていたのであろう。箱書きの内容からすれば、亀ヶ岡遺跡出土の完全な形の土器が入っていたことが推定できる。天明3年は、貞彦が弘前に来る前であるから、国元の人を通じて、江戸で手に入れたものであろう。

ところで、比良野貞彦は、弘前藩江戸定府の侍で、武芸と文才を兼ね備えた立派な人物であったという。谷文晁について画法を学び、外浜人・嶺雪と号した。天明八年五月に藩公の帰国に随従して、初めて弘前にやって来るが、翌年寛政元年三月には藩公の参府にお供して江戸に戻ってしまう。弘前滞在わずかに1年弱であるが、初めて目にする国元の風景、人々の暮らしぶり・風習などを巧みに写

生し『奥民図彙』を残した（森本1970）。この稿本は、この時期の庶民の生活・文化を知る貴重な資料となっているが、このなかに「亀ヶ岡陶器」として3個の土器（壺・鉢・注口土器）が描かれている。亀ヶ岡遺跡の土器が描かれた最初の文献となるが、その図は、他の絵と比べるとはなはだ稚拙に見えるので、貞彦本人が描いた部分であるのか気になるところである。

### ○ 亀ヶ岡遺跡と菅江真澄

菅江真澄は天明・寛政を中心に北海道や東北地方北部を歩き、亀ヶ岡遺跡や三内遺跡をはじめ、土器や石器が出る遺跡を訪ねたり、所有者の所を訪問して遺物をスケッチしたりしている。

菅江真澄の紀行文などを考古学史の立場から紹介し、その業績を高く評価したのは、やはり中谷治宇二郎であった。中谷は、真澄が亀ヶ岡遺跡の土器と三内村出土の土器の違いをとらえ、さらに亀ヶ岡遺跡出土土器の製作者まで考察していることに対し、縄文土器に関する真澄の「功績は実に石器に於ける白石、石亭の総和にも対比すべきもの」であるとまで言い切った。しかし、中谷はのちに発見された『外ヶ浜奇勝』を見ていないし、真澄と山崎立朴との関係についても関心を示していない。

ここでは、大きく亀ヶ岡遺跡に関わる部分（『外ヶ浜奇勝』・『津軽のつと』）、亀ヶ岡遺跡と関連付けられた他の遺跡の部分（『新古祝甕品類之図』）、三内村の遺跡に関わる部分（『すみかの山』・『津軽のつと』）に分けて記述し、真澄がこの二つの遺跡の違いをどのようにとらえていたか、を考えて見たい。

1. 亀ヶ岡遺跡に関わる部分を『外ヶ浜奇勝』（内田・宮本1972所収）、『津軽のつと』（内田・宮本1973所収）から書き抜いてみた。

(1)『外ヶ浜奇勝』（本文）「（寛政8年7月2日、3日）館岡見んとて、みちふたつある右なる小高き野添ひの細路よりゆけば、めてに松たてるくさむらを堂の前といふ。此あたりの土をほれば瓶子、小甕、小壺、天の手挾、祝瓶やうの、いにしへの陶のかたしたるうつわのほりいづる。さらば、瓶ヶ岡の名はふりたれど、近き世のことにや、此山に城づくり、やぐらたてたまはなんの、こころねがひし給ふのをりしも聞えたれば、今館岡という。この村なかに来つつ宿つきたり。三日 やの翁ほとけにぬかづき、はと、あくびうちして、けぶりをただふきにふいて、缶の形したる小瓶に、つばきぬ。此器や、かの周辺よりほり来りけん」（亀ヶ岡遺跡発見の土器2個の図あり）。

(2)『津軽のつと』（本文）「はた甕ヶ岡といふやかたのひろ野ある、その小高きところをほりうがてば、こがめ、へひぢ、ひらか、をつば、手壺、あまの手挾やうのものまで、むかしよりいまし世かけてほれどもほれどもつきせず、なにの料にうづみしにや。凡、いはいべ、とりへひぢに似たるもの多し。しか、そのかたをひだんにのす」（亀ヶ岡遺跡出土の土器の図あり）。

以上 ((1)・(2)) から、要点をまとめてみよう。真澄は、寛政8年7月2日、初めて亀ヶ岡遺跡のある館岡村をたずねる。紀行文だけあって描写は写生的である。堂の前は、現在も鎮座する雷電社付近を指すのであろう。また、瓶ヶ岡という地名は古いけれど、近い時代に、ここに城を築こうとしたので、今は館岡と云っている、とも述べている。問題点を箇条書きしてみよう。

①亀ヶ岡では岡の上を掘ると陶器が出土する、とある。低地の水田あるいは沢地を掘ると陶器が出土するとは書いていないことが注目される。『新古祝甕品類之図』でも片唄を掘るとある。このころの土器出土地点は、低湿地ではなく、丘陵と沢地への斜面が中心であった可能性がある。

②出土した陶器は、瓶子、小甕、平瓶、小壺、天の手挾、祝部に似たものが多く、大小は様々である、とする。土器の形を具体的にあげているのは、完全な形で出土するものが多いことを示している。真澄は形のわかるものが出土することも亀ヶ岡遺跡の特徴をとらえているようである。

③亀ヶ岡では、昔から現在まで陶器を掘っているが、尽きることがない。真澄は、陶器が沢山出土することも亀ヶ岡遺跡の特徴であると考えている。

④何を目的として埋めたのか分からないとしている。

⑤宿の主人が、小壺に痰を吐いているが、この壺はこの近くから掘り出して持ってきたものであろうとする。このことは、当時、発掘品を地元民が所持していた事を示している。

以上が、真澄がとらえた亀ヶ岡遺跡とその出土品の状況である。石器についてまったくふれていないのは、真澄が土器を掘り出している現場に直面していないことを示すものであろう。

## 2. 亀ヶ岡遺跡と関連付けられた他の遺跡の部分（『新古祝甕品類之図』（内田・宮本1973所収））

『外ヶ浜奇勝』、『津軽のつと』が、亀ヶ岡遺跡の現状報告なら、次の『新古祝甕品類之図』は、考察編のようなものである。ここでは、亀ヶ岡遺跡出土品に加え、秋田県・岩手県・北海道出土の土器を検討し、亀ヶ岡遺跡出土品とよく似た土器を一群のものとしてとらえ、製作者まで想定している。なお、『新古祝甕品類之図』でいう「祝甕」は祝部土器のことで、考古学では一般に須恵器をさすことが多い。真澄は、埋没家屋などで発見された須恵器を中心に、古い陶器として縄文土器も中近世の陶磁器も、一緒にとりあげている。図から縄文土器と判断できるものは7点あるが、すべて縄文晩期のものと思われる。真澄が興味を抱いていた「みかえのよるい」的な土器が含まれていないのは、完成品を見ることがなかったためであろう。ここでは、縄文土器と推定されるものの絵（『菅江真澄全集』を参照）と本文を紹介しよう。

(315)「同国同郡北比内荘、橋桁村の家の後なる地より掘り得るといふ。陸奥ノ津軽の甕箇岡より掘りうるがごとし、をりとしていくらも出る事あるてふ。そのさま蝦夷地の襴母呂より掘り得とて、人のもて来りしに形おなし。これもいにしへ蝦夷の作りし陶にやあらむかし」（全集の398頁の図を参照、縄文施文の壺である）。

(322)「此瓶は陸奥津軽紆麻郡甕箇岡の片罎を掘れば、をりとして小瓶を得る。大小定まらず、俚民、こは高麗人の来て制作たるといふ。蝦夷洲より掘りえる陶に凡似たり。なお奥にもものすべし」（全集の405頁の図を参照、肩に工字文風の文様がめぐる壺）。

(328)「秋田郡南比内十二所谷地町、大森永吉文家蔵」、「其二 大サ図ノ如シ。扇田ノ神明宮ノ杜りの北に上津野川のあなたに中山村あり。中山にいづれ君かおはしたりけむ。桜殿といへる城蹟あり。その古城の在りし地より此陶掘り得るもの語りあり。手なし、口を以て用しけるにや」（全集の411頁の図を参照、注口土器である、口縁は欠けているようである）。

(329)「秋田郡南比内十二所谷地町、大森永吉文家蔵。---- 其三 高二寸位、回九寸位、大如図。同郡北比内山田村より掘りしといふ。底は転甕にひとし」（全集の412頁の図を参照、羊歯状文らしき文様がめぐる注口土器）。

(330)「十二所に近き別所村ノ畠より、鋤にあたりていくらも掘り得るといへり。津軽の甕が岡に掘りうるがごとし。そのさま秋田比内の橋桁村、蝦夷国の襴母呂ノ浦に掘るものに凡似たり。----此甕はいにしへ蝦夷など、此所に住て作たるにや。襴母呂の甕をもておしはかり知るべし」（全集の413頁の図を参照、縄文施文の壺である）。

(331)「陸奥南部鹿角毛布郷毛馬内家土、山本栄蔵完秀家蔵。九戸ノ郡一ノ戸の山より掘り得しといへり。こはもろこしの□觚のたぐひにして、出羽の秋田北比内なる桜殿といふ柵戸の蹟より掘り出しものと、さまおなし。これも蝦夷人の作りなしたる陶にや。 高三寸二分、口亘一寸八分、甲乙回一尺四寸、丙此樋口八分斗」（全集の414頁の図を参照、雲形文をもつ注口土器）。

(334)「大館永倉町、横山萬四郎成房家蔵。多衢餌離、口亘四寸三分、深三寸。山田村ノ枝村□木の狐社より掘り出しと云ふ」（全集の417頁の図を参照、短い頸部に羊歯状文らしき文様をもつ深鉢）。

以上の資料から、亀ヶ岡遺跡に関わる部分に視点を置いて、要点を纏めてみよう。

①秋田県橋桁村や別所村の遺跡のように、掘ればいくらでも土器が出てくる様子は、亀ヶ岡遺跡と同じであるという。これは、真澄がたくさんの土器が出土する状況を三遺跡に共通する特色としてと



らえていたことを示す。

②亀ヶ岡遺跡・橋桁村・別所村出土の土器は、北海道根室出土の土器に似ているので、これらは、むかし蝦夷がそこに住んで製作したものであろうとし、亀ヶ岡の人々がいう「高麗人がやってきて製作したもの」という説を否定している。また、九戸郡一戸と北比内の桜殿出土の注口土器も、蝦夷人が製作したものとした。

以上から現在の秋田県・岩手県・青森県・北海道根室に、亀ヶ岡遺跡出土土器と類似する一群の土器が出土することを明らかにし、これらは、根室の出土例から考えて、むかしそれぞれの地域に蝦夷人が住んでいて、これらの土器を製作したと考えるべきであると主張している。しかし、真澄は土器の類似だけから蝦夷人との関係をとらえた訳ではない。東北地方にはむかし蝦夷が住んでいたという国史の記述や伝承があったことを知っていたこと、東北地方に多いナイという地名がアイヌ語に関連するものととらえていたこと、蝦夷地に渡り、道南を中心に旅してきたこと、当時、津軽半島や下北半島の北辺海岸部にアイヌが住んでいたのを見聞していたことなども、大いに与っていたにちがいない。

なお、清野は、『新古祝甕品類之図』を見て、真澄は、須恵器と縄文土器の区別がつけられなかったとし、「真澄の考へでは、縄文土器は祝部土器の一部分であった。然も亦後述するが如く蝦夷の造った土器らしく考へもして居った。究極する所、蝦夷の造った祝部土器と考えたかと云ふ事に落ちるが、其所迄つき留めた所は筆にして居らぬ」と、真澄に対し、やや皮相的な見方をしている（清野1954）。しかし、縄文土器7個のうち5個のものについて根室出土品との類似や蝦夷人との関連にふれているが、その他の須恵器あるいはそれ以降の陶磁器については、まったく触れていないので、真澄は、縄文土器を祝部土器と一緒にしているが、その中で縄文土器と須恵器との区別をしていたと見ることができる。

### 3. 三内村の遺跡と出土品

三内村の遺跡に関わる部分を、『すみかの山』（内田・宮本1972）・『津軽のつと』（内田・宮本1973）から抜き出し、真澄が三内村の遺跡をどのようにとらえていたか、そして亀ヶ岡遺跡との違いを本当に見いだしていたか、などを検証したい。

(1)『すみかの山』（本文）「（寛政8年5月14日）此村（三内村）の古堰の崩れより、縄形、布形の古き瓦、あるは甕の破れたらんやうの形なせるものを、掘り得しを見き。陶作のここに住たらんなどいへり。おもふに、人の頭、仮面などのかたちせしものもあり、はた頸鎧に似たるものあり。----こは、そのはにわ、たてもののたぐひにこそあらめ」。

（絵の解説）「其一、----此村の渠のほとりより瓦陶のごとなるものを掘り出る。其形は頸鎧のごとし。所謂幃延ちふものに似たり。美加弊乃與呂比といひしや、甕甲ならん」「其二、----寒苗の郷に掘り得る中に仮面の如きもの出る、これや波邇王ちふものにや」「其三（絵のみで解説なし）」。

(2)『津軽のつと』（本文）「寒苗の里よりみかべのよろひなすもの、あるははにわなすもの、あるはふる瓦やうのものいづるもいとあやしとおもふに、又このころ、黒石のほとりなる、むかしいふ小杭埜、いまいふ花牧の邑のこもり、山はたけより、さむなへにほりえしにおなじさまなるものほりいでしとて、しりたる人のをくりしを、めつらしう、かたにしるしむ」。

(3)『美香弊乃誉路臂』（本文）「戸鳥内の村に来けり。もと蝦夷や栖つらん。山かげに於加志桑為てふ所のあるにても知るべし。粟、稗、稷を佃る山蔭を墾たりしをりしも、人の面の如き陶を掘り得たる物語をそせりけり。こは陸奥津軽寒苗の畠よりほり出したるとひとしかりき」。

真澄は寛政8年5月14日、三内村（現、青森市）を訪ね、古堰の崩れた所から出土した土器などを見る。これは真澄が縄文土器を取り上げた最初で、亀ヶ岡遺跡をたずねる約50日前のことである。問題点を箇条書的に整理してみよう。

①三内の出土品は、縄目や布目のついた古き瓦のようなもの、甕の破れたようなものがあり、その

中には人の頭、仮面などの形をしたもの、頸鎧のような形をしたものがある。そして、ここに陶器作りが住んでいたのであろうと考えた。形を具体的に示していないのは、破片ばかりで、完全な形が分からなかったのであろう。

②頸鎧と似た土器は、図を見ると円筒上層式土器の大型突起の破片である。突起の形状から頸鎧を思い浮かべたのであろう。真澄研究者の内田は、真澄が「みかべのよろい」と呼んだのは、津軽三内の人たちがそう称していたからだろうとするが、津軽地方で縄文土器を「みかべのよろい」とよんでいた証拠はない。おそらく頸鎧に似たものが土器で作られているというので、真澄が「みかべのよろい」と造語したのであろう。そしてこれと似た土器は花牧遺跡でも出土しているとし、亀ヶ岡遺跡のものと区別している。

③人の頭、仮面などの形をしたものは、図をみるとあまり正確ではないが、土偶であろう。三内村周辺の円筒上層式土器の遺跡は、比較的多数の土偶が出土するところである（とくに三内丸山遺跡では1000個体をこす土偶が出土している）。真澄はこれを垂仁紀にある埴輪・立物の類であろうと考えた。戸島内の村でも「人の面の如き陶を掘り得たる物語」を聞き、三内村で出土したものと同じであると言っている。

④なお、真澄は石器にも関心があり、『すみかの山』『雪の出和路』などにスケッチを残している。『すみかの山』では「天狗台にのぼりてつちを掘れば、雷斧石、あるいは鈴石てふものを拾ふ」とある。天狗台は弘前市乳井の乳井神社（江戸時代は毘沙門堂）のある山であるが、縄文時代の遺跡はしられていない。いずれにしても、土をほって石斧を採集したとすれば、当然土器のかけらも出土するはずであるが、土器についてはまったくふれていない。真澄ほどの人でも石器と土器が結びつくことは無かったらしい。

#### ○ 松浦武四郎と亀ヶ岡遺跡

北方探検家として著名な松浦武四郎も幕末に津軽地方を旅行し、『東奥沿海日誌』（嘉永3年）に亀ヶ岡遺跡について次のように述べている。

「亀ヶ岡村 恐らくハ瓶ヶ岡成べし。此辺古き陶器出るなり」「どうぎ（注、さかが抜けている。筒木坂のこと）村は陶器坂なるべし。亀ヶ岡とうき坂の間の阪より、冬よりイテ解の後に種々の瓶出る也。皆白焼手造りにヒ目有。上方にて行基焼ともいふべきものなり。土質不宜といへ共品は甚珍敷もの有。余も三ツ程得て一ツハ仙府の一止へ送り、一ツハ松前の鷗洲子に送り、今に一ツ貯なり。定て此村名は訛なりべしと思ふ」。以上の意味をとって問題点を箇条書きにして纏めてみよう。

①松浦は、亀ヶ岡はもと瓶ヶ岡、どうぎさか村（筒木坂）は陶器坂であろうと、地名の由来を推定し、出土する瓶（陶器）は上方で云う行基焼のようなものと考えた。行基焼は一般に須恵器をさすことが多いが、松浦は、単に古い陶器という意味で、使用したと思われる。菅江真澄のような考証は見られない。白焼・ヒ目については調べることができなかった。

②春になって凍てついた大地がとけると、瓶（陶器）が出土するという話は、本当だろうか。石器ならともかく、形ある土器が雪解けで発見されるという話はあまり聞いたことがない。

③松浦は3個の瓶（陶器）を手に入れ、仲間にも贈った。亀ヶ岡の出土品を喜ぶ風潮が広がっていたことが分かる。こうした風潮に応える形で、頼めば入手できるだけの環境が地元が出来上がっていたにちがいない。こうした環境がいつごろ成立していたのか興味あるところである。

#### ○ 江戸の好事家と亀ヶ岡遺跡の出土品

江戸時代の中頃になると、泰平が長く続くのに乗じ、儒学や国学を中心に、医学・蘭学・本草学・天文・地理などさまざまな分野で、学問が盛んに行われるようになった。古物・古跡など考古学的資料

に関する収集・考察も例外ではない。人々は「古いものに愛着を覚え、これらを集めたり愛玩するという風潮もまたさかんになってきた。人々には、古いものにあこがれ、これを愛する気持が、その心の中にひそんでいる。社会がおちつき、学問がさかんになり、生活が安定するにともなって、この心性が燃えあがってきたのである」(齋藤1974)。交通事情がよくなり、大都市と地方の交流が盛んになったことも大いに与っている。江戸や大阪・京都などの大都市では、好事家が集まって、各地の珍しい物産・有益な物産を出し合って勉強する物産会が行われるが、書画・古物を出し合って互いに批評したりする勉強会も盛んになった。津軽の亀ヶ岡遺跡が発掘され、土器が採集されたのは、こうした古物愛好の風潮に応えるためでもあったのである。江戸に住んで、亀ヶ岡遺跡の土器を所蔵していた好事家は、書家・画家・医師・儒学者・国学者など多岐にわたる。ここでは江戸の好事家と亀ヶ岡遺跡の出土品との関わり合い、とくに彼らが亀ヶ岡遺跡の土器に対し、どのような考えをもっていたのか調べてみたい。

#### (1) 耽奇会と『耽奇漫録』と亀ヶ岡遺跡出土品

耽奇会は、雑学者山崎美成を中心とする好古・好事者が集まり、会員各自が持ち寄った古書画、古器財などの珍品、奇物を展覧批評したものである。この会は、文政7年5月から翌8年11月にかけて、毎月1回、計20回開かれ、その記録は『耽奇漫録』として集成されている(以上、小出1993)。『耽奇漫録』には、亀ヶ岡遺跡出土の土偶が1回、土器が2回載っており、中谷治宇二郎によって詳しく紹介されたことがある(中谷1943)。会に集まった人々が、亀ヶ岡遺跡出土の土偶や土器について、どのような感想をもったのか、あるいはどんな議論を交わしたか、などは記載されていないので分からない。彼ら出品者が、どんな手段で本州の果ての地である津軽亀ヶ岡遺跡の出土品を手に入れていたのだろうか。

(a)第1回(文政7年5月15日)の会合に、松蘿館西原梭江が「津軽亀ヶ岡にて掘り出たる土偶人二軀」を出品している(『耽奇漫録』第1集)。二軀とあるが、図を見ると、1個の遮光器土偶の表裏を描いたものである。西原梭江は、通称を新右衛門といい、梭江はその号、松蘿館は屋号という。筑後柳川藩の江戸留守居役であるが、藩命で、12回目の会合の出席を最後に帰国してしまう。この土偶は、のちに根岸武香の所有になり、再び『尚古図録』(横山1871)に登場するので、西原は、帰国の際に、この土偶を江戸に残していったものと考えられる。受け取った第一の候補者は、西原を岳父とする海棠庵関思亮であろう。

(b)第8回(文政7年11月14日)の会合に、海棠庵関思亮が「津軽亀ヶ岡より掘出す古磁器」を出品している(『耽奇漫録』第8集)。図を見ると大洞C1あるいはC2式の完全な形の注口土器である。こうしたものをどのようにして入手したのであろうか。関思亮は書家である。第1回の会合で土偶を出品した西原梭江は彼の岳父である。思亮は天保元年9月に35才で亡くなる。

(c)第20回(文政8年11月13日)の会合に、谷台谷が「奥州瓶岡山陶器」を出品している(『耽奇漫録』第20集)。図を見ると鉢形土器であるが、文様が正確に描かれていないので、晩期のいつ頃のものであるか判断がつかない。いずれにせよ、文様のある優品であったと思われる。台谷は、文二といい、画家谷文晁の子で、この年に14歳である。文晁は、義子の文一を亡くしてから、ことあるごとに台谷を伴って外出したという。台谷は、常連である父親に伴われ、耽奇会には3回出席し、2度出品している。僅か13、14才の少年が古書画・古器物を集めたとは思えないので、文晁が息子の名前で出品したのであろう。前に述べた弘前藩江戸定府の家臣である比良野貞彦は、文晁の弟子である。貞彦自身、亀ヶ岡遺跡出土の土器を所有しているが、文晁もこうした弘前藩の関係者などを通じて「奥州瓶岡山陶器」を入手したに違いない。

#### (2) 大槻玄沢と『伊波比倍考證』

大槻玄沢は仙台藩侍医で、『蘭学階梯』、『重訂解体新書』などを著した有名な蘭医である。名は茂質、

磐水と号した。古物にも関心を抱き、文化11年に『伊波比倍考證』を著作した。玄沢は、菅江真澄や耽奇会に集まった谷文晁や屋代弘賢などとはほぼ同時代の人である。『伊波比倍考證』は、須恵器の図録集で、文献を中心に詳しく考証したものであるが、亀ヶ岡遺跡にかかわる記事もあるので、原文を抜き書きしてみよう。

(a)「むかし津軽なる門人より異形なる素焼の二小壺を贈れり。是れは極めて粗器なり。即其郷の亀岡といふ所より掘出せりと。此岡を掘れば大小の壺夥しく出づ。只全き物は稀なりとぞ。古なにに用ひし者にや。知るべからず」。

(b)「又ここに云ふ、嚴瓮の類とも見えずして諸国にてスヤキの器を掘出すこと度々にして、然も夥しく出す所あり。是必あがりし世の焼ものせし地なるべし。奥州津軽の亀岡といふ所にては、其地を掘れば處として缺損したるスヤキの瓶壺の類を掘出すよし。夷地にては是をベンジというよし。瓮の古言に近し。松前の人にはベンバチといふとぞ。今の北蝦夷カラフトの奥地にては、貧家の者は今もスヤキの土鍋を作りて用ふる所あり。其處をシウトイウシと云ふ。是れは鍋土ありといふ事にて、即ち鍋を作る土を取る所の地名なりとぞ。但し近頃はここより渡せる鍔鍋竝に磁器を用ふる故に極貧のものならねば絶て用ひず。故にそこらに人到れば耻ぢておほひ隠くすとなり。彼地方には古風の存したる事は猶久しかりしなるべし」。

(c)「屋代輪池の蔵、丙寅二月五日一覽す。四五品あり。其中神谷氏蔵物に全く同形の物あり。外二三品形異なるあり。亀岡出す所といふに頗雅品あり。別に巨大、水五升程も入べき品あり」。

抜き出した内容がバラバラなので、意味をとって箇条書きに纏めてみよう。

①嚴瓮（祝部土器）と異なる素焼きの土器（縄文土器）が諸国で掘り出されているが、それは古い時代のものである。亀ヶ岡では、大小の壺が多数出土するが、素焼きの欠けたものが多く、完全な形の物は稀であるという。これらのものが、むかし、何に使用したのか、知ることができない。しかし、玄沢が縄文土器を同じ素焼きであっても、須恵器とは異なるものであるとはっきり言っているのは重要である。

②津軽出身の門人から贈られた亀ヶ岡出土の2個の小壺は極めて粗末なものであるが、屋代輪池の所蔵する亀ヶ岡のものは大変趣のある品であった。おそらく同じ亀ヶ岡のものであっても精粗様々あることを認識していたと思われる。また、亀ヶ岡遺跡の土器が、津軽出身者の贈答品に利用されていることが分かる。屋代輪池は、屋代弘賢のことで、輪池は号である。幕府の右筆を勤めた著名な国学者で、耽奇会のメンバーにもなっており、須恵器や亀ヶ岡出土品を所有していた。

③蝦夷地では素焼きの土器を瓮の古言に近いベンジあるいはベンバチとよんでいる。北蝦夷カラフトの奥地では、今でも貧しい家では土鍋を作りて使用しているところがあるとのことである。古い時代の風習が残ったものであろう、としている。清野謙次は、このことから「磐水（玄沢）は樺太アイヌが土器を製作しつつあるのを聞いて、縄文土器もアイヌの手で成ったもので無いかと思ったのである」と解釈しているが、そこまではっきり書いているわけでない。

### (3)雑記帖『乗合船』と亀ヶ岡遺跡出土の壺

清野によると、『乗合舟』（二冊）は、「筆者を詳にしないが、文化から文政に亘って著者の見聞した事実、友人からの通信等を記載すること百八十箇條で、----図を主とし、之に解説が加へてある。----書中往々水戸学者の名が出て来るから筆者は水戸藩関係の考古趣味に富んだ人の雑記帖かも知れない」（清野1954）という。この中に、亀ヶ岡遺跡出土の壺の絵とその壺が入っていた箱書などの記載がある。本文は次の通りである。

「古瓦瓶之図

「函蓋書云 奥州奥軽郡華輪莊木造新田亀岡從山中、自然所産、不知經其年代、且神工不得知也。

「備後福山藩医 文政十一戊子年冬十月七日覽之」



箱書きは、所有者である三養堂によって書かれたものであろう。壺の年代や製作については知ることが出来ないとし、当時の一般的な見解を示しているにすぎない。なお、『乗合船』には、関東地方の縄文後期の加曾利B式と目される土器など3点が「神代之器之図」として載っていることを付け加えておく（清野1954-274頁）。

#### (4) 冢田大峯の『随意録』と亀ヶ岡遺跡

冢田大峯（1745～1832）は、有名な儒学者で、名は虎、大峯は号である。冢田の随筆集である「随意録」（文政8年）に亀ヶ岡遺跡に関する記載があることを紹介したのは、柴田常恵が最初と思われる（柴田1900）。亀ヶ岡遺跡に関連する部分のみ抜き出してみよう。

「有一門人、歸自奥州津軽、語曰、津軽海辺有地名□陵、其陵自古□甕。其徑或六七寸。或八九寸。且其陵土多為石。□甕附著焉。土人鑿得之者。往々有焉。予因按之。国史云。天孫夢有天神。訓之曰。宜取天香山中土。以造平□八十枚。并造巖□。而敬祭天神地祇。亦為巖呪詛。如此則虜自平伏。云々。此神武東征之時也。国初有如是事。然則津軽之□。其此類之遺也與」

文意を要約してみよう。

①津軽から帰ってきた門人の話では、□陵から径6～9寸ほどの古い陶器が出土するが、ここでは土が石となり、陶器に付いてしまうという。村人は発掘してそれを得ることがある。

②余（大峯）の考えでは、国史に天香山の土で、平瓮八十枚と巖瓮を作り、天神地祇を祭り、また巖呪詛すれば、虜（敵）は、おのずと平伏する云々とある。神武東征の時の事で、国の初めにはこうしたことがありがちである。津軽の亀ヶ岡遺跡の陶器も、こうした類のものであろう。

大峯は、津軽の亀ヶ岡遺跡というところで、土中から陶器が発掘されることを聞き、日本書記にある神武東征の時に、天香山の土で、平瓮八十枚と巖瓮を作り、天神地祇を祭り、敵を呪詛したという記事から、津軽の亀ヶ岡の陶器も、こうした類の遺物であろうと解釈した。それ以上の考察は行っていない。

#### ○ 亀ヶ岡遺跡以外の亀ヶ岡式土器（菅江真澄の『新古祝甕品類之図』をのぞく）

亀ヶ岡遺跡以外で出土したいわゆる亀ヶ岡式土器（東北地方を中心とした縄文晩期の土器）は、菅江真澄の『新古祝甕品類之図』のほかに、清野謙次の『日本考古学・人類学史』によると、岩手県や北海道でも発見されていることが分かる。

(1)その一つは、清野謙次が、八木熒三郎の資料からみつけた香炉形土器の写生図とそれに関するメモである（清野1954、298頁）。その図から判断すると、縄文晩期中葉の香炉形土器である。覚え書きには、箱書の写しと思われる次のような文章がある。

「此陶器文化中奥羽琵琶柵址（割り注－泉三郎忠所掘土人謂之泉城）所掘出。此地今隸于磐井郡戸河内村郡正大槻氏、即余宗家也。得之土人以贈余、襲藏以為家珍云 天保壬寅冬十月 磐溪崇記 印」

これによって、玄沢は、一関の本家の土地から地元民が発掘した香炉形土器を贈られたことが分かる。この土器について、玄沢がどのように考えていたかは不明である。のち、この土器は、神田孝平によって図入りで紹介される（神田1889）。

(2)二つ目は、やはり清野が岡田屋嘉七の『瓦図譜』から見つけ出したもので、鈴付馬具や巴瓦（軒丸瓦）とともに3個の土器が描かれており、図から見ると、亀ヶ岡式土器に属する可能性はあるが、出所については「山中所得」とあるのみで、詳細は不明である。清野は「此土器は其形状から云っても文様から考えても縄文土器である。その二個は鉄鉢形、一個は亀ヶ岡式の装飾意匠の附いた注口土器で、立原杏所写」としている（清野1954）。

(3)三つ目も、清野によるもので、所蔵の一卷の巻物から見つけ出したものである。清野は「誰の手に成ったのか分からないが、筆者自身の家藏品、友人の所藏品が彩色で描かれて居って、此品に対し

て一二首づつ所蔵家が讃歌を詠じている。古物好きで歌趣味の友人が会合して、出品物について歌賛し合ったものらしい。会名は分からないが、卷子には古物畫賛と記してある。----年代も確かには云へぬが化政以後であろう」とし、一群の土器（6個）が描かれている部分を図示し、このうち2個が河内国出土の須恵器で、4個が縄文土器であると考えた。さらに、この4個の土器は、原文では「蝦夷が嶋より掘し得し所 家蔵」と説明されているが、清野は、その一つが高台付き亀ヶ岡式土器であり、他のものも形状から云って、東北地方の産であると断定している。しかし、図を検討すると、4個のなかに擦文土器の深鉢と続縄文前期の恵山式の深鉢が1個ずつ含まれているので、この縄文晩期の台付鉢の出土地も原文のあるように北海道（蝦夷が嶋）でよいのであろう。なお、この図は擦文土器や恵山式土器が描かれた最初のものと思われる。

#### (4)平尾魯仙の『谷の響き』

津軽地方を旅行した人々が亀ヶ岡遺跡の土器を得たり、津軽出身者が江戸の人々に亀ヶ岡遺跡の土器を贈ったり、あるいは江戸の好事家の間に亀ヶ岡遺跡の土器が出回ったりしているところを見ると、亀ヶ岡遺跡の現地では、需要に応える為の発掘がおこなわれていたに違いない。しかし、津軽在住者による亀ヶ岡遺跡に関する記録は意外と少ない。ここでは平尾魯仙の『谷の響き』をあげるにとどめる。

平尾魯仙の著作には『谷の響き』と『合浦奇談』があり、津軽地方の怪談・奇談を集めたもので、その中に「地を掘て物を得る」、「地中に希器を掘る」の記事がある。不確かな内容のものが多く、『谷の響き』から亀ヶ岡遺跡にかかわる部分の原文を紹介してみたい。

(a)「文政の年間、八幡崎村の八幡宮の境内を掘りて瓶を多く得たりと、この瓶の出る処多くあり。つぎにあぐべしその中一ツの瓶に五色の絹糸みてりとなり。又この廓を掘りて帆柱出たるを掘り上ぐることをとどめてその柱の先に堂を建て粟嶋大明神と祝へり」

(b)「天保の末年にて有けん独狐村の長左衛門といへるものその村の領なる若狭館といふ処をほりこの地より亀ヶ岡産に等しき磁器出るなり。掘りて鏡の形なるものを得たりけるが、それにある人形は岩木山の上にある本尊の脇師の神に似たるとて百沢寺に納めたりしとなり」

この「鏡の形なるものは」は、あとの文章で明らかに鉄製懸仏であることが分かるので、むしろ「亀ヶ岡産に等しき磁器」が、本当に縄文土器であるのか気になるところである。それにしても、領内各地で土器が出土すると、亀ヶ岡遺跡のものと比べており、亀ヶ岡遺跡の土器が基準資料になっていることが分かる。

また『合浦奇談』にも「陶器の出る処は亀ヶ岡の館跡、相沢村の畑中、八幡崎村の畑中、独狐邑の山圃（割り注あり一全形の物出ず、みな破碎のものにて多くあり。石鏃も此処より出づ）、……………皆素焼きの物にして何の器たると云うことを知らず。古録に載する所は亀ヶ岡より磁器出ると而已有て其の由緒及び根原を記さず。さすればよほど往古の物と思はる。又独狐の山畑より掘得し碎けたる磁器の文甚古風なり。左に図す。右陶器の碎片文様の古風を視るべし。諸所々より出ると云ながら精麗の差あり。亀ヶ岡の物は土精細文多からず。上品と云べし。八幡崎の物は是れに重ぐ。独狐山畑の物は土粗く器も厚く文多く下品と云べし。相沢の物は亀ヶ岡よりは素朴なり。……………天保年中筒木坂村農夫の子亀岡を掘て石地蔵の如き土偶人三個を得たり。又是も天保の年間当地の県令八木橋某と云人同じく亀ヶ岡を掘て一箇の甕を得たり。瓶中土満て其中に一奇石あり」など興味深い文章がある。しかし、「県令八木橋某」などと明治以降の行政用語が使用されているので、今回は『合浦奇談』を分析の対象とはしなかった。

#### 【引用・参考文献】

- 青森県教育委員会（1974年）『亀ヶ岡遺跡発掘調査報告書』
- 青森県立郷土館（1984年）『蓑虫山人－青森県立郷土館特別展図録』
- 青森県立郷土館（1984年）『亀ヶ岡石器時代遺跡』

- 磯崎正彦（1977年）「亀ヶ岡式土器研究小史－亀ヶ岡式土器の基礎的研究（Ⅰ）」大阪学院大学人文自然論叢3。
- 上野武（1983年）「亀ヶ岡遺跡」『日本の遺跡発掘物語2 縄文時代』、社会思想社。
- 内田武志・宮本常一（1972年）『菅江真澄全集 第4巻』、未来社。
- 内田武志・宮本常一（1973年）「すみかのやま・そとがはまきしょう・つがろのつと・にしきのはま・つがろのおく」『菅江真澄全集 第三巻』、未来社。
- 内田武志・宮本常一（1973年）「みかえのよろい」『菅江真澄全集 第四巻』、未来社。
- 内田武志・宮本常一（1973年）「しんこいわいべひんるいのかた」『菅江真澄全集 第9巻』、未来社。
- 江坂輝弥（1989年）『企画展 縄文の四季－亀ヶ岡文化の世界』1～5頁、福島県立博物館。
- 小野慎吉（1955年）「古記録に掘る出土品」うとう
- 神田淡崖（1889年）「第二十八図版（香炉形土器）」東京人類学会雑誌4－42。
- 清野謙次（1954年）『日本考古学・人類学史』、岩波書店。
- 小出正宏（1993年）『国立国会図書館蔵版 耽奇漫録 上』、吉川弘文館。
- 小出正宏（1994年）『国立国会図書館蔵版 耽奇漫録 下』、吉川弘文館。
- 齋藤 忠（1974年）『日本考古学史』、吉川弘文館。
- 齋藤 忠（1993年）『日本考古学史年表』、学生社。
- （主要文献）**
- 佐藤伝蔵（1896年）「陸奥亀ヶ岡発掘報告」東京人類学会雑誌第11－118。
- 佐藤伝蔵（1896年）「陸奥国亀ヶ岡第二回発掘報告」東京人類学会雑誌第11－124。
- 佐藤伝蔵（1896年）「陸奥国亀ヶ岡第二回発掘報告（続）」東京人類学会雑誌第11－125。
- 佐藤伝蔵（1900年）「載籍上の亀ヶ岡」東京人類学会雑誌16－176。
- 佐藤公知（1956年）『亀ヶ岡文化』、亀ヶ岡遺跡顕彰保存会。
- 芹沢長介（1960年）『石器時代の日本』、築地書店。
- 勅使河原彰（1988年）『日本考古学史』、東京大学出版会。
- 中谷治宇二郎（1929年）「東北地方石器時代遺跡調査予報」人類学雑誌44－3。
- 中谷治宇二郎（1928年）「明治以前の石器時代関係文献」民族3－2、民族発行所。
- 中谷治宇二郎（1928年）「石器に伴ふ説話の発展」民族3－3、民族発行所。
- 中谷治宇二郎（1929年）『日本石器時代提要』
- 中谷治宇二郎（1943年）『校訂 日本石器時代提要』、甲鳥書林。
- 中谷治宇二郎（1935年）『日本先史学序史』、岩波書店。
- 成田彦栄（1955年）「永禄日記雑考（上）」奥東文化2号。
- 成田彦栄（1955年）「永禄日記雑考（中）」奥東文化3号。
- 成田彦栄（1956年）「永禄日記雑考（下）」奥東文化4号。
- 長谷川成一校訂（1991年）『御用格（寛政本）』下巻、弘前市教育委員会。
- 福田友之（1976年）「東北・北海道の亀ヶ岡文化関係文献目録(1)」北海道考古学12。
- 福田友之（1980年）「亀ヶ岡文化研究略史－土器の発見から第二次大戦前の山内清男による土器編年確立まで－」考古風土記5。
- 福田友之（1991年）「亀ヶ岡文化の世界」『図説 青森県の歴史』、河出書房新社。
- 福田友之（1993年）「弘前藩関係の考古資料記事など」青森県考古学7。
- 平尾魯仙（1969年）『谷の響 付、合浦奇談』青森県立図書館郷土双書1、青森県立図書館。
- 松浦武四郎（吉田武三編）（1969年）『東奥沿海日誌』、時事通信社。
- 宮本常一・原口虎雄・谷川健一（1970年）『農山漁民生活』日本庶民生活史料集成10、三一書房。
- 三田史学会（1958年）『亀ヶ岡遺蹟－青森県亀ヶ岡低湿地遺蹟の研究－』
- 村越 潔（1970年）「紹介 永禄日記」考古学ジャーナル43号。
- 村越 潔（1983年）『亀ヶ岡式土器』、ニュー・サイエンス社。
- 村越 潔（1984年）『亀ヶ岡式遺跡』、ニュー・サイエンス社。
- 村越 潔（1989年）「青森県考古学のあゆみ」『村越 潔先生を囲む会での講演』。
- 村越 潔（1995年）「第2章 旧石器・縄文・弥生」『新編弘前市史 資料編1－1 考古編』。
- 村越 潔（2001年）「つがる古代史への招待」陸奥新報。
- 村越 潔（2001年）「青森県の考古学研究史」『新編弘前市史 通史編1（自然・原始）』。
- 森山泰太郎（1970年）「奥民図彙」『日本庶民生活史料集成』10、三一書房。
- 森山泰太郎（1973年）『奥民図彙』青森県立図書館郷土双書5。
- 森山泰太郎（1972年）「真澄の残した白タンポポ－山崎立朴のこと－」菅江真澄全集月報3、未来社。
- 横山由清（1871年）『尚古図録』
- 若林勝邦（1889年）「陸奥亀岡探究記」東洋学芸雑誌97。

## 亀ヶ岡文化の遺物の紹介

－弘前市薬師遺跡・五所川原市観音林遺跡・三戸町杉沢遺跡、東松島市里浜貝塚－

宮本明日香・五十嵐 愛・佐藤夏子

### ○はじめに

弘前大学人文学部日本考古学ゼミナール及び日本考古学実習では、亀ヶ岡文化の研究を重要課題として取り上げ、弘前市薬師遺跡や五所川原市観音林遺跡など各地の遺跡から出土した資料の実測図・文様展開図などを作成し、公表に努めてきた。

### ○弘前市薬師遺跡出土の土器・岩版について（第1図1～3・第2図4～6）

ここで紹介する資料は弘前市教育委員会が所蔵する。薬師遺跡は弘前市の中心部から約10km離れた、岩木山の南東麓にある片付地区に所在している。遺跡の周囲は大部分がリング畑で、近くを県道30号が走っている。また遺跡の北側に本木沢川が流れ、大峰川に合流する。大峰川は弘前市の北端で岩木川に合流する。薬師遺跡以外にも、岩木山の麓には特に北から南東にかけて遺跡が多数存在している（青森県教育委員会1998）。薬師遺跡は、弘前市教育委員会によって昭和33年に第1次調査、昭和35年に第2次調査が行われた。この遺跡からは縄文前期から晩期までのものが出土しているが、晩期のものが大多数を占めている。

1は口縁が大きく広がる大型の台付鉢で、台部は欠損している。口縁部が外反して逆「ハ」の字となる。肩がやや張っている。口唇部に頂部が二叉に分かれた小突起が多数配置され、小波状に似た口縁となっている。頸部と肩部に沈線で文様帯が2つ作られ、磨消縄文の手法で弧線連結文がそれぞれ9単位施されているが、これは晩期初頭に見られる文様である。肩の上端に3条の平行沈線がめぐり、中の沈線には小さな瘤が間隔をあけて貼り付けられている。縄文は単節LRである。内面には炭化物が口縁部から体部中央まで付着している。外面にも炭化物が台部付近まで付着している。

2は台付鉢である。口縁部は外反している。口唇に刻み目が入り小波状に似た口縁に、頂部が二叉に分かれたやや大きな突起が1個ついている。頸から肩の部分に、直線と弧線からなる文様が描かれていて、線の端部が入り組むものもある。縄文は単節LRで、台部は無文となる。内面には炭化物が口縁部から体部中央まで付着している。外面にも炭化物が底部付近まで付着している。

3は広口の壺である。体部中央が最も膨らみ、体部が横に伸びた形状をしている。口縁部は外反していて、頸部は短く立ち上がる。口縁部に縄文が施文されている。頸部はよく磨かれていて無文である。底部付近には平行沈線が2条めぐる。体部には磨消縄文の手法で弧線を伴う菱形の文様が描かれ、中には点対称に組み合わせるものもある。縄文は単節LRである。

4は皿である。口径が広く、平たい形状をしている。口縁部は外反しており、底部は上げ底となっている。口縁は平縁で、頂部が二叉に分かれた突起が2個配されている。口縁部内面に文様帯が作られ、両端が二叉に分かれた直線が描かれている。その間に丸い点が置かれており、玉抱き三叉文や入組三叉文的な文様となる部分もある。また口縁部外面にも三叉文が描かれ、なかには組み合っているものもある。体部文様帯には、弧線が点対称に入り組むことで中央に楕円形の文様を生み出し、端部には菱形の文様が付いたものが磨消縄文の手法で描かれている。縄文は単節LRである。

5は注口である。体部の中央が最も膨らみ、内傾する頸部の端部がそのまま口縁部となっている。口縁は平縁で、正面にやや大きな突起が1個施されている。注口部は体部の中央に付いているが、頸部が高く作られている。口縁部と体部上半に沈線がめぐるが、文様は注口部が施される面に菱形文と沈線文が描かれている。表面が磨滅してザラザラしているが、元は丁寧に磨かれていたと思われる。

6は残存高が約10.0cm、残存幅が約8.2cm、厚さ1.7cmの岩版で、隅部が1箇所残存している。正中線



を基準に復元すると幅は約9cmとなる。正面中央に、上端の窪みから正中線が縦に引かれている。しかし正中線の左右の文様は非対称である。正中線上には平行線による横C字とS字が描かれている。正面には菱形と平行線による渦巻・S字が、背面には三角・菱形・端部が渦を巻くS字・中央部が渦を巻く入組文が描かれている。また両面とも製作時のものと思われる擦痕が見られる(第2図6の拓本)。

なお1～6の写真は『岩木山』(村越1968)に掲載されている。また1～6の写真と1・2・4の展開拓本は『「亀ヶ岡文化の世界」図録』(藤沼・小川2006)に掲載されている。

#### ○五所川原市観音林遺跡出土の土器・土製品について(第3図7～11)

ここで紹介する資料は五所川原市教育委員会が所蔵する。観音林遺跡は五所川原市の東方約5km離れた松野木地区の南端に所在している。また遺跡は梵珠山の西麓から岩木川流域に突き出た台地に位置している。遺跡の周囲には北側に松野木川、南側に神山川が流れている。五所川原市教育委員会によって昭和54年から平成3年まで10次にわたる発掘調査が行われ、縄文前期から平安時代までの複合遺跡であることが分かった。縄文時代の遺物については大洞C1式から大洞A式のものが多く出土している。

7は小型の浅鉢である。頸部が内傾して、口縁部が短く立つ。口縁部の内面に沈線がめぐり、外面にも1条の沈線がめぐる。体部上半をめぐる3条の平行沈線のうち、上の沈線には刺突文が8単位配される。中の沈線は上の刺突に合わせるように短く途切れ、8本の短線となっている。縄文は単節LRで、頸部は磨かれて無文である。

8～10はいずれも器高と口径が5cm以下となるので超小型土器(ミニチュア土器)とした。8は台付鉢形である。口縁は小波状となっている。頸部に4条の平行沈線がめぐり、体部には把手が1個付いている。9は壺形で、口縁がすぼまり、下膨れの器形をしている。体部には6条の平行沈線がめぐり、底部は厚い。10は無文の鉢形である。全体が薄く作られていて、底は丸い。表面が磨かれている。

11は匙形土製品である。口縁部の一部が欠損し、柄の一部が剥離している。口径と柄の長さはほぼ等しい。水が約7cc入る大きさである。

なお8と11は『観音林遺跡』(新谷1975)に掲載されている。また7～11の写真と7の展開拓本は『「亀ヶ岡文化の世界」図録』(藤沼・小川2006)に掲載されている。

#### ○青森県三戸町杉沢遺跡出土の土器について(第3図12～16)

ここで紹介する資料は三戸町教育委員会が所蔵する。杉沢遺跡は三戸町の中心部から西へ約14km離れた山間にある杉沢地区に所在している。遺跡は台地と平野部の間に位置し、針葉樹林と民家、水田に囲まれている。付近には猿辺川が流れており、岩手県北部から流れる馬淵川と合流し、さらに北東へ流れた後に太平洋に注ぐ。遺跡は1971年に青森県立三戸高等学校(名久井1971)が、1994年に青森県立郷土館(福田・工藤1997)が、2006年に弘前大学人文学部日本考古学研究室(藤沼・秋山2008)が発掘を行った。

12は杉沢遺跡出土とされている壺で、ほぼ完形である。体部は中央が膨らみ、やや円球に近い形をしている。頸部は外反し、逆「ハ」の字となっている。やや膨らんだ口縁の端部には突起が1個配され、沈線がめぐっている。肩の上端をめぐる3条の平行沈線のうち、中の線は正面で途切れている。途切れた所に下の沈線の端部が入り込むため、部分的にπ字形に見える所がある。体部の文様帯は平行沈線と縦位の沈線で22個に区画されていて、逆U字形の文様が1区画置きに11単位描かれている。

13は台付鉢で、台部は欠損している。頸部が直立し、短い口縁部が外反している。肩はやや張っている。口縁部内面には沈線が1条めぐる。口縁は刻み目によって小波状となっている。頸部には2条の平行沈線がめぐり、沈線の中に刺突が施されている。また大きな突起が1個付いている。体部上半の文様帯には区画文による単位雲形文が磨消縄文の手法で描かれているが、破片資料のため全体の文

様構成は不明である。また一般的に区画文は磨り消されるが、この土器の区画文には縄文が残っているものがある。縄文は単節L Rが施文されている。また内外両面には炭化物の付着が見られた。

14は台付鉢で、台部は欠損している。頸部が直線的に立ち上がり、口縁部は短く外反している。肩は強く張っている。口縁内面には1条の沈線がめぐり、口唇に刻み目とB突起が付いている。頸部には3条の平行沈線がめぐり、上と下の沈線の中には刺突が施されている。肩には2個1対の瘤状突起が見られる。体部上半の文様帯には区画文による単位雲形文が磨消縄文の手法で描かれている。破片資料のため文様構成は不明である。縄文は単節R Lが施文されている。また内外両面には炭化物の付着が見られた。

15は浅鉢で、平底である。頸部が直線的に立ち上がり、口縁部は外反している。頸部は磨かれて無文である。口縁部の内外面に1条の沈線がめぐり、体部文様帯には細く浅い沈線で文様が描かれていて、縄文が残っている。全体の文様構成は不明である。縄文は単節R Lが施文されている。

16は鉢で、口縁部の破片である。器形や傾きをみると台部が付くと思われる。口縁部は外反し、頸部が「く」の字に屈曲している。肩は強く張っている。口唇に刻み目と頂部が2叉に分かれた突起が付いている。頸部に4条の平行沈線がめぐり、上から1条目と3条目に刺突が施される。肩に2個1対の横位の突起が2個付いている。2個の突起に挟まれて縦位の突起が付くが剥落している。体部には単節R Lが施文されている。また内外両面には炭化物の付着が見られた。

ここで紹介した資料のうち、13～15は『杉沢遺跡調査の略報告』（名久井1971）に掲載されている。

### ○宮城県東松島市里浜貝塚出土の壺について（第3図17）

里浜貝塚は、宮城県東松島市の宮戸島に所在する国指定の史跡である。

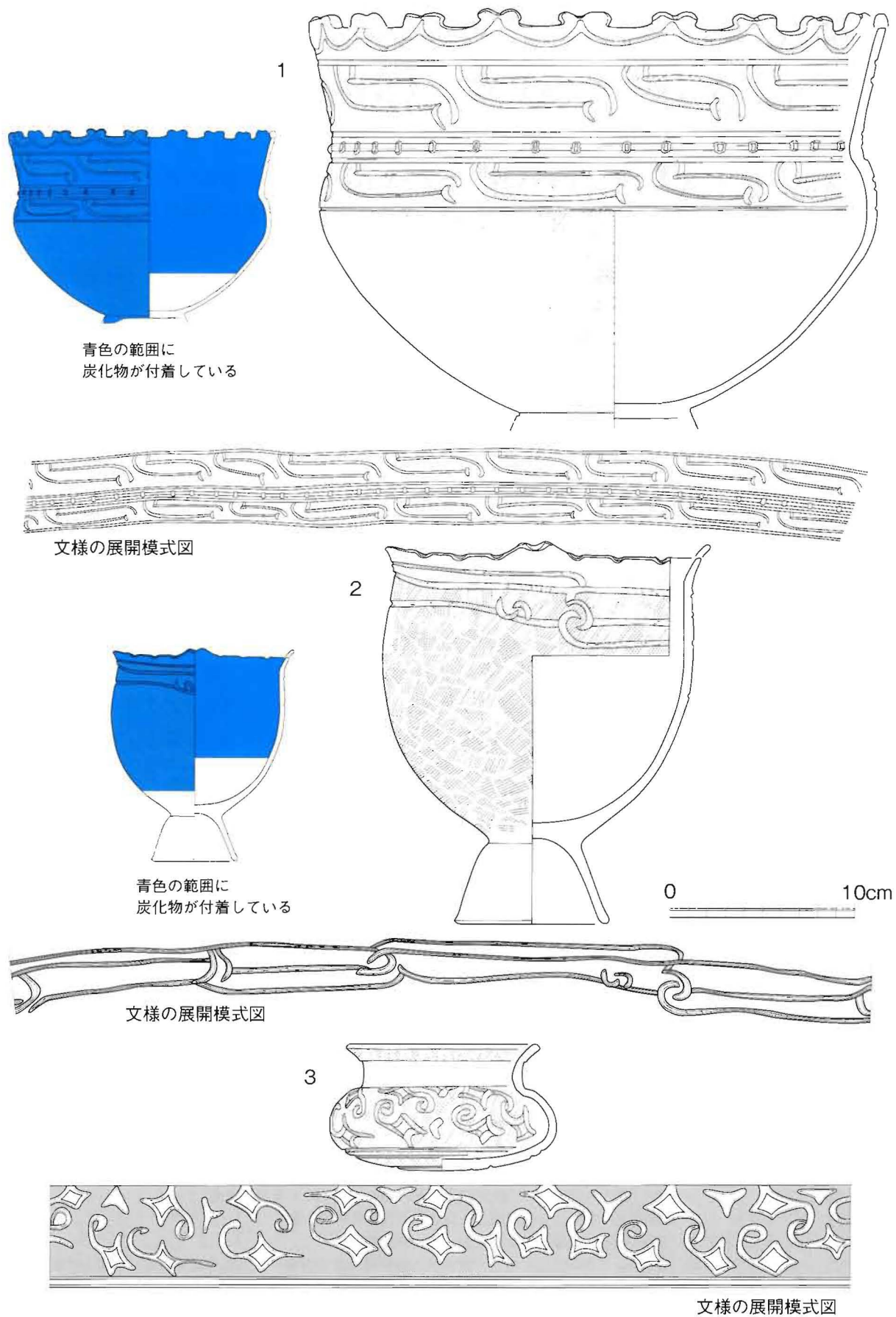
完形の壺で、昭和33年5月10日のネームが底に書かれている。体部中央が膨らみ、円球に近い形をしている。頸部は直線的に立ち上がり、口縁部が外反している。口縁は彫り込みによって小波状となっている。また口縁部は厚く作られており、内面に2条の平行沈線がめぐり、全体が丁寧に研磨され無地となっている。底部は上げ底である。この土器は藤沼邦彦が高校1年の時に、友人の山本好勝くん宅の庭で拾った記念すべき壺である。

### ○最後に

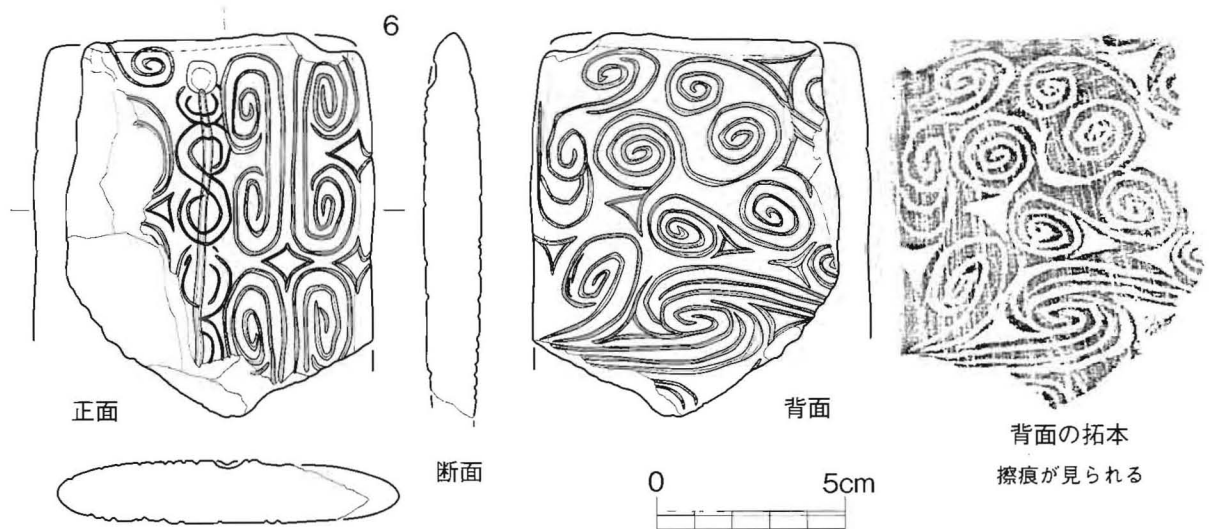
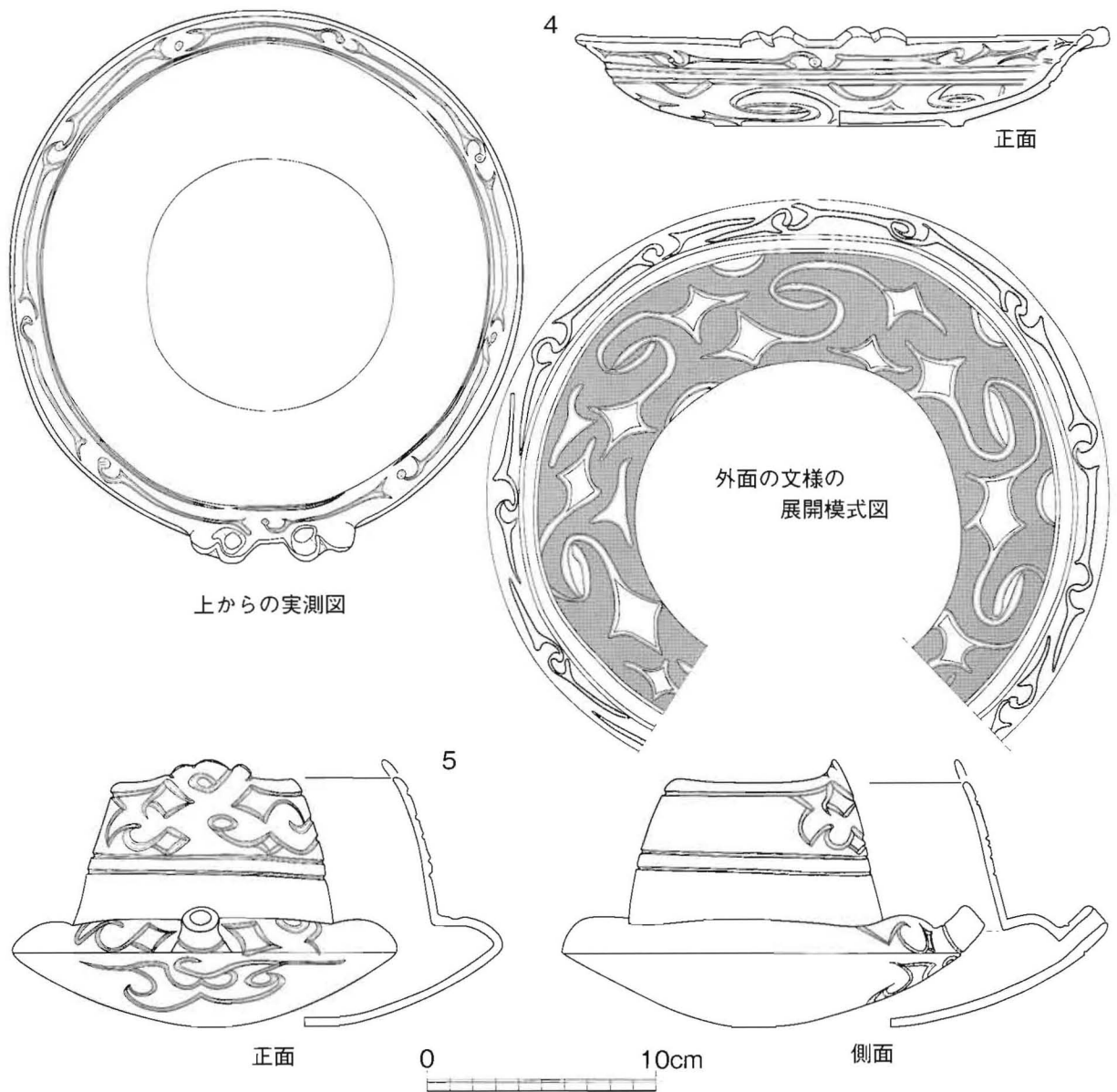
なお実測図は人文学部2年生で考古学実習生の菅野七瀬・菊地咲江・本間大輝・奈良美穂・三浦倫子・葛西早津紀・渡辺信彦、大学院人文社会科学研究科2年の秋山真吾・澤田恭平、人文学部4年の赤坂朋美・宮本明日香が作成したものである。また弘前市教育委員会の成田正彦氏・佐藤一憲氏、五所川原市役所の藤原弘明氏、五所川原市教育委員会の伊藤隆慈氏、三戸町教育委員会の野田尚志氏からは多大なご協力を頂いた。感謝の意を表したい。

### 引用・参考文献

- 青森県教育委員会編（1998年）『青森県遺跡地図』青森県教育委員会
- 秋山真吾・藤沼邦彦（2007年）「Ⅳ．東北地方各地の亀ヶ岡文化の遺物について」『亀ヶ岡文化遺物実測図集（3）』弘前大学人文学部日本考古学研究室研究報告5
- 新谷雄蔵（1975・1984～1992年）『観音林遺跡1～10次発掘調査報告書』五所川原市教育委員会
- 名久井文明（1971年）「杉沢遺跡調査の略報告」青森県立三戸高等学校研究紀要1集
- 福田友之・工藤大（1997年）『馬淵川流域の遺跡調査報告書』青森県立郷土館
- 藤沼邦彦・秋山真吾ほか編（2008年）『青森県三戸郡三戸町杉沢遺跡発掘調査報告書』弘前大学人文学部日本考古学研究室研究報告6
- 藤沼邦彦・小川忠博編（2006年）『ミニ特別展「亀ヶ岡文化の世界」の図録』弘前大学人文学部日本考古学研究室研究報告3
- 藤沼邦彦・蔦川貴祥ほか編（2004年）「Ⅴ．青森県五所川原市観音林遺跡」『亀ヶ岡文化遺物実測図集』弘前大学人文学部日本考古学研究室研究報告1
- 村越潔編（1968年）『岩木山』岩木山刊行会

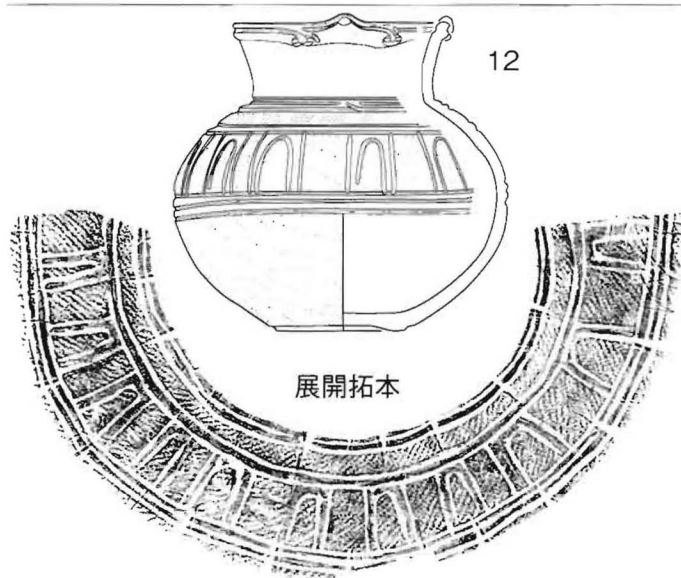
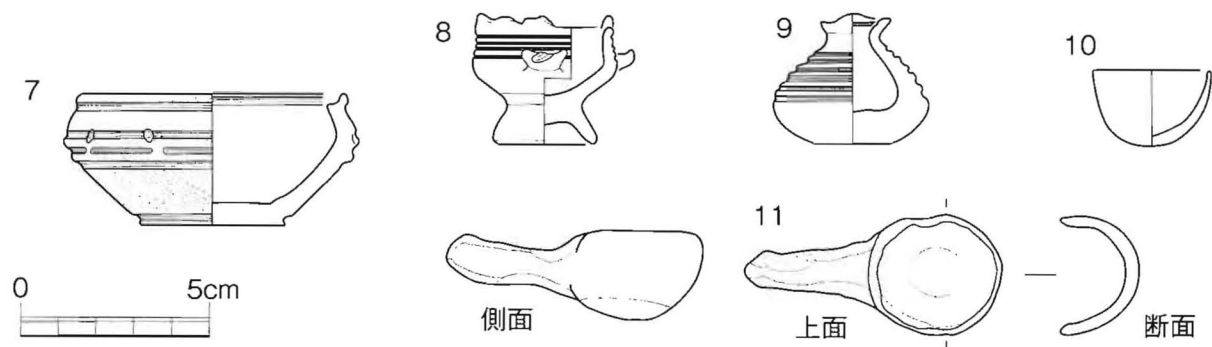


第1図 薬師遺跡出土の土器（1～3） 展開模式図・炭化物についての模式図は縮尺不同

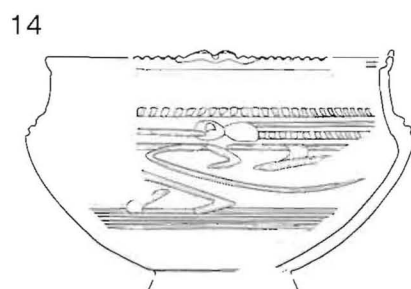
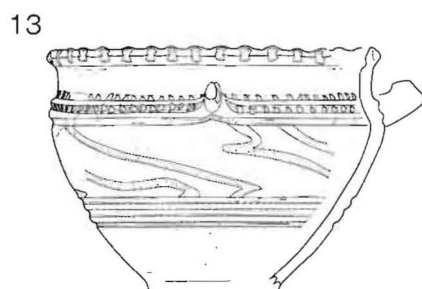


第2図 薬師遺跡出土の土器（4・5）、岩版（6） 拓本・展開模式図は縮尺不同

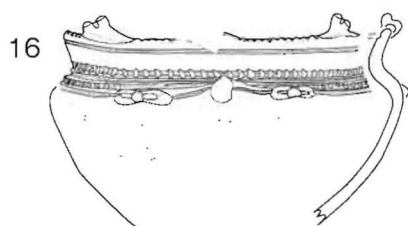




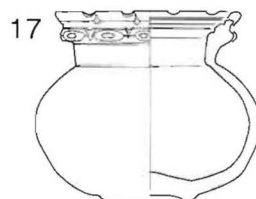
※



※



0 10cm



展開拓本・写真は縮尺不同

17 の写真は小川忠博氏が撮影したものである。  
※を付した写真は学生が撮影したものである。

第3図 観音林遺跡（7～11）・杉沢遺跡（12～16）・里浜貝塚（17）の土器

## 亀ヶ岡文化の土偶（附、仮面）の紹介

－岩手県高梨遺跡・八幡平市長者屋敷遺跡・つがる市亀ヶ岡遺跡・弘前市薬師遺跡・三沢市野口貝塚－  
附、岩手県内出土の仮面

赤坂朋美・秋山真吾・藤沼邦彦

亀ヶ岡文化研究センターで展示した亀ヶ岡文化に属する土偶6点と土製仮面を紹介する。

### 1) 高梨遺跡出土の中空土偶（第1・2図）

①高梨遺跡は、岩手県岩手郡岩手町大字川口21-150-2にあり、JR東北本線川口駅より南東方約5.4kmに位置する。町の中心部の西側にある古館川流域の谷間の低位段丘上に立地し、古館川との比高差は7mである（菅原1955）。

昭和31年の開田工事の際に8個の完形の土器が出土したことで、はじめて遺跡であることが分かったという。その後、岩手町郷土研究会・高橋昭治氏（高橋1965）・東北大学考古学研究室（須藤隆1975）・岩手町教育委員会（菅原1955）などの調査によって、縄文時代前期から弥生時代中期にかけての遺跡であることが知られた。縄文時代晩期の土器は、大洞B式から大洞A'式まで、すべての型式が出土している。報告する土偶は、岩手町在住の高橋昭治氏（北進考古学資料室）が採集したものである。

②土偶はほぼ完形品に近いが、背中と左肩の部分が破損している。大きさは高さ18.8cm、幅10.2cmである。重さは241.6gである。表面はよく研磨されていて光沢がある。色調は頭部が灰黄褐色、体部が明るい黄橙色である。色調が異なるのは、頭部破片と体部破片の埋蔵状況の違いによるもので、黄橙色の体部破片は焼土層に埋蔵されていたのであろう。頭部や肩部などに赤彩が残るので、全身に赤彩が施されていたのだろう。頭部は王冠状になっており、突起が規則的に配置されている。遮光器状の目が顔の大部分を占めている。後頭部の膨らみは剥離しているが、一部に鋸歯状の沈線が下垂しているのが見える。頭部には列点文がめぐり、正面に突起が配置される。肩には小さな点が並ぶ2条の隆線がめぐる。腕の部分はきれいに磨かれている。乳房の部分は列点文で囲まれている。腹部には左右対称の渦巻文がある。下腹部のふくらみは刺突で装飾され、臍には貫通孔がある。股の下にも貫通孔がある。脚は腕と同じように磨かれている。背面は大きく欠損・剥離しているため、文様構成などは知ることができない。

③背面の欠損部から内面の様子を観察することができる。内部の状況については青森県埋蔵文化財調査センターで撮影したX線写真も参考にし、製作法について考えてみたい。

内面を観察すると、約1.5cmごとに粘土紐の積み上げ痕があるのがわかる。またX線写真から両足を並べて接合した部分（股の部分）や腕と体部を接合した部分（脇の下）は、内部に厚く粘土を重ねて補強しているのがわかる。乳房の高まりは、内面を指で押すことによって作られ、その際についた爪痕が残っている。頭部の王冠状の装飾は粘土紐を十字に組み合わせて製作している。X線写真や指触による感じでは、頭部と体部の境に特別な接合状態はみられない。

以上のことから、この中空土偶の製作工程を考えてみると次のようになる。別々に作った両脚を股の部分で接合し、その部分に内部から粘土を足して補強する⇒両脚を動かないように固定し、その上に粘土紐を巻き上げて体部を作る⇒胸の内側の部分を押して乳房の高まりを表現する⇒腕を接合する。この時も接合部を内側から粘土を重ねて補強する⇒体部の上に頭部を作りあげる⇒王冠部をつくる⇒最後に文様をつけたり、研磨したり、細部を加工する。そして焼成したのちに赤彩を施した。

④土偶の形態・文様から大洞C1式に属すると思われる。

## 2) 長者屋敷遺跡出土の中実土偶 (第3図)

①長者屋敷遺跡は岩手県八幡平市松尾地区に位置し、八幡平火山群の1つである前森山から派生する丘陵の低位段丘面から沖積地にかけて立地する。標高は335～380mほどである。東北縦貫自動車道建設に伴い、1978年・1979年に財団法人岩手県埋蔵文化財センターによって発掘調査が行われている(佐藤ほか1980、佐藤ほか1981、三浦ほか1984)。

②この土偶は地元の方が採集したものという。現在、北進考古学資料室が所有している。ほぼ完形に近いが、右腕と右脚が大きく欠損している。また左脚の先端部も小さく欠けている。大きさは現高11cm、現幅6.3cmである。重さは81gである。全身が磨かれ、光沢もあるが、文様の施文は雑である。頭部は中空だが、体部は中実である。頭部には透かしのある王冠状の装飾が施される。大きな目は遮光器状に表現されている。顎には小さな瘤状の膨らみが2個ある。乳房の高まりの間には菱形文が施文されている。腹部には左右対称の渦巻文があり、下腹部はやや膨らみ、刺突で装飾されている。背中にはC字形を組み合わせた点対称の文様が施されている。

③この土偶の頭部は、王冠部の透かしから覗いて、中空であることがわかるが、X線でも確認することができた。体部は中実である。表面からの観察やX線写真では製作法を示すような痕跡を確認することができなかった。

④土偶の形態・文様から大洞C1式に属すると思われる。

## 3) 亀ヶ岡遺跡出土の結髪中空土偶 (第4図)

①この土偶はかつて旧制弘前高等学校の所蔵資料であり、現在は弘前大学人文学部附属 亀ヶ岡文化研究センターで展示している。「亀ヶ岡瓶子山 先史時代土偶 弘前高等學校」と注記されている。かつてサントリー美術館に展示されたことがある(サントリー美術館1969)。出土状況などは不明である。亀ヶ岡瓶子山は有名な亀ヶ岡遺跡のことである。亀ヶ岡文化研究センターで所蔵する亀ヶ岡遺跡の出土品はこの土偶を除いて公表している(境沢・山口・藤沼2006)。

亀ヶ岡遺跡はつがる市木造館岡字亀ヶ岡にあり、岩木川の流域に突き出た低丘陵に立地し、丘陵をはさむ沢地には遺物を含む泥炭層が発達している。亀ヶ岡遺跡に関する報告書・論文・資料紹介は膨大な数に達する。

②この土偶は、大型中空土偶の頭部と頸部が残っているものである。大きさは、現高9.5cm、幅12.7cmである。他の土偶のプロポーシオンを参考にとすると、全体の復元高は30cm以上と推定される。頭部しかないが重さは450gある。頭部は中空で、もとは頸部を通じて体部の中空部に連続していたのであろう。口の部分は貫通孔となっている。頭には左右に髪を分けたような表現があり、さらに大きな輪のような鬘をつけている、いわゆる結髪土偶である。結髪の前の部分の左右が欠損している。顔つきは平坦な感じで、やや上向きである。眉と鼻は粘土紐でT字形に繋がっており、鼻は高く、鼻孔もある。目は細く、楕円形に隆帯で囲まれている。眉と目の隆帯部には刻み目が並ぶ。口は小さな楕円形の貫通孔で表現され、左右に口端三角文がつく。側面に耳らしい表現がある。

③頭部の大きさや中空であることから、体部も当然中空に作られていたであろう。頭部の内面は滑らかで、粘土紐の輪積み痕はみられない。しかし、粘土紐を積み上げて、その上で細部を加工したり、結髪の部分を接合したものであろう。胎土は金雲母が混入している。

④土偶の形態・文様から大洞A'式に属すると思われる。

## 4) 薬師遺跡の中実土偶 (第5図)

①薬師遺跡は青森県弘前市大字新岡字薬師に位置し、岩木山の南麓に数多く分布する遺跡の一つである。標高約160mの舌状台地に立地する。現在はりんごを中心とした果樹園となっている。1958年と



1960年に弘前市教育委員会によって2地点が発掘調査され、薬師Ⅰ号遺跡からは縄文前期・後期～晩期の遺物が、薬師Ⅱ号遺跡からは縄文前期～晩期の遺物が出土した（村越1968）。この土偶は薬師Ⅱ号遺跡から出土したものである。

②上半部がよく残っている中空の土偶である。大きさは現高12.4cm、幅13.0cmで、下半部が欠損している。この欠損した面にはアスファルトが付いており、修理されていたことがわかる。重さは256.4gである。胎土は密であるが、表面は風化のためか荒れている。赤彩は沈線部や刺突部をはじめ全体によく残っており、もとは全面に赤彩されていたことがわかる。

頭部には角状の突起が付き、顔は横長である。眉と鼻は連続し、鼻はやや高く鼻孔をもつ。目は小さく楕円形に表現される。口は横に長く下向きの三角形である。耳たぶには孔がつけられている。

頸はやや長い。肩にパット状の突起がある。肩から腕にかけては肩覆いのような隆帯が付き、円文と三角文で飾られている。胸には三角形に区画された部分があり、刺突点で埋められている。乳房は表現されていない。背面は背の部分に三叉状の文様がある。

③土偶は中空に作られている。基本的には粘土紐を輪積みしながら体部を成形したのであろう。X線写真を見ると、体部に頭部や腕を接合した状況がわかる。まず頭部は、長い頸部を体部の肩の部分に差し込んで接合している。その食い違いがX線写真に現れている。同じように、腕も体部に差し込んでいることが、腕の付け根の下の部分でよくわかる。

④形態や文様からみて、大洞C2式から大洞A式にかけてのものであろう。

## 5) 野口貝塚の遮光器土偶A（第6・7図）

①野口貝塚は青森県三沢市大字三沢字早稲田298番地に所在し、小川原湖から約100m離れた東岸の標高12～20mの丘陵斜面に立地する。貝層は縄文早・前期のもので、晩期には貝層は形成されない。

1961（昭和36）年ごろ、三沢市在住の野口和三郎氏が自宅の畑を発掘し採集したもので、現在、三沢市歴史民俗資料館の「野口コレクション」として活用されている。今回ここで紹介する遮光器土偶2点も「野口コレクション」のものである。

②ほぼ完形であるが両足を欠損する。大きさは現高13.6cm、幅13.1cmである。もとの大きさは16cm前後であったと推定される。表面は黒色でよく研磨されており光沢がある。首や腹部に黒色の漆を塗ったような痕があるが、目の沈線などには赤彩の痕跡もみられる。頭部は王冠に似た表現で、円形の透かしが4ヵ所につく。頂部は欠損しているようである。顔は横に長く、遮光器状の目は顔の大部分を占めている。眉と鼻が連続しており、鼻は大きな目の間に位置する。口は三角形に深く彫りこまれている。後頭部には隆帯がめぐり、そこには四角い窪みが並ぶ。首は無文で太い。首の付け根には隆帯がめぐるが、胸の部分で他の隆線とともに逆三角形の区画を形成する。この隆線部の接する部分には小さな突起がつく。肩幅は広く直線的である。乳房は小さな高まりを示している。体部の正面も背面も文様が3段に分かれるが、それぞれ浮彫り手法によって美しい雲形文・渦巻文が描かれている。とくに腹部には隆帯による三角文が大きく作られ、その左右に渦巻文が対称に配されている。この三角文の3つの隅には三角形の小さな透かしが開けられている。腕は短く、手も小さい。脚と脚の間は比較的広い。

全体的に眺めると、遮光器土偶の中でも変わった装飾を持つものであるが、似たような形態・装飾を持つものとして明治大学考古学博物館が所蔵する亀ヶ岡遺跡の土偶が挙げられる（明治大学考古学博物館1991）。

③土偶の足の付け根の部分（股）が残っていたが、X線写真や指触でも接合痕などはみられない。体部の器壁は薄い作りで、粘土紐を輪積みしながら成形したと思われるが、その痕跡を辿ることはできなかった。

④時期は形態や文様から大洞C1式に属するものである。

## 6) 野口貝塚の遮光器土偶 B (第8図)

①は5)と同じ。

②胸部より上の部分が残存している大きな中空遮光器土偶である。大きさは現高で18.6cm、幅24.6cmである。頭部の王冠状の装飾は、上から見ると十字形になっている。遮光器状の大きな目が顔の大部分を占め、目と目の狭い間に、上から鼻・人中・口の順で並ぶ。口は小さな丸い貫通孔となっている。顎に膨らみをもつ。後頭部は長方形に区画され、そのなかに縦線と弧線文が描かれる。

首は無文で太いが短い。頸部の付け根には刻み目をもつ隆帯がめぐる。肩幅は広く、腕は短い。胸の下の方に小さな乳房があるが、剥離している。胸や背中部分とはともに磨消縄文による雲形文が施されている。腕の隆帯部や肩の部分には突起がみられる。頭部の突起部分などに赤彩がみられる。

③土偶が台座に固定されているため、内部の様子を知ることができなかった。X線写真では、体部に腕を接合した部分に粘土を足して補強している様子が窺われる。

④形態や文様から大洞C1式に属するものである。

## 7) 岩手県内出土の土製仮面 (第9・10図)

①岩手県立博物館の小田島コレクションに含まれている小型の土製仮面で、出土地は不明である。

②この仮面の大きさは縦5.5cm、横5.9cm、奥行き3.0cmで、重さは49.0gである。眉と鼻は連続して表現されていたと思われるが、鼻の上の部分で剥離がみられる。鼻は盛り上がり鼻孔をもつ。目は線のように細いが、目元に縁取りのようなものが沈線で表現されている。口は三角形で左右に口端三角文がつく。眉と口端三角文に縄文(RL)が付いている。頭部は沈線や刻み目をもつ隆帯などで飾られ、縁には2個1対の小さい突起が5個並ぶ(3個剥離)。側面に耳らしい表現がある。

③製作法は不明である。おそらく小型の丸底の皿形を作り、その丸い面に眉・鼻・口などを表現したものと思われる。

④この小型の仮面は形態からみて大洞C1式から大洞C2式にかけてのものであろう。

⑤なお、東北地方の土製仮面出土地の一覧を作ったことがあるが(藤沼・佐布・萩坂2002)、その後、青森県亀ヶ岡遺跡(採集品)・寺下遺跡(森2007)、岩手県大橋遺跡(八木・新井田・吉田2006)・宇登遺跡(菊地2004)などで土製仮面が追加されている。

本稿を作成するにあたって、次の機関・個人からご指導をいただいた。とくに白鳥氏からはX線写真撮影やその利用法についてご指導をいただいた。薬師遺跡の土偶は佐布氏が製作した実測図を使用させていただいた。明記して感謝の意を表したい(敬称略、順不同)。高橋昭治・小川忠博・菅原 修・弘前市教育委員会・成田正彦・三沢市教育委員会・長尾正義・青森県埋蔵文化財調査センター・白鳥文雄・岩手県立博物館・高木 晃・横山寛剛・佐布環貴。

### 【引用・参考文献】

菊地幸裕(2004年)『宇登遺跡・田の沢D遺跡』玉山村文化財調査報告書22。

境沢宏美・山口朋美・藤沼邦彦(2006年)「つがる市亀ヶ岡遺跡の縄文晩期の土器について」弘前大学人文学部日本考古学研究室研究報告4、亀ヶ岡文化研究センター。

佐藤 勝ほか(1980年)『東北縦貫自動車道関連遺跡発掘調査報告書 松尾村長者屋敷遺跡(Ⅰ)－遺構編Ⅰ』岩手県埋蔵文化財センター文化財報告書12。

佐藤 勝ほか(1981年)『東北縦貫自動車道関連遺跡発掘調査報告書 松尾村長者屋敷遺跡(Ⅱ)－遺構編Ⅱ』岩手県埋蔵文化財センター文化財報告書20。

サントリー美術館(1969年)『春の特別展 土偶と土面』。

菅原修(1995年)『岩手県岩手郡岩手町 町内遺跡発掘調査報告書Ⅲ〔高梨遺跡〕』。

須藤隆（1975年）「岩手県高梨遺跡調査報告」『東北大学考古学調査報告Ⅰ』。

高橋昭治（1965年）『岩手町遺物出土表』。

藤沼邦彦・佐布環貴・萩坂華恵（2002年）「青森県における縄文時代の土製仮面について」青森県史研究 6、青森県。

藤沼邦彦・小川忠博（2006年）『ミニ特別展「亀ヶ岡文化の世界」の図録』、弘前大学人文学部日本考古学研究室研究報告 3。

三浦謙一ほか（1984年）『東北縦貫自動車道関連遺跡発掘調査報告書 松尾村長者屋敷遺跡（Ⅲ）－遺構編』岩手県埋蔵文化財センター文化財報告書77。

村越 潔ほか（1968年）『岩木山』、岩木山刊行会。

森 淳（2007年）『寺下遺跡発掘調査報告書・笹畑遺跡発掘調査報告書』、陸上町教育委員会。

明治大学考古学博物館（1991年）『縄文晩期の世界』、明治大学考古学博物館蔵品図録 2。

八木勝枝・新井田えり子・吉田真由美（2006年）『大橋遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 481。





正面（ほぼ原寸大）

小川氏撮影

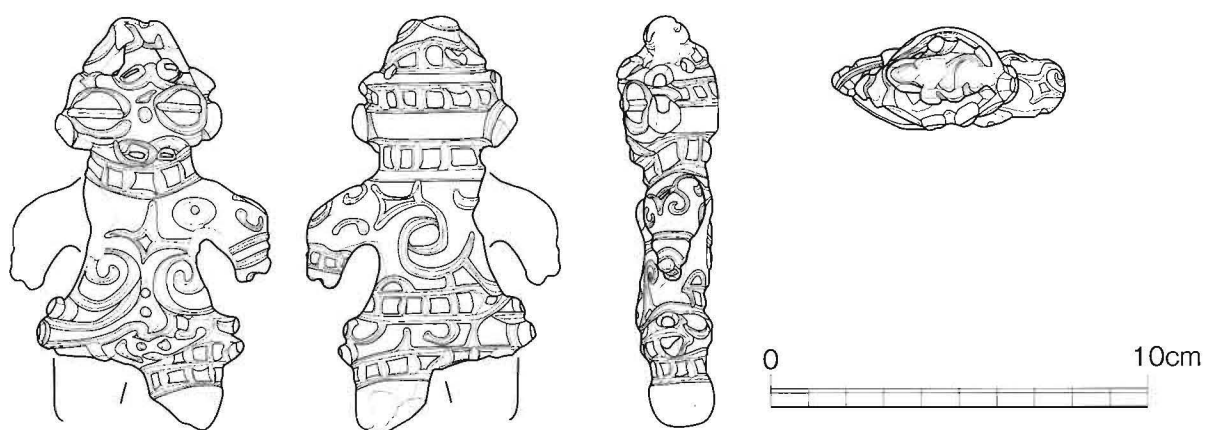


背面

小川氏撮影

第2図 岩手県高梨遺跡の遮光器土偶



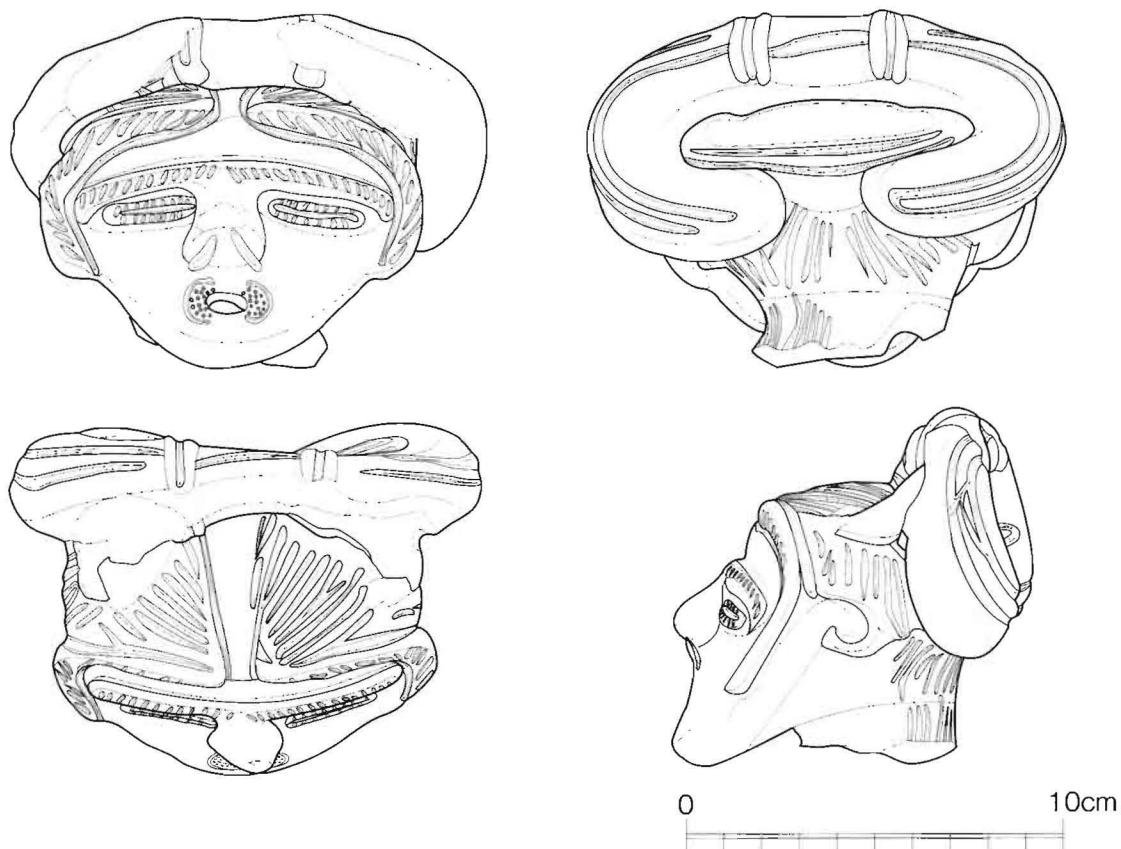


正面

背面

小川氏撮影

第3図 八幡平市長者屋敷遺跡の遮光器土偶

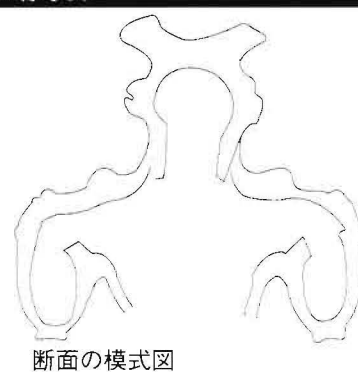
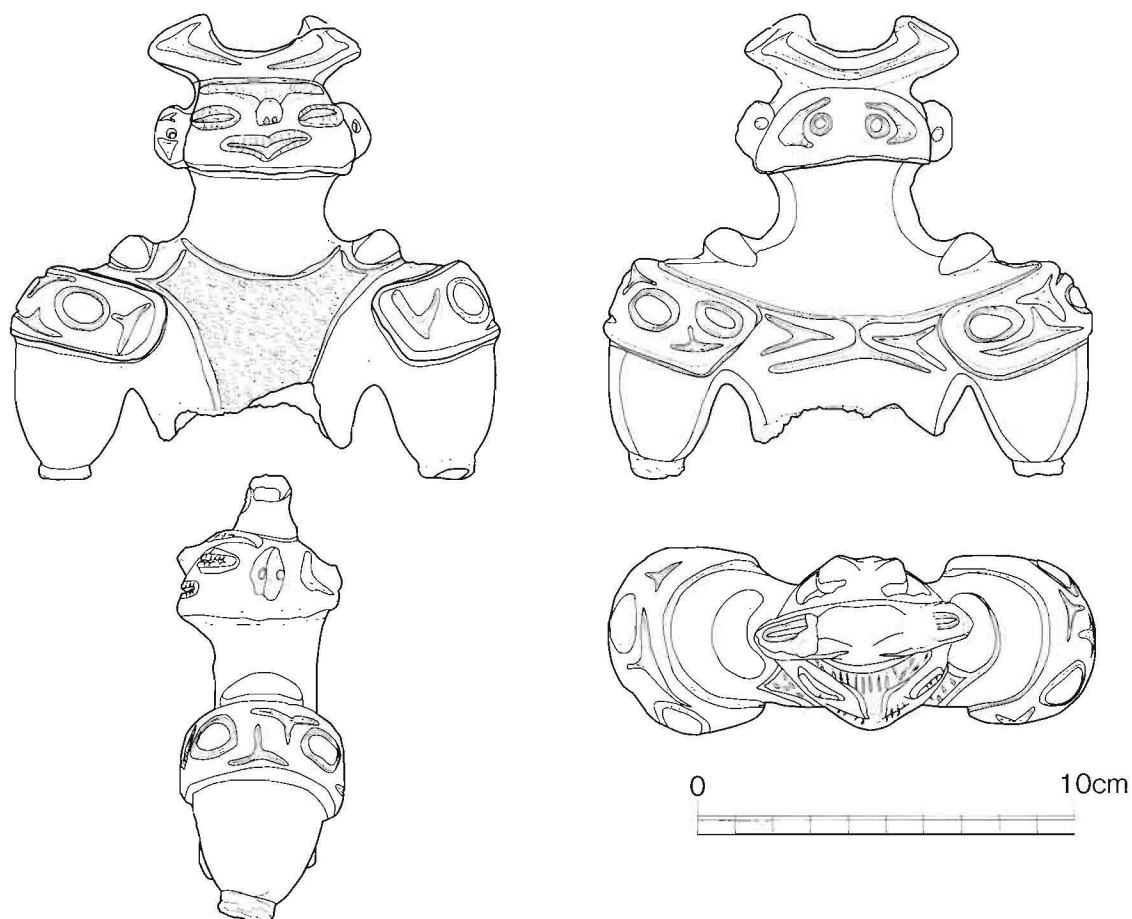


正面

小川氏撮影

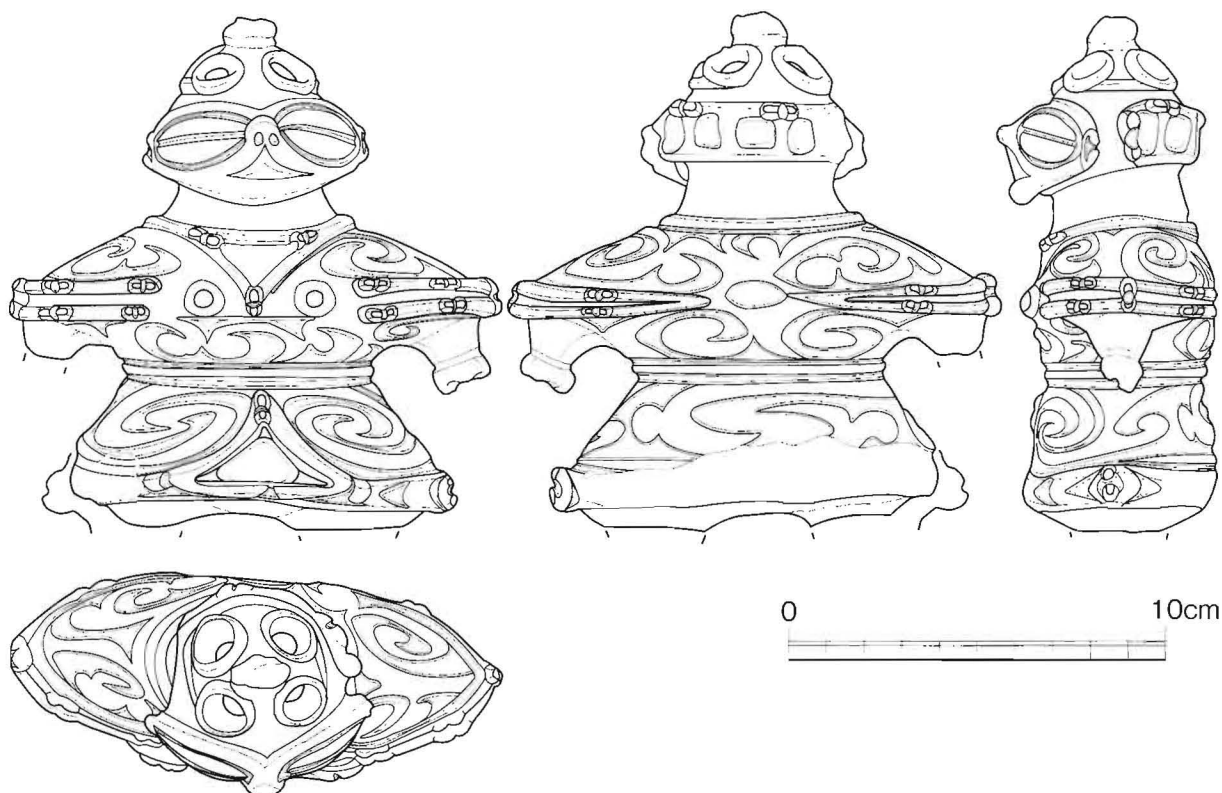
断面の模式図  
あごの先に接合面があることがわかる。

第4図 つがる市亀ヶ岡遺跡の結髪土偶



第5図 弘前市薬師遺跡の中空土偶





正面

小川氏撮影

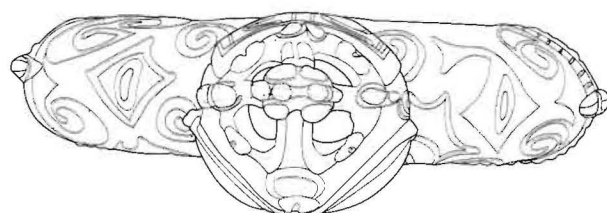
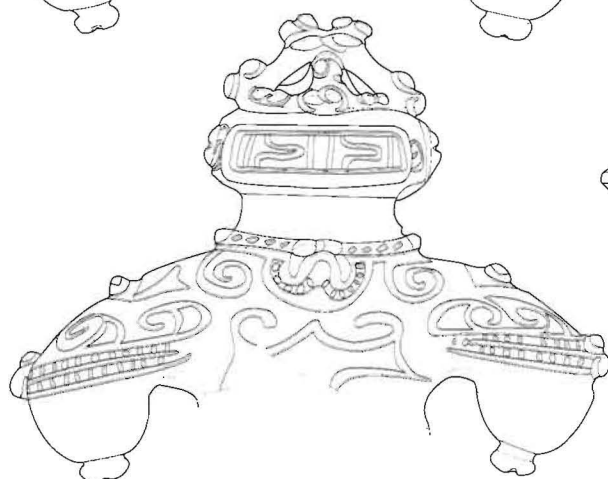


側面

第6図 三沢市野口貝塚の遮光器土偶A



第7図 三沢市野口貝塚の遮光器土偶A



0 10cm



正面



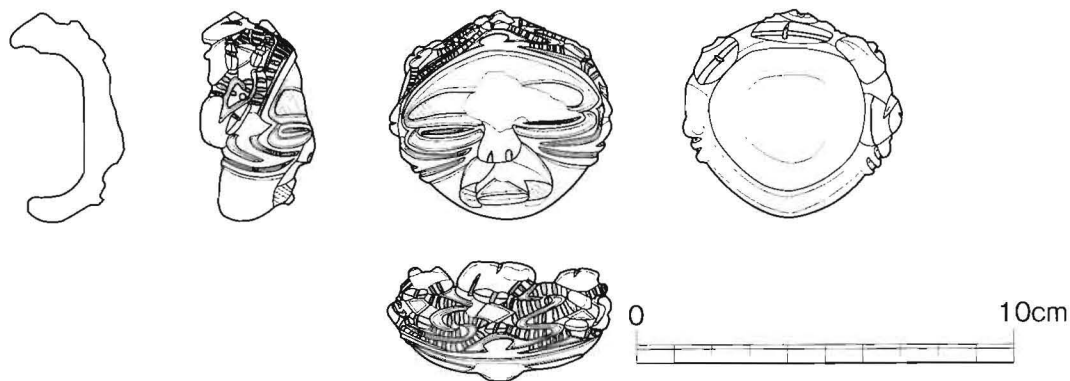
背面



X線写真

第8図 三沢市野口貝塚の遮光器土偶B

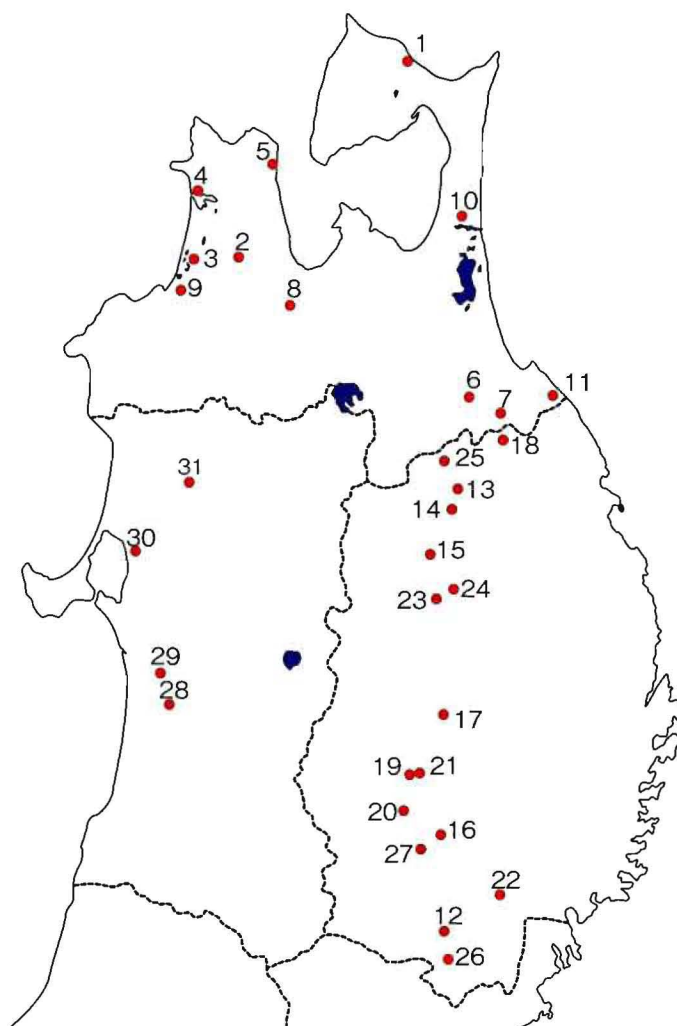




第9図 岩手県内出土の土製仮面実測図

番号	遺跡名	個数
1	青森県 むつ市 二枚橋(2)	20
2	青森県 五所川原市 千刈(1)	1
3	青森県 つがる市 亀ヶ岡	5
4	青森県 五所川原市 五月女苑	1
5	青森県 外ヶ浜町 今津	1
6	青森県 南部町 虚空蔵	2
7	青森県 南部町 鳥舌内	1
8	青森県 青森市 羽黒平	1
9	青森県 つがる市 石神	1?
10	青森県 六ヶ所村 上尾駁(1)	1
11	青森県 階上町 寺下	1
	青森県 陸奥	1
	青森県 不明	1
12	岩手県 一関市 草ヶ沢	1
13	岩手県 一戸町 時前	1
14	岩手県 一戸町 山井	1
15	岩手県 岩手町 どじの沢	3
16	岩手県 奥州市 根岸	1
17	岩手県 花巻市 屋敷	1
18	岩手県 九戸村 伊保内	1
19	岩手県 北上市 九年橋	2
20	岩手県 北上市 七折	1
21	岩手県 北上市 大橋	1
22	岩手県 一関市 太原	1
23	岩手県 盛岡市 前田	1
24	岩手県 盛岡市 宇登	1
25	岩手県 二戸市 (伝)雨滝	1
26	岩手県 一関市 貝島	1
27	岩手県 奥州市 杉の堂	1
	岩手県 不明	1
28	秋田県 秋田市 地方	3
29	秋田県 秋田市 戸平川	3
30	秋田県 三種町 高石野	1
31	秋田県 能代市 麻生	1

(藤沼・佐布・萩坂2002をもとに作成。  
新たに3遺跡3個体を追加している)



第10図 北東北3県の土製仮面の出土地一覧と分布

第9・10図 土製仮面

## 平川市唐竹出土の十字形土偶について

藤沼邦彦・萩坂華恵

この土偶は円筒上層式に伴ういわゆる十字形土偶である。出土地は平川市唐竹で、昭和6年7月に発掘されたものといわれるが、出土状況などは不明である。昭和23年6月、工藤力太郎氏から弘前大学に寄贈されたもので（以上、村越潔先生の御教示）、現在、弘前大学人文学部附属 亀ヶ岡文化研究センターで常設展示している。大型土偶であり、『円筒土器文化』（村越1974）や『土偶と土面』（サントリー美術館1969）で写真が紹介されているが、実測図は今回が初めてであろう。なお、本書の写真は、写真家小川忠博氏の撮影による。また内容については青森県教育委員会の小笠原雅行氏のご指導を得たことを明記したい。

### ○ 出土地

本土偶の出土地は、青森県平川市（旧南津軽郡平賀町）唐竹遺跡という（村越1974）。平川市教育委員会の渡部学氏によると、この唐竹遺跡は、唐竹地区にある現在の堀合遺跡群（(1)～(5)）をさし、土偶が出土したのは、そのうちの堀合(2)遺跡である可能性が高いとのことであった。堀合(2)遺跡は、昭和46年の平賀町教育委員会の発掘調査で、縄文中期の円筒上層c式・円筒上層d式・円筒上層e式・最花式などの土器が多数出土している。土偶も4点あり、それぞれ円筒上層d式、最花式、大木8b式、大木9式土器に伴ったものという（工藤・葛西1972）。

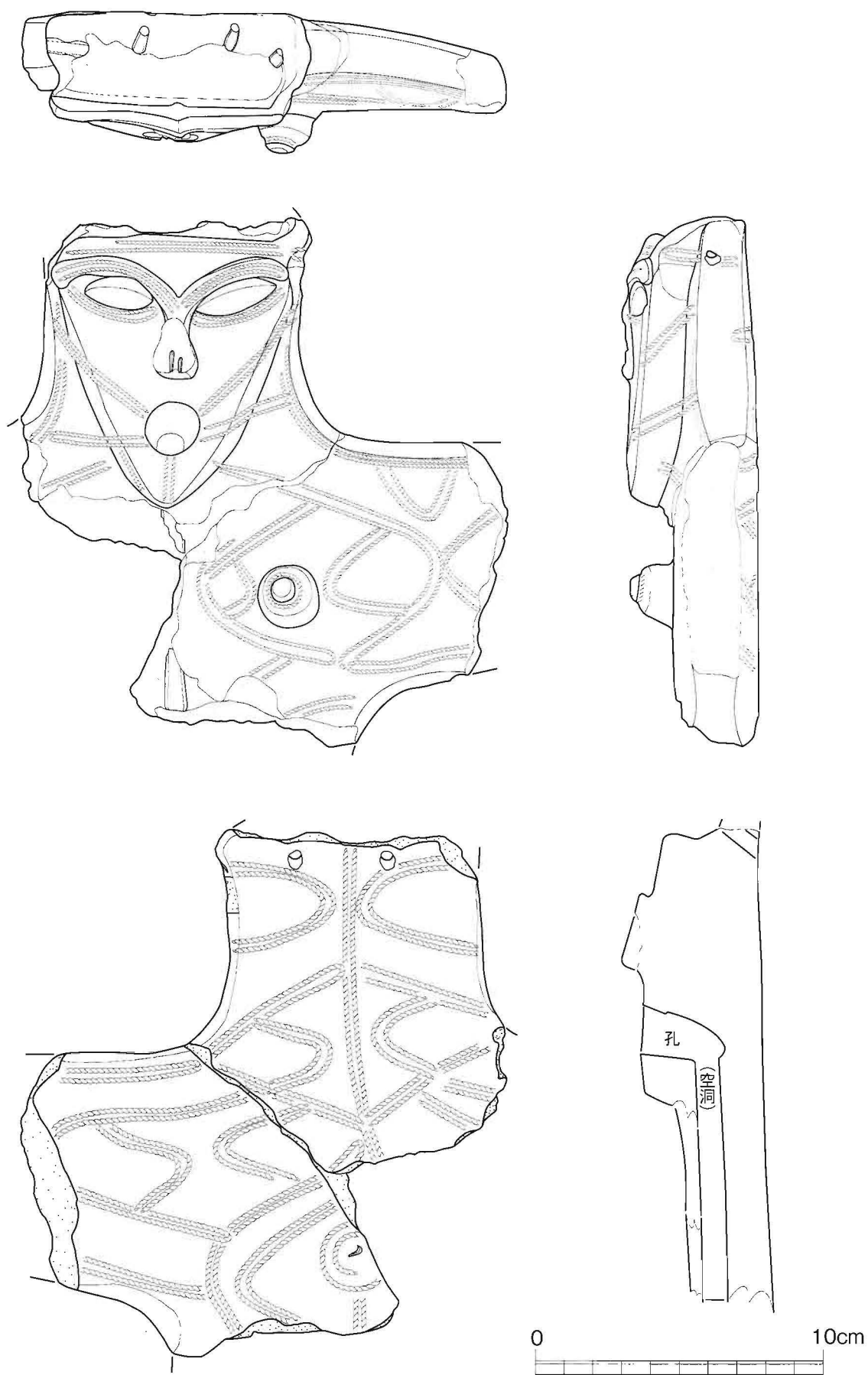
### ○ 土偶の形態・大きさ（第1図、第4図）

この土偶はいわゆる十字形土偶の破片である。頭部と左胸から左腕にかけて残るが、その他の部分は欠損している。大きさは、残存部で縦18.5cm、幅16.9cm、厚さは胸の中央で2.8cmである。三内丸山遺跡出土の完形になった大型土偶（第3図）の大きさは、縦32.5cm、腕の部分の幅23.8cm、胴の幅10.5cmである。この二つの大型土偶はよく似ているので、三内丸山遺跡の土偶のプロポーシオンに基づいて、唐竹の土偶のもとの大きさを推定すると、縦約35cm、腕の部分の幅約27～28cm、胴の幅13cmである。三内丸山遺跡のものより一回りか二回り大きいことになる。

頭部は平らであるが、その後ろの髪の毛の部分が欠損している。この髪の毛の下部分に頭の上面から背面にかけて斜めにあいた貫通孔が2個ある。また頭の上面から側面にかけて斜めにあいた貫通孔が2個ある。

顔は、全体が胸より1cmほど飛び出し、逆三角形である。眉と鼻は一連の隆帯で表現されて、その上に撚り糸が押捺されている。鼻は大きく、鼻孔も表現されているが、大部分が剥落している。耳は表現されない。目をアーモンド形にくぼませ、撚り糸の押捺で縁取っている（右目の上の縁取りは明らかでない）。口は、径1.9cmほどの大きな穴となっており、胴の中心を上下に通る穴と繋がっている（第2図）。口の穴は喉の奥まで凹んでおり、切り合いから胴の中心を通る穴より後に開けられたことが分る。胴の中心を通る穴は、ほぼまっすぐで、内面に縦方向に筋状の線がみえるようである。またひび状の小さな穴がみられる部分もある。おそらく胴体を作成する途中で棒状のものを埋め込み、整形後に抜き取って空洞を作ったのであろう。三内丸山遺跡出土の大型土偶を参考にすれば、この穴は口から胴部下端の穴まで通じていたのであろう。口の周り（頬・顎）は、撚り糸の押捺で飾られる。

腕の先端は欠損している。乳房は径2.0cm、高さ1.5cmほどで、乳首の周囲は撚り糸が押しつけられている。腕・胸の部分は撚り糸押捺の曲線的な文様で飾られているが、体部の中央を境にして左右対称の文様であったと推定される。



第1図 唐竹出土土偶の実測図

背面をみると、頭部から背中にかけて左右対称に撚り糸押捺の曲線的な文様で飾られている。中央の縦線は直線的な撚り糸押捺文であるが、背中あたりには渦巻き文もみられる。なお、本土偶にみられる撚り糸押捺文は、どの部分のものであっても、すべて2条の平行線となっている。

### ○ 年代

本土偶は、出土状況が不明なので、共伴土器などから年代を推定することはできない。

村越潔は、円筒上層b式の土偶について、「上層b式土器の時代は土器が華やかな文様装飾を有するのと同様に、土偶の面でもその傾向は顕著に現れている。文様は表裏面ともに撚糸文が多用され、それらが波状・渦巻・直線・曲線など巧みに入り混じって見事な構図を形成している」「顔面部の形態が、体部文様の相違を問わず同様である。たとえば眉と鼻を隆起させて、顔面の中央で合致を見せるのは前型式と同様であるが、口を円形に深い穴で現す点と、顔面部が体部より強く浮彫りさせて立体的な感じを出している点、顎の輪郭を逆三角形に浮彫りさせている点などは、この型式における特徴であり、また以後のc式土器の時期までその手法が維持されていくのである」と述べ、本土偶を円筒上層b式期の土偶とした(村越1974)。



第2図 胴の中心を通る孔は口の穴に連なる(唐竹出土土偶)

小笠原雅行は、三内丸山遺跡の調査の成果から、『青森県史 別編 三内丸山遺跡』(青森県史編さん考古部会2002)のなかで、共伴した土器が明らかな土偶を軸にして、円筒上層式期の土偶の編年を行っている。これを利用して本土偶(唐竹出土の土偶)の編年的位置付けを考えてみたい。まず、本土偶には、円筒上層b式期の土偶や土器に多用される「C」字状の撚り糸押捺がまったくない。また上層b式期の土偶より顔面の高さが発達している。体部文様も違う。また上層c式期の土偶や土器に多用される刺突文がみられない。上層d式期の土偶の文様は直線的な撚糸押捺文が多く、顎から肩にかけての縁取り・体部の縁取りにも利用されている。逆三角形の顔面をもつものは、顔面の高まりが明瞭である。こうした点は本土偶と共通することであるが、体部の文様は、本土偶のほうがやや曲線的である。

また、本土偶は大型土偶であるので、三内丸山遺跡から円筒上層d式土器に伴って出土した大型土偶(第3図)と比べてみよう。①全体の形(板状・十字形)とプロポーションが同じであると推定される。②どちらも逆三角形の顔部が本体より高くせりだし、眉・鼻・顎・口の作りや形がよく似ている。三内丸山遺跡のものは耳があるが、本土偶には耳が表現されていない。③本土偶の額の上端は平らであるが、三内丸山遺跡のものは緩やかな山なりである。しかし、両者とも頭部の上面が平坦でそこから背面にかけて貫通孔があることも共通する。④口から尻まで消化器のような空洞をもつことも共通する。⑤顔面や体部に見られる撚糸押捺文による装飾技法も共通するが、本土偶のほうが複雑な文様となっている。いずれにしても両者の土偶がよく似ていることは間違いない。

したがって本土偶の編年的位置は、円筒上層b式期ではなく、むしろ円筒上層d式期に近いものであろう。

### ○ まとめ・考察

①本土偶は、唐竹遺跡出土とされている。この遺跡は、現在の平川市唐竹地区の堀合(2)遺跡である

という。

②本土偶は形態・文様などから円筒上層b式期のものとされてきたが、もっと新しい円筒上層d式期である可能性が高い。

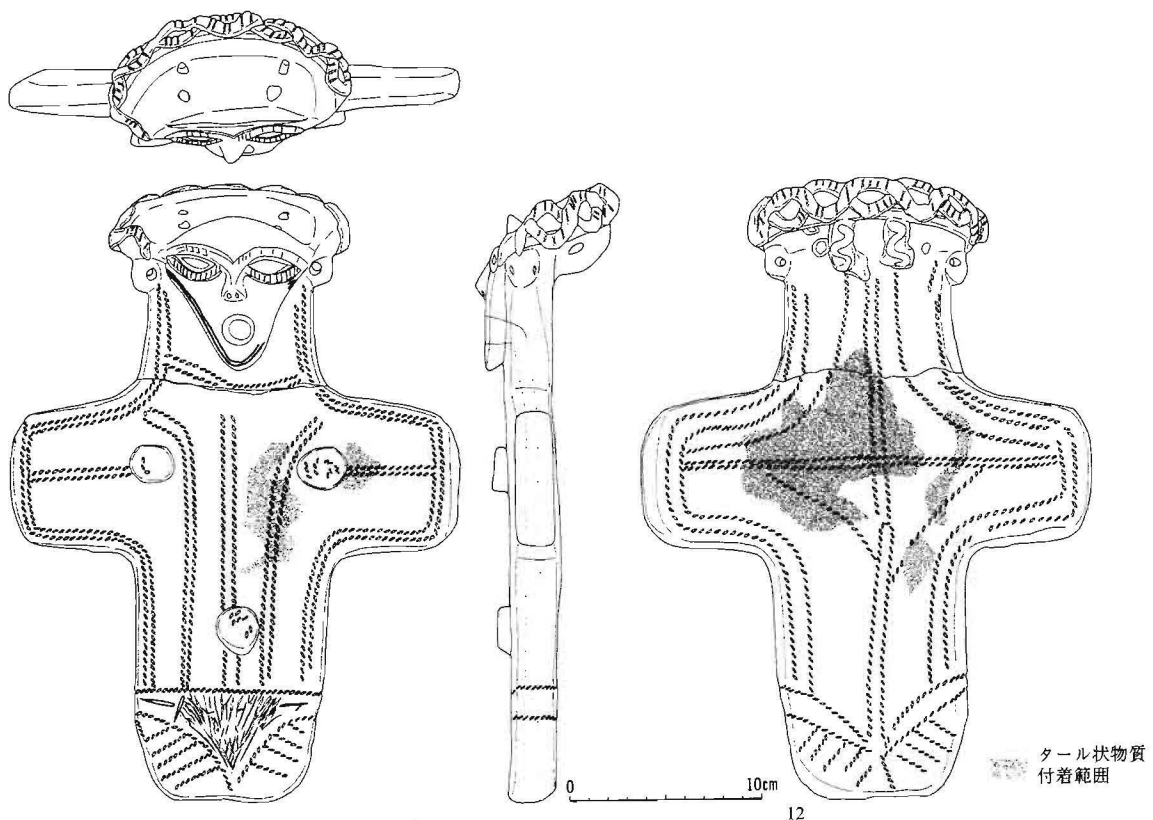
③本土偶は、頭部と左胸から左腕にかけての破片であるが、三内丸山遺跡から円筒上層d式土器に伴って出土した大型土偶と比較すると、形態・顔部の状況・構造・文様などいろいろな点でよく似ている。しかし、本土偶は、耳が表現されず、撚糸押捺文による装飾がより複雑な感じである。

④本土偶は、三内丸山遺跡の土偶のプロポーションによく似ていると想定されるが、それより一回りか二回り大きく、完形であれば高さ35.0cmはあったであろうと推定される。円筒上層式にともなう十字形土偶のなかでも最大クラスに属することは間違いない。

⑤本土偶の口の穴は、胴の中心を縦に通る穴に連なっている。三内丸山遺跡の土偶と同じように、この穴は胴下端にある穴（肛門）に通じるものであったと考えられる。消化器を示すようなこの穴（空洞）は、円筒上層式期の中型・大型の土偶にはよく見られる特色の一つである。

#### 【引用・参考文献】

- 青森県史編さん考古部会（2002年）『青森県史 別編 三内丸山遺跡』、青森県。
- 工藤正・葛西勲（1972年）『青森県平賀町堀合Ⅱ号遺跡発掘調査報告書』、平賀町教育委員会。
- サントリー美術館（1969年）『土偶と土面』、サントリー美術館。
- 三内丸山遺跡対策室（1996年）『三内丸山遺跡Ⅵ』青森県埋蔵文化財調査報告書205集、青森県教育委員会。
- 村越 潔（1974年）『円筒土器文化』、雄山閣出版株式会社。



第3図 三内丸山遺跡出土の大型土偶の実測図（三内丸山遺跡対策室1996）





正面



背面

第4図 唐竹出土土偶の写真

## 東北町田の沢(3)遺跡出土の壺

藤沼邦彦・佐藤千絵

今回紹介する壺は、東北町教育委員会所蔵のもので、土器そのものに出土地や出土年月日などは書き込まれていない。昭和26年に刊行された『甲地村史』の口絵写真にこの壺が掲載され、田の沢出土と説明されている。また文中に「今、甲地小学校に蔵するこれらの遺物の中、主として田ノ沢から出土した土器を見ると、比較的形の大きい壺形土器は、巧みな薄手であって、此紋様は亀ヶ岡式の様相でいわゆる蔵手形の部厚い擦消文を用いてある」とある。平成6年の『東北町史 上巻Ⅰ』にも、この壺の写真が掲載され、出土地は田の沢(3)遺跡となっている。平成10年発行の『青森県遺跡地図』では、『甲地村史』も『東北町史 上巻Ⅰ』も引用されておらず、田の沢(3)遺跡は、後期の遺跡とされ、晩期についてはまったくふれられていない。おそらくこの地域における詳細な分布調査が不十分なためであろう。

この土器を紹介するにあたって田中寿明氏・古屋敷則雄氏と葛川貴祥氏のお世話になった。

### (1)出土遺跡・出土状況

この壺の出土遺跡は、上述したように『甲地村史』や『東北町史 上巻Ⅰ』の記述から青森県上北郡東北町字田の沢川添にある田の沢(3)遺跡(遺跡台帳番号47009)でよいであろう。

田の沢(3)遺跡は、東北町の中心部から直線で東約8kmの所にあり、東の小川原湖に向って樹枝状に突き出た舌状台地の裾部に立地し、現在は水田となっている。標高1.5～2mの低い土地で、小川原湖岸まで20～30mの距離である。『青森県遺跡地図』を見ると、遺跡は道路で分断されており、現地でも遺物の散布はまったく見られず、ほんとうに遺跡なのかも分からない状況である。『甲地村史』(昭和26年)にこの壺の写真が掲載されているので、昭和26年以前に出土したことは分かるが、出土状況などの情報はまったくない。

### (2)土器の観察

形態) 口縁部が失われているが、その口縁部の形態は、岩手県上鷹生遺跡出土の壺(酒井1997)のように、口縁が短く外反するものと思われる。現高は21.3cm、最大径26.3cmであるが、復元高は約23.0cmと推定され、比較的大型である。頸部は直立し、体部は楕円形のやや偏平な形となる。撫で肩で、最大径は胴部中央付近にある。

文様) 頸部は無文で光沢がある。頸の付け根は一段太くなり、円文(窪み)と両端が二股に分かれる沈線とが交互に描かれる(3単位である)。

体部の上半を占める広い文様帯には、区画文の一部である楕円形・円形が目立ち、幅のせまい縄文帯からなる唐草文的な単位雲形文が密接してなっている。

最大径となる体部中央に幅の狭い文様帯がめぐり、そこに斜線文・三叉文と二本の円弧からなる楕円文が交互にめぐっている。4単位である。この文様帯は全体がよく研磨され光沢をもつ。

体部下半部は、原体LRの斜縄文が地文となっている。

彩色) 赤彩の痕跡が頸部・文様帯・地文部の所々に残っているので、もとは全体が赤彩されたものであったと考えてよい。

製作法) 成形の工程を示す痕跡は、丁寧に加飾される外面にはほとんど残らない。内面は頸部が小さいため、十分観察することができない。したがって粘土紐の接合痕・接合面の傾き・粘土紐の幅・指おさえなどの痕跡はみな不明である。表面にウロコ状の剥離がいくつか見られるので、整形時に化

粧土のようなものが表面に塗られているかもしれない。焼成後、赤漆を全体に塗って加飾している。

### (3)考察

#### ①体部上半の文様の描き方（第3図）

体部上半の文様は、文様帯に区画文を割り付け、それから充填文をうめて、単位雲形文を描いている。区画文は2種類ある。一つは弧線を点対称に組み合わせ、中央に大きな楕円形を造り出したものである（区画文1）。もう一つはやはり弧線を点対称に組み合わせたもので、中央に小型の円形を造り出し、弧線の基部に鱗状の四角文を付加したものである（区画文2）。この鱗状の四角文は、3個の区画文1のうち2個の弧線の基部にも付加している。区画文1と区画文2の間には三叉文が、文様帯の下線に沿って、三叉文・ノの字形文・円弧文・四角文などの小型の文様が充填される。その結果、単位雲形文（縄文部）が出来上がる。区画文は見た目の効果・描き方からみて、区画文1が描かれてから区画文2が描かれたのであろう。文様は3単位で構成されている。

#### ②年代、分布など（第1図）

この壺の出土状況は不明である。したがって相伴土器を考慮して年代を決定することはできない。

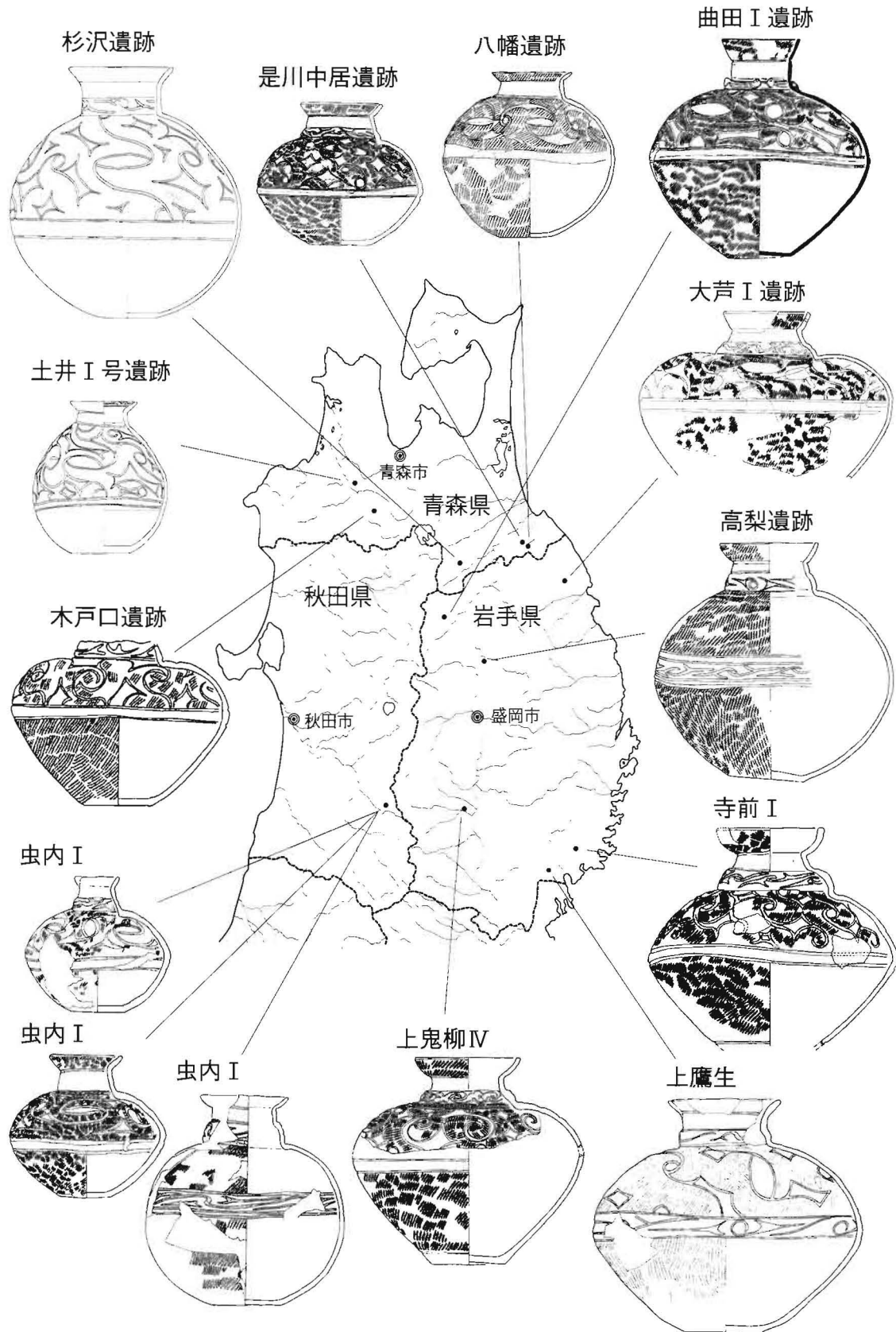
この壺の大きな特徴は、口縁部・頸部・体部からなり、欠損しているが①口縁部が外反すること、②無文の頸部の下端に文様を有する隆帯がめぐること、③体部上半の文様帯では、区画文が弧線を点対称に組み合わせて中央に楕円形・円形を造り出していること、単位雲形文が縦長の文様で唐草文的であること、単位雲形文が密接してならんで文様帯を埋めていること、④体部中央に幅の狭い文様帯があること（三叉文的な文様）である。こうした特徴をもつ壺は、晩期の大洞B式と見てよいであろう。

こうした特徴をもつ土器を、北海道渡島半島・北東北3県の主要な報告書で捜して見ると、北海道渡島半島では見つけることができなかったが、青森・岩手・秋田の3県には数多く、しかも広く分布することがわかった。全体の形が分るような資料が多数報告されているので代表的な類例をあげてみよう。相似といっても良いほど似ているのは、岩手県上鷹生遺跡（酒井1997）のものである。似ているが、体部中央の平行線間が無文になっているものに岩手県曲田Ⅰ遺跡（嶋・鈴木1985）・寺前Ⅰ遺跡（平井1989）・上鬼柳Ⅳ遺跡（村上1991）・大芦Ⅰ遺跡（高木1998）、青森県杉沢遺跡（藤沼ほか2008）・木戸口遺跡（平賀町教育委員会1983）・是川中居遺跡（新井田・関根ほか2004）、秋田県虫内Ⅰ遺跡（栄・高橋1998）があるが、虫内Ⅰ遺跡と是川中居遺跡のものはやや小型である。似ているが頸部下端に文様帯がないものに青森県八幡遺跡（八戸市教委1987）・上井Ⅰ号遺跡（境沢・山口ほか2006）、秋田県虫内Ⅰ遺跡がある。また体部上半に文様がないにも関わらず、似た印象を受けるものに岩手県高梨遺跡（東北大学1985）、秋田県虫内Ⅰ遺跡などがある。

### 引用・参考文献

- 青森県教育委員会（1998年）『青森県遺跡地図』。
- 平井進（1989年）『寺前Ⅰ・Ⅱ遺跡、片地家館跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書140。
- 村上修（1991年）『上鬼柳Ⅳ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書160。
- 高木晃（1998年）『大芦Ⅰ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書306。
- 酒井宗孝（1997年）『上鷹生遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書253。
- 境沢宏美・山口朋美ほか（2006年）「つがる市亀ヶ岡遺跡の縄文晩期の土器について」『亀ヶ岡文化遺物実測図集(2)』弘前大学人文学部日本考古学研究室研究報告4。
- 栄一郎・高橋忠彦ほか（1998年）『虫内Ⅰ遺跡』秋田県文化財調査報告書274。
- 嶋千明・鈴木隆英（1985年）『曲田Ⅰ遺跡発掘調査報告書』岩手県埋蔵文化財センター文化財調査報告書87。
- 新井田えり子・関根桂子ほか（2004年）「青森県八戸市是川中居遺跡」『亀ヶ岡文化遺物実測図集』弘前大学人文学部日本考古学研究室研究報告1。
- 東北大学文学部考古学研究室（1985年）「北上川流域における先史集落の調査－岩手県高梨遺跡発掘調査報告書」東北大学考古学研究室報告1。
- 東北町史編集委員会（1994年）『東北町史 上巻Ⅰ』東北町。

中道 等（1951年）『甲地村史』青森県上北郡甲地村役場。  
 八戸市教育委員会（1987年）『八幡遺跡発掘調査報告書』八戸市埋蔵文化財調査報告書26集。  
 平賀町教育委員会（1983年）『木戸口遺跡』平賀町埋蔵文化財調査報告書12。  
 藤沼邦彦・秋山真吾ほか（2008年）『青森県三戸郡三戸町杉沢遺跡発掘調査報告書』弘前大学人文学部日本考古学研究室研究報告6。

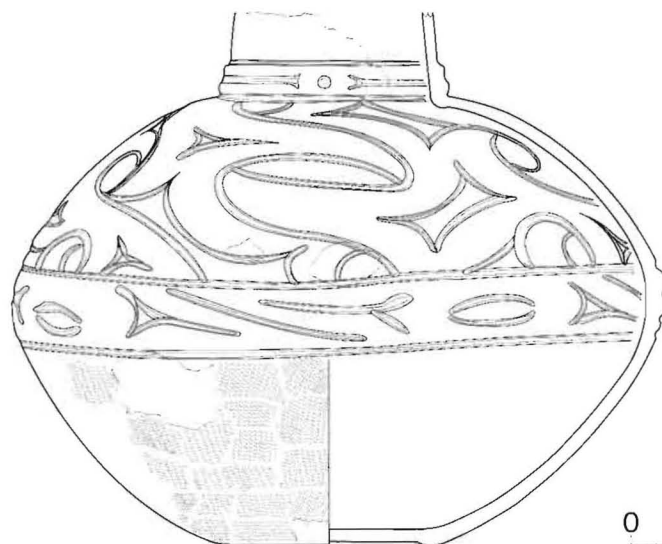


第1図 北東北3県で出土した代表的な類例（実測図は縮尺不同）





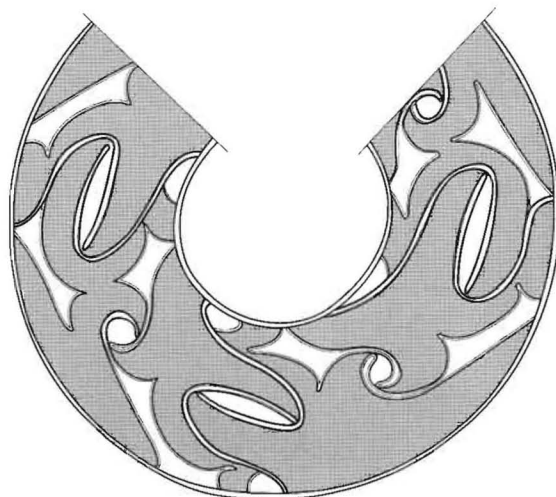
第2図 田の沢（3）遺跡出土の壺



0 10cm



①区画文1を3単位施す。



②区画文2を3単位施す。



③区画文間に充填文をうめる。



④充填文のみ取り出したもの。

第3図 壺の文様を描く手順（文様模式図は縮尺不同）

## 無地という用語について

藤沼 邦彦

### (はじめに)

考古学の用語は難しい。とくに文様の研究をやっていると、有文土器・無文土器、有文の部分・無文の部分、地文・無文・磨かれた滑沢な面など、用語の使い方に悩むことがある。簡単な例を挙げると、表面に縄文だけが施文されている深鉢は、有文土器なのか無文土器なのかである。早期の研究者は少なくとも無文土器とはいわないだろうし、晩期の研究者は少なくとも有文土器とは言わないであろう。むしろ晩期の研究者は、いわゆる有文土器を意識して、無文土器ということが多いかもしれない。同じ用語でも研究する対象の時期によって研究者のもつイメージ、あるいはニュアンスが異なるのは事実である。その異なる幅を小さくするために、ここでは縄文晩期の文様研究の立場から「無地」という用語の使い方を考えてみたい。このことは亀ヶ岡式土器の文様を説明するさいに取り上げたことがある(藤沼・秋山ほか2008)。ここで述べることはその再録に近いものである。

### (磨かれた器面、磨かれた部分は無文とよんでよいのか)

壺①と②は、体部上半には文様が施されているが、下半には文様がないといってよいであろう。すなわち、体部上半はいわゆる有文の部分で、下半はいわゆる無文の部分である。しかし体部上半に文様があるので、壺①と②はいわゆる有文土器に属する。下半のいわゆる無文の部分は、壺①では縄文が施文されており、②では縄文もなく磨かれた滑沢のある面となっている。この磨かれた面を無文とよぶと、文様のないいわゆる無文との区別が難しくなる。文様を考えると、縄文もなく磨かれた面(部分)をなんと呼んだらよいのであろう。多くの研究者に尋ねてみると、まず「無文」と答えるが、文様のない「いわゆる無文」との関係を問うと、「わからない」「考えたことがない」と応える者が意外と多い。これでは文様研究がやりにくい。やはり、この「縄文もなく磨かれた面」を表現するのに「無文」以外の特定の名称で呼ぶ必要があると思う。いろいろ考えた結果、試みに「無地」という言葉を用いてみた。いまのところ大きな矛盾にぶつかっていないので、今後も「縄文もなく磨かれた面」を「無地の面」とよぶつもりである。無地の面(部分)は、縄文のない「磨かれた面」だけでなく、「ケズリの面」・「ナデの面」を表現する時にも使用できると考えている。すなわち「無地」という用語は、いわゆる地文のない面(部分)を表現するものとして考え出したのである。しかし、文様を説明する時には、「無地」は「地文」に含めた方が便利である。

### (無地とは)

無地とは、広辞苑によると「全体が一色で模様のないこと、またそのもの」とある。「無地の布」などの使い方をするという。また明鏡国語辞典には「全体が同じ色で模様のないこと」とあり、「無地の着物」「鉄無地・紺無地」などの使い方をするとあり、内容は広辞苑とほぼ同じである。

地文・地紋は、広辞苑では「各種製作品の地紋様」、明鏡国語辞典には「塗り物・印刷物などで地に描かれている模様」と説明されている。やはり地文は、普通の文様ではなく、あくまでも地に描かれた地文様であり、この部分にいわゆる文様が描かれてもかまわないことを示唆している。亀ヶ岡式土器では、地文といえば縄文をさすことが多く、縄文地とも呼ばれる。

したがって、縄文も文様もない「無地」は、地文様である「地文」とは異なるものである。しかし、亀ヶ岡式土器の文様について考えるときは、やはり無地も地文に含めて使用することにしたい。

### (有文・無文・地文、縄文地・無地)

亀ヶ岡式土器の文様について考えるときは、無地も地文に含めて使用することにしたい。有文・無文・地文、縄文地・無地の使い方は次のようになる。

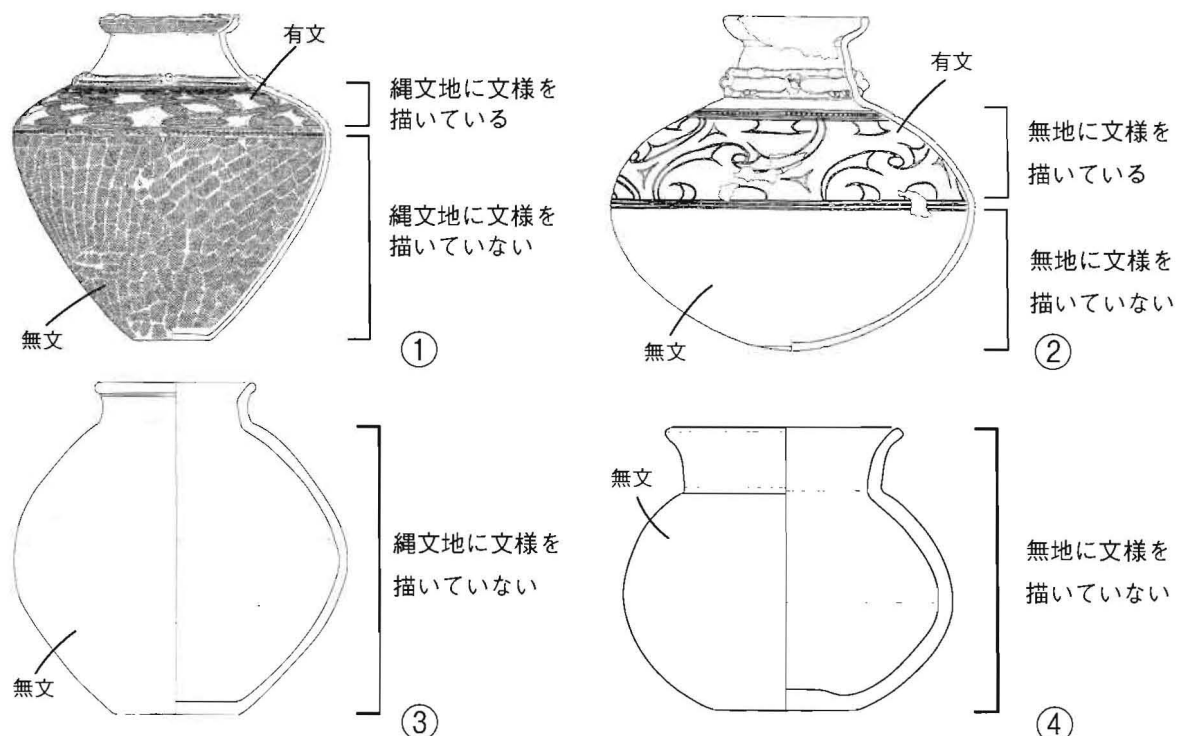
1) 有文—具体的な文様である。三叉文・羊歯状文・雲形文・工字文などをさす。工字文をもつ土器は有文土器であり、工字文土器と呼ばれることもある。

2) 無文—具体的な文様が描かれていないことをさす。したがって具体的な文様が描かれていない土器は無文土器である。有文土器であっても文様のない部分（この部分に地文があっても）を無文の部分ということがある。また地文だけの土器も無文土器と呼ばれることがある。

3) 地文—いわゆる地の文様で、縄文地・条痕文地などをさすが、無地も含めることにする。具体的な文様の有無だけを念頭におくと、地文だけの土器を無文土器と呼んだり、地文だけの部分を無文の部分とよぶことがある。地文だけの土器でも、地文が縄文であれば縄文土器、条痕文であれば条痕文土器とよばれることも多い。具体的な文様が描かれている面（部分）であっても、そこに地文が存在することがある。その場合、縄文があれば縄文地に文様を描いた、縄文がない磨かれた面であれば無地の部分に文様を描いたと説明されることがある。磨消縄文の手法による雲形文の場合、地文が縄文地なのか無地なのかは難しい問題であるが、ここでは縄文地とする。地文の仲間に含めた無地は、具体的には、磨かれた面・ナデ調整の面・ケズリ調整の面などをさすが、文様との関係でいえば、磨かれた面の状態をさすことが多い。無地だけの土器（無地土器と仮称）はまさに無文土器である。亀ヶ岡式土器の場合、無地土器は製塩土器を除外すれば、その多くは器面が光沢をもつほど研磨されたり、赤彩されたりしており、壺や浅鉢に多い。

#### (まとめ)

亀ヶ岡式土器の文様を考えると、縄文もなく磨かれた面（部分）をなんと呼んだらよいのであろう。無文でもよいのだが、文様のない「いわゆる無文」との区別がややこしくなるので、「無文」以外の特定の名称が必要である。そこで「無地」という言葉を用いてみた。無地の面（部分）は、縄文のない「磨かれた面」だけでなく、「ケズリの面」・「ナデの面」を表現する時にも使用できる。「無地」という用語は、いわゆる地文のない面（部分）を表現するものとして考え出したのであるが、文様を説明する時には、「無地」は「地文」の仲間に含めた方が使いやすい。





## 亀ヶ岡文化における彩文土器

藤沼邦彦・秋山真吾・赤坂朋美

### (1) はじめに

ここでいう彩文土器とは赤漆や黒漆などで文様を描いた土器をさす。少なくとも縄文前期からあり、福井県鳥浜貝塚や山形県押出遺跡ものが有名である。押出遺跡の彩文土器は、表面にまず赤漆を塗り、その上に黒漆で繊細な渦巻文を描いた美しいものである。漆職人の故沢田滋氏の教示によると、押出遺跡の壺に見られる細く盛り上がった文様は、水分をぬいて調整した粘稠な漆でないと描くことが難しいという。最近の調査によって、縄文中期や後期のものも知られており、縄文時代を通じて一定数は存在した遺物である。東北地方では、後期のものも若干あるが（第1図）、もっとも多いのは晩期のもので、亀ヶ岡文化を特徴づける遺物の一つとなっている。

亀ヶ岡文化に伴う土器には漆塗りのものが少なくないが、大部分は赤漆だけの単色のものである。黒漆だけの単色のものも亀ヶ岡遺跡などで出土しているが（境沢・山口ほか2006、八戸市博物館1988）、赤漆だけのものと比べるとその数ははるかに少ない。また亀ヶ岡遺跡以外の出土品もほとんどないのは注目してよいであろう。また土器に施された文様部に部分的に赤漆を塗って加飾したものもある。これを塗りわけ手法（第2図参照）とし、彩文の一変形とみることも不可能でないとの意見もあるが（清水1959）、今回は彩文土器に含めないことにする。

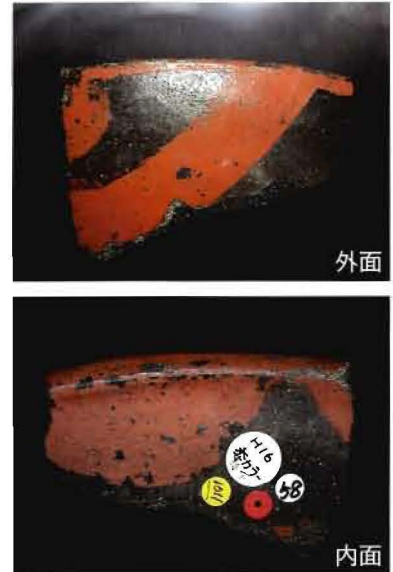
亀ヶ岡文化の彩文土器は、黒漆と赤漆を使い分けして、浅鉢の内面や壺の外面に雲形文を描いた物であるが、壺のものは少ない。土器の両面に彩文が描かれものも稀にある。多くは黒漆を下地としその上に赤漆で曲線的な雲形文を描いたもので、その逆はまだ見つかっていない。まれに黒漆を下地とせず、赤漆で文様を描いたものがあるが、その場合、土器の素肌に直接文様を描いたのか、あるいは何らかの下地があったのかなどは分からない。

※ここでいう黒漆とは、肉眼で黒く見える漆塗りの部分をさす。生漆が黒く酸化したものか、あるいは黒色顔料を入れた黒漆を塗ったものかは分らない。

### (2) 研究史

東北地方の縄文晩期の彩文土器を最初に取り上げたのは杉山寿栄男で、昭和3年の『日本原始工芸』に青森県亀ヶ岡遺跡・宮城県沼津貝塚・陸奥（遺跡不明）出土の浅鉢を紹介し、内面に描かれた彩文を見やすいように図化し、その文様が渦巻文を基本としたものであることを述べている。また内面の彩文と外面の土器文様とでは「描写上の差異ある點は注意すべきもの」と注意を促している。

慶応義塾大学によって昭和25年に発掘調査された亀ヶ岡遺跡の報告書が昭和34年に刊行され、発掘による彩文土器1点、民間に所有されていた彩文土器3点・彩文籃胎漆器1点が紹介された（清水



第1図 後期の彩文土器（北秋田市漆下遺跡、小林克氏写真提供）



第2図 塗りわけ手法による注口土器 青森市玉清水遺跡（青森県立郷土館1996）

1959)。これによって亀ヶ岡遺跡が他の遺跡にくらべ多くの彩文土器を出土していること、浅鉢のほかに壺にも彩文土器があることなどが明らかになった。民間に所有されていた資料については、写真で紹介されているのみで、彩文土器の実測図などはなく、文様についての具体的な記述や所属時期についてはふれていない。のちになって藤村東男はこの報告書に写真掲載された亀ヶ岡遺跡出土の彩文ある壺の実測図を作成し紹介した（藤村1966）。彩文土器に関する本格的な実測図の最初のものであろう。

晩期の彩文土器を研究対象として本格的にとりあげたのは、伊藤玄三の「縄文晩期藍胎漆器の文様」（1974）である。論文の目的は、宮城県栗原市山王遺跡出土の藍胎漆器の文様を分析し、その文様構成と文様の由来、所属年代などを明らかにすることであった。そのなかで、藍胎漆器の彩文と土器の彩文を比較検討するために、亀ヶ岡遺跡出土の浅鉢3点・壺2点、沼津貝塚出土の浅鉢2点の彩文土器を取り上げ、大洞 C1式の彩文土器、とりわけ壺の彩文の文様が大洞 C2式～大洞 A 式の藍胎漆器の文様成立に影響を与えたと述べている。これをこえる彩文土器・彩文藍胎漆器の研究はほとんどない。須藤隆も栗原市山王遺跡出土の藍胎漆器を取り上げたが、論文の目的が別なところにあるので、踏み込んだ文様分析は行っていない（須藤1998）。図録としては、亀ヶ岡遺跡出土の彩文土器3点がカラーでのっている『漆の美』（青森県立郷土館1993）が便利である。

彩文土器も彩文藍胎漆器も出土数が少なく、亀ヶ岡文化（社会）における工芸的遺物の存在意義をさぐる貴重な資料である。それにもかかわらず、実測図や展開文様図などが作成されていない彩文土器が多いこと、彩文藍胎漆器を多数出土している宮城県山王遺跡の発掘調査報告書が未刊であることなどで、客観的な研究がしにくい面がある。また実物調査をして見ると、彩文の部分に後世の補筆が加えられたと推定される資料も含まれていた。考古学の世界でも、実測図や詳細な写真などによる基礎的資料のきちんとした情報公開が必要である。

### (3) 亀ヶ岡文化における彩文土器とその出土地（一覧表を参照）

亀ヶ岡文化における彩文土器は青森県3遺跡12個体（遺跡不明のもの1個体を含む）、秋田県1遺跡1個体、岩手県2遺跡5個体、宮城県3遺跡5個体、遺跡不明2個体ある。県別の遺跡数はあまり変わらないが、亀ヶ岡遺跡は10個体出土しており、他の遺跡を大きく引き離している。しかも亀ヶ岡遺跡のものは比較的完形に近い大型破片が大部分であり、本来なら破片も数多く出土しているであろう。亀ヶ岡遺跡が最多の彩文土器出土を誇るのに対し、八戸市是川中居遺跡からは彩文土器が1点も出土していない。その理由は、亀ヶ岡遺跡が大洞 C1式以降も遺物の出土する泥炭層に恵まれているのに対し、是川中居遺跡は大洞 C1式以降の遺物を出土する泥炭層があまりないことであろう。彩文土器は他の漆器と同じように低湿地遺跡のほうがよく保存されるようである。

亀ヶ岡文化の彩文土器の一覧						
	遺 跡	型 式	彩文の位置・手法		外面の文様など	高×横cm
①	青森県亀ヶ岡	大洞 C1式	浅鉢の内面	黒漆+赤漆	連続雲形文、黒漆塗。	20.1×13.1
②	青森県亀ヶ岡	大洞 C1式	浅鉢の内面	黒漆+赤漆	連続雲形文、黒漆塗。	径9.6
③	青森県亀ヶ岡	大洞 C2式	浅鉢の内面	黒漆+赤漆	連続雲形文、黒漆塗。	径20.0
④	青森県亀ヶ岡	大洞 C2式	浅鉢の内面	黒漆+赤漆	無文、赤漆塗。	3.1×19.7
⑤	青森県亀ヶ岡	大洞 C2式	浅鉢の内面	黒漆+赤漆	単位雲形文。	2.5×17.0
⑥	青森県亀ヶ岡	大洞 C1式	浅鉢の内面	黒漆+赤漆	連続雲形文、黒漆塗。	3.1×19.7
⑦	青森県亀ヶ岡	不明	不明・両面	黒漆+赤漆	—————	破片
⑧	青森県亀ヶ岡	大洞 C1式	皿の内面	黒漆+赤漆	雲形文、黒漆塗。	破片
⑨	青森県亀ヶ岡	大洞 C2-A 式	壺の外面	黒漆+赤漆	—————	9.4×9.4

⑩	青森県亀ヶ岡	大洞 C2-A 式	壺の外表面	黒漆 + 赤漆	———	現高7.0
⑪	青森県今津	大洞 C2式	浅鉢の内面	? + 赤漆	連続雲形文、黒漆なし。	破片
⑫	青森県宇鉄	大洞 C2式	浅鉢の内面	? + 赤漆	文様不明、黒漆なし。	破片
⑬	青森県内	大洞 C1式	浅鉢の内面	黒漆 + 赤漆	連続雲形文。	9.0×22.1
⑭	秋田県戸平川	大洞 C1式	浅鉢の内面	黒漆 + 赤漆	連続雲形文、黒漆塗。	7.4×21.2
⑮	岩手県大日向	大洞 C1式	浅鉢の内面	黒漆 + 赤漆	雲形文。	破片
⑯	岩手県大日向	大洞 C1式	浅鉢の内面	黒漆 + 赤漆	雲形文。	破片
⑰	岩手県大芦	大洞 C1式	浅鉢の内面	黒漆 + 赤漆	雲形文。	破片
⑱	岩手県大芦	大洞 C1式	浅鉢の内面	黒漆 + 赤漆	雲形文。	破片
⑲	岩手県大芦	大洞 C1式	浅鉢の内面	黒漆 + 赤漆	雲形文。	破片
⑳	宮城県里浜	大洞 C2式	浅鉢の内面	黒漆 + 赤漆	———	破片
㉑	宮城県沼津	———	浅鉢の内面	黒漆 + 赤漆	———	破片
㉒	宮城県沼津	———	浅鉢の内面	黒漆 + 赤漆	———	———
㉓	宮城県沼津	大洞 C1式	浅鉢の内面	黒漆 + 赤漆	連続雲形文、黒漆なし。	12.0×36.5
㉔	宮城県永根	大洞 C1式	皿の内面	? + 赤漆	単位雲形文、黒漆なし。	6.6×22.6
㉕	出土地不明	大洞 C1式	浅鉢の内面	? + 赤漆	連続雲形文、黒漆なし。	8.0×24.9
㉖	出土地不明	大洞 C2式	浅鉢の内面	黒漆 + 赤漆	連続雲形文。	径15.0

彩文土器について個別的看着にいこう。

① 亀ヶ岡遺跡出土（鈴木1979、青森県立郷土館1993、伊藤1974）。青森県立郷土館蔵。第7図。

青森県立郷土館の大高コレクションの一つで、もっとも有名な彩文土器である。浅鉢である。外面は配置文と充填文で形成された連続雲形文で、黒漆が塗ってある。内面は黒地に赤漆でC字文や逆S字文が筆太に描かれている。描く手順は、(a)点対称のC字文を描く⇒(b)C字文に更にC字文を付加する⇒(c)小さな円（玉）を付加し完成すると思われる。彩文の文様構成は比較的単純で、外面の雲形文と比べれば描くのは簡単であったろう。

② 亀ヶ岡遺跡出土（清水1959、青森県立郷土館1993）。個人蔵。第7図。

青森県立郷土館で展示している。小型の浅鉢である。外面は配置文と充填文で形成された連続雲形文で、黒漆が塗ってある。内面は黒地に赤漆でC字文が筆太に描かれている。描く手順は、(a)点対称のC字文を描く⇒(b)口縁に沿ってC字（ノの字）文などを埋めると完成する。この(a)の段階の文様は、①の(a)の段階の文様と一致するのは注目される。

③ 亀ヶ岡遺跡出土（清水1959、村越1983）。個人蔵。第8図。

つがる市木造亀ヶ岡考古資料室で展示している。底の小さな浅鉢である。外面の文様帯はやや体部上半に位置し、文様は配置文と充填文で形成される連続雲形文である。時期は器形・文様帯の位置・文様から見て大洞 C2式と思われる。内面は彩文で、黒地に赤漆でC字文が描かれている。文様構成は明らかでないが、推定復元図を描いてみると、第8図のようになるとと思われる。

④ 亀ヶ岡遺跡出土。個人蔵。第8図。

つがる市木造亀ヶ岡考古資料室で展示している。浅鉢の破片である。外面は無文（無地）で全体に赤漆が塗られている。口縁に沿って一条の沈線がめぐり、また平縁で二個一対の小突起（B突起）がつく。器形からみて時期は大洞 C2式であろう。内面は彩文で、黒地に赤漆で文様が描かれているが、漆の剥離があり、文様構成を知ることができない。

⑤ 亀ヶ岡遺跡出土（佐藤1956、伊藤1974）。第8図。

底の小さな浅鉢である。外面の文様帯はやや体部上半に位置し、文様は区画文で形成された単位雲形文である。口縁に沿って列点文がめぐり、器形や文様帯の位置から時期は大洞 C2式に近いと思われる。内面は彩文で、黒地に赤漆で両端が渦巻状になったC字文が描かれている。伊藤によって復



元図が描かれている。

⑥ 亀ヶ岡遺跡出土（杉山1928、伊藤1974、須藤2007）。東北大学文学部蔵。第9図。

底の小さな浅鉢である。外面の文様帯は幅広く、文様は配置文と充填文で形成された連続雲形文である。時期は器形・文様からみて大洞 C1式である。内面は彩文で、黒地に赤漆で中央に大きな円文（玉）が、周縁に渦巻状のC字文が4単位配置されている。文様自体は単純な構成である。

⑦ 亀ヶ岡遺跡出土（境沢・山口・藤沼2006）。弘前大学人文学部附属亀ヶ岡文化研究センター蔵。第9図。

旧制弘前高等学校時代に採集されたものらしい。薄くて小さな破片で、面に浅い凹凸がある。内外面とも黒地に赤漆で文様が描かれている。器種は浅鉢と思われるが定かではない。どちらが外面なのかも分からない。亀ヶ岡文化の彩文土器で内外面に彩文が描かれている唯一のものである。時期（型式）も不明である。

⑧ 亀ヶ岡遺跡出土（清水1959）。慶応義塾大学蔵。第9図。

慶応義塾大学の発掘調査で出土したものである。浅鉢の小さな口縁部破片である。外面に雲形文がある。時期は大洞 C1式であろう。内面は彩文で、黒地に赤漆で文様が描かれているが、小破片のため文様構成は不明である。

⑨ 亀ヶ岡遺跡出土（青森県立郷土館1993、伊藤1974、藤沼・小川2006）。個人蔵。第10図。

青森県立郷土館で常設展示されている資料である。比較的小型の壺で、口縁部の一部が欠けている。逆ハの字形の頸部で、口縁に小さな突起が並ぶ。肩がやや張り、体部はやや四角形に近く、四面から構成されているような感じである。底部は四角形で、四隅に小さな瘤状の脚がつく。体部と底部に彩文があり、黒地に赤漆で描いた曲線的文様が描かれている。体部の文様は、三叉文（ノ状文）を点対称的に配置して形成される連続雲形文あるいは工字文的な文様に近いもので、底部の文様に繋がっている。底部の文様は玉を囲んだ円文があり、体部の文様はそこに繋がる。この彩文の文様構成は大洞 C1式や大洞 C2式土器の普通の文様とは異なっており、むしろ大洞 C2式の新しい時期から大洞 A 式にかけての土器の文様構成に似ている（第4図を参照）。また、宮城県栗原市山王遺跡出土の彩文籃胎漆器の文様に似ていることは注目される。この壺の時期は大洞 C2式-A 式（中間的）であろう。

⑩ 亀ヶ岡遺跡出土（清水1959、藤村1966）。慶応義塾大学蔵。第9図。

比較的小型の壺で、口頸部や底部が欠け、しかも器面の剥離が著しい資料である。おそらく⑨とよく似た形の壺であったと推定される。体部は彩文で、黒地に赤漆で描いた曲線的文様が描かれている。その文様は⑨のものとよく似ており、三叉文（ノ状文）を点対称的に配置して形成される連続雲形文あるいは工字文的な文様に近いものである。藤村東男の実測図によって全体の文様を知ることが出来る。時期は⑨の壺と同じで、大洞 C2式-A 式（中間的）であろう。

⑪ 青森県外ヶ浜町今津遺跡出土（新谷・岡田1986）。青森県埋蔵文化財調査センター蔵。第9図。

浅鉢の口縁部の小破片である。外面の体部上半に文様帯があり、そこに配置文で形成される連続雲形文がみられる。内部に彩文が描かれているが写真や説明がないため施文の状態は不明である。時期は器形や文様帯の位置・文様そして共伴土器などから見て大洞 C2式である。

⑫ 青森県外ヶ浜町宇鉄遺跡出土（葛西1995）。外ヶ浜町教育委員会蔵。第9図。

広い底部をもつ浅鉢の底部破片である。外面は底にあたるため文様がない。内面は彩文で、黒い下地はなく、器面に直接、赤漆で曲線的文様を描いている感じである。破片のため文様全体を推測することができない。時期は共伴して出土した土器から大洞 C2式と考えられている。

⑬ 青森県内出土（杉山1928）。東京国立博物館蔵。第11図。

杉山寿栄男の『日本原始工芸』（1928）に陸奥の出土とある。遺跡は分からない。浅鉢で、外面は配置文と充填文で形成された連続雲形文である。器形や文様から見て、時期は大洞 C1式である。内

面は彩文で、黒地に赤漆でC字文や逆S字文が描かれている。描く手順は、(a)中央の円(玉)を中心に逆S字文を点対称に組み合わせて大きく描く⇒(b)口縁に沿った空間にC字文や逆S字文を追加し完成する。この(a)の段階は、①や②の(a)の段階の描き方と共通している。

⑭ 秋田市戸平川遺跡出土(高橋・伊藤2000)。秋田県埋蔵文化財センター蔵。第11図。

浅鉢の大型破片である。外面は配置文と充填文で形成された連続雲形文で、黒漆が塗られている。内面は彩文で、黒地に赤漆でC字文が描かれている。彩文の構成は報告書の説明(図)では分らないが、写真などを見ると、中央の円文(玉)を中心に、周囲に渦巻的なC字文を配した文様に復元できそうである。時期は形や外面の文様そして共伴土器から考えて大洞C1式である。

⑮・⑯ 岩手県軽米町大日向Ⅱ遺跡出土(田鎖・斎藤1995)。岩手県埋蔵文化財センター蔵。第12図。

両方とも浅鉢の小破片である。⑮は口縁部で外面に雲形文が施文されている。⑯の外面は無文らしい。ともに内面は彩文で、黒地に赤漆で文様が描かれているが、破片が小さいので文様構成は不明である。時期は大洞C1式である。

⑰・⑱・⑲ 久慈市大芦遺跡出土(面代1985)。久慈市教育委員会蔵。第12図。

3個体とも浅鉢の小破片である。3個体とも外面の広い文様帯に雲形文が施文されているが、小破片のため文様構成は不明である。また3個体とも内面は彩文で、黒地に赤漆で曲線的な文様が描かれているが、やはり文様構成は不明である。時期は大洞C1式である。

⑳ 東松島市里浜貝塚西畑地区出土。奥松島縄文村歴史資料館蔵。第12図。

浅鉢の口縁部の小破片である。奥松島縄文村歴史資料館で展示されている貝層の剥ぎ取りに付着していた資料である。見学の際にその存在に気がついたが、強力に接合されているため、外面の文様などを見ることはできなかった。内面は彩文で、黒地に赤漆で曲線的な文様を描いているが、全体の文様は不明である。外面の文様は分らないが、時期は共伴する遺物から大洞C2式と推定される。

㉑ 石巻市沼津貝塚出土(杉山1928)。第12図。

杉山寿栄男の『日本原始工芸』(1928)にカラーでのっている6片の破片である。同一個体かどうか分らないが、一括して扱うことにする。器種は不明であるが、おそらく浅鉢であろう。外面については写真・拓本がないので不明である。内面は黒地に赤漆で曲線的な文様を描いたものである。時期は大洞C1式か大洞C2式であろう。

㉒ 石巻市沼津貝塚出土(伊藤1974)。東北大学文学部蔵。第12図。

伊藤玄三によると台付土器(台付皿あるいは台付浅鉢であろう)の内面に雲形文に似た彩文が描かれているという。他の彩文土器の文様と異なっているのが注目される。器形や外面の文様などは不明であるが、時期は大洞C1式であろう。

㉓ 石巻市沼津貝塚出土(杉山1928、伊東1964)。東北大学文学部蔵。第13図。

大型の浅鉢で、数十個の破片を接合して復元している。古くから「彩文大平鉢」として著名な資料で、戦前は重要美術品(現在は重要文化財)に指定されていたものである。外面の広い文様帯には、横に長く伸びた配置文などによって表現された連続雲形文が展開する。内面に曲線的な文様(C字文・逆S字文)が赤漆で描かれるが、かすれて文様がみえにくい部分がある。もとは黒地に赤漆で描いたもので、黒赤の対比がハッキリしたものであったろう。杉山が彩文を復元しているのでその文様構成を知ることができる。中央の点部分で点対称となるように渦巻状のC字文を組み合わせ、その周囲にC字文や逆S字文を並べたものである。最初に描く中央の点部分で点対称となる渦巻状のC字文の組み合わせは①や②の描き方と共通する。時期は大洞C1式であろう。

㉔ 宮城県松島町永根貝塚出土(藤沼・小川2006)。多賀城市埋蔵文化財調査センター蔵。第14図。

かつて塩竈市在住の故佐々木功氏のコレクションの一つで、ほぼ完形に復元された浅鉢である。実測図を作成した。外面は横にのび、加飾された区画文と充填文で形成された単位雲形文が2単位表現

されている。内面は彩文で、赤彩がかすれ不明瞭な部分がある。下地は黒く見えない。彩文の描く手順は、一端が渦巻状になる2個のC字文を中央で点対称になるように配置し、次に渦巻の方向の違う2個のC字文を同じように配置するのであろう。このように、中央で点対称になるようにC字文やS字文を配置する手法は、①・②・③・④などに共通するものである。

㉕ 出土地不明（愛知県陶磁資料館2002）。愛知県陶磁資料館蔵。第15・16図。

破片を接合して復元した浅鉢である。実測図を作成した。破片の足りない部分に補填材が埋められているが、どこが補填材か分かりにくいところがある。外面は広い文様帯に配置文と充填文で形成された連続雲形文が展開するが、補修のため文様の細部がとらえにくいところがある。内面は彩文で、赤漆で文様が描かれている。下地の様子は不明であるが、黒くはない。描く手順を考えると、2個のC字文を中央で点対称になるように繋げて配置し、さらに縁にそった部分に2個のC字文を点対称になるように並べている。全体に筆太に描かれているが、後世の補筆が当時の彩文をなぞっている部分がある。しかし、彩文の文様構成は①・②・③とほぼ共通するので、補修はあまり著しくなさそうである。時期は大洞 C1式である。出土遺跡は東北地方と考えられるが、出土地点は器面や彩文の保存状態から水分の多い泥炭層ではなく、普通の遺物包含層であらう。

㉖ 亀ヶ岡遺跡出土（斎藤・吉川1970）。第16図。

完形の浅鉢である。『原始美術』（斎藤・吉川1970）には、カラー写真がのっている。写真から判断すると、外面の文様帯がせまく、単純なC字文を配置文として並べて連続雲形文を形成しているようである。時期は大洞 C2式であらう。内面は彩文で、黒地に赤漆で筆太に渦巻C字文が描かれている。

#### (4) 亀ヶ岡文化における彩文土器のまとめと考察

1) 分布－すでに述べたように、亀ヶ岡文化における彩文土器は、青森・秋田・岩手・宮城4県でそれぞれ1～3遺跡で出土しているが、総計は出土地不明のものを含めても26個体であり、決して多い数ではない。亀ヶ岡文化圏の広い地域で製作されたと思われるが、他の土器にくらべれば、数が少ないのは事実である。亀ヶ岡遺跡で10個体出土しており、他の遺跡を大きく引き離している。しかも亀ヶ岡遺跡のものは比較的完形に近い大型破片が大部分であり、本来なら破片も数多く出土しているのであろう。亀ヶ岡遺跡は、彩文以外に、外面に黒漆を塗ったものが一定量出土しているが、これも他の遺跡ではほとんどみられない現象である。有名な是川中居遺跡では彩文土器はなく、黒漆塗土器もほとんど知られていない。

2) 彩文土器の時期－彩文土器のうち浅鉢は外面の文様や器形からある程度、型式を決定することができる。しかし、壺は外面に彩文があるため、年代決定には外面のいわゆる土器文様を使用できないので、彩文そのものに頼らざるを得ない。すでに個々の彩文土器について所属時期を考察してきたが、整理すると彩文浅鉢は大洞 C1式と大洞 C2式であり、彩文壺は大洞 C2-A 式に属するようである。

(a) 大洞 C1式－①・②・⑥・⑧・⑬～⑰・⑳～㉕（14個体）

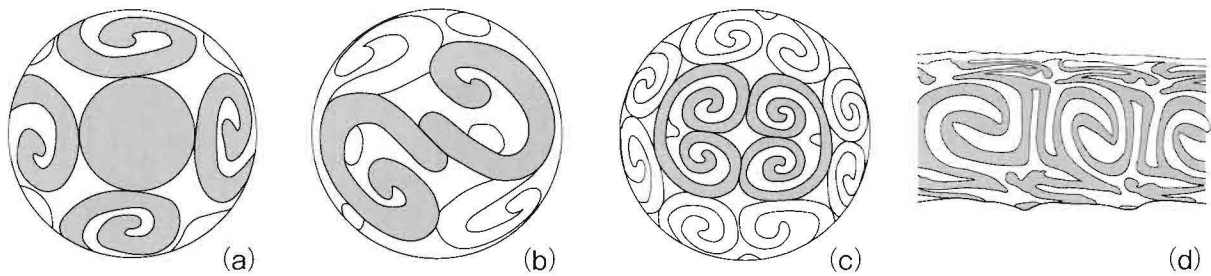
(b) 大洞 C2式－③～⑤・⑪・⑫・⑳・㉖（7個体）

(c) 大洞 C2-A 式－⑨・⑩（2個体）

もっとも数が多いのは大洞 C1式の時期で、次いで大洞 C2式、大洞 C2-A 式の順になる。大洞 C1式と大洞 C2式の彩文は浅鉢の内面（見込み）に限定される。大洞 C2-A 式になると彩文浅鉢は姿を消し、外面に彩文を描いた壺が亀ヶ岡遺跡で出土しているが数は少ない（2個体のみ）。また浅鉢と壺では彩文の種類も大きく異なる。すなわち大洞 C1式・大洞 C2式と大洞 C2-A 式では、彩文土器は器種も文様も大きく異なるのである。なお彩文土器は大洞 BC 式に遡るものはない。また大洞 A 式に相当するものも確認されていない。



3) 彩文の文様構成、雲形文との関係、彩文藍胎漆器との関係－彩文の文様構成が分る資料あるいは推定できる資料に基づいて、彩文を分類すると次のようになる（第3図）。

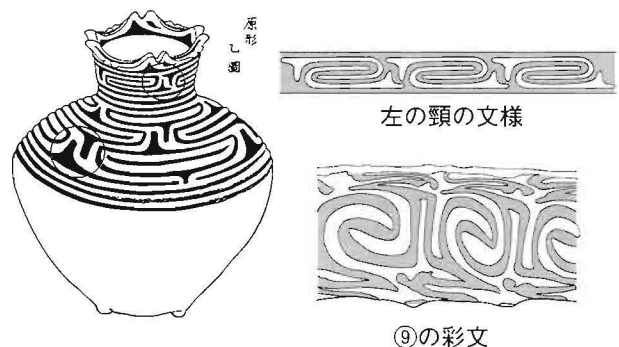


第3図 彩文の分類模式図

- (a) 浅鉢の見込みの中心に円文を置き、周囲に渦巻状のC字文を配置する－⑥・⑭（2個体）。  
 (b) 浅鉢の見込みを中心として2個のC字文あるいはS字文を点対称に配置し、周囲にC字文やS字文を配置する－①～③・⑬・⑲～⑲（7個体）。  
 (c) 浅鉢の見込みに線対称にC字文などを多数配置する－⑤（1個体）  
 (d) 壺の外面に連続雲形文に近い文様、あるいは工字文的な文様に近いものを描いたもの－⑨・⑩（2個体）  
 (e) (a)～(d)に含まれないものが1点ある。分類模式図を作成していない－⑳（1個体）

このうち浅鉢の見込みに描かれた彩文の(a)(b)(c)の文様は大洞 C1式と大洞 C2式に見られるものである。これらの文様は、外面に描かれた（いわゆる）雲形文とくらべれば決して複雑なものでなく、むしろ単純な文様ということができる。彩文は、雲形文を描く時に用いる配置文や区画文に相当するC字文あるいはS字文を、赤漆で筆太に描き、それを主文様とすることに特色がある。手法的にみると、外面の雲形文は、配置文や区画文・充填文を配置すること、すなわちその部分を磨り消すこと（マイナスの手法）で浮かび上がるのであるが、彩文は塗り重ねること（プラスの手法）で直接文様を構成することになる。この違いは大きい。

壺の外面に描かれた彩文の(d)の文様は、(a)(b)(c)の文様とくらべれば、はるかに複雑な構成を示し、描くのも難しいようである。この彩文は、三叉文（+状文）を点対称的に交互に配置した結果できあがる連続雲形文あるいは工字文的な文様に近いものであろう。また三叉文を入り組ませてできる工字文にも似ている。このことが(d)の文様をもつ彩文壺の時期を大洞 C2-A 式頃と考える大きな理由である。なおこの彩文は、宮城県山王遺跡で大洞 C2-A 式頃（山王6層式とよばれたこともある）の土器と共伴した彩文藍胎漆器の文様や、共伴土器が不明である亀ヶ岡遺跡出土の藍胎漆器（第5図）の文様に共通する。したがって彩文壺や彩文藍胎漆器の文様は、前の型式の彩文土器の彩文文様の影響を受けるのではなく、同時期（大洞 C2-A 式）の土器の文様の影響のもとに作成されたのであろう。



第4図 ⑨の彩文と壺の工字文



第5図 亀ヶ岡遺跡出土の藍胎漆器（八幡1959）



4) 復元した彩文土器—亀ヶ岡文化の彩文土器は、浅鉢の内面や壺の外面に黒漆を地としその上に赤漆で曲線的な文様を描いたものである。赤漆と黒漆を使い分け、黒と赤のコントラストが美しく大胆に表現されているのが大きな特色である。まれに下地の黒色が見えない部分に赤漆で文様を描いたものがあるが、その場合、土器の素肌に直接文様を描いたのか、あるいは何らかの下地があったのかなどは分からない。黒漆の下地があっても、漆に黒色の顔料などが含まれていない場合、保存状態が悪ければ漆の成分が失われるとともに、漆の黒さも失われるからである。

おそらく彩文土器の彩文は、黒漆の面を下地として赤漆で描くというのが基本であろう。菊地逸夫氏が製作した彩文土器（第6図）は、亀ヶ岡文化の彩文土器がいかにも美しいものであったかを彷彿させてくれる。



第6図 菊池逸夫氏が製作した彩文土器(小川氏撮影)

最後に本稿を作成するにあたって、村越 潔先生、小川忠博氏・菊地逸夫氏はじめ、次の多くの機関や個人の方からご協力・ご指導をいただいたので、記して感謝の意を表したい。

（あいうえお順、敬称省略）愛知県陶磁資料館、相沢清利、青森県立郷土館、市川健夫、伊藤玄三、井上喜久男、小川忠博、奥松島縄文村歴史資料館、菊地逸夫、児玉大成、小林和彦、小林 克、斎藤 岳、佐野忠史、菅原弘樹、関根達人、多賀城市埋蔵文化財調査センター、千葉孝弥、つがる市木造亀ヶ岡考古資料室、東北大学考古学研究室、福田友之、村越 潔。

#### 【引用・参考文献】

- 愛知県陶磁資料館（2002年）『愛知県陶磁資料館コレクション—日本陶磁5000年の至宝』。
- 青森県埋蔵文化財調査センター（1990年）『北の誇り・亀ヶ岡文化—縄文時代晩期編』、青森県文化財保護協会。
- 青森県立郷土館（1993年）『漆の美—日本の漆文化と青森県』。
- 青森県立郷土館（1996年）『縄文の玉手箱—風韻堂コレクション図録—』。
- 青森県立図書館（1968年）『青森県埋蔵文化財展—目録—』。
- 新谷 武・岡田康博（1986年）『今津遺跡—間沢遺跡発掘調査報告書—』青森県埋蔵文化財調査報告書95、青森県埋蔵文化財調査センター。
- 伊藤玄三（1969年）「縄文晩期文化—東北」『新版考古学講座3—先史文化—』雄山閣。
- 伊藤玄三（1974年）「縄文晩期藍胎漆器の文様」法政大学文学部紀要20号。
- 伊東信雄（1962年）『沼津貝塚出土石器時代遺物』、東北大学文学部東北文化研究室。
- 伊東信雄・須藤隆（1985年）『山王岡遺跡調査図録』宮城県一迫町教育委員会。
- 葛西励（1995年）『宇鉄遺跡発掘調査報告書』、青森県三厩村教育委員会。
- 喜田貞吉・杉山寿栄男（1932年）『日本石器時代植物性遺物図録』。
- 斎藤 忠・吉川逸治（1970年）『原始美術—原色日本の美術1—』小学館。
- 境沢宏美・山口朋美・藤沼邦彦（2006年）「つがる市亀ヶ岡遺跡の縄文晩期の土器について」『亀ヶ岡文化遺物実測図集(2)』弘前大学人文学部日本考古学研究室研究報告4、弘前大学人文学部附属亀ヶ岡文化研究センター。
- 佐藤公知（1956年）『亀ヶ岡文化』。
- 清水潤三（1959年）『亀ヶ岡遺蹟』、三田史学会。
- 杉山寿栄男（1928年）『日本原始工芸』。
- 鈴木克彦（1979年）「県重宝指定の亀ヶ岡遺跡出土遺物について」青森県立郷土館研究年報4。
- 須藤隆（1998年）「亀ヶ岡文化の発展と地域性」『東北日本先史時代文化変化・社会変動の研究』、纂修堂。
- 須藤隆（2007年）『東日本縄文・弥生時代集落の発展と地域性』、東北大学大学院文学研究科。
- 芹沢長介・坪井清足（1966年）『日本人の原像』。
- 田鎖壽夫・斎藤邦雄（1995年）『大日向Ⅱ遺跡発掘調査報告書—第2次—第5次調査—』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書225集、岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター。
- 高橋忠彦・伊東攻（2000年）『戸平川遺跡』秋田県文化財調査報告書294、秋田県教育委員会。
- 八戸市博物館（1988年）『縄文の漆工芸』。
- 藤沼邦彦・小川忠博（2006年）『ミニ特別展「亀ヶ岡文化の世界」図録』弘前大学人文学部日本考古学研究室研究報告3、弘前大学人文学部附属亀ヶ岡文化研究センター。

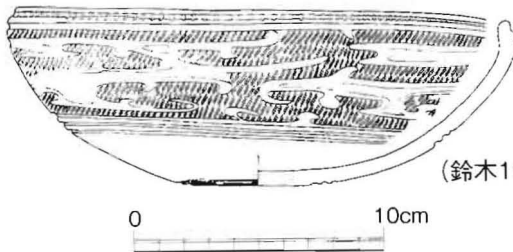
藤村東男（1966年）「青森県亀ヶ岡遺跡出土の漆器について」史学45-3。  
北海道開拓記念館（1998年）『うるし文化－漆器が語る北海道の歴史－』。  
村越潔（1983年）『亀ヶ岡式土器』、ニュー・サイエンス社。  
面代民義（1985年）『大芦遺跡発掘調査報告書』久慈市埋蔵文化財報告書5。  
八幡一郎（1959年）『世界考古学大系1・日本I』平凡社。



彩文の復元図



(青森県立郷土館1993)



(鈴木1979)

0 10cm

①つがる市亀ヶ岡遺跡

最初に描いた部分



彩文の復元図

②つがる市亀ヶ岡遺跡



(青森県立郷土館1993)

最初に描いた部分



第7図 ①・②





外面

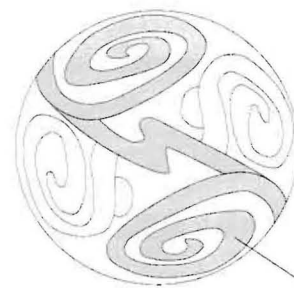


彩文の復元図



内面

③つがる市亀ヶ岡遺跡



最初に描いた部分

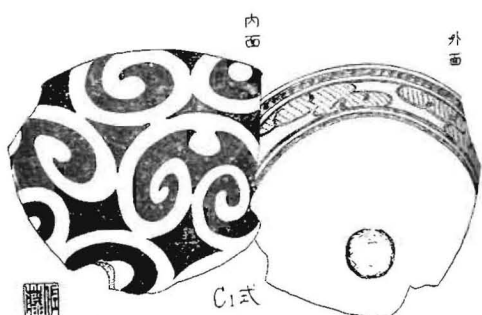


外面

④つがる市亀ヶ岡遺跡



内面



推定 径 17 CM  
高さ 2.5

江良 鉄太郎氏蔵  
(佐藤1956)

⑤つがる市亀ヶ岡遺跡



(伊藤1974)



最初に描いた部分

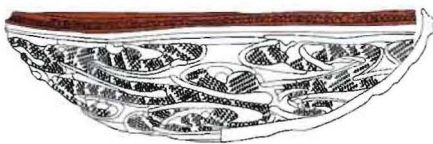
第8図 ③～⑤



(須藤2007)



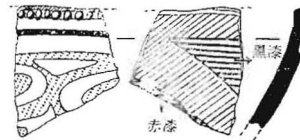
(青森県立郷土館1993)



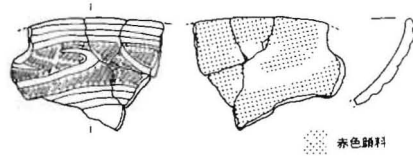
⑥つがる市亀ヶ岡遺跡



⑦つがる市亀ヶ岡遺跡 (境沢・山口ほか2006)



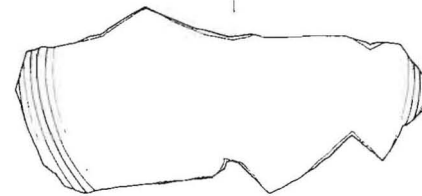
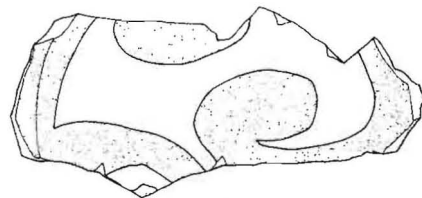
⑧つがる市亀ヶ岡遺跡 (清水 1959)



⑪外ヶ浜町今津遺跡 (新谷・岡田1986)



(青森県埋文調査  
センター 1990)



⑫外ヶ浜町宇鉄遺跡 (葛西1995)



⑩つがる市亀ヶ岡遺跡

(藤村1966)

第9図 ⑥～⑧・⑩～⑫

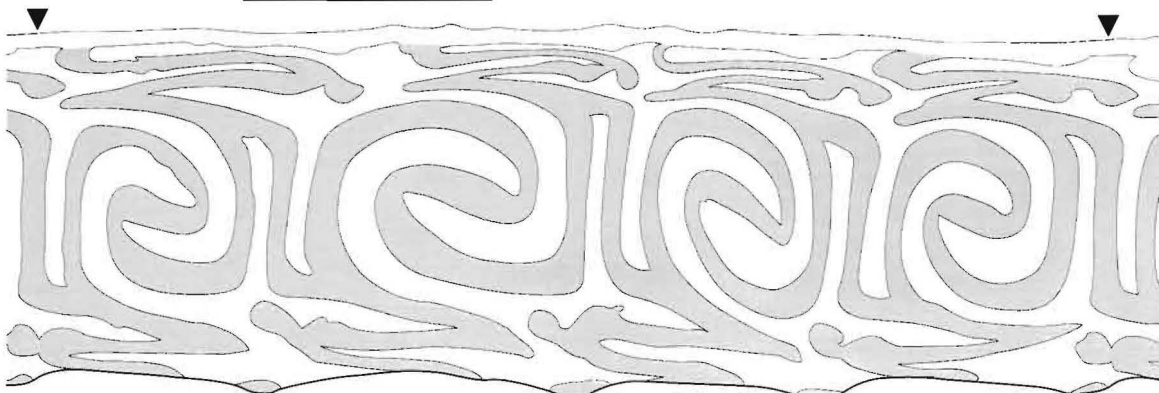




小川氏撮影



0 10cm



第10図 ⑨つがる市亀ヶ岡遺跡

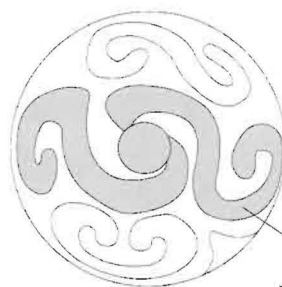


彩文の復元図

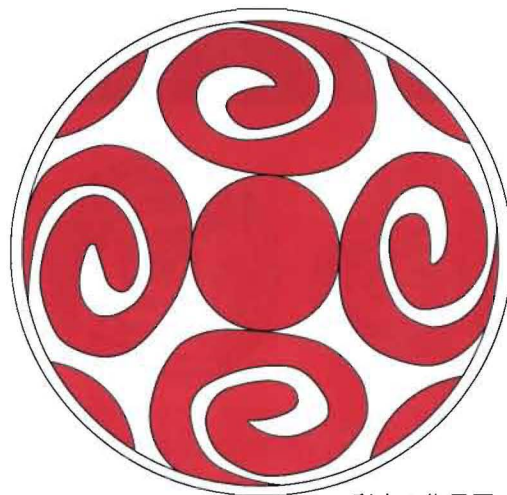


(杉山1928)

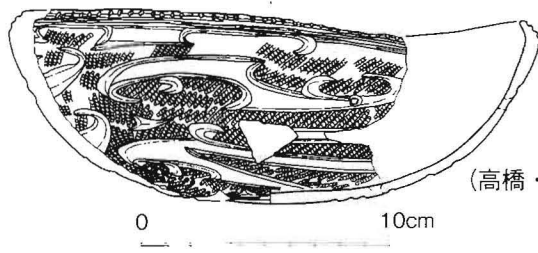
⑬青森県内（出土地不明）



最初に描いた部分



彩文の復元図



(高橋・伊東2000)

⑭秋田市戸平川遺跡

第11図 ⑬・⑭

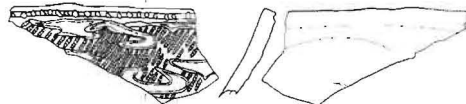




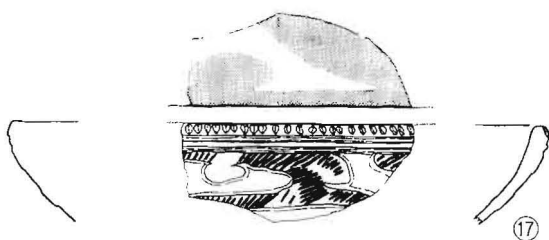
⑮



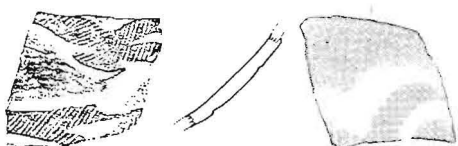
⑯



⑮・⑯軽米町大日向Ⅱ遺跡（田鎖・斎藤1995）



⑰



⑱

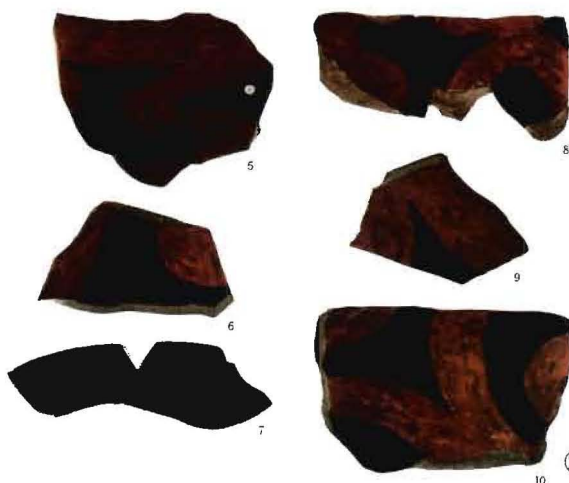


⑳東松島市里浜貝塚



⑲

⑰～⑲久慈市大芦遺跡（面代1985）



⑳（杉山1928）



㉑

（伊藤1974）

㉑・㉑石巻市沼津貝塚

第12図 ⑮～㉑

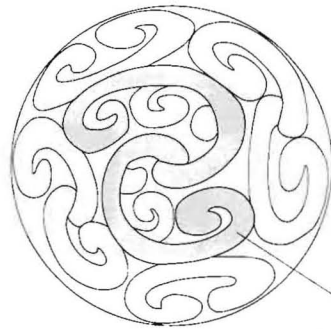


㉓

(伊東1962)



(杉山1928)



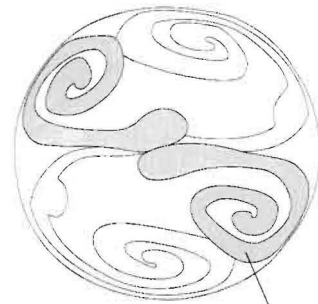
最初に描いた部分

第13図 ㉓石巻市沼津貝塚

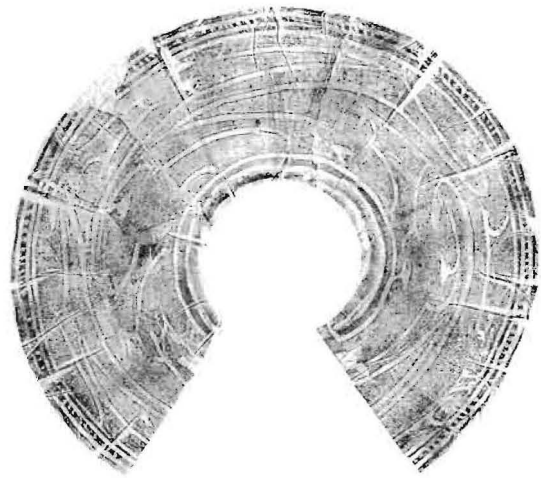
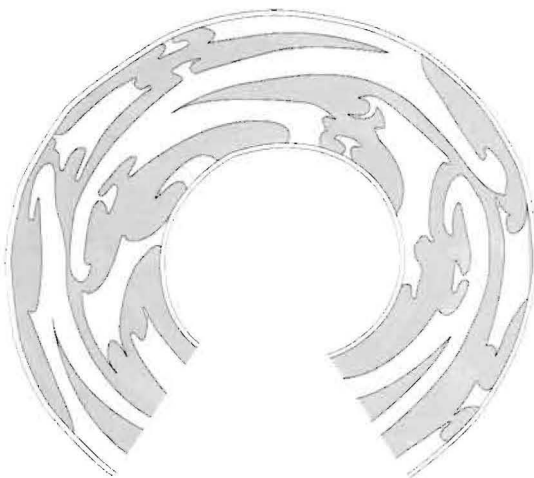
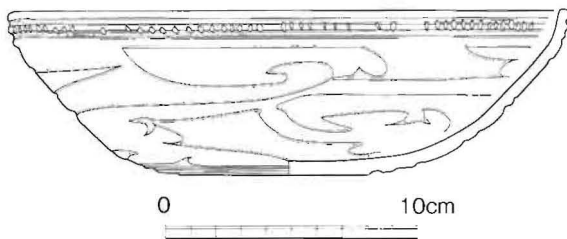




彩文の復元図



最初に描いた部分

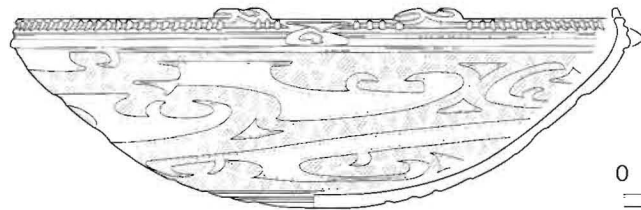


第14図 ㊸松島町永根貝塚





(愛知県陶磁資料館2002)



0 10cm



第15図 ㊸出土地不明

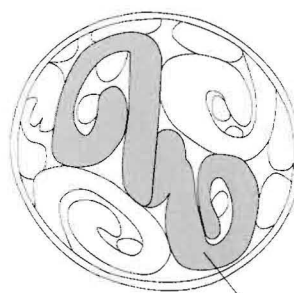


(愛知県陶磁資料館2002)



㊦の彩文

彩文の復元図



最初に描いた部分



(斎藤・吉川1970)

㊦出土地不明

第16図 ㊦・㊦

## 青森県五戸町大久保遺跡出土の縄文中期の顔面付土器

藤沼邦彦・栗原 徹

### (1) はじめに（東北地方の縄文前・中期に見られる顔面付土器）

東北地方の縄文土器にいわゆる顔面あるいは顔面らしきものが現れるのは前期初頭からである。宮城県上川名貝塚のものは、大きな深鉢形の破片で、土器の口縁部近くに人面を表現したもので、国内では最も古い顔面付土器である。眉と鼻を隆線で、目を窪みで表現し、眉・鼻の部分、目の周囲に赤い色を塗っている本格的な顔の表現である。しかし東北地方では、前期の顔面付土器は少なく、大木文化圏で大木4式ごろにカエルのような表情をしたもの（宮城県登米市沼崎山遺跡・糠塚貝塚）や大木6式に人面らしいもの（登米市糠塚貝塚・長根貝塚）があるが（伊東ほか1981、藤沼1969）、円筒下層式文化圏では見られない。

東北地方で顔面付土器が多くなるのは中期からである。この時期の土器に顔面が現れるのは、口縁に突起が発達し、文様に隆起線文が多用されることと関係があるだろう。それでも総数は30個体をこえないと思われる。大木文化圏では、中期初頭に鉢形の口縁をめぐる4個の突起を利用して顔面を表現したものが宮城県北・中部にあらわれる（登米市糠塚貝塚、涌谷町長根貝塚、七ヶ浜町大木皿貝塚）。どちらかというとも獣面という感じのものが多く（第2図を参照）。中期中葉のものはあまりない。中期後葉には、宮城県では比較的大きな顔面をもつものがある（石巻市南境貝塚、蔵王町湯坂山遺跡、東北歴史資料館1996）。また福島県では人体文土器が登場する（相馬市大窪遺跡、飯野町和台遺跡）。大窪遺跡のものは踊るような人体文であるが、顔に目鼻だちの表現はない。和台遺跡のものは、正面を向いた人体文で顔が明瞭に表現されている（西戸・新井2003）。なお和台遺跡出土の狩猟文土器は欠損部が多いが、人物が描かれていた可能性がある。

円筒上層式文化圏では、中期前葉から中葉にかけて顔面付土器が登場する。今回紹介する顔面付土器もその一つである。この顔面付土器の破片は、平成7年に、宮城県瀬峰町在住の佐々木尚見氏から東北歴史資料館に寄贈された土器破片の中に含まれていたもので、現在は、東北歴史博物館で保存されている。佐々木氏によると青森県の友人からいただいたもので、青森県五戸町大久保遺跡から出土した資料という。本論では、この顔面付土器の紹介を通じて、円筒上層土器文化に於ける顔面付土器のもつ意義について考えてみたい。

### (2) 顔面付土器を出土した大久保遺跡

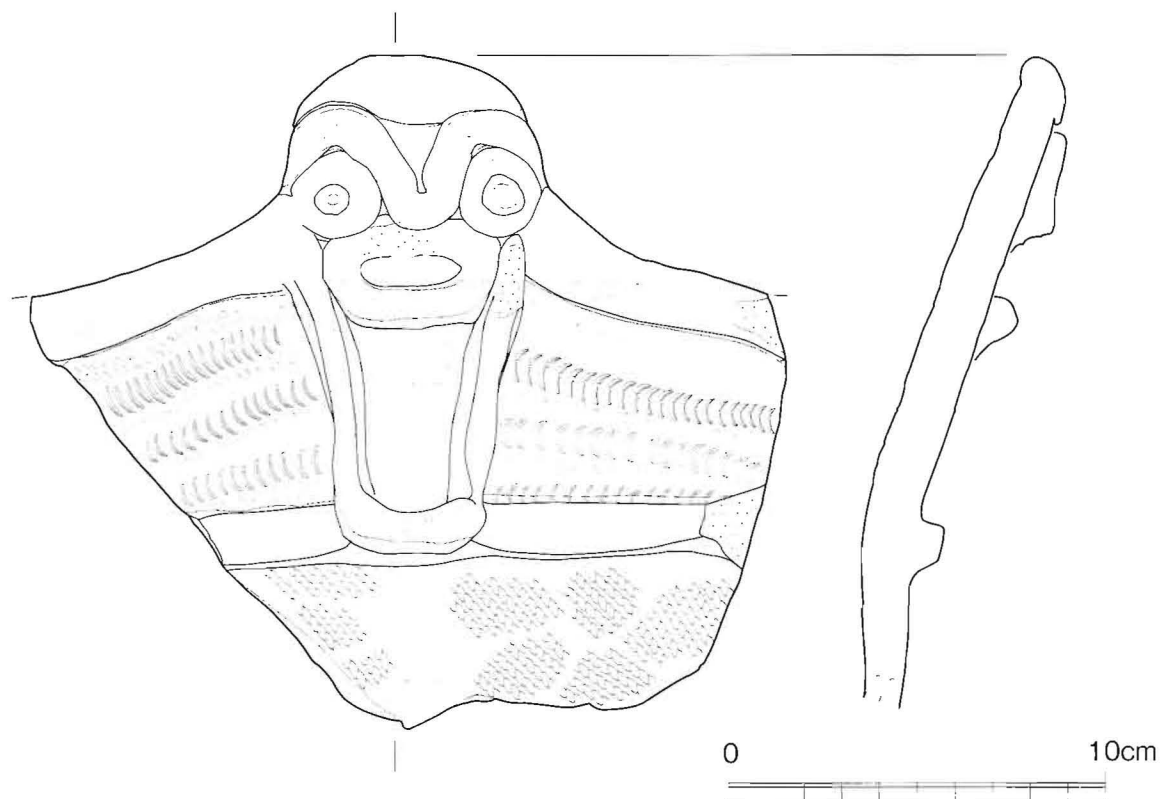
この顔面付土器の出土地は、青森県五戸町大久保遺跡という。『青森県遺跡地図』（1998年）によると、大久保遺跡（遺跡番号 59019）は、縄文早期から後期にかけての遺跡であるが、学術的な発掘調査などは実施されることがないようである。西から東に流れる五戸川の北側にある丘陵上に立地し、五戸町役場から北東約3.6kmに位置する。残念ながら栗原も藤沼もまだ遺跡を見ていない。

### (3) 大久保遺跡の顔面付土器の形態・大きさなど（第1・6図）

この顔面付土器の顔面は、円筒上層式土器の把手の部分を利用して表現されている。破片の大きさは、縦約18cm、横約20cmである。口径を推定すると32～36cmあり、もとは大きな深鉢であった。写真は『東北地方の土偶』（東北歴史資料館1996）に掲載されているが、実測図は今回が初めてである。

顔面の表現を見よう。頭は把手の丸みを利用している。眉と鼻は一本の太いうねった粘土紐で連続的に表している。鼻孔はない。目は丸く、ドーナツ状になり、周囲を隆線で、内側を窪みで表現している。口は大きな楕円形で、周囲を隆線で囲み、中を窪ませている。口を表現する隆線は上唇に相当





第1図 青森県五戸町大久保遺跡出土の顔面付土器



第2図 宮城県七ヶ浜町大木岡貝塚出土の顔面付土器

する部分に欠損が見られる。口の下に隆線で囲った縦に四角い区画を表現している。この区画が長い顎を示すのか、あるいは体を表現しているのかは分らない。いずれにせよ、粘土紐を貼り付けた隆線で、表情豊かな分かりやすい顔だちを、大胆に表現しているのが特色である。なお、この粘土紐（隆線）にも撚糸の圧痕がみられる。

中期前葉の円筒上層式土器の把手は4個あるのが普通であるので、把手の部分に表現されたこの顔面もそれぞれの把手の部分に付いて、計4個あった可能性が高い。

なお、土器の口縁部は文様帯となっている。口縁端はやや膨らみ、絡状体圧痕が見られる。その下に横方向の撚糸文が平行して4列あり、その間に爪形文を1列ずつ、計3列描いている。この爪形は撚糸を押しつけたものではなく、篋の先のようなものを刺して表現している。その下の体部との境目もやや膨らみ、口縁端部と同じ絡状体圧痕が見られる。文様帯の施文順序は、口縁端部の貼り付け⇒眉・鼻・目・口などの粘土紐貼り付け⇒撚糸の施文⇒爪形文の施文となる。

体部は単節 RL の斜縄文が全体に施文されると推定される。人面の下にあたる部分に、縦の綾線文がみられる。

内面は粘土紐輪積に由来すると思われる凸凹がみられるが、ミガキが丁寧になされ、ツルツルして光沢がある。

#### (4) 大久保遺跡の顔面付土器の年代

この顔面付土器は、4個の突起をもつ円筒上層式の深鉢であることは、だれしも異論がなからう。口縁部の文様帯に横方向の撚糸が長く平行して4列押されており、その間に爪形文を1列ずつ、計3列描いている。この爪形は撚糸を押しつけたものではなく、篋の先のようなものを刺して表現している。

円筒土器の研究者に聞くと、撚糸を短く「C」の字のように押しつけた爪形文は、上層b式の重要な特徴であるが、上層a式にも見られることがあるという。また、この爪形文は上層c式にも残るが、その場合は、撚糸を押しつけたものではなく、篋で刺して表現したものが多くなるという。

大久保遺跡の顔面付土器の年代決定は難しいが、把手の形・その部分の文様表現の方法・文様帯の文様構成と表現法・見た目の印象（土器群のもつ雰囲気）などから考えると上層b式がもっとも近い型式と思われる（この部分は、『青森県史 別編 三内丸山遺跡』を参考にした）。

#### (5) 円筒上層式の顔面付土器の類例と分布

成田滋彦の青森県を中心とした顔面付土器の集成（成田1991・1994）をもとに、円筒文化圏における顔面付土器の再集成を試みたが、あまり増加していない。サントリー美術館の『土偶と土面』は、「人面付」土器と「人面を思わせる文様のある」土器を区別している。私も「顔面付土器」と「顔面を思わせる文様のある土器」を区別し、多くの人が納得するであろう「顔面付土器」を中心に集成を行った。私たちにあって顔に見えるものであっても、縄文人が顔を意識して表現したものでなければ、顔面付土器として評価できないはずである。朽ちた縄に驚くことがあっても、朽ちた縄は長虫ではないのと同じである。このような観点で資料を点検すると、円筒上層式文化圏における顔面付土器は、北海道で2遺跡2個体、青森県で7遺跡14個体出土しているに過ぎない。しかし、三内丸山遺跡では未報告の顔面付土器が相当数あるとい



第3図 青森県つがる市石神遺跡（顔面を思わせる土器、江坂1970より）



うから、三内丸山遺跡の遺物整理の結果によって、出土数は大幅に変わる可能性がある。円筒上層式文化圏に属する岩手県や秋田県での出土例はまだ知られていない。

#### (6) まとめと考察（円筒上層式における顔面付土器）

①大久保遺跡出土の顔面付土器は、きちんと顔面を表現したことが分る良好な資料である。粘土紐を貼り付けた隆線で、眉・鼻・目、口を作り、表情豊かな顔だちを大胆に表現しているのが特色である。まだ同じような表現をした類例はない。所属時期は、先にも述べたが、円筒上層b式土器と考える。

②顔面付土器の顔面は、土器に宿った精霊の顔であろう。円筒上層式の顔面付土器はほぼ深鉢に限定される。深鉢は容器であり、食料を煮たり（＝食べ物を生み出す）するものであることを考えると、これに宿る精霊も土偶と同じように、新しい生命を生み出す力や食べ物を生み出す力、すなわち母性的性格をもつと考えられる。中期中頃、会津盆地（会津若松市石生前遺跡）や青森県（六ヶ所村富ノ沢(2)遺跡、青森市三内丸山遺跡、八戸市松崎遺跡）では中期の土器の把手に人間の足をイメージした足形が表現されることがあるが、あたかも土器に宿った精霊が足を土器の外側に伸ばした感じである。1個の土器に向かい合って2個ある足形把手は、土偶精霊が両足を開いて体の中にモノ（食べ物）を生み出しているとの解釈もおもしろい（渡辺1997）。いずれにしても、顔面付土器は、食料を生み出すあるいは食料に関する精霊の依代と考えてよい。

③顔面付土器は円筒上層式文化圏と大木式文化圏では類似点もあるが相違点もある。

(1)円筒上層式・大木式文化圏ともに顔面は土器の突起・把手を利用して表現することが多い。

(2)大木式文化圏の顔面付土器は中期初頭の大木7a式に集中する傾向があるが、円筒上層式文化圏のものは中期前・中葉（上層a式～e式）とやや幅が広い時期にみられる。

(3)大木式土器文化圏の中期初頭のものは小さな把手（突起）を利用して、どちらかというとも獣に似た（獣面とする）ものが多く、その時期の土偶の顔面表現とは共通しない（この時期の土偶は日鼻立ちの表現がないものが多い）。円筒土器文化圏のものは大きな把手を利用して、人に似た顔（人面とする）を表現するものが多く、この時期に製作された十字形土偶に共通する顔だちもある（4～10）。しかし、カエルのような顔・鳥のような顔・顔の一部が省略されたような顔のものもある（12～16）。

(4)円筒上層式文化圏における顔面付土器の分布は青森県域が中心で、とくに青森市や八戸市周辺に多いが、弘前市周辺には少ない傾向である。秋田県や岩手県では顔面付土器がほとんど知られていない。その理由は、秋田・岩手両県における円筒上層式文化圏が極めて狭いことと、大木式文化圏に近く、中期中葉には大木式文化圏の影響を受けることが多かったためであろう（中期中葉の大木式文化圏は顔面付土器が少ない時期である）。

④円筒上層式文化圏における顔面付土器の顔面は把手・突起部にあるのが普通で、外面を利用するもの8個体、内面を利用するもの3個体、内外両面を利用するもの5個体である。

⑤大木式文化圏の中期後葉になると、顔面付土器に加えて、福島県などで人体文土器があらわれる（西戸・新井2003）。円筒上層式文化圏でも三内丸山遺跡では小型の土偶を貼り付けたような人体文土器が出土している（村越・岡田2002）。しかし、東北地方の後期に見られる人体文（北上市蛭川館遺跡・館Ⅳ遺跡）や東北地方北部の狩猟文は、それぞれ大木式文化圏における中期後葉の人体文や狩猟文に由来するものであろう。

#### 【引用・参考文献】

- 小笠原善範（1977年）「青森県三内丸山遺跡出土の顔面把手について」遮光器11、6～10頁、みちのく考古学研究会。
- 青森県教育委員会（1978年）『三内沢部遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書41。
- 青森県教育委員会（1992年）『富ノ沢(2)遺跡発掘調査報告書Ⅴ』青森県埋蔵文化財調査報告書143。
- 青森県教育委員会（1993年）『富ノ沢(2)遺跡発掘調査報告書Ⅵ』青森県埋蔵文化財調査報告書147。
- 青森県埋蔵文化財調査センター（1990年）『図説ふるさと青森の歴史-総括編』

伊東信雄ほか（1981年）『宮城県史34 史料集Ⅴ 考古資料編』、財団法人宮城県史刊行会。  
伊東信雄・藤沼邦彦ほか『長根貝塚』  
江坂輝弥（1970年）『石神遺跡』石神遺跡研究会。  
大場利夫「北海道の人面文様土器」北海道考古学1。  
葛西 励（1980年）「顔面付円筒土器」うとう86、35～37頁、青森郷土会。  
工藤正・葛西励（1972年）『青森県平賀町堀合Ⅱ号遺跡発掘調査報告書』、平賀町教育委員会。  
児玉作左衛門・大場利夫・竹内収太（1958年）『サイベ沢遺跡』、市立函館博物館。  
サントリー美術館（1969年）『土偶と上面』、サントリー美術館。  
鈴木克彦・鈴木 徹ほか（1983年）『上北町古屋敷貝塚・Ⅰ』上北町文化財調査報告書1。  
報告書には人面付土器が写真で写っているが、説明はない。  
東北歴史資料館（1996年）『東北地方の土偶』  
成田滋彦（1991年）「青森県の顔面付き土器—縄文時代中期を中心に—」青森県考古学6、1～4頁、青森県考古学会。  
成田滋彦（1994年）「青森県の顔面付き土器（補遺）—縄文時代中期を中心に—」青森県考古学8、26～27頁、青森県考古学会。  
西戸純一・新井達哉（2003年）『和台遺跡』、飯野町教育委員会。  
八戸市教育委員会（1990年）『八戸市内遺跡発掘調査報告書Ⅰ—石手洗遺跡—』八戸市埋蔵文化財調査報告書36。  
藤沼邦彦（1969年）「第Ⅰトレンチと第Ⅱストレンチ」『埋蔵文化財緊急発掘調査概報—長根貝塚』宮城県文化財調査報告書19、3～25頁、宮城県教育委員会。  
村越 潔・岡田康博ほか（2002年）『青森県史 別編 三内丸山遺跡』、青森県。  
渡辺誠・古本洋子（1994年）「人面・土偶装飾付深鉢形土器の基礎的研究」日本考古学1、277～307頁、日本考古学協会。  
渡辺誠・古本洋子（1999年）「人面・土偶装飾付深鉢形土器の基礎的研究（追補）」日本考古学8、51～85頁、日本考古学協会。  
渡辺 誠（1997年）「足を広げた縄文土器」『堅田直先生古希記念論文集』、73～80頁。

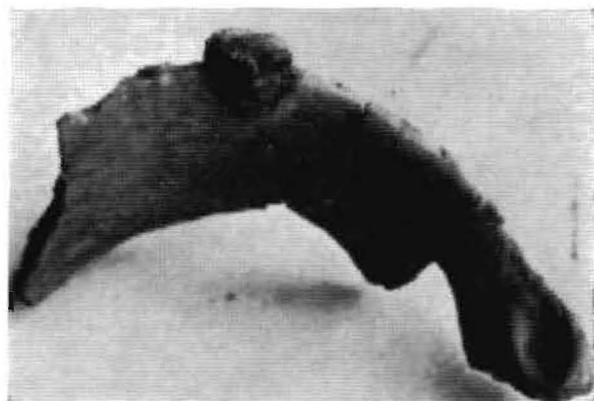
円筒上層式にともなう顔面付土器の集成					
	遺跡名	器種・部位	時期	出土原因	文 献
北海道					
2	森町オニウシ	深鉢の口縁部の外面・内面	上層 e 式	表面採集	大場1965、サントリー美術館1969
3	函館市サイベ沢	深鉢突起外面	上層 e 式	発掘調査	児玉・大場ほか1958、サントリー美術館1969
青森県					
1	五戸町大久保	深鉢把手外面	上層 b 式	不明	本論参照
4	八戸市石手洗	深鉢把手内面	上層 d 式	発掘調査	八戸市教委1990
		深鉢把手内面			
		深鉢把手内面			
		深鉢把手内面			
5	八戸市石手洗	深鉢把手外面	上層 d 式	発掘調査	八戸市教委1990
6	八戸市石手洗	深鉢把手外面	上層 d 式	発掘調査	八戸市教委1990
7	青森市三内丸山	深鉢把手外面	上層 d 式	発掘調査	小笠原1977
		深鉢把手内面			
8	青森市三内丸山	深鉢把手外面		発掘調査	村越・岡田ほか2002の135頁。
9	青森市三内丸山	深鉢把手外面		発掘調査	
10	青森市三内丸山	深鉢把手外面		発掘調査	
11	青森市三内沢部	深鉢把手内面	上層 d 式	表面採集	青森県教委1978
12	平川市堀合Ⅱ号	深鉢把手外面	上層 a 式	表面採集	葛西1980
		深鉢把手内面			
13	平川市堀合Ⅱ号	深鉢把手内面	上層 a 式	表面採集	
14	東北町古屋敷貝塚	深鉢突起外面	上層 e 式	発掘調査	鈴木・鈴木ほか1983 報告書に説明なし。写真では2個の突起に顔面が表現
15	六ヶ所村富ノ沢(2)	深鉢把手外面	上層 e 式	発掘調査	青森県教委1993
		深鉢把手内面			
16	六ヶ所村富ノ沢(2)	深鉢把手外面	上層 d 式	発掘調査	青森県教委1992
		深鉢把手内面			

参考 顔面を思わせる文様のある土器（藤沼が顔面であるかどうか迷うもの、顔面に見えないもの。※は藤沼の意見）

	つがる市石神	深鉢把手外面		——	江坂1970、サントリー美術館1969
	※いろいろな本に顔面として取り上げられるが、実物をみると顔面表現とは思われない。このことは報告書の実測図をみても分る（第3図）。サントリー美術館の『土偶と土面』は、この土器を「人面を思わせる文様のある」土器として、「人面付」土器と区別している。				
	つがる市石神	深鉢突起内面		——	江坂1970
	※突起内面は、突き出した鼻と口、あるいは目と口にみえるが、顔面とは断定しにくい。				
	八戸市石手洗	深鉢把手外面		発掘調査	八戸市教委1990
	※報告書は獣面突起（片目）とするが、断定できなかった。				
	青森市三内沢部	深鉢把手内面		表面採集	青森県教委1978、200 図3
	※報告書に動物型把手、カエルを模倣？とあるが、顔面には見えない。				
	平川市堀合Ⅱ号	深鉢把手外面	上層 a 式	発掘調査	江藤・葛西1972
	※報告書に「顔面風に見えるもの」とある。顔面かどうか迷うものである。				
	青森市三内丸山	深鉢体部外面		発掘調査	村越・岡田ほか2002の135頁
	※『青森県史 別編 三内丸山遺跡』に人面のついた土器とあるが、小さな人体文を貼り付けたものであろう。				



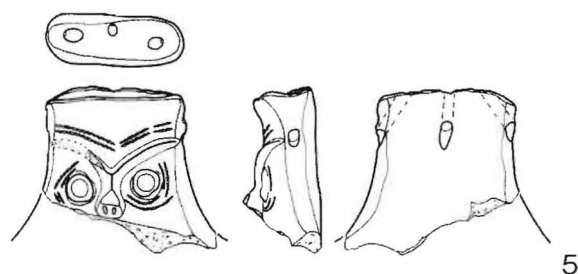
2. 北海道森町オニウシ遺跡（外面）



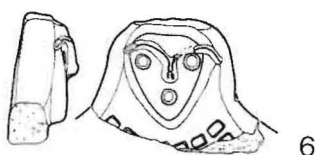
2 の内面（大場 1965）



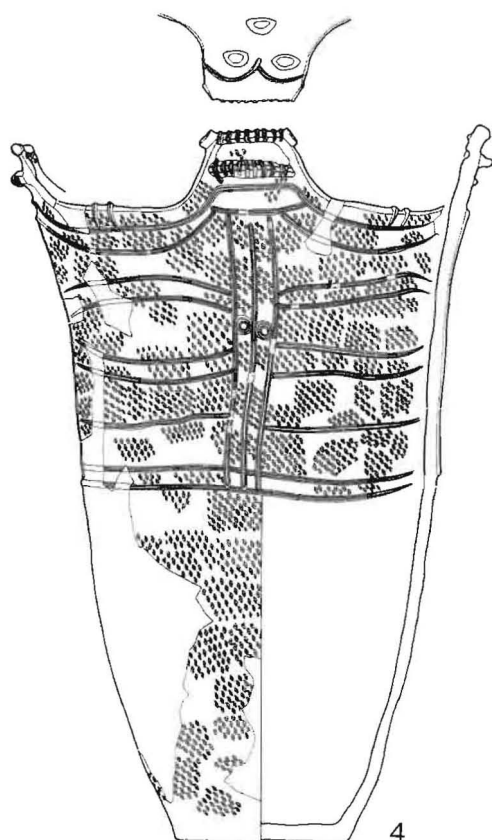
3. 函館市サイベ沢遺跡



5



6



4

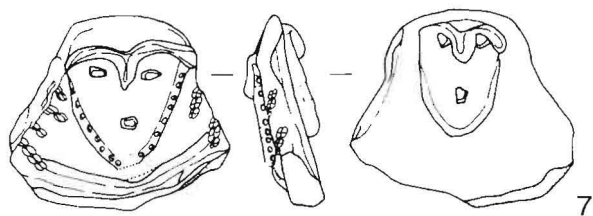


4 の突起の内面

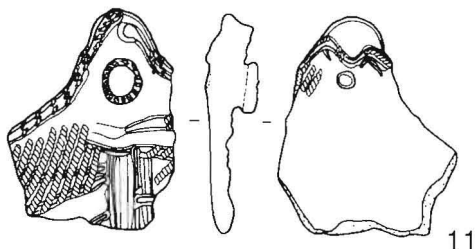
4 ~ 6 八戸市石手洗遺跡

縮尺不同

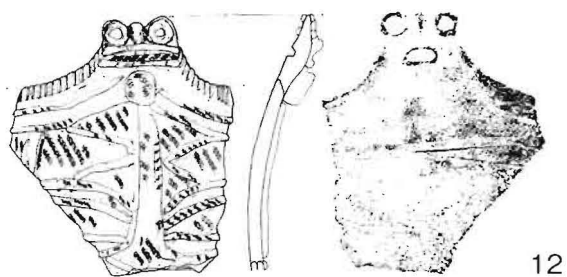
第4図 円筒上層式に伴う顔面付土器の集成①



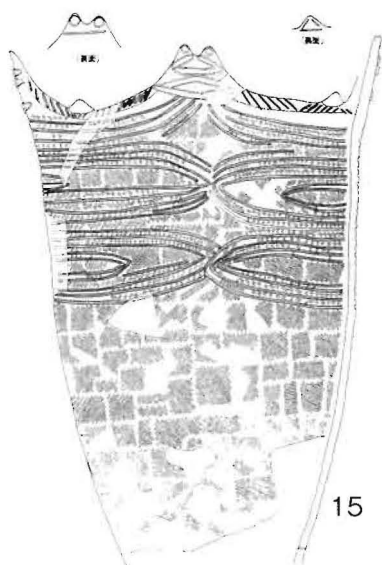
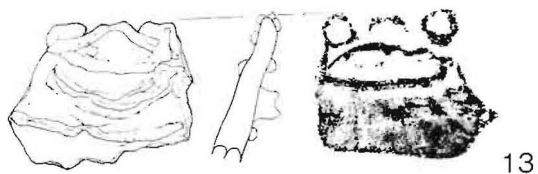
7 ~ 10 青森市三内丸山遺跡



11. 青森市三内沢部遺跡



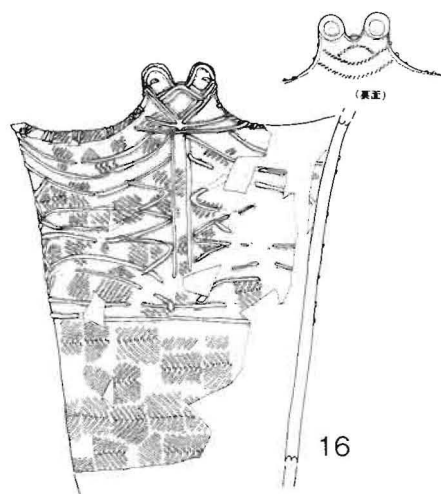
12・13 平川市堀合Ⅱ号遺跡



15・16 六ヶ所村富ノ沢(2)遺跡



14. 東北町古屋敷貝塚



縮尺不同

第5図 円筒上層式に伴う顔面付土器の集成②





外面



内面

第6図 青森県五戸町大久保遺跡出土の顔面付土器の写真

## 蓑虫山人の「陸奥全国神代石古陶之図」と青森新聞の 「第二回弘前博覧会縦覧の記」について

藤沼邦彦・深見 嶺・工藤清泰

### ○ はじめに

津軽地方の明治時代の考古学研究史はおもしろい。中央でモースが明治10年に大森貝塚で日本初の学術的発掘調査を行い、明治12年にその報告書を英文と和文で刊行する。明治17年には、坪井正五郎を中心に人類学会が創設される。日本の石器時代に関する興味が急激に高まった時代といえよう。明治19年から機関紙『人類学会報告』（まもなく『東京人類学会雑誌』と改称）が発刊されると、亀ヶ岡遺跡など津軽地方を中心とした遺跡・遺物が資料紹介・論文の形で多数掲載されるようになる。これを見ると、津軽地方の考古資料が明治期の石器時代研究の発展にいかにか寄与したかが分かる。青森県では、佐藤部・安田雄吉・工藤祐龍・広沢安任・外崎覚などが入会し、発掘報告・資料紹介・論文などを投稿するとともに中央からやってくる研究者の協力者になり、学界のために活躍する。明治22年7月、東京大学の若林勝邦が亀ヶ岡遺跡を学術目的で発掘調査するが（若林1892）、このとき地元の佐藤部・外崎覚・安田勇（雄吉と思われる）が湯口村の土器塚を案内し、佐藤は亀ヶ岡遺跡まで同道している（『東奥日報』明治22年7月28日の記事）。東京大学の佐藤伝蔵は、地元の協力を得て、明治28・29年、亀ヶ岡遺跡の大規模な発掘調査を行い、詳細にその内容を報告する（佐藤1896a・1896b・1896c・1896d）。しかし、人類学会創設前後には、すでに津軽地方には出土品（古物）を収集する人々が数多く存在していた。明治13年の青森新聞の第二回弘前博覧会の記事や蓑虫山人が描いた絵画などを調べると、明治前・中葉の津軽地方には、実に60名を越す古物所蔵者すなわち古物愛好家がいたことが分かる。彼らがすべて積極的な蒐集家あるいは研究者であったかは不明であるが、少なくとも政治に関心の高い人、地域産業の振興に熱心な人、地域文化の向上に尽くした人々が含まれていることは事実である。そして当時の津軽地方は東奥義塾を中心にきわめて開明的な雰囲気－キリスト教の伝導や民権運動など－に包まれていた。なぜ、古物に興味を寄せる人々が多数いたのであろうか。こうした明治前・中葉の津軽地方の考古学事情を明らかにすることは、津軽地方の地域文化の顕彰という立場からも重要なことであると考えている。

まず、明治20年近くに蓑虫山人が描き残した絵画と明治13年の青森新聞の第二回弘前博覧会の記事を通じて当時の遺物所蔵者の名前や出土品の種類をさぐって見ることにする。

### ○ 蓑虫山人

蓑虫山人（1836～1900年）は、美濃国（岐阜県）の出身で、本名は土岐源吾という。蓑虫にかかわる伝記は多数あるが、考古学との関わりについては、杉山莊平の「蓑虫仙人小伝」（杉山1967）がもっとも詳しくかつ読みやすい。杉山は日本考古学史の立場から蓑虫の位置づけを行っている。青森県滞在中の蓑虫については、成田彦栄の「蓑虫山人と考古学」（成田1949）が詳しい。蓑虫の墓は名古屋市の長母寺にあり（第1図）、この寺には蓑虫が蒐集した多数の石器・土器、22冊の絵日記および画軸が残されている。

蓑虫は、独特な画風をもつ漂白の画人で明治11年から明治20年まで青森県に滞在した。青森県に滞在中、県内各地を旅行し、数多くの風景画を描いた。また、古物に興味があった蓑虫は、各地の蒐集家のところをたずねて土器や石器などの出土品を描くと同時に、多くの地方



第1図（蓑虫山人の墓）



有力者や古物愛好家と交流し、自分も出土品を多数集めた。また中央の神田孝平などから石器時代の遺物を集めることを頼まれたりしている。明治20年には亀ヶ岡遺跡を自ら発掘し、その様子を神田孝平に手紙で報告した。神田はその手紙の内容を「陸奥瓶岡ニテ未曾有ノ発見 津軽ノ蓑虫翁の手束」(神田1887)として東京人類学会に報告したので、蓑虫は亀ヶ岡遺跡の内容を中央の学会誌に報告した最初の人となる。しかし、手簡の内容から分るように、蓑虫は研究者というより古物愛好家の段階にとどまった人物であった。

青森県立郷土館の特別展図録である『蓑虫山人』に収録されている「陸奥全国神代石古陶之図」・「太古石器古陶図」・「古陶図」などを見ると、青森県内の100点を越す多数の出土品が描かれ、その傍らに1点ごとに出土地や所蔵者名が書き込まれている。所蔵者のなかには、『東京人類学会雑誌』に投稿する佐藤部・下沢保躬・工藤彦一郎、画家の平尾魯遷、地方の有力者である熊沢慶次郎・阿部文助などが含まれている。彼らはみな津軽地方の有力者・文化人で、考古学資料(古物)に対して好奇心を抱く階層が広がったことを示している。このことは、明治13年の青森新聞の第二回弘前博覧会の記事からもいえることである。

蓑虫の出土品の絵は、よく特徴をとらえているが、写実的ではない。考古学の立場からいえば、古風な描き方で、津軽を代表する研究者・蒐集家であった佐藤部の描く土器図・土偶図と比較すると、正確さが著しく低いといわざるをえない。誇張されたもの・省略されたもの・潤色を加えたものなどがあり、同じものを描いたものでも、作品によって細部が異なっているものが多い。それでも特徴をよくとらえており、写真資料や現存する資料と同定できるものがある。また現物が失われている資料も描かれており、津軽の考古学にとっては貴重な資料となっている。したがって蓑虫という人物とその作品を多数の図版を用いて紹介した青森県立郷土館の特別展図録である『蓑虫山人』は青森県の明治前半期の考古学史を研究する上で基礎的な文献となっている。しかし、写真の大きさに制限があるため、絵画に書き込まれた出土地や所蔵者名の文字は小さくて解読することができない。

ここでは、「陸奥全国神代石古陶之図」を題材に、なるべく写真を大きく掲載し、そこに描かれた遺物の種類、その出土地・所蔵者などを探ってみることにする。

#### ○「陸奥全国神代石古陶之図」(阿部屏風・木村屏風)に登場する遺跡と出土品(第3図～15図と第1～3表)

蓑虫が青森県内の出土品を描いた代表的な作品は、「陸奥全国神代石古陶之図」・「太古石器古陶図」・「古陶図」・「陸奥全国神代石之図」・「陸奥全国内古陶図」で、そのすべてが青森県立郷土館の『蓑虫山人』に収録されており、概要を掴むことができる(青森県立郷土館1984)。それぞれの作品に見られる出土品は、その大部分が共通すると見られるが、同一のものであっても作品によって描き方に精粗があり、同定が難しいものがある。しかし、亀ヶ岡遺跡出土の短頸壺や土偶、屏風館跡出土の大型壺・石像・石製獅子頭のような特色ある遺物に関しては同定が可能である。同じ遺物がそれぞれの作品に描かれていることは、蓑虫が所蔵者のところを訪ね写生した原本があり、その原本に基づいてさまざまな作品を製作したためであろう。

「陸奥全国神代石古陶之図」は、「太古石器古陶図」・「古陶図」・「陸奥全国神代石之図」・「陸奥全国内古陶図」などを集大成したような大作品で、六曲一双に仕立てた屏風が、青森県内に4組残されている。これを所蔵者別に、仮に阿部屏風・木村屏風・熊沢屏風・成田屏風と呼ぶことにする。このうち成田屏風は現在軸装されている。また阿部屏風は、青森市浪岡の中世の館に陳列されており、いつでも見学することができる。

ここでは、阿部屏風と木村屏風を取り上げ、そこに描かれた出土品の内容・遺跡・所蔵者などを明らかにし、これらの遺物が描かれた明治10年から20年頃にかけての津軽を中心とした考古学事情につ

	遺物名	出土地	阿部家	木村家
1	環状石斧	佐井村	下北郡佐井村所獲 蓑虫山人有	下北郡佐井村所獲 土岐蓑虫所藏
2	石刀2本		弘前 岡本氏所藏	弘前 岡本氏所藏
3	独鈷石		青森 浅田氏藏	青森 浅田氏所藏
4	両頭石棒		本口村林松治郎氏有	本口村林松治郎所藏
5	石棒		浪岡村 阿部氏藏	波岡 阿部文助所藏
6	太石棒		南津軽郡相澤村 村社八幡宮神宝	南津軽郡相澤村 八幡宮社宝
7	石刀		弘前 神氏所藏也	弘前 神氏所藏
8	香炉形土器		弘前佐東部氏藏	弘前佐藤部所藏
9	浅鉢		館岡村 前田氏藏	館岡村 前田氏所藏
10	土器		亀岡村 野呂氏藏	亀ヶ岡村 野呂氏所藏
11	壺		弘前 都賀氏藏	弘前 都賀氏所藏
12	鉢		佐東氏藏	佐藤部氏所藏
13	台付鉢		青森 浅田氏藏	青森 浅田氏所藏
14	筒形土器		蓑虫山人	蓑虫山人所藏
15	壺－後期	荒谷山中	枝川村 工藤氏藏荒谷山中所獲	枝川工藤氏所藏荒谷山中所獲
16	工字文壺		弘前佐東部氏藏	弘前佐藤部氏所藏
17	大型壺	猫淵山中	西津軽郡猫淵山中所獲 蓑虫山人	西津軽郡猫淵山中所獲 土岐蓑虫藏
18	台付鉢 土偶頭部	亀ヶ岡	亀ヶ岡所獲 蓑虫	亀ヶ岡所獲 土岐蓑虫藏
19	鉢？		蓑虫藏	土岐蓑虫藏
20	細口壺		蓑虫山人	蓑虫氏所藏
21	注口土器		蓑虫山人	土岐蓑虫所藏
22	片口鉢		蓑虫所藏	土岐氏所有
23	壺－上欠損？		蓑虫	蓑虫藏
24	皿		蓑虫所藏	土岐蓑虫所藏
25	土器把手破片		土岐蓑虫所藏	土岐蓑虫所藏
26	大型壺	北中野村屏 風館跡	北中野村屏風館跡所獲同村天皇社藏	北中野村屏風館跡所獲同村天皇社藏 ※藩日記に出てくる
27	壺		弘前 都賀氏所藏	弘前 都賀氏所藏
28	鉢形土器		館岡氏 野呂所藏	館岡 野呂氏藏
29	壺		弘前 大道寺氏所藏	弘前 大道寺氏所藏
30	注口土器		小川渉氏藏	小川渉氏所藏
31	広口壺		佐東部氏所藏	佐藤部氏所藏
32	壺形土器		館岡村 野呂氏	館岡村 野呂氏所藏
33	壺		下北郡大畑村 村社八幡宮神宝	下北郡大畑村 村社八幡宮藏
34	土偶	亀ヶ岡	瓶ヶ岡所獲館越村 北畠氏有	亀ヶ岡所獲館ノ越村 北畠氏所藏
35	土偶		佐東氏有	佐藤部氏所藏
36	土偶		佐東氏有	佐藤氏藏
37	土偶	亀ヶ岡	瓶ヶ岡所獲蓑虫山人	亀ヶ岡所獲蓑虫山人藏

第1表 「陸奥全国神代石古陶之図」の遺物の出土地と所蔵者（1）



38	土偶		佐東氏有	佐藤氏所蔵
39	土偶		蓑虫山人	蓑虫所蔵
40	壺 - 後期		館岡村 前田氏所蔵	館岡村 前田氏所蔵
41	細口壺		木造村 松木氏有	木造 松木氏所蔵
42	鉢		黒石 浅川氏所有	青森 浅田氏蔵
43	大型土器	追良瀬村 山中	西津軽郡追良瀬村山中所獲同村長 谷氏所有	西津軽郡追良瀬村山中所獲同村長 谷庄三郎所有
44	土器	亀ヶ岡	弘前今氏所有瓶岡所獲	弘前今氏所蔵亀ヶ岡所獲
45	巖手刀		弘前縣社熊野宮宝蔵	弘前縣社熊野宮神蔵
46	石棒	河内村	蓑虫山人蔵下北郡河内村所獲	蓑虫蔵下北郡河内村所獲
47	石刀		弘前 佐東部氏蔵	弘前 佐藤部所有
48	石刀		高杉村 加茂神社神寶	高杉村 加茂神社神宝
49	独鈷石		弘前 魯仙翁所蔵	弘前 魯仙翁所有
50	岩筒		深浦 圓覚寺所蔵天岩筒	深浦 圓覚寺所蔵天岩筒
51	勾玉類		蓑虫山人所蔵曲玉	土岐蓑虫蔵曲玉
52	石皿		弘前長利仲聴氏所蔵	弘前長利仲聴所蔵
53	石皿	富岡村	北津軽郡富岡村所獲蓑虫山人	北津軽郡富岡所獲 土岐蓑虫蔵
54	鐔		浪岡村阿部氏蔵	波岡村阿部氏所蔵
55	石棒		深浦円覚寺所蔵	深浦円覚寺所蔵
56	石帯	松野村	北津軽郡松野村所獲蓑虫	相野村所獲 蓑虫山人蔵
57	独鈷石	尾崎山中	尾崎山中所獲蓑虫	尾崎山中所獲土岐氏所蔵
58	石棒?	湯口山中	弘前岡林氏所蔵 湯口山中所獲	弘前岡林氏所蔵 湯口山中所獲
59	勾玉		弘前下沢保躬氏	弘前下沢保躬所有勾玉
60	勾玉		佐藤部氏	佐藤部所有
61	垂玉		蓑虫山人	土岐氏所有
62	石皿		蓑虫山人	土岐蓑虫所蔵
63	天岩筒		種里村八幡宮天岩筒	種里村八幡宮神宝天岩筒
64	独鈷石		佐東部氏所蔵	佐東部所蔵
65	石棒		浪岡阿部氏蔵	浪岡阿部文助所有
66	鏡?		追良瀬村長□氏所蔵	追良瀬村長□氏所蔵
67	有頭石棒		舞戸村一戸氏所蔵	舞戸村一戸氏所蔵
68	有頭石棒		五所川原毛内治兵衛氏所蔵	五所川原毛内治兵衛所蔵
69	石皿		北下郡河内村憶念寺蔵	北下郡河内村憶念寺蔵
70	石棒		南津軽郡廣舟村廣船神社宝蔵	南津軽郡廣舟村廣船神社蔵
71	石棒		南津軽郡五本松村加茂神社蔵	南津軽郡五本松村加茂神社蔵
72	石斧		蓑虫山人	土岐蓑虫蔵
73	青龍刀形石器		西津軽郡種里村八幡宮寶蔵	西津軽郡種里村八幡宮蔵
74	青龍刀形石器		西津軽郡種里八幡宮神蔵	西津軽郡種里村八幡宮所蔵
75	有頭石棒		青森造道二国地主所蔵	青森造道二国地主所蔵

第2表 「陸奥全国神代石古陶之図」の遺物の出土地と所蔵者（2）

76	石冠		中津軽郡十腰内村巖鬼山神社寶藏	中津軽郡十腰内村巖鬼山神社社宝
77	石皿		南津軽郡下山形村熊沢氏所藏	南津軽郡下山形村熊沢氏所藏
78	石像 獅子頭	北中野村 屏風館跡	北中野村屏風館跡所獲天皇社藏同 獅子頭	北中野村屏風館跡所獲天皇社藏同 獅子頭
79	石皿		西津軽郡湯船村高倉神社藏	西津軽郡湯船村高倉神社藏
80	石棒		中津軽郡下湯口村岡林氏所藏	中津軽郡下湯口村岡林氏所藏
81	鉢	亀ヶ岡村	亀岡村所獲 蓑虫	亀ヶ岡村所獲土岐蓑虫藏
82	壺		蓑虫藏	蓑虫所藏
83	壺形土器	南中野村三 蔵社内	南津軽郡南中野村三蔵社内所獲 蓑虫	南中野村三蔵社境内所獲 蓑
84	壺形土器		蓑虫山人	土岐氏所藏
85	鉢形土器		蓑虫	蓑虫所藏
86	壺		土岐蓑虫藏	土岐氏藏
87	壺－後期		蓑虫山人	土岐氏藏
88	雲形文の壺	造道村館野	東津軽郡造道村館野所獲土岐蓑虫	東津軽郡造道村館野所獲 蓑
89	壺形土器		蓑虫山人	土岐蓑虫藏
90	蓋付き壺		蓑虫	蓑藏
91	壺形土器		蓑虫山人	土岐氏所藏
92	壺	浪岡村古 城跡	浪岡村古城跡所獲 蓑虫	浪岡古城跡所獲 蓑虫所有
93	大型土器	相内村山中	北津軽郡相内村庄司氏所藏 同村山 中所獲	北津軽郡相内村庄司氏所藏同村山 中出
94	大型壺		亀岡村野呂氏所藏	亀ヶ岡 野呂氏所藏
95	壺		弘前都賀氏所藏	弘前都賀氏所藏
96	鉢	瓶ヶ岡	弘前神氏所藏瓶ヶ岡所獲	弘前神氏所藏亀ヶ岡所獲
97	鉢		青森浅田氏	青森浅田氏藏
98	壺		浪岡村玄德寺藏	浪岡玄德寺所藏
99	鉢		青森浅田氏藏	青森浅田氏所藏
100	注口土器	下山形村	枝川村工藤氏所藏 下山形田中堀得	枝川村工藤氏所藏 下山形村田中堀得
101	壺	亀ヶ岡	木造松木氏所藏 亀ヶ岡所獲	木造松木氏所藏 亀ヶ岡所獲
102	石槍		矢根八幡宮神宝	矢根八幡宮神宝
103	石櫃	岩木山	岩木山神宝石筒	岩木山神社神宝石筒
104	石棒	尾崎村山中	南津軽郡尾崎村山中所獲蓑虫山人	南津軽郡尾崎村山中所獲土岐蓑虫藏
105	石棒	岩木山	西津軽郡蓬村與三郎氏岩木山所獲	西津軽郡蓬村與三郎氏岩木山所獲
106	石剣		青森浅田萬兵衛氏所藏	青森浅田萬兵衛氏所藏
107	石皿		獨狐村庄三郎氏	獨狐村庄三郎氏
108	不明		青森浅田氏所藏	青森浅田氏藏
109	石棒		青森浅田氏藏	青森浅田氏藏
110	勾玉類		下北郡佐井村矢ノ根八幡宮藏曲玉	下北郡佐井村矢ノ根八幡宮神宝曲玉

第3表 「陸奥全国神代石古陶之図」の遺物の出土地と所蔵者（3）

いて考察してみたい。

#### (1)出土地

出土品は110点描かれている。出土地が記入されているのはそのうち26点で、遺跡名ではなく遺跡の所在する村などの名を上げているものが多い（括弧内は現在の市町村名）。

記載ある出土地をあげると、佐井村（佐井村）、荒谷山中（田舎館村）、猫淵村山中、亀ヶ岡・亀ヶ岡村（つがる市）、北中野村屏風館跡（青森市）、追良瀬村山中（鯹ヶ沢町）、河内村（むつ市）、富岡村、松野村、尾崎山中・尾崎村山中、湯口山中（弘前市）、南中野村三蔵社境内（青森市）、造道村館野（青森市）、浪岡村古城跡（青森市）、相内村山中（五所川原市）、下山形村田中（黒石市）、岩木山（弘前市）である。

出土地が、現在の下北半島・青森市・弘前市・つがる市に比較的多く見られるのは、蓑虫が訪ねた所蔵者がこの地域に住む人たちであったことと関係があり、蓑虫がたどった足跡を示すものである。

出土地（蓑虫はしばしば「所獲」と表現）として、亀ヶ岡・亀ヶ岡村がもっとも多く登場するが、亀ヶ岡遺跡が早くから遺物目的で発掘され、広く愛好家のところに出回っていたことを示す資料として興味深い。蓑虫自身も明治20年に発掘し、遺物の出土状況・遺物の種類・出土品をめぐるトラブルなどを神田に報告している（神田1887）。なお北中野村屏風館跡は現在の源常平遺跡、浪岡村古城跡は浪岡城跡に相当するが、他のものについては具体的な遺跡名をあげることはできない。

#### (2)出土品（遺物）

「陸奥全国神代石古陶之図」に登場する出土品の数は、作品の違いによって若干の違いがあるが、ほぼ同じと考えてよい。阿部屏風・木村屏風には110点の遺物について所蔵者名が記されている。その110点の遺物名については表に記した通りであるが、不明なものもある。縄文時代の遺物が大部分であるが、古代以降のものも含まれている。

##### ①縄文時代と考えられる石器・石製品

石器・石製品は種類が多いが、判別がつかないものが2点（48・108）含まれている。

石槍1点（102）は江戸時代からしばしば文献に登場する佐井村の矢根八幡宮の神宝である。石斧（72）は数点描かれているが、出土地・所蔵者ともに明記されていないものがある。石冠1点（76）・足付石皿4点（52・53・62・77）・中高石皿と思われるもの3点（69・79・107）もある。

祭祀にかかわる遺物として大きな石棒5点（5・6・58・71・80）、有頭石棒らしきもの11点（2・4・46・55・67・68・70・75・104・105・109）、石剣ないし石刀が4点（7・47・65・106）、独鈷石4点（3・49・57・64）、環状石斧1点（1）、青龍刀形石斧2点（73・74）がある。青龍刀形石斧は2点とも種里村八幡宮（現、鯹ヶ沢町）所蔵であるが、現在は紛失しているようである。

装身具は勾玉類10点（51・59・60・110）と垂飾品6点（51・61・110）がある。110にある垂飾品のうち一つは珧状耳飾の欠損品かもしれない。

##### ②縄文土器

縄文土器は多数取り上げられている。完形あるいは完形に近い土器が多いが、破片もふくまれている。比較的小型で文様のある晩期の土器がもっとも多く、ついで後期のものとなる。中期のものは少ない。時期不明のものもある。絵からでは鉢と浅鉢の区別がつけにくい。

晩期の土器は、香炉形1点（8）、浅鉢・鉢13点（9・12・13・18・19・22・23・24・28・42・81・96・99）ある。18・13は台付、22は片口と思われる。注口土器は2点（21・30）ある。壺は20点（10・11・16・20・27・31・32・40・41・82・83・84・86・88・89・91・94・95・98・101）ある。16は工字文が描かれた優品である。86は口頸部が欠損しているものであろう。

後期の土器は、鉢・浅鉢が1点（97）、壺が3点（15・26・87）、注口土器が1点（100）ある。26は土器棺として利用されたものという（葛西2001）。注口土器（100）は優品である。

中期の土器は、円筒上層式の大型突起の破片1個(25)である。14の筒形土器は、形からみると、前期の円筒下層式土器かもしれない。

文様のない土器は、時期を特定できないものが多い。壺(90・92)、大型壺(17・29・33・43・93)、鉢(85)、器種不明のもの(44)、がある。大型壺のなかには五所川原産の須恵器が含まれているような印象を受けるが、断定できない。

### ③土偶

土偶は7個(18・34～39)描かれている。顔部が残っている土偶の大部分は晩期後半のもののようなものである。遮光器土偶は1点も描かれていない。34は顔の表現から晩期後半のものと推定されるが、体部の表現に不正確さを感じる。

### ④古代から近世までの遺物

縄文時代より新しいものは数が少ない。このうち時代の推定できるものは蕨手刀(45)と石帯(56)である。ともに平安時代に属すると思われる。しかしこの蕨手刀は石器と一緒に描かれているのが不思議である。石であるなら縄文時代の石刀であろう。岩木山神社の円筒形の石櫃(103)や屏風館跡の石像(78)・石製の獅子頭(78)はいつの時代のものでどのような性格をもつのか不明である。岩筒(50・63)もなにものか分からない。果たして人工物なのであろうか。54は刀の鐔、66は鏡と思われる。

### (3)所蔵者(第4表)

出土品の傍らには出土地名がなくとも必ず所蔵者名が丹念に書き込まれている。所蔵者を訪ね興味あるものを見せてもらい、それを描くことによって生活の糧を得ていたことから考えれば当然であろう。しかし、苗字(姓)だけのものが多い。住むところが同じで、同姓のものが複数いる場合はフルネームを書くのが普通であるが、同姓でも住む地域がことなれば苗字(姓)だけを書き記したようである。したがって弘前の岡林氏と下湯口村の岡林氏、館岡村の野呂氏と亀ヶ岡村の野呂氏は別人物であろう。42の土器は、阿部屏風では「黒石 浅川氏所有」、木村屏風では「青森 浅田氏蔵」となっているが、木村屏風の方が正しいと思われる。整理した結果は、所蔵者は個人が31人、寺社が15カ所となった。大変多い数で、蓑虫が所蔵者の所を丹念に歩き、熱心に写生していたことが分る。このころ津軽の佐藤部も所蔵者の所をめぐり歩き、出土品その他の古物をスケッチしている(青森市の成田コレクションに佐藤部のスケッチが残されており、その一部が雑誌『東奥文化』の表紙に紹介されている)。蓑虫は佐藤部など熱心な研究者によって導かれ、所蔵家を紹介してもらうことが多かったと思われる。

所有者として最も多く登場するのは蓑虫山人本人で33カ所に名前が書いてある。ついで佐藤部の10カ所、浅田萬兵衛の8カ所の順となる。

個人の所蔵者で、人物像を明らかにできるのは、浪岡の阿部文助、斗南の小川渉、館ノ越村の北畠立庵、枝川村の工藤彦一郎、下山形村の熊澤慶次郎、弘前の佐藤部、弘前の下沢保躬、館岡の野呂武左エ門、弘前の平尾魯仙である。彼らは、地方の知識人であるとともに有力者でもあり、地方の政治・文化に貢献した実力者が多い。このうち昭和43年の『青森県人名大事典』に載っているものが8人いる。考古学との関連でいえば、佐藤部・工藤彦一郎(祐龍)・下沢保躬の3人は東京人類学会雑誌に論文などを投稿しているが、もっとも活躍したのは佐藤部である。

佐藤部は当時の津軽地方を代表する考古学の研究者かつ考古資料の蒐集家である。彼のスケッチは正確で、実際の遺物と同定することが可能である。亀ヶ岡遺跡の著名な遮光器土偶の図「瓦偶人之図」はほぼ実測図に近いものである。営林署に勤め植物学にも詳しい。成田彦栄によるときわめて魅力的な人物である(成田1944)。彼が初期に集めた考古資料は神戸の久原房之助に譲渡されるが、のち東北大学に移管され、現在、東北大学文学部の久原コレクションとして現存する。また久原に譲渡した



	所蔵者	所蔵する出土品	姓名	備考
01	青森 浅田氏	3. 13. 42. 97. 99. 106. 108. 109	浅田萬兵衛	
02	波岡 阿部文助	5. 54. 65	阿部文助	青森人名大事典17頁
03	舞戸村 一戸	67		
04	弘前 岡本	2		
05	弘前 岡林	58		
06	下湯II村 岡林	80		
07	弘前 長利仲聴	52	長利仲聴	
08	(青森) 小川涉	30	小川涉	青森人名大事典109頁
09	追良瀬村 長□	66		
10	館ノ越村 北畠氏	34	北畠立庵	
11	枝川 工藤氏	15. 100	工藤彦一郎	青森人名大事典218頁
12	下山形村熊沢氏	77	熊澤慶次郎	青森人名大事典225頁
13	弘前 今氏	44	今敬一?	
14	弘前 佐藤部	8. 12. 16. 31. 35. 36. 38. 47. 60. 64	佐藤部	青森人名大事典291頁
15	弘前 下沢保躬	59	下沢保躬	青森人名大事典303頁
16	相内村 庄司	93		
17	獨狐村 庄三郎氏	107		
18	弘前 神	7. 96	神 宇吉?	
19	弘前 大道寺氏	29		
20	弘前 都賀	11. 27. 95	都賀一学	
21	青森造道二国地主	75	二国地主	
22	館岡野呂氏	28. 32		
23	亀ヶ岡村 野呂氏	10. 94	野呂武左エ門	青森人名大事典533頁
24	追良瀬村 長谷庄三郎	43		
25	弘前 魯仙翁	49	平尾魯仙	青森人名大事典560頁
26	本口村 林松順郎	4	林松順郎	
27	館岡村 前田氏	9. 40		
28	木造 松木七右衛門	41. 101	松木七右衛門	
29	養虫山人	1. 14. 17 ~ 25. 37. 39. 46. 53. 56. 57. 61. 62. 72. 81~92. 104	養虫山人	
30	五所川原毛内治兵衛	68	毛内治兵衛	
31	蓬村 與三郎	105		
1	岩木山神社	103	弘前市	
2	深浦圓覚寺	50. 55	深浦町	
3	下北郡河内村憶念寺	69	むつ市	
4	高杉村加茂神社	48	弘前市	
5	五本松村加茂神社	71		
6	十腰内村巖鬼山神社	76		
7	弘前縣社熊野宮	45	弘前市	
8	浪岡玄德寺	98	青森市	
9	湯船村高倉神社	79		
10	北中野村天皇社蔵	26. 78	宮司. 有馬千足	
11	大畑村八幡宮	33		
12	種里村八幡宮	63. 73. 74. 70		
13	相澤村八幡宮社	6		
14	廣舟村廣船社	70	宮司. 石山直世	
15	佐井村矢ノ根八幡宮	110. 102.		
参考 古陶図(長母寺所蔵)に記載された所有者のうち阿部・木村両屏風のものとは重複しないもの				
	鯨ヶ沢永昌寺			
	五所川原三上元章			

第4表 「陸奥全国神代石古陶之図」の遺物の所蔵者

後に再び集めた資料は、現在、青森市の成田コレクションに収蔵されている。本格的な研究者であるが、研究の対象は次第に植物学のほうに移ってしまう。

工藤彦一郎も人類学会に入会し、工藤祐龍の号で投稿する人物である。後の田舎館式土器の発見者としても知られている。平尾魯仙は国学者・絵師であり、彼の著した『合浦奇談』や『谷の響き』には考古資料が散見する。阿部文助は浪岡八幡宮の宮司で、野沢野村の木村又一とともに蓑虫と親しくつきあい、二人とも「陸奥全国神代石古陶之図」を描いてもらっている。これがここで紹介している阿部屏風と木村屏風に相当する。下沢保躬は国学者・歴史学者で『津軽古今雑記類纂』などの著書がある。彼はこの本のなかで佐藤蓼の人物像を簡単に紹介している（下沢1884）。

青森の浅田萬兵衛、弘前の長利仲聴、弘前の都賀一学、青森の三国地主、追良瀬村の長谷庄三郎、本口村の林松順郎、木造の松木七右衛門、五所川原の毛内治兵衛などはフルネームが分るにもかかわらず、どんな人物なのか調べることができなかった。やはり地方の知識層・有力者層に属する人たちと思われる。

フルネームを推定できない人々は、姓名あるいは名前だけで通用する地方の有名人であったと思われるが人物像を明らかにすることはできなかった。

なお、参考のため、名古屋の長母寺で所蔵する『古陶図』に書き込まれた出土地・所蔵者について一覧を作成したが（第4表）、阿部屏風・木村屏風のそれと重複しない所蔵者は、鯉ヶ沢の永昌寺と五所川原の三上元章だけであった。

## ○遺物の行方

「陸奥全国神代石古陶之図」に描かれた遺物は、現在どこにあるのであろうか。佐藤蓼が明治年間に集めたコレクションの大部分は久原房之助に譲渡され、その多くは現在、東北大学文学部で保管されている。しかし、蓑虫の絵は写実的でないのでよほど特徴あるものでないと同定できない。したがって同定できたものはごく僅かである。

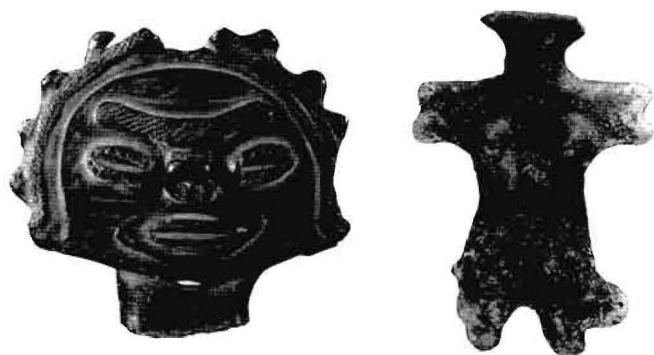
① 37の亀ヶ岡遺跡出土の土偶（蓑虫所有）は、明治14年には館岡村野呂忠吉の所有で、明治14年旧4月に佐藤蓼が写生している（東奥文化の表紙）。その後、高杉村の山谷藤四郎に移り、これを蓑虫が写生している（青森県立郷土館1999）。蓑虫がこの土偶を入手したのはその後である。現在の所在は不明。

② 36の亀ヶ岡遺跡出土の土偶（佐藤蓼所有）は、もと高杉村の山谷藤四郎の所有であり、これを蓑虫が写生している

（青森県立郷土館1999）。その後、佐藤蓼の所有となる。さらに佐藤蓼から久原房之助に譲渡され、現在は東北大学文学部保管の久原コレクションに含まれている（第2図参照、東北大学文学部1982）。

③ 38の土偶（佐藤蓼所有）は、出土地の記載はない。佐藤蓼から久原房之助に譲渡されたため、現在は東北大学文学部保管の久原コレクションに含まれている（東北大学文学部1982）。

④ 16の亀ヶ岡遺跡出土の短頸壺（佐藤蓼所有）は、若林勝邦が陸奥亀ヶ岡から発見された「十孔貝塚土器」（佐藤蓼所有）として東京人類学会雑誌に報告した短頸壺と同一であろう（若林1892）。蓑虫の絵と若林の絵では体部中央の三角形の無文の部分の大きさが違うように描かれているが、類例が数少ないものであること、所有者がともに佐藤蓼となっていること、形・文様の内容・文様の構図が



36の土偶 現高8.3cm    38の土偶 現高11.3cm  
第2図

よく似ていること、短い頸部に10個ほどの孔が描かれていることなどが共通しており、同一の土器と考えてよい。この土器も佐藤薮から久原房之助に譲渡され、杉山寿栄男が『原始文様集』に神戸の久原房之助所蔵、陸奥国中津軽郡裾野村十面澤発見の壺として大きな写真をのせるが、出土地は亀ヶ岡遺跡の方が正しい。この壺は神戸に久原コレクションがあった段階で姿を消したものの1つで、東北大学の久原コレクションには入っていない。現在の所在は不明である。

⑤ 26の大型壺と78の獅子頭・石像は、『弘前藩庁日記』の安政6年（1859年）7月11日の条に、「浪岡組中野村社司、有馬伊予ヨリ別紙申出 --- 神像并獅子頭土器共差出候」の記事にあらわれたものと同一のものと考えられている。この大型壺と獅子頭は、現在、青森市浪岡の広峰神社（旧・北中野の天王社）に現存する。土器の中には「南津軽郡五郷村大字北中野字天王（俗名雀倉）御廟館ヨリ発掘（萬延元年三月八日）山田権太ノ二男與兵衛発見大瓶（高サ四尺余胴ノ回五尺余）」が入っており、獅子頭にも万延元年（1860年）に御廟館（雀倉）から出土した旨の付箋がついている（佐藤2000）。藩庁日記と書き付け・付箋とでは、なぜか発見年が1年ずれている。土器は絵に描かれているような完全な形の大型壺ではなく、胴部を中心とした大きな破片である。蓑虫は破片を見て完全な形に描いたのか、あるいは完形であったものが描いた後に割れたかのどちらかであろう。葛西は前者と想定する。しかし蓑虫は破損している土器をそのまま描いているものが多いので、後者の可能性の方が高い。描かれた大型壺は型式学的にみて形態に疑問があるが、これは彼の画風のためで、決して正確に描かれたものでないからである。なおこの土器は後期初頭のもので土器棺として使用されたものである（葛西2001）。獅子頭は石製で数少ない資料であり、なんの目的でいつごろ製作されたのかも不明である。

⑥ 103の岩木山で発見された石櫃（岩木山神社蔵）は、現在も岩木山神社の宝物庫に保管されている。蓋身あわせて高さ61cm、重さ35kgの頑丈なものである。文久元年（1861年）に下居宮普請の地均し工事で出土したもので、身と蓋は2軒ほど離れていたというから、蓋があげられた状態で発見されたのであろう。中には何もなかった。この石櫃は、発見当時、百澤寺光明院縁起に「昔鬼人退治の節90歳の老鬼女強いて降らんと乞う故に山神給仕の眷属となって此山を擁護すべし即ち誓文を書かしめ手形を取り赤倉に住わしめ云々、右証文当山霊物なり箱を開けば不時風雨を発す度々怪変あり。故に石櫃に納め土中丈底に埋む今其所を失う」とある石櫃と考えられたようである（成田1968）。おもしろい伝承であるが、発見された石櫃がそれに相当するものである証拠はなく、何に使用されたのかは不明である。

以上、調べたように「陸奥全国神代石古陶之図」に描かれた出土品110点のうち、現在所在が分るものは亀ヶ岡遺跡の土偶、屏風館の土器・獅子頭、岩木山神社の石櫃の僅か3点である。多くの遺物は散逸したと見られる。

#### ○ 明治13年の青森新聞の第二回弘前博覧会縦覧の記

明治13年8月11日から25日までの予定で弘前の下白銀町にあった東奥義塾で第二回弘前博覧会が行われた。大分盛況で、とくに19日から25日までは1日に2000人近くが入場したので、会期をさらに13日間延長したという。青森新聞に掲載された「明治十三年第二回弘前博覧会列品目録」には陳列された品目と出品者名が詳細に書いてある。この「列品目録」から考古学に関係ありそうな部分を抜き出すと次のようになる。

「矢鏃石山田浩蔵、矢鏃石神字作」（257号）

「曲玉長内助吉、天ノ磐笛吉田源左衛門 --- 陽石竹内藤一郎、陽石誓願寺」（258号）

「鎗穂並鍔金物藤崎村ヨリ掘出白崎太一郎 --- 棒石長内治兵衛 --- 長圓形石櫃百澤元宮ヨリ掘出岩木山神社寶蔵 --- 石像人像浪岡字御廟館ヨリ掘出、同獅子頭全、瓶碎片有馬千足、金物全陵ノ森ヨリ掘出ス、茶臼碎片北畠古城跡ヨリ掘出ス、瓶碎片陵ノ森ヨリ掘出平野清助、香炉亀ヶ岡掘出土器

泉光院、土器亀ヶ岡掘出薄田貞一、土器亀ヶ岡掘出神宇作、同々棟方覚爾、同々長尾助一郎、同々今敬一、同々竹内藤次郎、同々小山内助吉、同々山田浩蔵、同々笠原是三郎 ---- 皿石岩淵彦五郎 ---- 武蔵大森古物編東奥義塾、---- 皿石高館山麓松嶋鉄太郎、雷斧石山田洪蔵、同木村繁四郎、同小栗山福蔵、同神宇作、同佐藤喜一郎、」(262号)。

	出品者	列品名	備考
1	岩淵彦五郎	皿石	石皿か
2	長内治兵衛	棒石	石棒か
3	長内（小山内）助吉	曲玉・土器亀ヶ岡掘出	
4	小栗山福蔵	雷斧石	
5	笠原是三郎	土器亀ヶ岡掘出	
6	木村繁四郎	雷斧石	
7	佐藤喜一郎	雷斧石	
8	白崎太郎	鎗穂並鍔金物藤崎村ヨリ掘出	
9	神宇作	矢鏃石・土器亀ヶ岡掘出・雷斧石	
10	今敬一	土器亀ヶ岡掘出	
11	薄田貞一	土器亀ヶ岡掘出	自由民権運動家⇨『新編弘前市史 通史編4』
12	竹内藤一郎	陽石	考古資料かどうかは不明
13	竹内藤次郎	土器亀ヶ岡掘出	
14	長尾助一郎	土器亀ヶ岡掘出	
15	平野清助	金物全陵ノ森ヨリ掘出ス・茶臼碎片北畠古城跡ヨリ掘出ス・瓶碎片陵ノ森ヨリ掘出	
16	松嶋鉄太郎	皿石高館山麓	石皿か
17	棟方覚爾	土器亀ヶ岡掘出	
18	山田浩蔵（洪蔵）	土器亀ヶ岡掘出・矢鏃石・雷斧石	実業家、津軽塗中興の功労者⇨『新編弘前市史 通史編4』
19	吉田源左衛門	天ノ磬笛	考古資料かどうかは不明
20	岩木山神社	長圓形石櫃百澤元宮ヨリ掘出	蓑虫の阿部・木村屏風に絵あり
21	誓願寺	陽石	考古資料かどうかは不明
22	泉光院	香炉亀ヶ岡掘出土器	
23	有馬千足 （天皇社の官司）	石像人像浪岡字御廟館ヨリ掘出、同獅子頭全。瓶碎片	蓑虫の阿部・木村屏風に絵あり
24	東奥義塾	武蔵大森古物編	

第5表 第2回弘前博覧会の遺物出品者

これによると、19名の個人や5カ所の寺社・学校から実にさまざまな遺物が出品されていることが分る（第5表を参照）。明治前・中葉における津軽地方の遺物所蔵者は、蓑虫の阿部屏風・木村屏風と第二回弘前博覧会の記事をあわせると、実に70名（寺社を含める）に達する。津軽地方の知識人・有力者の間で土器・石器を集めることが、このころ大流行していたとしか思えない。また亀ヶ岡遺跡で発掘された土器の類が広く愛好者のあいだに出回っていることも驚きである。蓑虫が津軽地方の所蔵者を訪ね歩き、遺物を集めたり、斡旋したり、スケッチして作品として残したりしたことは、当時の津軽のこうした風潮と密接な関係があるのであろう。こうした風潮は、資料の収集の段階である勃興期の考古学・人類学にとって、きわめて具合のよいものであった。

「列品目録」にはもっと興味深いものがあつた。それは『武蔵大森古物編』である。明治12年に東



京大学から出版された大森貝塚の報告書である『大森介壙古物編』であろう。これが東奥義塾から出品されていたのである。東奥義塾では、博覧書院といういわゆる図書館を設置して、有料で一般にも公開した。津軽の人々は、お金を払えば誰でも出版されたばかりの『大森介壙古物編』をみることができたのである。東奥義塾に出版されたばかりの『大森介壙古物編』があるのは、東奥義塾で教師をしていた岩川友太郎が上京し、モースの学生として、東京大学理学部生物学科に属していたからであろう。岩川自身が母校に贈ったものかもしれない。明治の津軽地方は、東奥義塾を中心に、新しい学問の吸収に熱心な土地柄であったことを、第二回弘前博覧会の記事からも知ることができる。

## ○ まとめ

① 津軽地方の明治時代の前・中葉の考古学史は興味深いものがある。その事情を調べる主要な史料として、これまでは明治19年から刊行された東京人類学会雑誌が用いられることが多かったが、蓑虫山人が残した絵画資料や青森新聞の第二回弘前博覧会の記事も重要である。とくに第二回弘前博覧会の記事は、これまで注目されることがなかったが、博覧会の雰囲気や多岐にわたる出品物・出品者の名前や活動などがよくわかり、東奥義塾を中心とした弘前地方の進歩的な様子を伝える重要なものである。

② 明治13年8月、弘前の下白銀町にあった東奥義塾で第二回弘前博覧会が行われた。青森新聞に掲載された記事や博覧会列品目録を見ると、考古資料の出品者は19名、それに4カ所の寺社・学校が加わる。東奥義塾は、東京大学から出版されたばかりの大森貝塚の報告書『大森介壙古物編』を出品している。

蓑虫山人が残した絵画資料からも明治10年代の弘前地方の考古学事情がみえてくる。阿部家・木村家で所蔵する「陸奥全国神代石古陶之図」だけでも、出土品が110点描かれており、所蔵者名は個人が31名、寺社が15カ所書き込まれている。

③ 青森新聞の第二回弘前博覧会列品目録と蓑虫が描いた「陸奥全国神代石古陶之図」をあわせると、明治10年代、津軽地方を中心に考古資料の蒐集家（少なくとも所蔵者）が、実に60名（寺社を含める）以上いたことがわかる。当時、この地方の知識人・有力者の間で考古資料を集めることが大流行していたとしか思えない。

④ 明治17年に人類学会が創設され、機関紙『東京人類学会雑誌』（はじめは『人類学会報告』）が発行されると、全国的に石器時代に関する興味が急激に高まった。古くから考古資料の蒐集家が存在していた津軽地方の遺物は、資料紹介・論文の形で『東京人類学会雑誌』に多数掲載されるようになり、その大半の出土品として亀ヶ岡遺跡が注目されるようになる。東京大学人類学教室でも、亀ヶ岡遺跡を発掘し、遺跡や出土品について報告し、亀ヶ岡遺跡の名をさらに高める。これを見ると、亀ヶ岡遺跡など津軽地方で出土した遺物が日本における考古学・人類学の勃興期において、石器時代研究の発展にいかにかつ寄与したかが分かる。青森県では、佐藤蔭・安田雄吉・工藤祐龍・広沢安任・外崎寛などが発足したばかりの人類学会に入会し、発掘報告・資料紹介・論文などを投稿するとともに、中央からやってくる研究者の協力者になり、学界のために活躍する。安田雄吉は古物業を営むが、他のものは地方の有力な政治家・経済人・文化人である。外崎寛（工藤覚蔵）は東奥義塾の生徒（12才）であった明治8年に板垣退助・後藤象二郎らの民撰議員設立建白書提出に刺激され、「君民共治の立憲制度」を要望する建言書を提出した人物という（『新編 弘前市史』編纂委員会2005）。古物に興味を抱いた人々のなかに、このような進歩的な人物が含まれているとは驚きである。

⑤ モースが大森貝塚で日本初の学術的発掘調査をおこなったところ、津軽地方には考古資料に興味をもち、それを収集する人々が沢山いた。明治12年に刊行された『大森介壙古物編』は、少なくとも明治13年には津軽の東奥義塾に届いていた。東奥義塾では、博覧書院といういわゆる図書館を設置して、

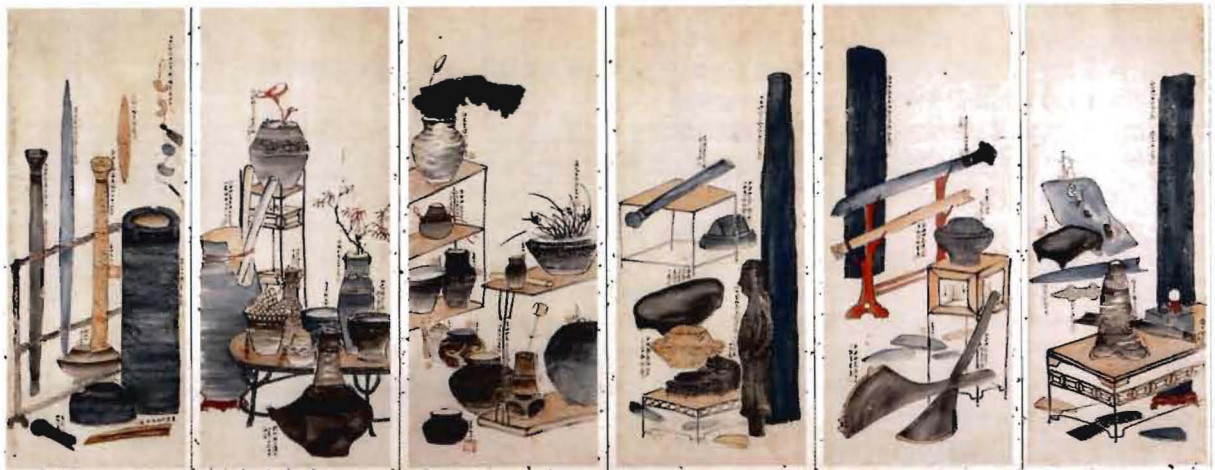
有料で一般にも蔵書を公開しているので、津軽の人々は、お金を払えば誰でも出版されたばかりの『大森介壺古物編』をみることができたのである。東奥義塾出身の岩川友太郎が東京大学のモースのもとで貝類の研究を行っているので、東京からの新しい情報が入って来たのであろう。このころの津軽地方はキリスト教の伝導・自由民権運動などが盛んであった東奥義塾を中心に進歩的・開明的雰囲気には溢れていた。こうした雰囲気の中、地元で豊富にある考古資料をつかって日本の石器時代を考える、ということに関心をもつ人々が増えていったのである。考古学資料を集めたり、関心を持ったりすることは津軽地方の有力者のステータスシンボルとして流行したのかもしれない。

#### 【引用・参考文献】

- 青森県人名大事典編さん室（1968年）『青森県人名大事典』、東奥日報社。
- 青森県立郷土館（1984年）『蓑虫山人－青森県立郷土館特別展図録』。
- 青森県立郷土館（1999年）『描かれた青森』。
- 安藤直太郎（1949年）「蓑虫山人論」『郷土文化』4－2。
- 太田三郎（1949年）「蓑虫山人（上）」『郷土文化』2－4。
- 太田三郎（1949年）「土岐蓑虫伝」『郷土文化』4－2。
- 葛西 勲（2001年）「浪岡町廣峯神社所蔵の縄文土器について」研究紀要4、青森大学考古学研究所。
- 神田孝平（1887年）「奥羽巡回報告」東京人類学会雑誌2－11。
- 神田孝平（1887年）「瓶ヶ岡上偶図解」東京人類学会雑誌3－21号。
- 神田孝平（1887年）「陸奥瓶岡ニテ未曾有ノ発見津軽ノ蓑虫翁の手東」人類学会報告2－16。
- 清野謙次（1954年）『日本考古学・人類学史』、岩波書店。
- 斎藤 忠（2006年）「蓑虫山人」『日本考古学人物事典』、学生社。
- 佐藤 節（1887年）「瓦偶人の図」（巻末石版図）東京人類学会雑誌3－21。
- 佐藤伝蔵（1896年）「陸奥亀ヶ岡発掘報告」東京人類学会雑誌11－118。
- 佐藤伝蔵（1896年）「陸奥亀ヶ岡第2回発掘報告」東京人類学会雑誌11－124。
- 佐藤伝蔵（1896年）「陸奥亀ヶ岡第2回発掘報告（続）」東京人類学会雑誌11－125。
- 佐藤伝蔵（1896年）「陸奥亀ヶ岡石器時代遺跡地勢地質及び発見品」東京地学協会報告第18年第2号。
- 佐藤 仁（2000年）「町史研究余録63」広報なみおか平成12年9月号。
- 下沢保躬（1884年）『津軽古今雑記類纂』。
- 「新編 弘前市史」編纂委員会（2005年）『通史編4（近・現代1）』、弘前市企画部企画課。
- 杉山莊平（1967年）「蓑虫仙人小伝」物質文化10、物質文化研究会。
- 東奥日報社記者編（1949年）「座談会蓑虫山人の逸話」月刊東奥11－10。
- 東北大学文学部（1982年）『東北大学文学部考古学資料図録』。
- 中村良之進（1930年）「奇人土岐蓑虫の小伝」陸奥考古3。
- 中谷治宇二郎（1935年）『日本先史学序史』岩波書店。
- 成田彦栄（1949年）「蓑虫山人と考古学」郷土文化4－2。
- 成田彦栄（1944年）「故 佐藤翁」月刊東奥6－8。
- 成田末五郎（1968年）「岩木山神社元宮址」『岩木山』、岩木山刊行会。
- 村越 潔（2007年）『青森県の考古学史－先覚者の足跡を尋ねて』、弘前大学教育学部考古学OB会。
- 山本時男（1949年）「蓑虫山人の東北漫遊」郷土文化4－2。
- 若林勝邦（1889年）「陸奥亀岡探究記」東京学芸雑誌97。
- 若林勝邦（1892年）「六孔又ハ十孔ヲ有スル貝塚土器」東京人類学会雑誌78。



阿部屏風 (右)



阿部屏風 (左)



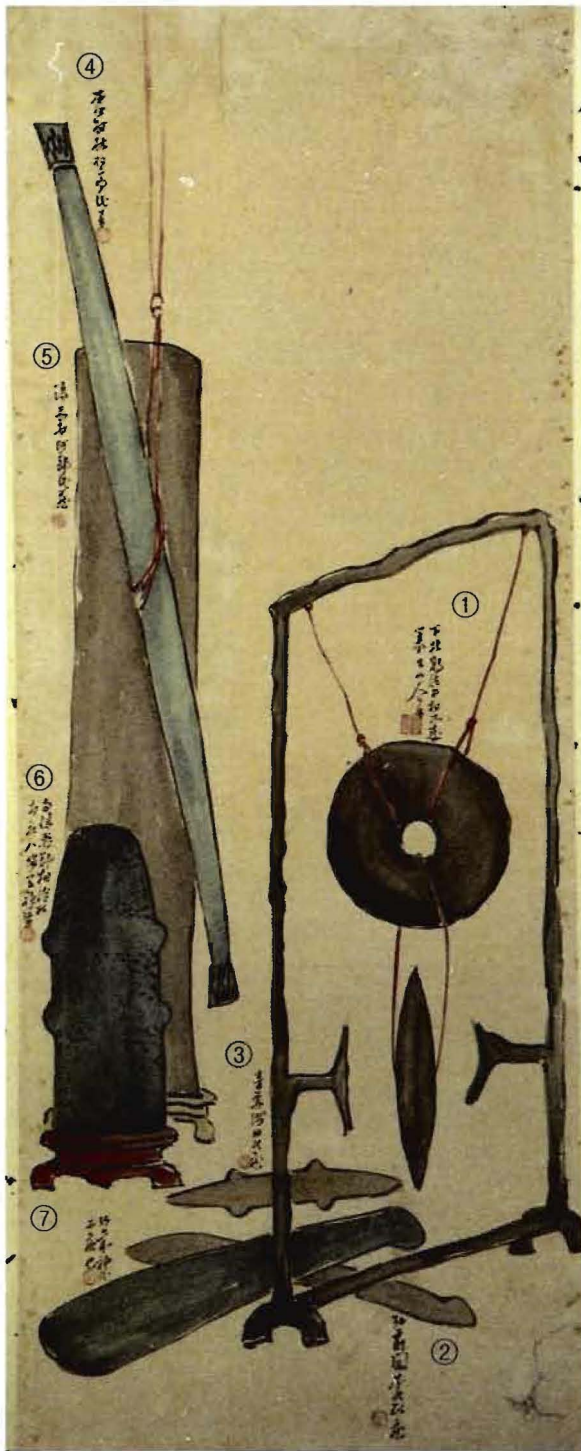
木村屏風 (右)



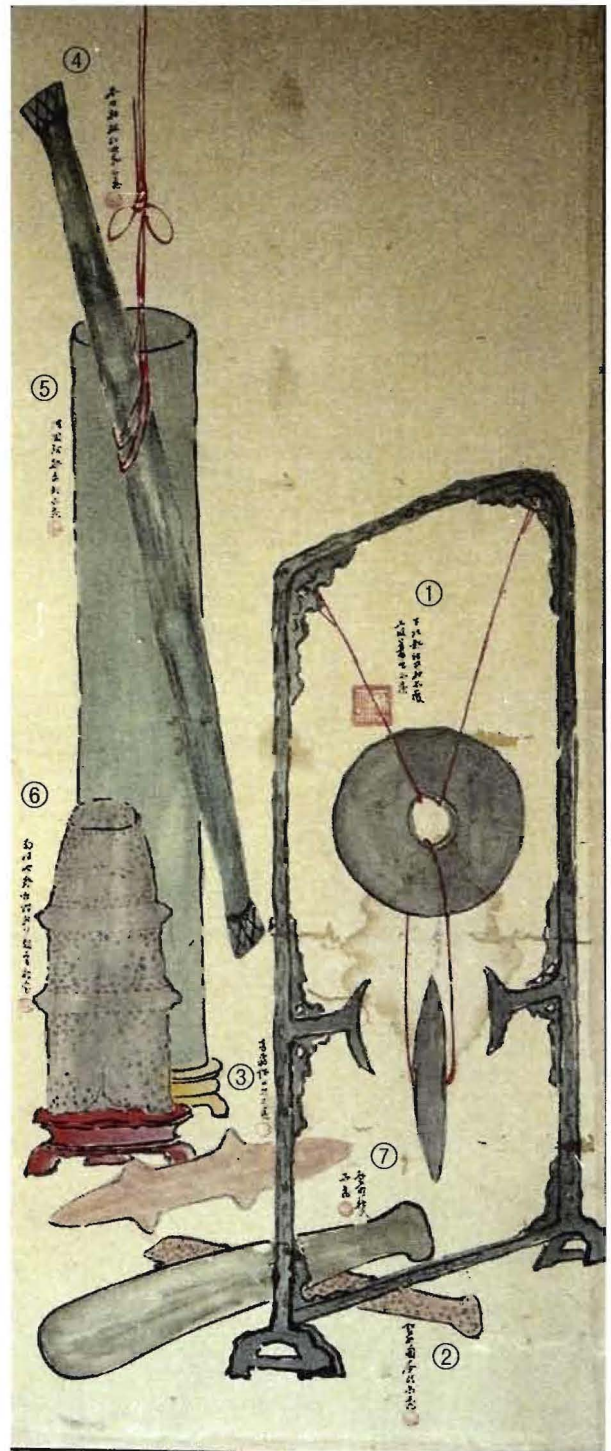
木村屏風 (左)

第3図 「陸奥全国神代石古陶之図」 (阿部屏風・木村屏風)





阿部屏風 1



木村屏風 1

第4図 「陸奥全国神代石古陶之図」部分（1）





阿部屏風2



木村屏風2

第5図 「陸奥全国神代石古陶之図」部分(2)





阿部屏風3



木村屏風3

第6図 「陸奥全国神代石古陶之図」 部分 (3)





阿部屏風 4



木村屏風 4

第7図 「陸奥全国神代石古陶之図」部分(4)





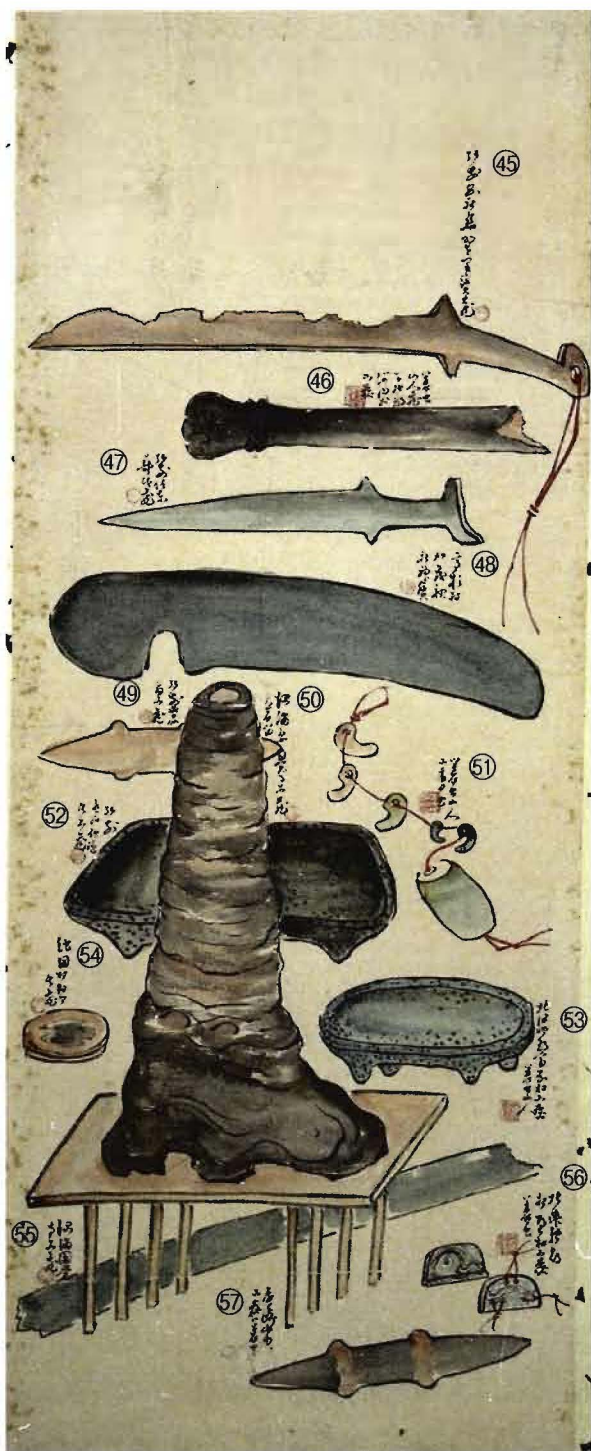
阿部屏風 5



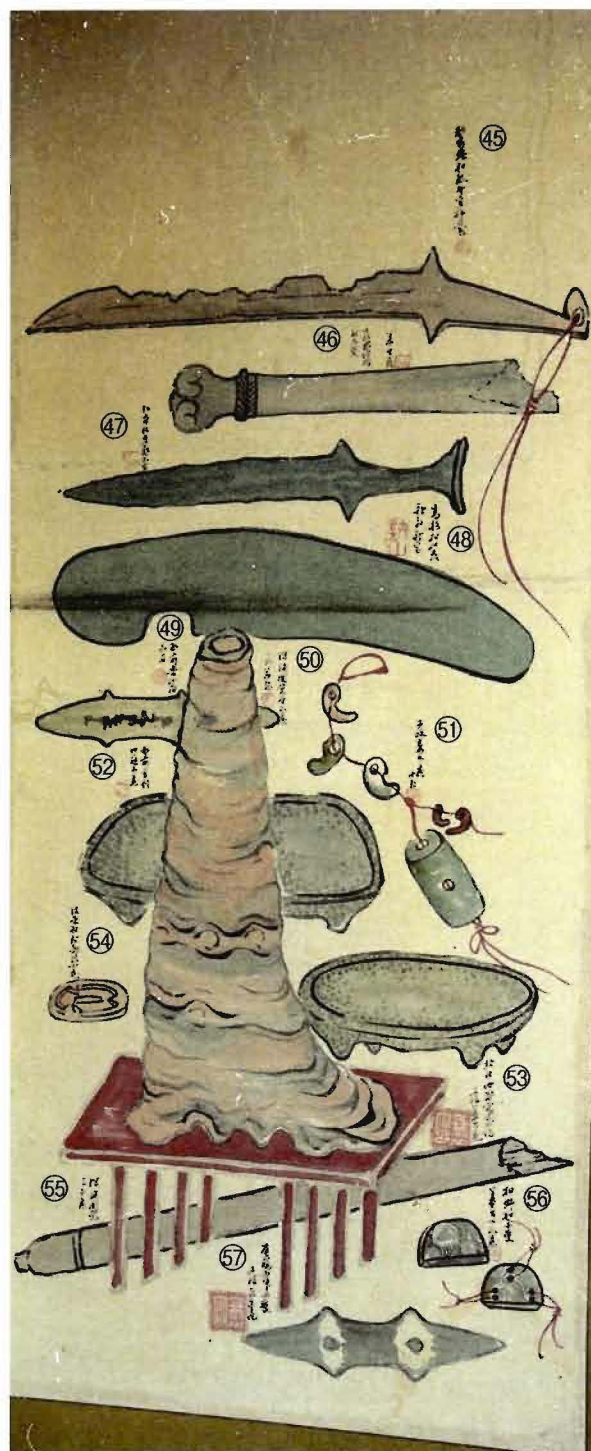
木村屏風 5

第 8 図 「陸奥全国神代石古陶之図」 部分 (5)





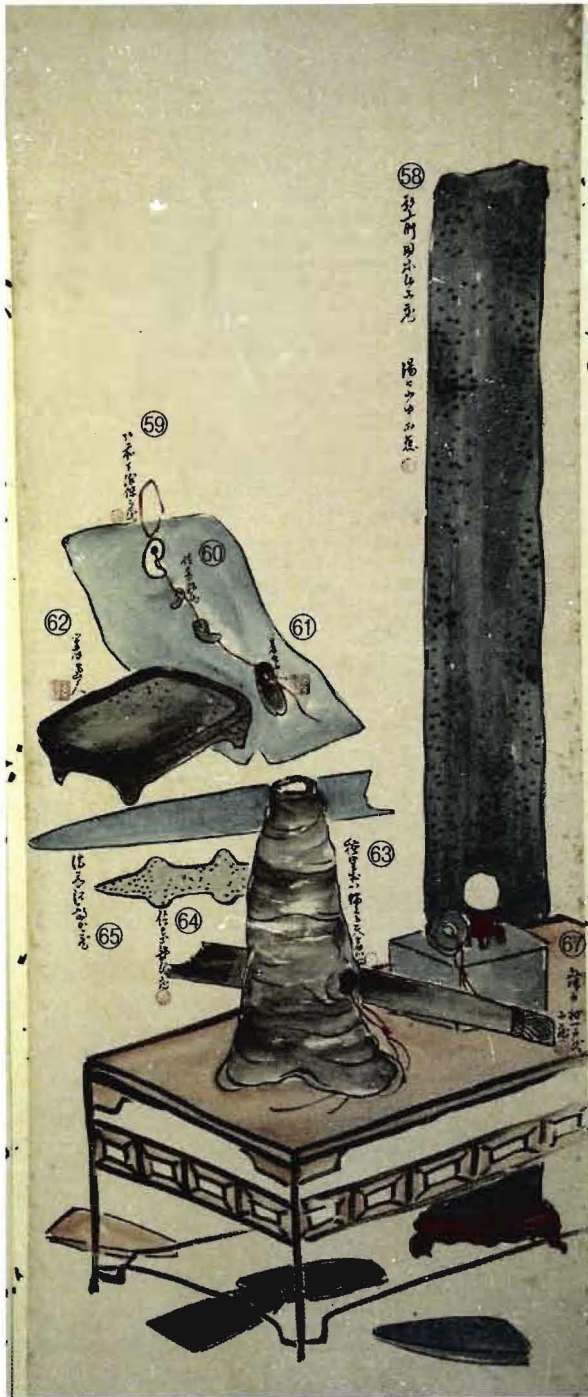
阿部屏風6



木村屏風6

第9図 「陸奥全国神代石古陶之図」部分(6)





阿部屏風 7



木村屏風 7

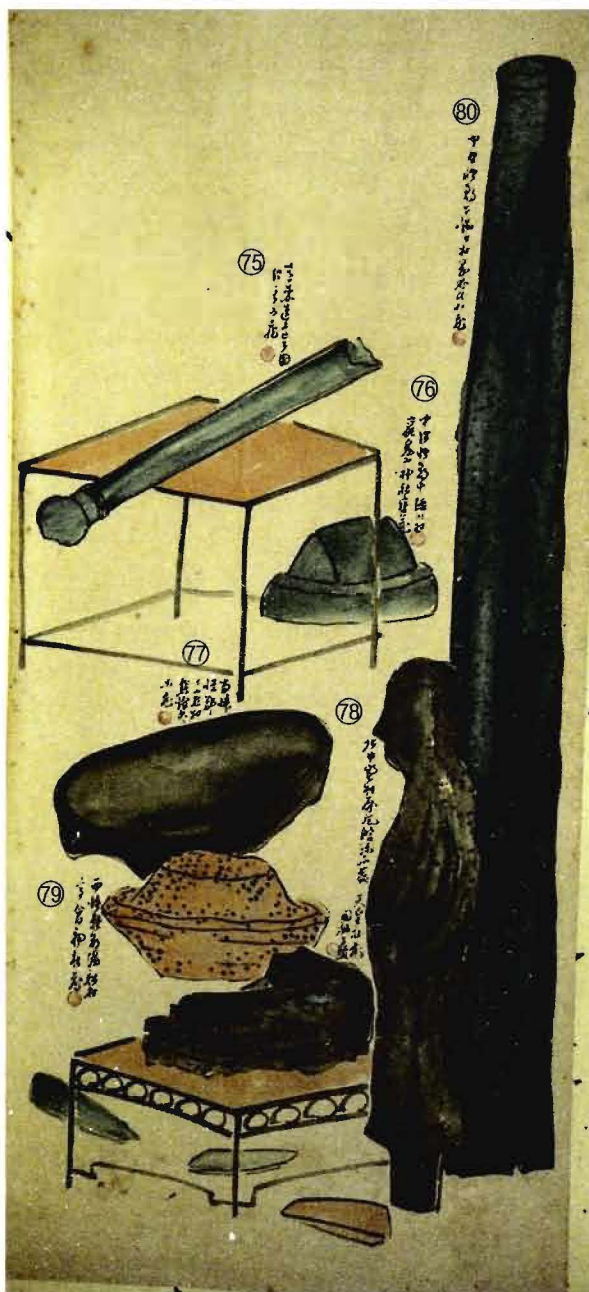




阿部屏風 8



木村屏風 8



阿部屏風 9



木村屏風 9





阿部屏風10



木村屏風10





阿部屏風.11



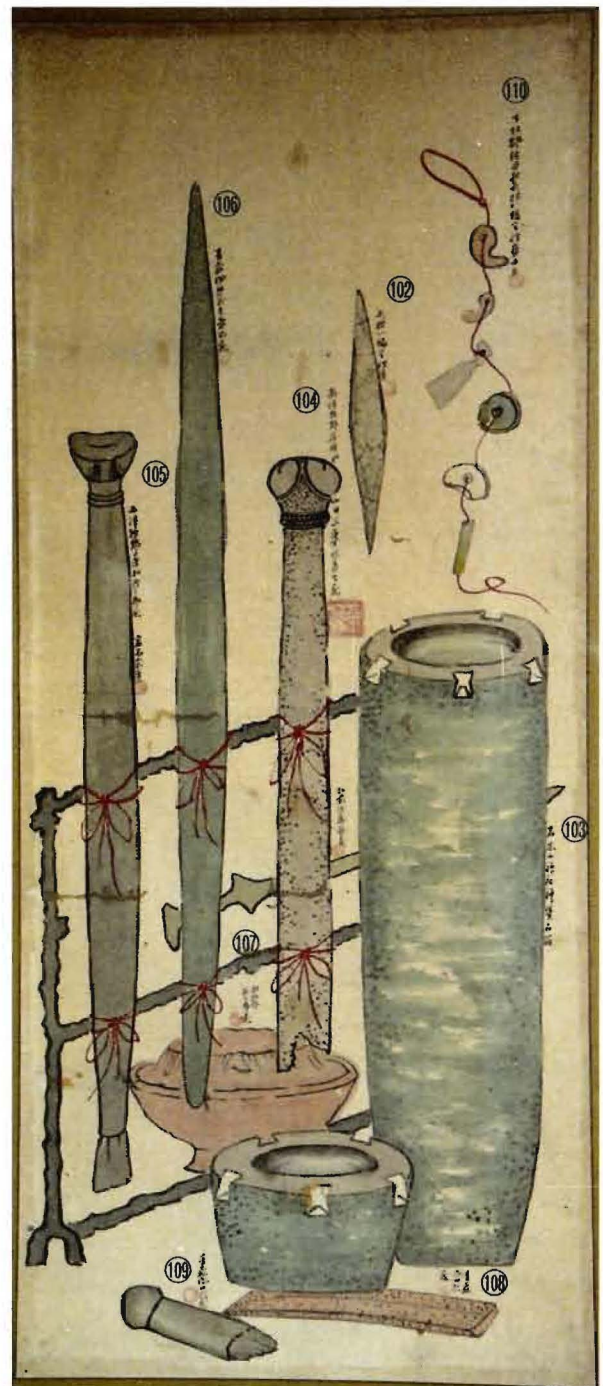
木村屏風.11

第14図 「陸奥全国神代石古陶之図」 部分 (11)





阿部屏風12



木村屏風12

第15図 「陸奥全国神代石古陶之図」 部分 (12)

(はじめに)

馬淵川流域は、古くから亀ヶ岡文化に伴う岩偶が多く発見される地域として知られている。2006年に弘前大学日本考古学研究室が発掘調査を行った青森県三戸町杉沢遺跡でも、大洞C1式に伴う岩偶が1点出土している(藤沼・秋山ほか2008)。晩期の岩偶については、江坂や稲野、渡辺らによって研究されてきた(江坂1960、稲野1983、渡辺1997)。そのため、ここでは稲野・渡辺両氏らの優れた先行研究を参考として論を進めたい。晩期の岩偶については、実測図化されていないものも多いため、研究を行う上で不便であった。そのため今回は、青森県八戸市是川中居遺跡の大型岩偶や七戸町道地遺跡の岩偶を資料化し、それを報告するとともに晩期の岩偶の集成を試み、分布・特徴などについて検討してみたい。

① 是川中居遺跡の岩偶(第1図)

35は、胸部から腰部にかけての大型の破片で、左脇・腰の一部が残存し、頭部・腕部・脚部・乳房が欠損する。現高は17.6cmで、横幅16.7cm、厚さ4.6cmとなる。

乳房は破損しているが、脇の部分に左乳房と思われるふくらみが残存している。胸には正中線で線対称となる平行沈線文が描かれている。沈線文はC字状となり、脇の付近で入り組む。背中では脇の付近をめぐる沈線によって文様が2段に分かれている。上部には、平行沈線文や四角形文が描かれている。文様の全体構成は破損や磨滅のため不明だが、C字状またはS字状の入り組み文、渦巻き文が点対称に配されたのであろう。下部には、横C字文が3単位残存し、その間には点対称の三叉文が配されている。脇の下には、正面から背面にかけて一周する幅の狭い文様帯がめぐり、三叉状の文様が描かれている。この文様は、工字文に見られる一状の文様に近いものである。腰部には沈線の一部が残存している。

表面はよく研磨されている。正面や背面には黄褐色の付着物(Hue10YR5/6、Hue7.5YR4/8)が見られるが、何であるかは分からない。

この岩偶の文様は、青森県五所川原市観音林遺跡の岩偶(3)の文様(藤沼ほか2004)と極めて類似しているので、この二つの岩偶は、型式学的に見て同時期のものといえよう。全体形がわかる観音林遺跡を基に器高を復元すると約44cmとなる(第1図参照)。その大きさは青森県田子町石亀遺跡から出土した大型品(27)とほぼ同程度である。

36は頭部破片である。頭部以下を欠き、頭部も後頭部の大部分が破損している。現高は3.9cmで、横幅4.8cm、厚さ2.4cmとなる。

頭頂部には沈刻によって三角形文が施文される。顔面には沈線によって大きな目と小さな口が表現され、楕円形となる目の中には横線が1条描かれる。口は三角形である。頸の部分には2条の沈線がめぐり、上の沈線は頭頂部の三角形文に接する。胸部に描かれる文様の一部が残存している。後頭部の文様は、破損によって不明だが、残存部から、沈線によって描かれる渦巻文・入組文が描かれていたと考えられる。赤彩の痕跡は見られない。また、全体が磨滅しており、頭頂部の文様も見えにくい。

37は左脚部の破片である。腰の一部が残存しているが、それ以外はすべて欠損している。現高は7.7cmで、横幅4.6cm、厚さ2.3cmとなる。表面はよく研磨されている。

正面には沈線による文様が描かれている。腰・脚部の付け根付近には沈線で区画された中に細かい沈刻が施され、文様の一部は背面にまで達している。膝には沈線によって描かれた三叉文や平行線に



よる入組文が施される。端部には指を意識した刻み目が施される。背面の文様も、正面と類似し、三叉文や沈線によって描かれた渦巻文が施される。また、破損面にはアスファルトが付着しており、欠損した部分を接合したものと考えられる。

## ② 青森県田子町道前遺跡の岩偶（第2図）

青森県立郷土館の大高コレクションに含まれる資料である。

頭部から胴部にかけての破片で、両乳房を持ち、両腕・腰・両脚部が欠損している。現高は7.2cmで、横幅6.7cm、厚さ3.0cmとなる。文様・装飾は、残存部で見ても両乳房や首をまわる2条の沈線のみであり、表面の研磨もあまり見られない。全体的に装飾は少なく、未完成品である可能性が高い。

## ③ 青森県七戸町道地遺跡の岩偶（第2図）

青森県立郷土館で展示している資料である。

頭部のみの破片であるが、顔面や頭頂部・後頭部の造作や文様などがよく残っている貴重な資料である。現高は7.1cmで、横幅6.6cm、厚さ3.8cmとなる。

頭頂部には沈線文と隆帯文・「ノ」の字状の文様が描かれている。沈線は、耳から伸びるように1条の横線を引き、頭頂部の中央からX字状に描いている。沈線によって区画され隆帯となる部分には、点対称に交互に配される「ノ」の字状の文様が描かれる。顔面には、沈線によって眉・大きな目・口が表現されている。眉の上には三角形の彫り込みが施される。楕円形の目には横に走る沈線は描かれない。口の表現は、孔を開け、彫り込みを加え十字形となる。後頭部には縦の平行沈線が描かれ、その間に点対称となる「ノ」の字状の文様が交互に配置される。頭部側面には沈線と「ノ」の字状の文様によって耳が表現されている。頸には襟巻き状の隆帯がめぐり、上下交互に配置された「ノ」の字状やクランク状の文様が並ぶ。表面が研磨されており、文様から見ても装飾化が著しい。赤彩は沈線や彫り込み内に見られ、当時は全面が赤彩されていたと考えられる。

## ④ 五所川原市観音林遺跡の岩偶（第2図）

弘前大学日本考古学研究室研究報告1（藤沼ほか2004）に掲載されている資料であるが、実測図に間違いがあったので修正して掲載した。この岩偶は右肩の裏側が剥落しているが、ほぼ完形品である。器高は12.0cm、横幅は7.3cm、厚さは2.6cmとなる。

頭頂部には沈線によって三角形の彫り込みが施される。顔面には大きな目と小さな口が表現される。目の中には横線が1条描かれる。口は彫り込みによって三角形となる。後頭部には沈線によって渦巻文が描かれる。頸には襟巻き状の隆帯がめぐる。乳房は胸よりも脇下に近いところにある。胸や腕部には平行沈線による入組文が描かれる。正中線は見られないが、文様が両乳房の間で線対称となるため、正中線を意識して描かれたのであろう。背中には沈線によって描かれるC字状の渦巻文や三叉文が施文される。背面の腰には、幅の狭い文様帯内に一状の文様が描かれる。正面の腹から腰にかけては、渦巻文や三叉文が描かれる。その下部には、正面・背面ともに沈線によって区画された四角形文の中に細かな沈刻が施される。脚部には沈線による渦巻文が描かれる。赤彩は沈線や彫り込み内に見られ、当時は全面が赤彩されていたと考えられる。

## ⑤ 晩期に見られる岩偶の出土遺跡とその分布（第3図）

晩期の岩偶で、全体形をうかがうことができる資料は十腰内遺跡・杉沢遺跡・観音林遺跡・向様田A遺跡・根岸遺跡などごく少ない。この代表的な岩偶に類似するものを、東北地方の晩期の岩偶の一般的な形態ととらえ、これを集成すると30遺跡で60個体を数えることができた。

晩期の岩偶の分布を見ると、馬淵川流域に最も多く見られ、中でも馬淵川の支流の一つである熊原川流域にやや密集しているようである。しかし、隣接する新井田川流域では、岩偶の発見例がほとんど見られない。隣接した地域で出土数が違うのは、岩偶を作るのに適した良質の石材の分布と関係するとの考えもある（稲野1983、渡辺1997）。馬淵川流域に次いで、米代川流域や岩木川中流域・北上川上流域でも出土している。米代川流域では、ややまとまって分布しており、石材の原産地や生産地が問題になっているが、まだ議論は活発ではない。またこの地域は個性的な岩偶が出土することでも注目すべきであろう（50・51）。遠く離れた宮城県根岸遺跡でも1個体発見されている（56）が、北東北地方のものにくらべると形態・厚さ・文様・乳房の有無・顔の造作などに違いが認められる。

#### ⑥ まとめ

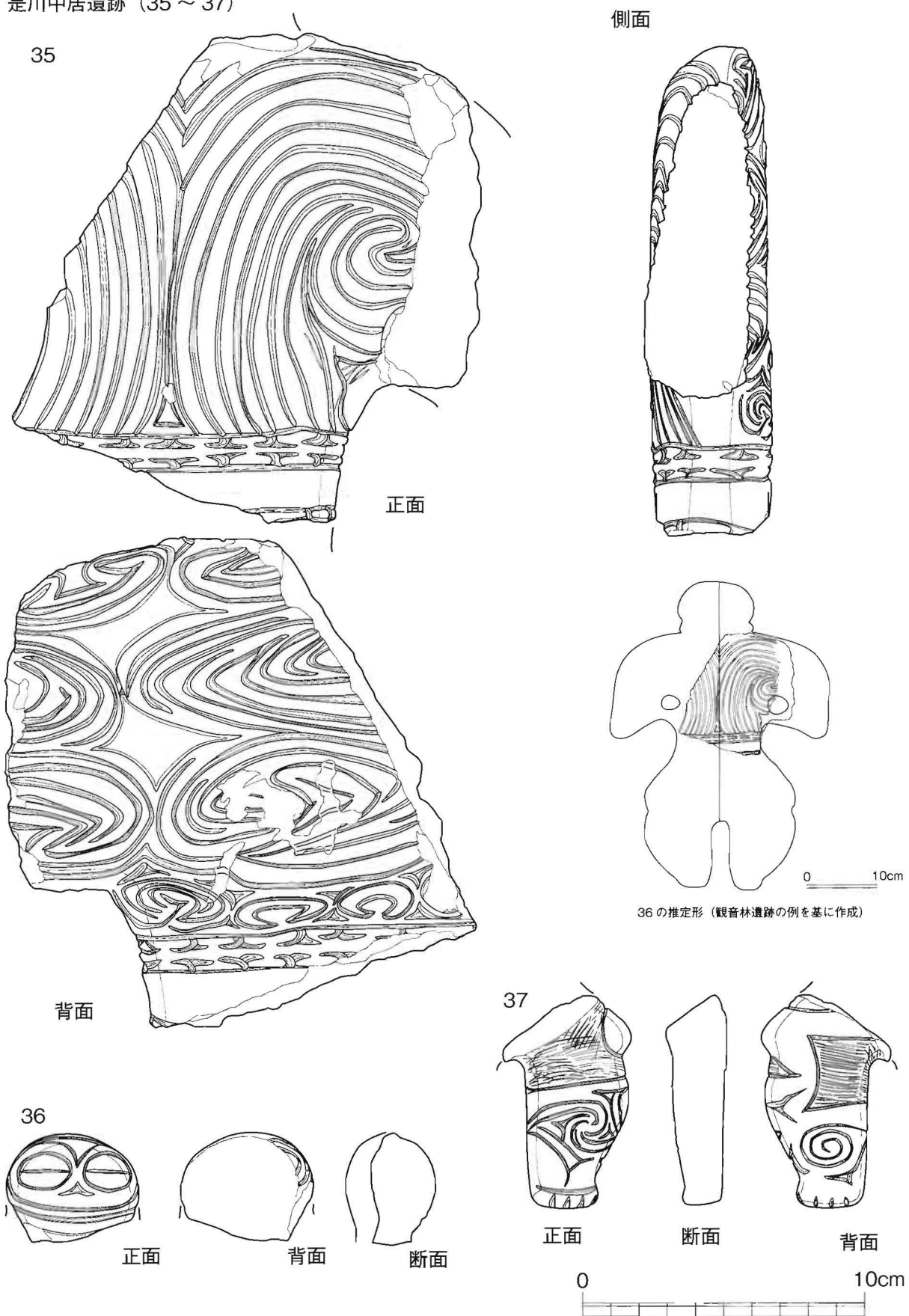
今回、晩期の岩偶について報告されているものすべてを見ることはできなかったが、集成を試み、分布や特徴について検討した。岩偶は、同時期の土偶などと比較してもその個体数が圧倒的に少ない。さらに、破片資料が多く、全体形が判断できる個体はほぼ限られている。また、共伴する土器が不明のものが多いため、岩偶の編年については、土器を用いて行うことは困難である。大洞C1式に相当する9の岩偶を基準として考えると、描かれる文様から型式学的に5→9→3と変遷を辿ることができであろう。頭頂部が加飾されるものは9よりも時期が古く（5・28など）、線対称となる平行沈線文が胸に描かれるものについては、9よりも時期が新しく、大洞C2式期以降となると考えることができそうである（3・35など）。

赤彩は61個体中7個体のものに塗布される。黄褐色の付着物（Hue10YR5/6、Hue7.5YR4/8）が見られるものもある（35）。また、破損部にアスファルトが付着しているものもある（37など）。中には完形となるものもある（52）。岩偶の中には、装飾的な文様の上にさらに赤彩されるものや、破損した後も修復されて使用されたものがあつたと考えることができる。

#### 【引用・参考文献】

- 1901年 大野雲外・松村瞭「陸奥地方旅行見聞録」（1982年 日本人類学会（復刻）『東京人類学会雑誌』第一書房に所収）
- 1960年 江坂輝弥『土偶』
- 1964年 江坂輝弥「岩偶と岩版」『日本原始美術2 土偶・装身具』講談社
- 1969年 大高興『風韻堂収蔵庫縄文文化遺物集成』
- 1969年 サントリー美術館『春の特別展 土偶と土面』
- 1975年 新谷雄蔵『観音林遺跡』五所川原市教育委員会
- 1982年 江坂輝弥「縄文土器文化研究序説」六興出版
- 1983年 稲野裕介「岩偶」『縄文文化の研究9 縄文人の精神文化』雄山閣
- 1983年 江坂輝弥『田子町誌』
- 1984年 十和田市教育委員会『明戸遺跡発掘調査報告書（昭和58年度）』十和田市埋蔵文化財発掘調査報告書3
- 1988年 八戸市教育委員会『八幡遺跡発掘調査報告書』八戸市埋蔵文化財調査報告書第26集
- 1990年 青森県埋蔵文化財調査センター『北の誇り・亀ヶ岡文化』図説ふるさと青森の歴史シリーズ③ 青森県教育委員会
- 1993年 工藤泰博『土井1号遺跡』板柳町教育委員会
- 1993年 工藤竹久『名川町誌』
- 1995年 春日信興『南部町誌 上巻』青森県南部町
- 1995年 高田和徳・中村明央『山井遺跡』一戸町教育委員会
- 1996年 東北歴史資料館『東北地方の土偶』（財）宮城県文化財保護協会
- 1997年 藤沼邦彦『縄文の土偶』歴史発掘③ 講談社
- 1997年 渡辺 誠ほか『青森県石亀遺跡における亀ヶ岡文化の研究』古代学研究所研究報告 第5輯
- 1997年 福田友之・工藤大『馬淵川流域の遺跡調査報告書』青森県立郷土館調査報告書 第40集 考古-11
- 2001年 山口巖『上杉沢遺跡発掘調査報告書』浄法寺町教育委員会
- 2004年 柴田陽一郎・宇田川浩一ほか『向井様田A遺跡 遺物編』秋田県埋蔵文化財調査報告書第370集
- 2006年 藤沼邦彦・小川忠博『ミニ特別展「亀ヶ岡文化の世界」の図録』弘前大学人文学部日本考古学研究室研究報告3
- 2008年 藤沼邦彦・秋山真吾ほか『青森県三戸郡三戸町杉沢遺跡発掘調査報告書—馬淵川流域における亀ヶ岡文化の遺跡—』弘前大学人文学部日本考古学研究室研究報告6

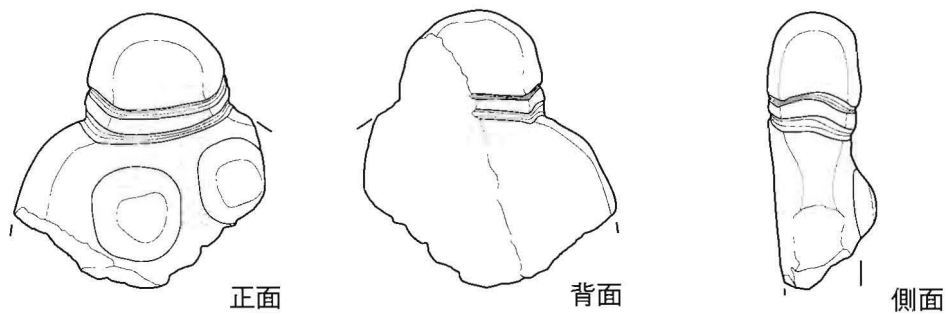
是川中居遺跡 (35 ~ 37)



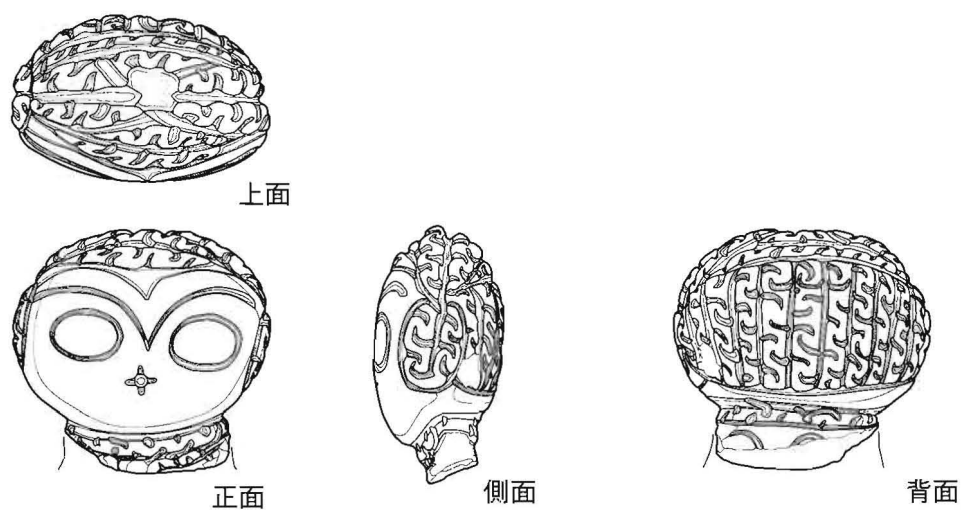
第1図 是川中居遺跡の岩偶



道前遺跡 (16)

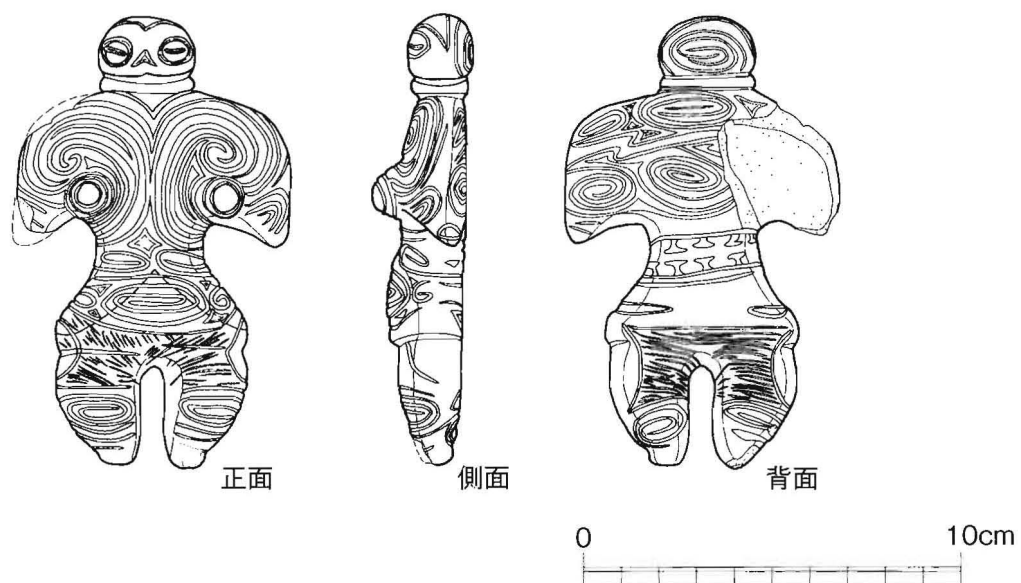


道地遺跡 (5)



観音林遺跡 (3)

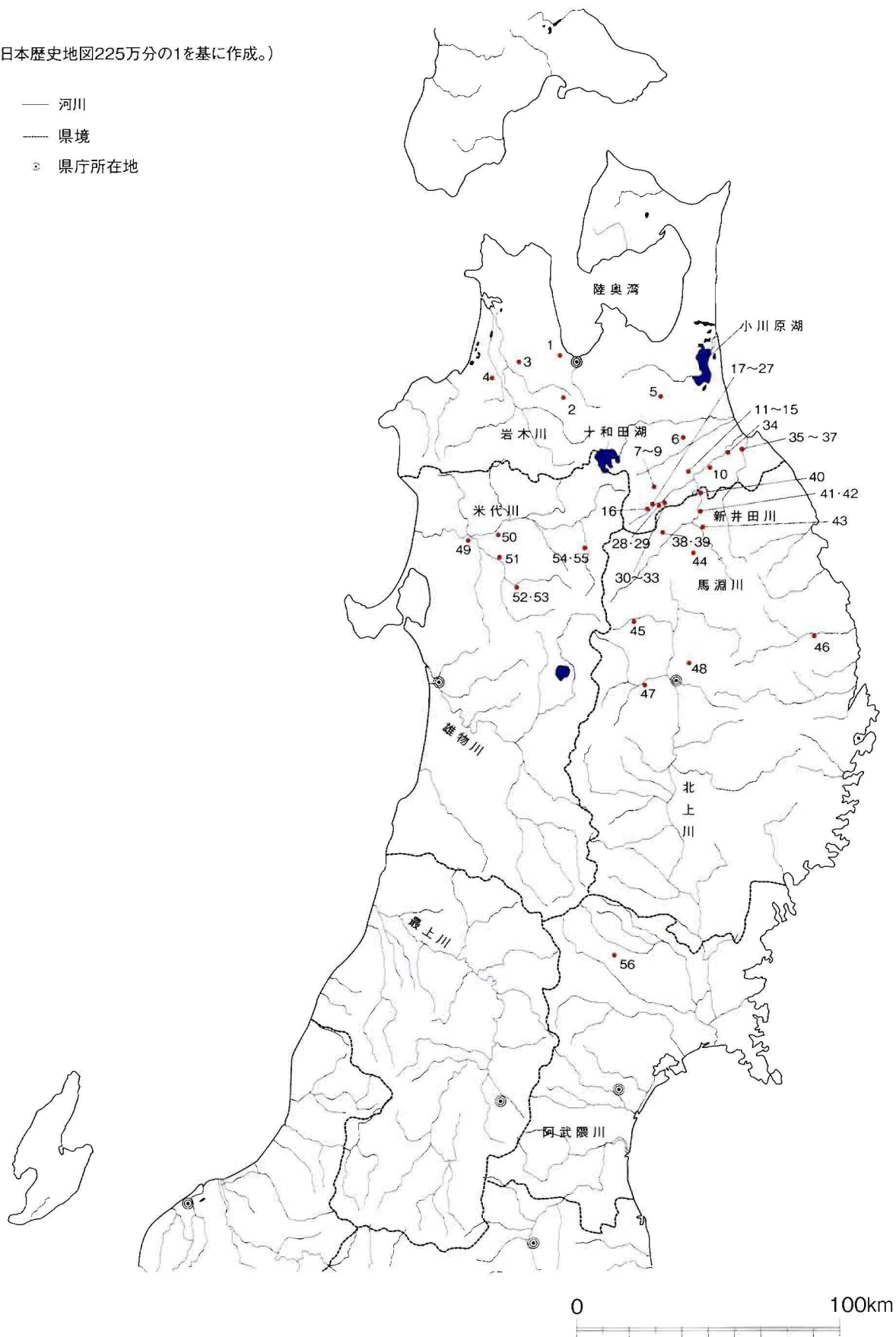
(実測図の一部を修正)



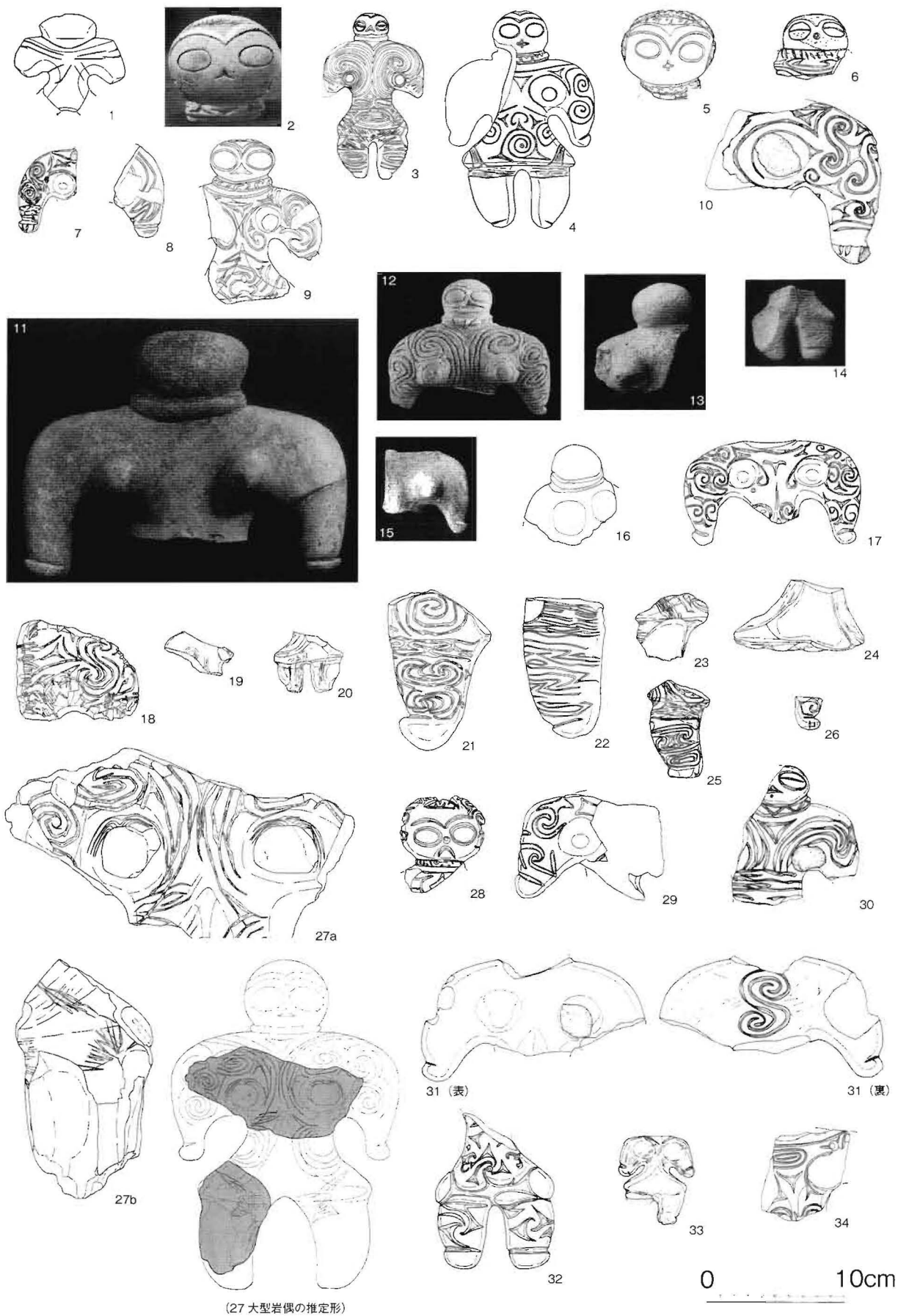
第2図 道前・道地・観音林遺跡の岩偶

(日本歴史地図225万分の1を基に作成。)

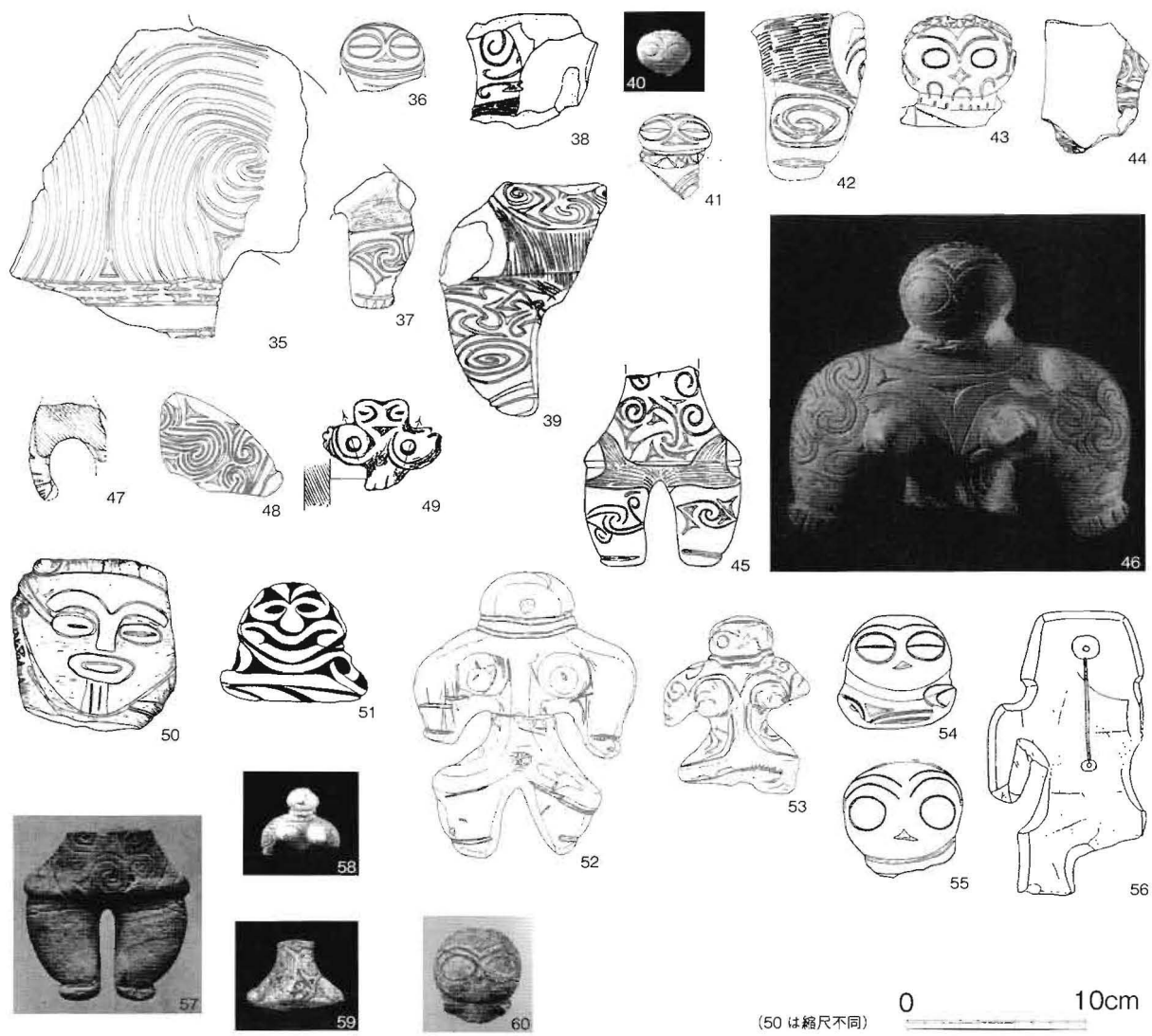
- 河川
- 県境
- ◎ 県庁所在地



第3図 晩期の岩偶出土遺跡分布図



第4図 岩偶集成図1



第5図 岩偶集成図2



県	市町村	遺跡名	遺物 番号	掲載文献	所蔵	備考
青森	青森市	新城岡町	1	江坂1960、青森市2006	慶応大学	無文。脚部欠損。
		細野	2	サントリー1969	早稲田大学	頭部以下欠損。
	五所川原市	観音林	3	新谷1975、藤沼ほか2004	五所川原市歴史民俗資料館	完形に近い。背面の右腕部剥離。
	弘前市	十腰内	4	江坂1960	東京大学総合博物館	完形に近い。右腕部欠損。
	七戸町	道地	5	渡辺1997	青森県立郷土館	頭部以下欠損。個人所蔵。
	十和田市	明戸	6	菅田1984	十和田市郷土館	頭部以下欠損。
	三戸町	杉沢	7	植田・工藤1997	青森県立郷土館	右腕・右腕部欠損。
			8	名久井1971、藤沼ほか2008	三戸町教育委員会	腕部以外欠損。
			9	藤沼ほか2008	弘前大学	右腕・脚部欠損。
	南部町	虚空蔵（平）	10	工藤他1993、福田・工藤1997	青森県立名久井農業高等学校	左腕・左腕部以外欠損。
			11	江坂1960	南山大学人類学博物館	無文。腰部以下欠損。
		鱒沢（小向）	12	渡辺1997	東京国立博物館	腰部以下欠損。
			13	春日他1995	個人	無文。頭・右腕部以外欠損。
			14	春日他1995	個人	腰・脚部以外欠損。
			15	春日他1995	個人	左腕・左腕部以外欠損。
	田子町	道前	16	大高1969	青森県立郷土館（風韻堂コレクション）	頭・胴部以下欠損。
		石亀	17	渡辺1997	古代学協会	腕・胴部以外欠損。
			18	渡辺1997	古代学協会	左腕・胴部以外欠損。
			19	渡辺1997	古代学協会	無文。胴部以外欠損。小型品。
			20	渡辺1997	古代学協会	無文。腰以上欠損。小型品。
			21	渡辺1997	古代学協会	脚部以外欠損。
			22	渡辺1997	古代学協会	脚部以外欠損。
			23	渡辺1997	古代学協会	腰部・脚部以外欠損。
			24	渡辺1997	古代学協会	腰部以外欠損。
			25	渡辺1997	古代学協会	脚部以外欠損。
			26	渡辺1997	古代学協会	脚部以外欠損。
			27	渡辺1997	古代学協会	大型品。a・bは同一の可能性が高い。
		飯豊平（上郷）	28	浜田他1995	岩手県立博物館（小田島コレクション）	頭部以外欠損。頭頂部が加飾される。
			29	浜田他1995	岩手県立博物館（小田島コレクション）	右腕部・胴部以外欠損。
		野面平	30	稲野1983・江坂1983	田子町教育委員会	右頭・右腕・脚部欠損。
			31	稲野1983・江坂1983	田子町教育委員会	脚部・頭部欠損。
			32	稲野1983・江坂1983	田子町教育委員会	脚部・胴部以外欠損。
			33	稲野1983・江坂1983	田子町教育委員会	無文。頭部・右脚部欠損。小型品。
	八戸市	八幡	34	小笠原1988	八戸市博物館	胴部の一部以外欠損。
			35	稲野1983	八戸市縄文学習館	大型品。胴部・左脇部以外欠損。
		是川	36	渡辺1997	八戸市縄文学習館	頭部以下欠損。
			37	渡辺1997	八戸市縄文学習館	左脚部以上欠損。
岩手	二戸市	上杉沢	38	山口2001	二戸市教育委員会	胴部の一部以外欠損。腰部破片か？
			39	山口2001	二戸市教育委員会	右脚部以上欠損。
		雨滝	40	渡辺1997	明治大学	頭部以下欠損。
		橋場	41	二戸市教育委員会1983	二戸市教育委員会	頭部・胴部の一部以外欠損。
			42	二戸市教育委員会1983	二戸市教育委員会	脚部以上欠損。右脚部？
	一戸市	蒔前台	43	高田他1986	国立歴史民俗博物館	頭部以下欠損。頭頂部が加飾される。
		山井	44	高田・中村他1995	一戸市教育委員会	胴部以外欠損？
	八幡平市	金沢屋敷	45	稲野1983	個人	胴部・頭部欠損。
	岩泉町	袋綿	46	江坂1960	日本民藝館	腰部・脚部欠損。
	盛岡市	萩内	47	工藤1982	岩手県埋蔵文化財センター	脚部以上欠損。
		宇登 I	48	菊池他2004	盛岡市（旧玉山村）教育委員会	腕部以外欠損。
秋田	能代市	麻生	49	大野1901	不明	腰部・脚部欠損？
	北秋田市	藤株	50	富樫他1981	北秋田市教育委員会	頭部以下欠損。
		白坂	51	高橋他1994	北秋田市教育委員会	頭部以下欠損。
		向様田A	52	柴田・宇田川他2004	北秋田市教育委員会	無文。接合して完形品となる。胴部破損面にアスファルト付着。
			53	柴田・宇田川他2004	北秋田市教育委員会	脚部欠損。
	鹿角市	尾去沢	54	稲野1983	個人	頭部以下欠損。
			55	稲野1983	個人	頭部以下欠損。
宮城	大崎市	根岸	56	東北歴史資料館1996	東北歴史博物館	右腕・右脚部欠損。
東北地方の出土地不明の岩偶			57	江坂1960	個人	胴部・腕部・頭部欠損。青森県三戸郡出土。
			58	渡辺1997	東京国立博物館	腰部・脚部欠損。
			59	渡辺1997	慶応大学	腰部のみ。
			60	東北歴史資料館1996	東北歴史博物館	頭部のみ。

表 集成した晩期の岩偶一覧（渡辺1997を基に作成）

## 亀ヶ岡式土器文様のデザイン・図案集

藤沼邦彦・須藤真由美・赤坂朋美・五十嵐 愛・宮本明日香  
佐藤千絵

### (はじめに)

縄文晩期に東北地方を中心に盛行した亀ヶ岡文化の特色の一つは、極めて美しい工芸的な遺物に彩られていることである。とくに土器（亀ヶ岡式土器）の文様は極めて精巧であり、その洗練された文様は現代にも通じる高いデザイン性を持っている。弘前大学人文学部の日本考古学ゼミナールでは、亀ヶ岡文化の研究を重要課題として取り組み、亀ヶ岡式土器の文様構成・その描き方などの解明に力をいれてきた。亀ヶ岡式土器の主要な文様は、三叉文・羊歯状文・雲形文・工字文である。そのうちでもっとも美しくかつ複雑に見える文様は雲形文である。これを単に写しとろうと思うと描くのは困難であるが、区画文や配置文と呼ばれる簡単な文様を配置して、さらに簡単な小さい充填文を加えると、雲形文はおのずとできあがる。実は複雑そうに見える雲形文であっても、簡単に描ける手順があって、縄文人はみな知っていたのである。こうした研究過程で、多数の土器の実測図・文様の展開拓本図・文様の展開模式図などを作成し、発表してきた（『弘前大学人文学部日本考古学研究室研究報告』1～7を参照）。

これまでに集積した多数の土器の実測図・文様の展開拓本図・文様の展開模式図を利用して、文様のデザイン化・図案化をおこない、伝統工芸品のみならず現代のさまざまな日用品の文様に活用できないかも考えてきた。たとえば地域の伝統工芸である津軽塗りの文様に応用できないかと思い試作品も作ってみた。大学での研究成果の地域社会への還元である。また地域文化・地域産業にいささかでも貢献するのがねらいである。

### (大野雲外と杉山寿栄男の文様研究)

日本考古学で土器の文様を研究した者は多いが、工芸的な観点あるいは図案的な観点から縄文土器の文様を研究した者は多くない。まず上げるべきは大野雲外と杉山寿栄男であろう。大野は東京大学人類学教室の画工を勤めた特異な研究者である。『模様のから—日本石器時代の部』・『人種紋様—先住民の部』などで工芸的・図案的立場から縄文土器・土版などの文様を集成した。前者の発刊趣旨に「土器の表に、巧なる模様を画しし技のいかにも面白く雅致ありて一種異りたるものなれば、これをまとめて世間の工芸技術社会に応用なさしめば、多少裨益することあらん」とあり、坪井正五郎が寄せた序文にも「豊富な材料を供するに於ては工業に従事する人を利する事が大きい」とある。これによって大野・坪井が、土器などの優れた文様は、現代工業の意匠に応用できると考えていたことは明白である。

杉山は工芸家であるが、原始工芸に興味をもち、大正から昭和初期にかけて『原始文様集』・『日本原始工芸』・『日本原始工芸概説』などの膨大な図録・解説書を著した（藤沼・小山1997）。これらは、日本原始美術の宝庫といっても過言でない。私たちの亀ヶ岡式土器の文様研究も杉山の業績に導かれることが多い。今回提示した図案のなかにも杉山の業績を利用したものが含まれている。

### (亀ヶ岡式土器文様をデザイン化・図案化する)

亀ヶ岡式土器の文様をデザイン化するには、単なる土器の実測図では役に立たない。全体の文様構成が分るような文様展開図を作る必要がある。この文様展開図を作成するには、まず文様の展開拓本図を作り、それをトレースするのがよい。壺や浅鉢の文様の展開拓本図は扇形になるものが多い。一方、

器面が垂直に近い鉢の展開拓本図は横長になるものが多い。扇形のものは円形になるようにデザインし、横長のものは長方形になるようにデザインする。図案として使用するには円形のものも、長方形のものもゆがみを調整しなければならない。前者を円形図案、後者を横長図案と仮によぼう。

円形図案を作る手順を示すと図のようになる（第1図）。①浅鉢の文様の展開拓本をとる。②文様を復原してトレースをする。③展開拓本図は扇形なので、その中心点をもとめ、そこを中心に扇形の部分をできるだけ細かく均等分割し、円になるように等間隔に広げていく（この作業は今のところパソコンではうまくいかず手作業でおこなっている）。④これによって扇形の展開拓本図は、円形の文様展開図となるが、この段階では、土器のゆがみや拓本のゆがみがまだ残っている。⑤これを修正してゆがみを除去し、正円の図案を完成させる。横長図案を作るにも、同じような工程をたどり、長方形に近い文様展開図のゆがみを取り去る必要がある。

#### （円形図案と横長図案を集成）

亀ヶ岡式土器の文様をデザイン化し作り上げた円形図案と横長図案を若干集成したものである。

図案①～④は円形図案とそのもとになった扇形の文様展開拓本（図）である。デザイン性の高い美しい文様のものを集めた。拓本にも雲形文の美しさが遺憾なく発揮されている。

図案⑤～⑯は、文様展開拓本図をトレースした文様展開図であるため扇形となっている。扇形の円弧に土器や拓本のゆがみがあらわれている。円形図案の前段階のものである。

図案⑰～⑳は、円形図案を集成したもので、身の回りの品々を飾る図案として利用できそうである。ブレスレット・イヤリング・ネックレス、ブローチなど小型の装身具の意匠にも利用できそうである。文様を組み合わせれば、浴衣の柄にもなるであろう。工夫してネイルアートの意匠に用いたら面白いかも知れない。

図案㉑～㉓は横長図案を集めたものである。『日本原始工芸』（杉山1928）にある図を利用して作り上げた図案も含まれている。横長図案は手拭いなど長いものの文様に利用できる。とくに縁を飾る文様に適している。

#### （亀ヶ岡式土器の文様をデザイン化し、伝統工芸に利用）

雲形文を円形デザインした図案を、黒地に赤で表現すると、漆文様の雰囲気ができあがる。これを見た人々は津軽塗りでこの文様を表現したら素晴らしいものになるであろう、といってくれる。そこで津軽塗の職人である岩谷武治氏と藤野興蔵氏に頼んで試作してもらった（第15図）。評判は上々である。ただ複雑な雲形文を漆で描くのは難しいという。手間があまりかからぬよう、型紙かシルクスクリーンを用いた転写などによって、下図を簡単に描く工夫が必要であろう。亀ヶ岡文化は漆工芸も盛んであったので、亀ヶ岡式土器の文様をデザイン化し、その図案を現在の津軽塗に再現させるのは意義あることと思う。

津軽こぎん刺しは、麻糸で織られた地布に麻糸で文様を手刺ししたものである。刺される文様は、直線のみで構成される幾何学文様であり、一、三、五…と奇数目を拾って刺した基本的な文様の組み合わせで複雑な文様を編み出している。亀ヶ岡式土器の文様は美しい曲線によって構成されているので、津軽こぎん刺しで表現することは難しい。しかし、亀ヶ岡式土器の文様を点描で表現すれば、津軽こぎん刺しにも応用できる。その場合、横長デザインの方がこぎん刺しで表現しやすいと思われる（第16図は須藤がエクセルを用いてパソコンで作ったもの）。まだ実物の試作品を作っていない。その他、藍染めの文様、陶磁器の文様にも利用できる。図案①の文様を見込みに白く大きく象嵌した四角皿は素晴らしい出来であった（佐京窯の作品）。

(亀ヶ岡式土器の文様をデザイン化し、日常的な身の回り品を飾る)

藤沼の最終講義の時、図案①の文様を染め抜いた手提げ袋と風呂敷を記念にいただいた。エコバックにも亀ヶ岡式土器の文様を染め抜き、地球環境を考えて欲しいものである。第17図はカレンダーと組み合わせたものである。ドイツから来た留学生は図案①を見て、Tシャツにプリントしたいと言った。そのほか手拭い、ハンカチ、コースターなどさまざまなものに利用できよう。

(地域を象徴する考古資料とまつり)

文様・図案と直接関係ないが、考古資料のなかには遮光器土偶のように地域を象徴するような遺物があり、世間の人々にもよく知られている。遮光器土偶は亀ヶ岡文化圏各地で素晴らしいものが出土しているが、とくに有名なのはつがる市亀ヶ岡遺跡の出土品である。旧木造町の人々はこの土偶を「しゃこちゃん」と呼び親しんでいる。木造駅舎の外壁には大きな遮光器土偶が貼りつき、列車がくると大きな目がピカピカ光るという。遮光器土偶は教科書にも載っていたのでこどもでもよく知っている。ネブタの季節が巡ってくるたびに、遮光器土偶をかたどったネブタを金魚ネブタように小さいものでもよいから作ってみたいと何度思ったことか。五所川原市で平成 8年に巨大な立佞武多が復活し、その大きさとそこから噴出する威容と迫力に驚いた。これを見た瞬間、小さな遮光器土偶ネブタはいらないと思った。五所川原市には立佞武多「遮光器土偶が来た」をぜひ作ってほしい。その願いをこめて、学生（佐藤千絵）や卒業生（其田香保里）と相談してできたのが、第18・19図の立佞武多である。

このほかにも津軽出身の高見盛に相応しい亀ヶ岡式土器の文様の化粧回しを考えてみた。図案51はなんとなく強そうな文様である。階ヶ嶽の相撲錦絵を利用して、その図案を化粧回しに応用してみた。こうした化粧回しをつけると高見盛はもっと強くなるかもしれない。

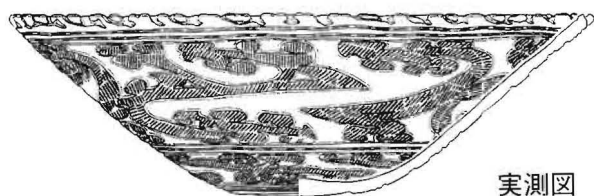
#### 【引用・参考文献】

- 秋田県埋蔵文化財センター（2004年）『向様田A遺跡 遺物編』秋田県文化財調査報告書370。  
秋田県埋蔵文化財センター（2005年）『向様田D遺跡』秋田県文化財調査報告書392。  
秋田県埋蔵文化財センター（1994年）『白坂遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書244。  
大野雲外（1916年）『人種紋様－先住民の部』、芸艸堂。  
大野雲外（1901年）『模様のくら－日本石器時代の部』、嵩山房。  
工藤得子（1976年）『津軽こぎん刺し』、株式会社主婦と生活社。  
杉山寿栄男（1923年）『原始文様集』、工芸美術研究会。  
杉山寿栄男（1928年）『日本原始工芸』、工芸美術研究会。  
杉山寿栄男（1928年）『日本原始工芸概説』、工芸美術研究会。  
弘前市立博物館（1981年）『津軽の伝統工芸 津軽塗』。  
藤沼邦彦（1983年）「文様の描き方－亀ヶ岡式土器の雲形文の場合－」『縄文文化の研究』5、雄山閣。  
藤沼邦彦（1989年）「亀ヶ岡式土器の文様の描き方－雲形文を中心に－」『考古学論叢Ⅱ』。  
藤沼邦彦・小山有希（1997年）「原始工芸・アイヌ工芸の研究者としての杉山寿栄男（小伝）」東北歴史資料館研究紀要23。  
藤沼邦彦・蔦川貴祥ほか編（2004年）『亀ヶ岡文化遺物実測図集』弘前大学人文学部日本考古学研究室研究報告1。  
藤沼邦彦・関根達人ほか編（2005年）『青森県東津軽郡平館村今津遺跡発掘調査報告書』弘前大学人文学部日本考古学研究室研究報告2。  
藤沼邦彦・横山寛剛ほか編（2006年）『亀ヶ岡文化遺物実測図集（2）』弘前大学人文学部日本考古学研究室研究報告4、亀ヶ岡文化研究センター。  
藤沼邦彦・小川忠博編（2006年）『ミニ特別展「亀ヶ岡文化の世界」図録』弘前大学人文学部日本考古学研究室研究報告3、亀ヶ岡文化研究センター。  
藤沼邦彦・秋山真吾編（2007年）『亀ヶ岡文化遺物実測図集（3）』弘前大学人文学部日本考古学研究室研究報告5、亀ヶ岡文化研究センター。  
藤沼邦彦・秋山真吾・赤坂朋美ほか編（2008年）『青森県三戸郡三戸町杉沢遺跡発掘調査報告書』弘前大学人文学部日本考古学研究室研究報告6、亀ヶ岡文化研究センター。

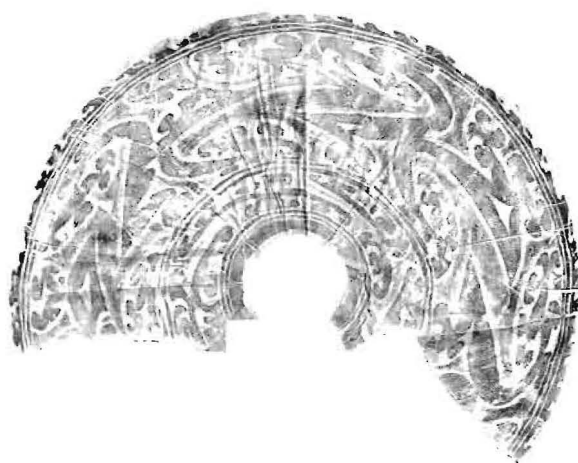


図案の一覧				
図案①	五所川原市観音林遺跡	浅鉢	円形図案と展開拓本 (図)	研究報告 1
②	岩手県岩手町豊岡遺跡	浅鉢	円形図案と展開拓本 (図)	研究報告 3. 4
③	北秋田市向様田 A 遺跡	浅鉢	円形図案と展開拓本 (図)	報告書
④	青森県三戸町杉沢遺跡	浅鉢	円形図案と展開拓本 (図)	研究報告 6
⑤	三沢市野口貝塚	台付皿	文様展開図 (扇形)	研究報告 4
⑥	三沢市野口貝塚	皿	文様展開図 (扇形)	研究報告 4
⑦	三沢市野口貝塚	壺	文様展開図 (扇形)	研究報告 4
⑧	十和田市明戸遺跡	壺	文様展開図 (扇形)	研究報告 5
⑨	十和田市明戸遺跡	鉢	文様展開図 (扇形)	研究報告 5
⑩	十和田市明戸遺跡	浅鉢	文様展開図 (扇形)	研究報告 5
⑪	十和田市明戸遺跡	鉢	文様展開図 (扇形)	研究報告 5
⑫	十和田市明戸遺跡	鉢	文様展開図 (扇形)	研究報告 5
⑬	十和田市明戸遺跡	皿	文様展開図 (扇形)	研究報告 5
⑭	青森県外ヶ浜町宇鉄遺跡	浅鉢	文様展開図 (扇形)	研究報告 5
⑮	青森県階上町滝端遺跡	壺	文様展開図 (扇形)	研究報告 5
⑯	青森県東北町田の沢(3)遺跡	壺	文様展開図 (扇形)	研究報告 7
⑰	青森県三戸町杉沢遺跡	壺	円形図案	研究報告 6
⑱	青森県三戸町杉沢遺跡	浅鉢	円形図案	研究報告 6
⑲	青森県三戸町杉沢遺跡	浅鉢	円形図案	研究報告 6
⑳	青森県三戸町杉沢遺跡	浅鉢	円形図案	研究報告 6
㉑	青森県三戸町杉沢遺跡	皿	円形図案	研究報告 6
㉒	青森県三戸町杉沢遺跡	浅鉢	円形図案	研究報告 6
㉓	つがる市亀ヶ岡遺跡	浅鉢	円形図案	研究報告 3
㉔	青森県外ヶ浜町宇鉄遺跡	壺	円形図案	研究報告 3
㉕	つがる市亀ヶ岡遺跡	壺	円形図案	研究報告 3
㉖	岩手県岩手町豊岡遺跡	皿	円形図案	研究報告 3. 4
㉗	岩手県岩手町豊岡遺跡	浅鉢	円形図案	研究報告 3. 4
㉘	北秋田市藤株遺跡	浅鉢	円形図案	研究報告 3
㉙	弘前市十腰内遺跡	浅鉢	円形図案	研究報告 3
㉚	弘前市十腰内遺跡	台付皿	円形図案	研究報告 3
㉛	北秋田市白坂遺跡	皿	円形図案	報告書
㉜	北秋田市向様田 A 遺跡	皿	円形図案	報告書
㉝	北秋田市向様田 A 遺跡	皿	円形図案	報告書
㉞	北秋田市向様田 D 遺跡	皿	円形図案	報告書
㉟	北秋田市向様田 D 遺跡	皿	円形図案	報告書
㊱	北秋田市向様田 D 遺跡	皿	円形図案	報告書
㊲	北秋田市向様田 D 遺跡	皿	円形図案	報告書
㊳	弘前市十腰内遺跡	皿	円形図案	原始文様集
㊴	つがる市	浅鉢	円形図案	原始文様集
㊵	石巻市沼津貝塚	皿	円形図案	原始文様集
㊶	石巻市宝ヶ峯遺跡	皿	円形図案	原始文様集
㊷	北秋田市羽根山遺跡	皿	底部 (円形文様)	原始文様集
㊸	能代市麻生遺跡	皿	底部 (円形文様)	日本原始工芸
㊹	つがる市亀ヶ岡遺跡	浅鉢	彩文文様	研究報告 7
㊺	つがる市亀ヶ岡遺跡	浅鉢	彩文文様	研究報告 7
㊻	石巻市沼津貝塚	浅鉢	彩文文様	研究報告 7
㊼	青森県三戸町杉沢遺跡	鉢	横長図案	研究報告 6
㊽	青森県三戸町杉沢遺跡	鉢	横長図案	研究報告 6
㊾	青森県三戸町杉沢遺跡	鉢	横長図案	研究報告 6
㊿	青森県三戸町杉沢遺跡	鉢	横長図案	研究報告 6
51	弘前市十腰内遺跡	德利壺	横長図案	日本原始工芸
52	青森県三戸町杉沢遺跡	壺	横長図案	研究報告 6
53	青森県外ヶ浜町宇鉄遺跡	壺	横長図案	研究報告 5
54	つがる市亀ヶ岡遺跡	———	横長図案	日本原始工芸
55	八戸市是川中居遺跡	台付浅鉢	横長図案	日本原始工芸
56	八戸市是川中居遺跡	壺	横長図案	日本原始工芸
57	八戸市是川中居遺跡	———	横長図案	日本原始工芸
58	秋田県五城目町中山遺跡	壺	横長図案	日本原始工芸
59	八戸市是川中居遺跡	壺	横長図案	日本原始工芸

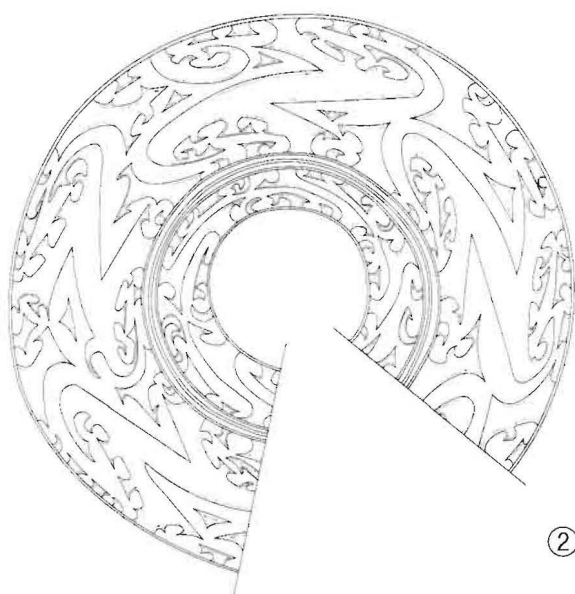
※研究報告 - 弘前大学人文学部日本考古学研究室研究報告の略



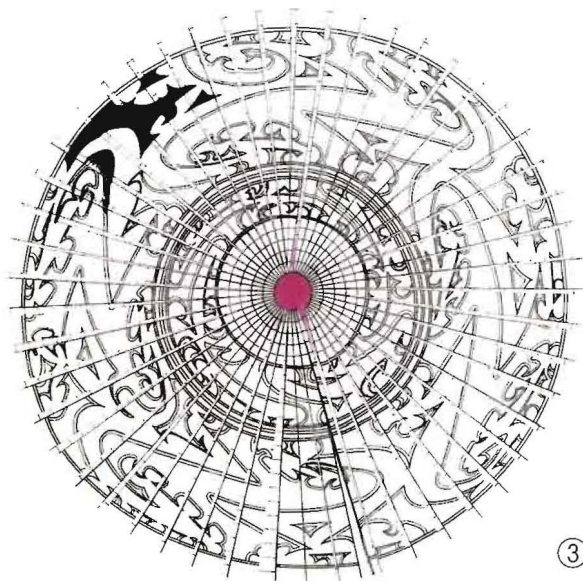
実測図



①



②



③



④



⑤

第1図 円形図案を作る手順





第2図 円形図案① 観音林遺跡



第3図 円形図案② 豊岡遺跡





第4図 円形図案③ 向様田A遺跡



第5図 円形図案④ 杉沢遺跡





⑤野口貝塚  
(台付皿)



⑥野口貝塚  
(皿)



⑦野口貝塚  
(壺)



⑧明戸遺跡  
(壺)



⑨明戸遺跡  
(鉢)



⑩明戸遺跡  
(浅鉢)

第6図 円形図案⑤～⑩



⑪明戸遺跡  
(鉢)



⑫明戸遺跡  
(鉢)



⑬明戸遺跡  
(皿)



⑭宇鉄遺跡  
(浅鉢)



⑮滝端遺跡  
(壺)



⑯田の沢(3)遺跡  
(壺)

第7図 円形図案⑪～⑯





⑰杉沢遺跡  
(壺)



⑱杉沢遺跡  
(浅鉢)



⑲杉沢遺跡  
(浅鉢)



⑳杉沢遺跡  
(浅鉢)



㉑杉沢遺跡  
(皿)



㉒杉沢遺跡  
(浅鉢)

第8図 円形図案⑰～㉒





②③ 亀ヶ岡遺跡  
(浅鉢)



②④ 宇鉄遺跡  
(壺)



②⑤ 亀ヶ岡遺跡  
(壺)



②⑥ 豊岡遺跡  
(皿)



②⑦ 豊岡遺跡  
(浅鉢)



②⑧ 藤株遺跡  
(浅鉢)

第9図 円形図案②③～②⑧





②⑨十腰内遺跡  
(浅鉢)



③⑩十腰内遺跡  
(台付皿)



③⑪白坂遺跡  
(皿)



③⑫向様田A遺跡  
(皿)



③⑬向様田A遺跡  
(皿)



③⑭向様田D遺跡  
(皿)

第10図 円形図案②⑨～③④





③⑤向様田D遺跡  
(皿)



③⑥向様田D遺跡  
(皿)



③⑦向様田D遺跡  
(皿)



③⑧十腰内遺跡  
(皿)



③⑨青森県つがる市  
(浅鉢)



④⑩沼津貝塚  
(皿)

第11図 円形図案③⑤～④⑩



④① 寶ヶ峰遺跡  
(皿)



④② 羽根山遺跡  
(皿)



④③ 麻生遺跡  
(皿底部)



④④ 亀ヶ岡遺跡 (彩文)  
(浅鉢)



④⑤ 亀ヶ岡遺跡 (彩文)  
(浅鉢)



④⑥ 沼津貝塚 (彩文)  
(浅鉢)

第12図 円形図案④①～④⑥





④⑦杉沢遺跡（鉢）



④⑧杉沢遺跡（鉢）



④⑨杉沢遺跡（鉢）



⑤⑩杉沢遺跡（鉢）



⑤⑪十腰内遺跡（壺）



⑤⑫杉沢遺跡（壺）



⑤⑬宇鉄遺跡（壺）

第13図 横長図案④⑦～⑤⑬





⑤4亀ヶ岡遺跡（日本原始工芸）



⑤5是川遺跡（日本原始工芸）



⑤6是川遺跡（日本原始工芸）



⑤7是川遺跡（日本原始工芸）



⑤8五城目町遺跡（日本原始工芸）



⑤9是川遺跡（日本原始工芸）

第14図 横長図案⑤4～⑤9



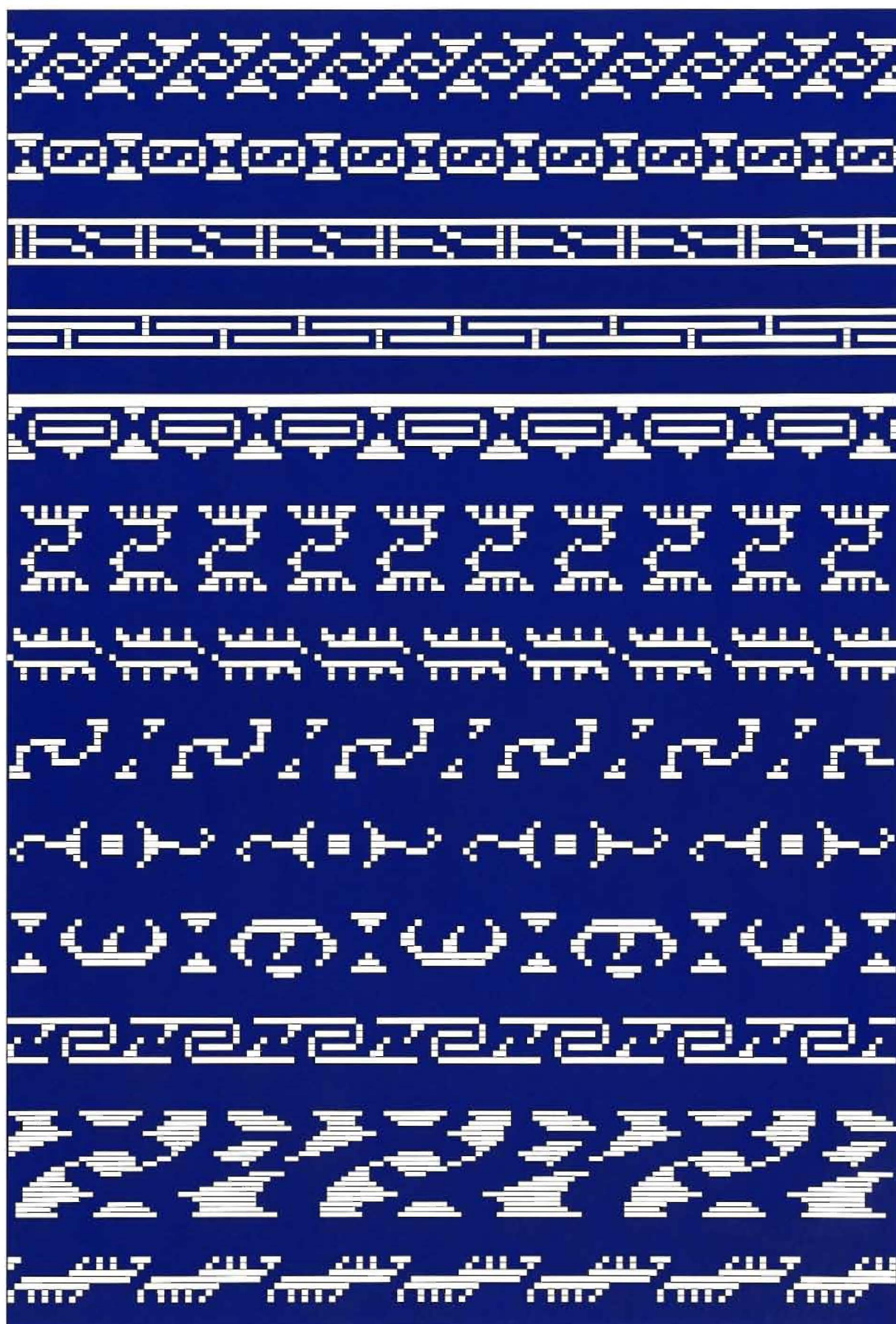
図案①を津軽塗りのお盆に利用  
(岩谷氏作製、小川忠博氏撮影)



津軽塗り職人・岩谷氏の作業場を見学

第15図 円形図案を津軽塗りに応用





第16図 文様を津軽こぎん刺し風に応用

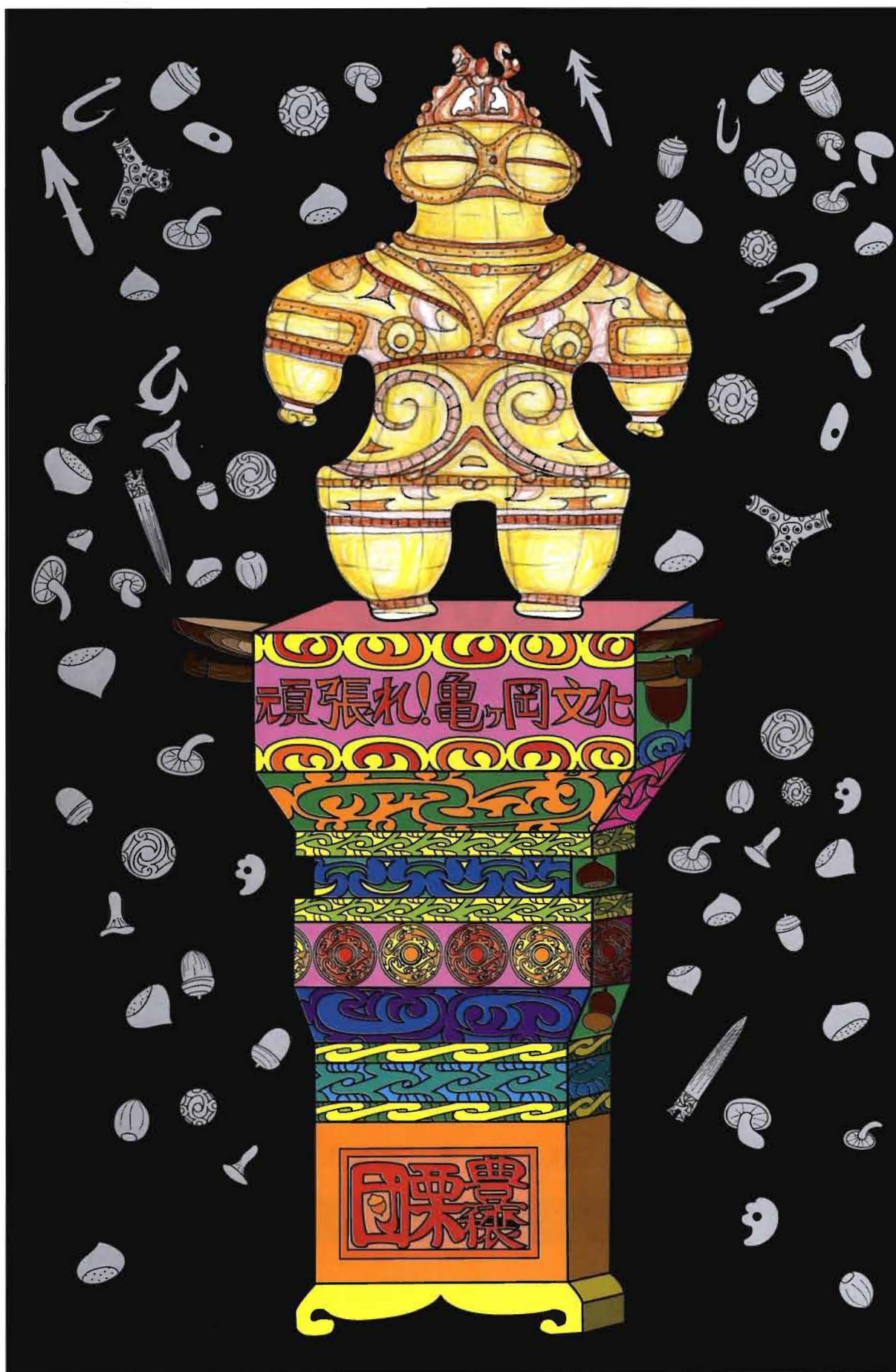




雲形文を使用した  
扇子（イメージ図）



第17図 亀ヶ岡文化研究センター2008年カレンダー

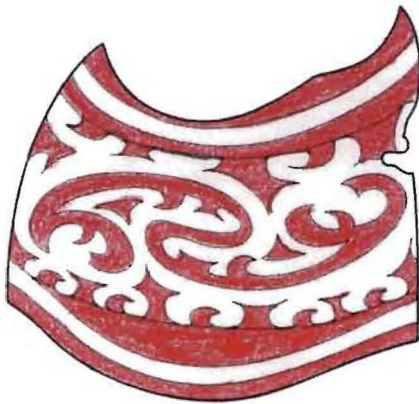


第18図 立佞武多「遮光器土偶が来た」(1)









第20図 階ヶ嶽竜右衛門に亀ヶ岡式土器の文様の化粧回しをさせた



第21図 亀ヶ岡式土器の文様やどんぐり、しゃこちゃんを飾った化粧回し



## 亀ヶ岡文化と亀ヶ岡式土器（最終講義抄）

美しい工芸的な遺物と縄文社会

藤沼邦彦

### ○ はじめに

私の実質的な最終講義は1月23日でしたが、時間の配分がうまくいかず、一コマ分たりなくなり、最後に話そうと思っていた亀ヶ岡文化の話が出来ませんでした。そこで、この最終講義の場をお借りして補習の講義とさせていただきます。

補習講義ですので、いつもの講義と同じ調子、同じスタイルで行います。みなさまも学生のつもりで聴いていただければと思います。では出席をとります。今日は人数が多いので、名前を呼ばれた方は、大きな声で返事をし、手を挙げて下さい。

全員の名前を呼ぶと、授業の時間がなくなります。その他大勢を代表して其田さんで終わりにします。其田香保里さんおられますか。

今日の授業のテーマは「亀ヶ岡文化」ですが、私は専ら亀ヶ岡式土器の基礎的な研究をしておりまして、この補習講義でも亀ヶ岡式土器から見た亀ヶ岡文化の話ということになります。

### ○ 亀ヶ岡文化とは

亀ヶ岡文化は、縄文時代の終わりの頃（晩期）、東北地方で隆盛した文化で、その文化圏は北海道渡島半島から東北地方全体・新潟県の一部まで広がっております。亀ヶ岡文化の影響を受けた遺物（主として土器）は、亀ヶ岡文化圏をはるかに越えて、北は北海道北・東部から南は近畿・四国・北九州まで出土しています。釧路市緑ヶ丘遺跡では美しい入組文の壺が出土していますが、これは津軽海峡をめぐる地域－函館周辺・下北半島・津軽半島域－で作られ、運ばれたものと推定されます。兵庫県神戸市灘区では遮光器土偶の破片が、四国の高知県土佐市居徳遺跡では北上川中流域の亀ヶ岡式土器とよく似たものが出土しています。このように亀ヶ岡文化の影響を受けた遺物は、日本列島の広い範囲で出土しております。また、亀ヶ岡文化はその中葉のころ西日本の弥生文化と接触しております。

したがって亀ヶ岡文化の研究は、日本列島における広域的な土器編年、縄文文化の終末や縄文文化と弥生文化の接触の様子を探る上で重要であると考えております。

また亀ヶ岡文化の特色は、美しく精巧に作られた土器・漆器などの工芸的な遺物や土偶や岩版などの祭祀的な遺物に彩られていることです。いいかえると、狩猟採集経済に支えられた文化の中で、食料獲得に直接関係ない極めて工芸的な道具やすぐれた祭祀的な道具を数多く生み出していたということです。この特色は亀ヶ岡文化に顕著ですが、縄文文化全体にも云えることです。なぜ縄文社会（亀ヶ岡文化の社会を含む）は、数多くの美しい工芸品や祭祀の道具を必要としたのでしょうか。もう一つ、わからないことがあります。華やかな亀ヶ岡文化を咲かせていた人々は、弥生文化と接触すると、なぜ農耕民となる道をえらんだのかということです。

### ○ 亀ヶ岡文化研究センター

10年前に、私は宮城県の大賀城跡調査研究所の所長から弘前大学人文学部の教授に移りました。弘前大学が位置する津軽地方は、亀ヶ岡文化の遺跡や遺物に恵まれているところです。それ以来、縄文時代晩期の亀ヶ岡文化に関する研究を続けております。ですから私の研究室に属する学生の研究テーマは、ほとんど亀ヶ岡文化に関するものばかりです。とくに亀ヶ岡文化の土偶・石刀などの祭りの道具、美しい土器や漆器などの工芸的な遺物などの研究に力を入れました。大学にはほとんど資料がありま



せんでしたので、あっちこっちから研究に値する優れた遺物を借り集めました。すると、いろんな方が考古学実習室を覗いていくようになりました。遠山文部科学大臣・芹沢長介先生・坪井清足先生、県内外の研究者です。試みに平成14年の大学祭の時に実習室を公開しましたら学生や市民の方が約550人入場しました。文化財の展示室が欲しいという気持ちがより強くなりました。

平成17年10月5日、文化財論講座の仲間と弘前大学人文学部に亀ヶ岡文化研究センターを作り、ここに小さな展示室を設け、地域社会と結びつけた展示と研究活動を始めました。その切っ掛けは「弘前大学人文学部に特色ある研究センターを設立できないか」と云うことでした。設置した理由は、①弘前大学は亀ヶ岡文化の遺跡や出土品に恵まれた地域に所在する、②したがって特色ある研究センターを設立できる、③すでに亀ヶ岡文化を考古学ゼミナールの中心課題として取り上げ、研究を進めていた、④継続的な発掘調査によって優れた研究資料を収集・研究・展示ができる、⑤地域研究が列島の広域研究に連なる、⑥研究や運営を通じて地域社会に様々な点で貢献できる、などでした。

初年度（平成17年）は、設立を記念して、ミニ特別展「亀ヶ岡文化の世界」を行い、東北大学・岩手県立博物館・青森県立郷土館・秋田県埋蔵文化財センターなどから亀ヶ岡文化の素晴らしい土器・上偶・仮面・石刀などをお借りし、山のように展示しました。みんなびっくりしました。実は見に来た人をびっくりさせようと考えて、関根先生や学生と頑張ってよいものを沢山集めたのですから、びっくりするのは当然です。一カ月弱の展示期間に約1600人をこす入場者がありました。その半分は学外の研究者・一般市民です。

2年目、昨年度の秋には、秋田県埋蔵文化財センターと北秋田市教育委員会の協力を得て、ミニ特別展「森吉山麓の亀ヶ岡文化」を行いました。北秋田市・大館方面の方々が大勢やってきました。これもおもしろい展示となりました。これは、「森吉山麓の亀ヶ岡文化」のポスターです。背景は、森吉山ダムが作られている小又川流域の古い写真です。これに白坂遺跡出土の岩偶と向様田遺跡出土の土偶の写真を加えました。この笑っているような表情の岩偶は、発見当時、「笑い続けて三千年」といわれました。私はこれをパクって「笑い疲れて三千年」といって喜んでおりました。3年目、今年度のミニ特別展は、北上市教育委員会や岩手県埋蔵文化財センターの協力を得て、ミニ特別展「北上川中・下流域の亀ヶ岡文化」を展示する予定でした。しかし、残念ながら人文学部の校舎の改築のため中止せざるを得ませんでした。

## ○ 亀ヶ岡式土器

亀ヶ岡文化の土器は亀ヶ岡式土器ともよばれ、やきものとしての縄文土器を代表するものの一つです。

中期の土器のような豪放さやダイナミックさはありませんが、器種は、深鉢・浅鉢・皿・壺・注口土器などバラエティに富み、洗練された美しい形と文様をもつのが大きな特色です。器面は、羊歯状文や雲形文・上字文と呼ばれる文様で飾られたり、赤漆や黒漆で化粧されたり、ピカピカに磨き上げられたりするものが多いのです。つがる市亀ヶ岡遺跡でこの種の土器が古くから多数出土していたので、これと類似した土器は、亀ヶ岡式土器とよばれるようになりました。

1930年、山内清男は、大船渡市大洞貝塚出土の亀ヶ岡式土器を研究し、亀ヶ岡式土器が縄文時代終末に位置付けられること、6つの型式に分かれること、6つの型式は継続的に変遷（大洞B⇒大洞BC⇒大洞C1⇒大洞C2⇒大洞A⇒大洞A'式）すること、型式（時期）によって形・文様・器種・その組み合わせなどが異なることなどを明らかにしました。さらに亀ヶ岡式土器の分布を広く調べ、東日本の縄文文化の終末は、西日本における縄文文化の終末と著しい差がないことを論じました。この研究は先史考古学を科学的な学問に押し上げる重要な役割を果たしたと思っています。

亀ヶ岡式土器は、飾られた精製土器とそうでない粗製土器とがあり、すべての土器が美しいわけではありません。精製土器は壺・浅鉢・注口形・香炉形などに多く、粗製土器は深鉢を中心に鉢・壺な

どに多いのですが、区別が難しいものも沢山あります。粗製土器は決して粗製ではありません。装飾がないだけで、深鉢などはうまくものを煮ることができるようキッチンと作られております。

### ○ 亀ヶ岡式土器の文様の描き方

亀ヶ岡文化圏に属する津軽地方と仙台湾沿岸では、同じ文様をもつ土器が作られています。なぜだろうか。簡単にいえば、両地域とも同じ情報で結ばれた亀ヶ岡文化圏に属し、同じ情報に基づいて文様を描いたからです。そして同じ文様の土器を作り使用することで同じ文化圏に属することを確認していたのです。しかし、情報の内容が難しければ、互いに遠く離れている地域で、同じ文様を描くのは難しい。難しそうな文様を文化圏各地に正しく伝えていたのは、複雑な文様でも簡単に描ける方法を縄文人は知っていたからと思われます。実際、彼らはその方法を知り、情報の発信と受信を巧みに行っていたのです。



### ○ 雲形文を描く

亀ヶ岡式土器の雲形文は美しいが、複雑で難しい文様であると言われる。呪術的な文様の代表とされたこともありましたが。しかし、区画文あるいは配置文を用いるという二つ方法で簡単に描くことができることが大分前にわかりました。区画文は、文様帯を区画し、そこに充填文をうめると、単位雲形文を作り上げます。配置文は、文様帯に配置され、そこに充填文をうめると、連続雲形文を作り上げます。区画文や配置文は簡単な図形で種類も少なく、点対称的な構図や配置をとるものが多いので、覚えやすく、手の動きにも馴染みやすい。充填文も決まりきった簡単な形のものです、美しい文様ができるように、充填すればよい。こうした方法は羊歯状文や工字文など他の文様を描くにも利用できます。

配置文は、①文様帯の上線・下線のいずれか一方にのみ接続する形をとるもの（接続型）と、②文様帯の内部に完全に埋め込まれるもの（独立型）に大別されます。接続型はノの字形やキノコ形のものが多く、独立形は横C字形（箆笥の把手形）が基本で、それが点対称的に接合した横S字形（横Z字形）もあります。配置文は基本の形は単純ですが、付加文がつき、変化ある形となり、美しい文様効果を見せているものがあります。区画文よりは複雑な形のものが多く、付加文は充填文の形と似ているものが多い。複雑な形の配置文から付加的な部分を取り去ると、単純な形の基本形がみえてきます。

区画文や配置文は簡単な図形で種類もごく僅かなので覚えるのは容易です。しかも点対称的な構図や配置をとるものが多いので手の動きにも馴染みやすいようになっています。また、充填文も三角あるいは四角に近いきまりきった形のものが多く、美しい文様ができるように、充填する場所を考え、縦横にのびたり、縮んだりするように気を配れば良いだけです。沢山の雲形文を見ていると、亀ヶ岡文化人がねらった美しい文様は、一定幅の曲線的な縄文帯（あるいは隆帯）から構成される安定した文様（単位文様・連続文様）であったと思われます。

### ○ 工字文を描く

工字文は、複数の平行線を基調とし、横方向にのびる線が反転して逆方向にのび、また反転することを繰り返し、横あるいは縦に連続する文様です。沈線部あるいは隆線部に注目すると漢字の「工」に見える部分が、互い違いに並ぶのが特色です。工字文を描くことで最も難しいのは多条の平行線を描くことです。そこで櫛歯状のものを利用して多条の平行線を下書きしてから、鍋蓋（) 状の配置文を点対称に、あるいは入れ換え文的に一周ずつ、一段ごとに重ねていけば、おのずと見事な連続した隆帯文（工字文）が出来上がります。配置文の基本形はとその組み合わせだけで極めて単純です。工字文を描くには雲形文ほどのリズムがありません。

### ○ 文様の描き方の伝達―土器文様絵描き歌

手順を守れば複雑な雲形文を簡単に描ける。このことが互いに遠く離れた地域でも同じ文様を描くことができることを可能とした情報だったのです。ではこうした情報がどのようにして亀ヶ岡文化圏の各地に正確に伝えられたのであろうか。

区画文や配置文、充填文を利用して繰り返し雲形文を描いていると、区画文・配置文・充填文がリズムカルな点対称的な構図や配置をとっていることが分かる。情報というものは物語やリズム・歌詞を伴っていると覚えやすいものです。おそらく、土器の文様を描く情報にはリズムや歌詞が伴っていたのであろうと思います。土器文様絵描き歌です。

互いに遠く離れたところで製作された縄文土器に同じような文様が描かれているのを見ると、テレビや新聞のない縄文時代であっても、土器文様絵描き歌が正確に伝わっていたと思わざるをえない。どんなふうにして情報が伝えられたのだろうか。

### ○土器作りは共同の場でみんなで製作

土器作りは、形・文様・製作法から分るように一定の規制（情報）の下に行われています。共同場で行われたのだろう。亀ヶ岡文化人は、共同作業を通じて、土器作りに関する情報を上手に交換しあい、複雑な技術であっても体系的に身につけるよう努力しました。各地に情報が伝わるのも、人々が集まる共同作業の場を経由することが多かったと思っております。共同作業こそ工芸的に優れた技術や感覚を生み出し、情報を巧みに伝達・交換する原動力だったのです。

○ 弘前大学の学生に絵描き歌を描いてもらったら、圧倒的に「かわいいコックさん」が多く、ついで「ドラえもん」・「オバQ」・「アンパンマン」などでした。みなテレビで覚えたものばかりです。

これによって、①絵描き歌を口ずさむことさえできれば誰でもが簡単に漫画の主人公を描くことができること、②地域がちがっても世代がちがっても、同じ情報（絵描き歌）を聞いて覚えていれば、同じ絵を簡単に描くことができること、③世代が違ったり、地域が違ったりして、他の世代や地域と異なった絵描き歌の番組を見て覚えたものは、別の絵を描くこと、などを教えてくれます。④しかし、歌詞を忘れると、部分的に間違ったり、描けなくなったりすることも分りました。

すなわち、同じ絵描き歌「かわいいコックさん」でも、情報の微妙な違い・部分的誤報・部分的忘失などによって、微妙に絵が異なってきます。「かわいいコックさん」の一般的な歌詞は「棒が一本あったとさ 葉っぱかな 葉っぱじゃないよカエルだよ カエルじゃないよアヒルだよ 6月6日に雨ざあーざあー降ってきて 三角定規にひび入って アンパン2つに豆3つ コッペパン2つ下さいな あっという間に かわいいコックさん」です。豆3つを忘れると、コックさんの服にはボタンが付かないし、コッペパン2つを忘れると、コックさんの顔には耳が描かれない。このようなお母さんや保育士に絵描き歌を習ったこども達は、みなボタンのない服をきて、耳のないコックさんを描くようになります。絵描き歌にみられるこうした現象は、縄文土器の文様の微妙な地域差・年代差を想起させます。

絵描き歌のように、歌詞に合わせて、文様を構成する曲線などを描いていけば、物語のない文様でも、みんなで同一の、あるいは共通する土器の文様を描けたと思います。言葉を唱えながら文様を描くことは、物語性文様だけでなく、抽象的な装飾文であっても描きやすかったと思います。現在の「絵描き歌」のように、口から流れ出る歌の文句に合わせて文様を描いたとしても、その歌の文句とできあがった文様は関係なかったことも考えられます。その場合、歌の文句・唱えことばは、文様を描くための方便となってしまいます。



## ○ 亀ヶ岡文化（縄文文化）についての評価

亀ヶ岡文化（縄文文化）とは、どんな文化でどんな社会であったのであろうか。いろいろな意見があります。代表的なものを3つほど紹介します。

①亀ヶ岡文化は、生産用具の新たな改良がなく、生産活動に結びつかない遺物が多い。その社会は呪術的で、停滞的であった。そのため現状を打破することができなく、食料生産経済である弥生文化を受け入れざるを得なかったという説がありました。⇒しかし、採集経済の行きづまった証拠はないので、私は弥生文化を受け入れるには別な要因があったのだと考えております。また停滞的であったということにも疑問をもっています。亀ヶ岡文化の人々はなぜ西からの弥生文化を受け入れ、なぜ農耕民となる道を受け入れたのか、これも大きな課題です。

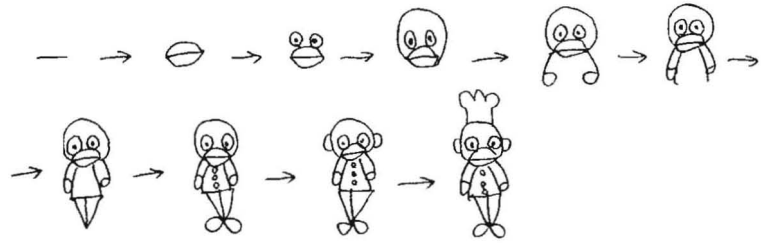
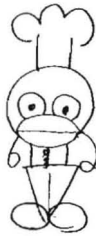
②北アメリカの北西海岸のインディアンのように、備蓄と定住を特色とする狩猟採集民の社会のなかには、大きなムラを構成し、階級を生み出しているものがあります。こうした民族誌の研究に基づいて、同じように備蓄と定住を特色とする縄文社会にも経済的・社会的不平等や戦争などがあった可能性があるという縄文階層論が盛んになってきております。縄文時代の後期・晩期に奴隷がいたのではないかと、という意見もあります。小林達雄は、高度の組織力を発揮するだけの社会の仕組みの一環として身分階層制があったのではないかと考えております。⇒しかし、北西海岸のインディアンの民族誌は、彼らの民族誌であって、縄文人の民族誌ではありません。私は、現在の考古学的資料に基づくかぎり、縄文時代に本格的な階層制があったとは考えておりません。

③縄文社会は、狩猟採集によって生活を維持し、生業に関する基本的道具や技術、集落規模などをほとんど変化させずに、一万年の長い間、安定した小さな社会を維持して来たとし、西田正規はなぜ安定性が維持されたかを研究すべきであると云います。⇒私は土偶の研究から、縄文社会が1万年続いても、基本的なところはほとんど変化していないと考えていたので、この考え方を支持しております。そして、長い間、安定した小さな社会を維持できた最大の原因は、縄文人が食料の拡大再生産の道を辿らなかったためと考えております。

## ○ 亀ヶ岡文化の工芸的な生活用具や祭りの道具の役割

北半球の中緯度に位置し、四季のはっきりした日本列島で生活する縄文人は、食料を備蓄し、年間の食料事情を安定したものにしないと、生活の維持は困難でした。そのため、食料を備蓄し、年間を通していつでも食料を確保できるシステムを作り上げ、定住生活をおくるようになりました。しかし、縄文人は、備蓄した食料などを、すぐれた工芸品を作ったり、みんなで祭りを行ったり、環状列石の造営のような公共的な工事を行うことで消費してしまい、人口を著しく増加させたり・社会を大きくさせたり・著しい社会的階層が生まれたりするのを避けていたと思われます。人口が増加して集落が拡大すると、食料を大量に確保しなければならない。排泄物の処理など衛生的な問題も出てくる。ストレスも増大し、伝染病にも罹りやすくなる。こうした問題が起こらないように、彼らはさまざまな手だてを考え食料の拡大再生産を拒否してきたのだと思います。その手段の一部が手間隙のかかる工芸的な道具と祭りの道具の製作であり、祭りを行うことであったと考えております。もちろん、モノが工芸的であるのは、生活で快く使用するためであり、祭りの雰囲気盛り上げるためでもあったのですが。

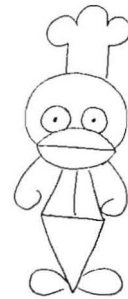
以上で、最終講義兼補習講義を終わります。今日は忙しいなか出席していただき有り難うございました（平成20年2月16日、水曜日）。参考文献は多数のため省略させていただきます。



棒が1本あったよ。  
葉っぱがなす葉っぱじゃないよ  
かえるだよ。かえるじゃないよ、  
あひるだよ。6月6日に雨  
ザーザー降ってきて、三角定  
規にヒビ入ってジョウロの豆  
3つ。あつという間に  
かわいいコックさん。

耳がない例

葉っぱが2枚ありました  
葉っぱじゃないよ、カエルだよ。  
カエルじゃないよ、アヒルだよ。  
6月6日に雨ザーザー  
三角定規にヒビが入った  
最後にジョウロを分けてら  
かわいいかわいい  
コックさん



耳とボタンがない例



まる描いてチョン、まる描いてチョン  
お豆に芽が出て植木鉢に植木鉢  
6月6日にUFがあら行ってきた  
来ておこちで、お池が2つできました  
た。お池にお船を浮かべたら、  
お空に三日月のぼった。ヒゲを  
つけたら ドラえもん!!

まるかいてちゃん  
まるかいてちゃん  
お豆に芽が出て  
植木鉢に植木鉢  
6月6日に UF が  
あら行ってきた  
落ちて  
お池が2つできました  
ヒゲをつけたら  
ドラえもん



うちはさあしました  
が完成形はこんな  
かんじだと思っます。



亀ヶ岡文化研究センターの内部 「亀ヶ岡文化の世界」 2005年度



亀ヶ岡文化研究センターの入口 「森吉山麓の亀ヶ岡文化」 2006年度





弘前大学人文学部  
日本考古学研究室  
研究報告

第1～7集の表紙

坪井清足先生（日本考古学実習室にて 2001年10月）

## 索 引

(弘前大学人文学部日本考古学研究室研究報告第1集～第7集)

五十嵐 愛  
宮本明日香  
佐藤 千絵  
立花 晃一  
藤沼 邦彦

## はじめに

弘前大学人文学部日本考古学研究室研究報告は平成15年度から平成19年度まで5年間で7冊発行することができた。日本考古学ゼミのみんなの頑張りで作ったものである。新たに作成した遺物の実測図は完形に近い土器だけでも約1,500個、土偶は約200個に達する。その他の遺物の実測図も多数ある。もう一覧するのも大変である。

そこで、研究報告1～7の索引をつくり、遺跡・遺物がどの研究報告にのっているかを分かりやすくした。活用いただければ幸いである。

## 凡例

- ① 弘前大学人文学部日本考古学研究室研究報告は、研究報告と略する。
- ② この索引は、研究報告1～7で取り上げた遺跡・遺物の一覧である。
- ③ この索引は次のように構成されている。

I部－研究報告の記載順に遺跡・遺物を一覧したもの。各研究報告にどんな遺跡のどんな遺物が記載されているかを調べることができる。

II部－研究報告に取り上げた遺跡とその出土品を、遺跡のアイウエオ順に並べたもの。遺跡の名前からその遺跡でどんな遺物が出土しているかを調べることができる。

III部－研究報告に取り上げた遺跡とその出土品を、土器・土偶・仮面・ミニチュア土器・円板状土製品など（以下省略）の順に並べたもの。特定の遺物がどんな遺跡から出土しているかを調べることができる。

IV部－研究報告1～2、4～7にのせた実測図をさらに縮尺し、出土品の種類ごとに遺跡別に並べたもの。実測図が中心なので、どんな形態の遺物があるかを簡単に調べることができる。また、詳しく記載されている研究報告の番号も分るようにした。

④ IV部には研究報告3は利用されていない。研究報告3は遺物の写真と拓本が中心で、実測図がないからである。

⑤ IV部の遺物の実測図の縮尺は、土器が6分の1、その他は4分の1である。顔面付土器は破片であるので、土器であるが4分の1とした。



# I部-研究報告1~7の索引

## 研究報告第1集

二枚橋(2)遺跡(むつ市)	土器(晩期)	107点	①
二枚橋(2)遺跡(むつ市)	土偶	151点	①
二枚橋(2)遺跡(むつ市)	石刀・石剣	116点	①
二枚橋(2)遺跡(むつ市)	仮面(土製仮面)	20点	①
今津遺跡(青森県外ヶ浜町)	仮面(土製仮面)	1点	①
五月女泡遺跡(五所川原市)	仮面(土製仮面)	1点	①
羽黒平遺跡(青森市)	仮面(土製仮面)	1点	①
烏舌内(青森県南部町)	仮面(土製仮面)	1点	①
(伝)亀ヶ岡遺跡(つがる市)	仮面(土製仮面)	1点	①
千刈(1)遺跡(五所川原市)	仮面(土製仮面)	1点	①
伊保内(岩手県九戸村)	仮面(土製仮面)	1点	①
虚空蔵遺跡(青森県南部町)	仮面(土製仮面)	1点	①
山井遺跡(岩手県一戸町)	仮面(土製仮面)	1点	①
是川中居遺跡(八戸市)	土器(晩期)	140点	①
是川中居遺跡(八戸市)	石刀・石剣	41点	①
観音林遺跡(五所川原市)	土器(晩期)	24点	①
観音林遺跡(五所川原市)	土偶	20点	①
観音林遺跡(五所川原市)	岩偶	1点	①
観音林遺跡(五所川原市)	石刀・石剣	19点	①
野里遺跡(岩手県一戸町)	土器(晩期)	42点	①
野里遺跡(岩手県一戸町)	土偶	5点	①
野里遺跡(岩手県一戸町)	匙形土製品	1点	①
野里遺跡(岩手県一戸町)	中空土製品	1点	①

## 研究報告第2集

今津遺跡・弘前大学調査区(青森県外ヶ浜町)	土器(晩期)	226点	②
今津遺跡・弘前大学調査区(青森県外ヶ浜町)	製塩土器(晩期)	8点	②
今津遺跡・弘前大学調査区(青森県外ヶ浜町)	土器(後期)	1点	②
今津遺跡・弘前大学調査区(青森県外ヶ浜町)	円板状土製品	6点	②
今津遺跡・弘前大学調査区(青森県外ヶ浜町)	土偶	2点	②
今津遺跡・弘前大学調査区(青森県外ヶ浜町)	ミニチュア(超小型土器)	2点	②
今津遺跡・平館村調査区(青森県外ヶ浜町)	土器(晩期)	22点	②

## 研究報告第3集

亀ヶ岡遺跡(つがる市)	土器(晩期)	33点	③
十腰内遺跡(弘前市)	土器(晩期)	8点	③
藤株遺跡(北秋田市)	土器(晩期)	2点	③
女名沢遺跡(函館市)	土器(晩期)	1点	③
川向遺跡(遠野市)	土器(晩期)	1点	③
宮田遺跡(青森市)	土器(晩期)	2点	③
青鹿長根遺跡(青森県三戸町)	土器(晩期)	1点	③
槻ノ木遺跡(青森県平内町)	土器(晩期)	1点	③
是川中居遺跡(八戸市)	土器(晩期)	14点	③
青森県内	土器(晩期)	1点	③
明戸遺跡(十和田市)	土器(晩期)	1点	③
野口貝塚(三沢市)	土器(晩期)	9点	③
観音林遺跡(五所川原市)	土器(晩期)	7点	③
薬師遺跡(弘前市)	土器(晩期)	11点	③
湯ノ沢遺跡(弘前市)	土器(弥生)	3点	③
大曲Ⅲ号遺跡(青森県鯉ヶ沢町)	土器(弥生)	1点	③
宇鉄遺跡(青森県外ヶ浜町)	土器(晩期)	12点	③
二枚橋(2)遺跡(むつ市)	土器(晩期)	6点	③
泉山遺跡(青森県三戸町)	土器(晩期)	6点	③

宇田野(2)遺跡(弘前市)	土器(弥生)	1点	③
垂柳遺跡(青森県山田町)	土器(弥生)	2点	③
豊岡遺跡(岩手県岩手町)	土器(晩期)	25点	③
山王岡遺跡(栗原市)	土器(晩期)	11点	③
永根貝塚(宮城県松島町)	土器(晩期)	2点	③
天王寺遺跡(大崎市)	土器(晩期)	2点	③
北小松遺跡(大崎市)	土器(晩期)	1点	③
大沼遺跡(五所川原市)	蓋?(晩期)	1点	③
二枚橋(2)遺跡(むつ市)	蓋?(晩期)	1点	③
宮野貝塚(大船渡市)	蓋?(晩期)	1点	③
出土地不明	土器(晩期)	1点	③
八幡崎遺跡(平川市)	土器(晩期)	2点	③
亀ヶ岡遺跡(つがる市)	漆塗土器破片	13点	③
土井Ⅰ号遺跡(青森県板柳町)	土偶(晩期)	1点	③
二枚橋(2)遺跡(むつ市)	土偶(晩期)	5点	③
野口貝塚(三沢市)	土偶(晩期)	1点	③
薬師遺跡(弘前市)	土偶(晩期)	1点	③
観音林遺跡(五所川原市)	土偶(晩期)	3点	③
向様田D遺跡(北秋田市)	土偶(晩期)	12点	③
大洞貝塚(大船渡市)	土偶(晩期)	1点	③
沼津貝塚(石巻市)	土偶(晩期)	1点	③
豊岡遺跡(岩手県岩手町)	土偶(晩期)	5点	③
向様田A遺跡(北秋田市)	岩偶(晩期)	2点	③
観音林遺跡(五所川原市)	岩偶(晩期)	1点	③
二枚橋(2)遺跡(むつ市)	仮面(晩期)	7点	③
上尾駁遺跡(青森県六ヶ所村)	仮面(晩期)	1点	③
伊保内(岩手県九戸村)	仮面(晩期)	1点	③
羽黒平遺跡(青森市)	仮面(晩期)	1点	③
岩手県内	仮面(晩期)	1点	③
五月女落遺跡(五所川原市)	仮面(晩期)	1点	③
十腰内遺跡(弘前市)	土版(晩期)	1点	③
滝端遺跡(青森県階上町)	岩版(晩期)	1点	③
田子町内	土版(晩期)	1点	③
二枚橋(2)遺跡(むつ市)	岩版(晩期)	1点	③
向様田D遺跡(北秋田市)	岩版(晩期)	2点	③
二枚橋(2)遺跡(むつ市)	土版(晩期)	1点	③
薬師遺跡(弘前市)	岩版(晩期)	1点	③
宇鉄遺跡(青森県外ヶ浜町)	冠状石製品(晩期)	1点	③
滝端遺跡(青森県階上町)	冠状土製品(晩期)	1点	③
二枚橋(2)遺跡(むつ市)	冠状土製品(晩期)	2点	③
滝端遺跡(青森県階上町)	動物形付石製品(晩期)	1点	③
亀ヶ岡遺跡(つがる市)	独鈷石(晩期)	1点	③
向様田D遺跡(北秋田市)	異形石製品(晩期)	9点	③
宇鉄遺跡(青森県外ヶ浜町)	石刀(晩期)	2点	③
二枚橋(2)遺跡(むつ市)	石刀(晩期)	12点	③
宇鉄遺跡(青森県外ヶ浜町)	玉象嵌土製品	3点	③
薬師遺跡(弘前市)	土製装身具	2点	③
向様田D遺跡(北秋田市)	腕輪(貝輪を模した土製腕輪)	1点	③
泉山遺跡(青森県三戸町)	石製垂飾品	1点	③
滝端遺跡(青森県階上町)	土製耳飾り	1点	③
朝日山遺跡(青森市)	石製勾玉など	8点	③
向様田D遺跡(北秋田市)	石製勾玉など	7点	③
向様田D遺跡(北秋田市)	ボタン状石製品	7点	③
山王岡遺跡(栗原市)	漆塗り櫛	1点	③
大洞貝塚(大船渡市)	骨角・貝製装身具	9点	③
大洞貝塚(大船渡市)	石鏃を装着した根挟み	1点	③
大洞貝塚(大船渡市)	鹿角製装身具	1点	③
大洞貝塚(大船渡市)	骨簪・鹿角製品	5点	③
二枚橋(2)遺跡(むつ市)	鹿角製離頭鉗	6点	③
大洞貝塚(大船渡市)	釣針・ヤス・骨鏃など	17点	③

二枚橋(2)遺跡(むつ市)	円盤状土製品	5点	③
向様田A遺跡(北秋田市)	円盤状土製品	7点	③
向様田D遺跡(北秋田市)	土製スプーン	1点	③
滝端遺跡(青森県階上町)	石皿	1点	③
向様田A遺跡(北秋田市)	石皿	1点	③
山王岡遺跡(栗原市)	彩文監胎漆器	1点	③
山王岡遺跡(栗原市)	漆漙しの編布	1点	③
<b>研究報告第4集</b>			
野門貝塚(三沢市)	土器(晩期)	108点	④
今津遺跡・青森県埋蔵文化財調査センター調査区(青森県外ヶ浜町)	土器(晩期)	27点	④
豊岡遺跡(岩手県岩手町)	土器(晩期)	34点	④
槻ノ木遺跡(青森県平内町)	土器(晩期)	48点	④
亀ヶ岡遺跡(つがる市)	土器(晩期)	41点	④
八幡崎遺跡(平川市)	土器(晩期)	2点	④
土井Ⅰ号遺跡(青森県板柳町)	土器(晩期)	1点	④
青森県内	土器(晩期)	3点	④
<b>研究報告第5集</b>			
明戸遺跡(十和田市)	土器(晩期)	257点	⑤
宇鉄遺跡(青森県外ヶ浜町)	土器(晩期)	30点	⑤
宇鉄遺跡(青森県外ヶ浜町)	石刀(晩期)	3点	⑤
滝端遺跡(青森県階上町)	土器(晩期)	16点	⑤
寺下遺跡(青森県階上町)	土器(晩期)	1点	⑤
千曳遺跡(青森県東北町)	土器(晩期)	2点	⑤
陣場川原遺跡(青森県野辺地町)	土器(晩期)	1点	⑤
業師遺跡(弘前市)	土器(晩期)	6点	⑤
湯ノ沢遺跡(弘前市)	土器(弥生)	3点	⑤
大曲Ⅲ号遺跡(青森県鰺ヶ沢町)	土器(弥生)	1点	⑤
青鹿長根遺跡(三戸町)	土器(晩期)	1点	⑤
宮田遺跡(青森市)	土器(晩期)	1点	⑤
桂の沢遺跡(北秋田市)	土偶(遮光器土偶)	1点	⑤
天王寺遺跡(大崎市)	土器(晩期)	2点	⑤
北小松・西岩田遺跡(大崎市)	土器(晩期)	1点	⑤
<b>研究報告第6集</b>			
杉沢遺跡(青森県三戸町)	土器(晩期)	約1,800点(うち完形あるいは完形に近いもの290点)	⑥
杉沢遺跡(青森県三戸町)	土器(後期)	3点	⑥
杉沢遺跡(青森県三戸町)	土偶(晩期)	4点	⑥
杉沢遺跡(青森県三戸町)	円板状土製品	5点	⑥
杉沢遺跡(青森県三戸町)	匙形土製品	1点	⑥
杉沢遺跡(青森県三戸町)	蓋形土製品	1点	⑥
杉沢遺跡(青森県三戸町)	ミニチュア(超小型土器)	11点	⑥
杉沢遺跡(青森県三戸町)	岩偶(晩期)	2点	⑥
杉沢遺跡(青森県三戸町)	岩版(晩期)	1点	⑥
杉沢遺跡(青森県三戸町)	ボタン状石製品	1点	⑥
杉沢遺跡(青森県三戸町)	円板状土製品	7点	⑥
杉沢遺跡(青森県三戸町)	石刀	4点	⑥
杉沢遺跡(青森県三戸町)	石斧(超小型)	1点	⑥
杉沢遺跡(青森県三戸町)	石錐	6点	⑥
杉沢遺跡(青森県三戸町)	石匙	11点	⑥
杉沢遺跡(青森県三戸町)	石鏃	25点	⑥
杉沢遺跡(青森県三戸町)	不定形石器	11点	⑥
杉沢遺跡(青森県三戸町)	石斧(磨製)	3点	⑥
杉沢遺跡(青森県三戸町)	敲石	1点	⑥
杉沢遺跡(青森県三戸町)	磨石	2点	⑥
杉沢遺跡(青森県三戸町)	凹石	5点	⑥

杉沢遺跡(青森県三戸町)	石皿	1点	⑥
<b>研究報告第7集</b>			
田の沢(3)遺跡(青森県東北町)	土器(晩期)	1点	⑦
堀合Ⅱ号遺跡(平川市)	土偶(中期)	1点	⑦
業師遺跡(弘前市)	土器(晩期)	5点	⑦
業師遺跡(弘前市)	岩版(晩期)	1点	⑦
観音林遺跡(五所川原市)	土器(晩期)	1点	⑦
観音林遺跡(五所川原市)	ミニチュア(超小型土器)	3点	⑦
観音林遺跡(五所川原市)	匙形土製品	1点	⑦
杉沢遺跡(青森県三戸町)	土器(晩期)	5点	⑦
里浜貝塚(東松島市)	土器(晩期)	1点	⑦
大久保遺跡(青森県五戸町)	顔面付土器(中期)	1点	⑦
遺跡不明(愛知県陶磁資料館蔵)	彩文土器(晩期)	1点	⑦
永根貝塚(宮城県松島町)	彩文土器(晩期)	1点	⑦
高梨遺跡(岩手県岩手町)	土偶(遮光器土偶)	1点	⑦
長者屋敷遺跡(八幡平市)	土偶(遮光器土偶)	1点	⑦
野門貝塚(三沢市)	土偶(遮光器土偶)	2点	⑦
業師遺跡(弘前市)	土偶(遮光器土偶)	1点	⑦
亀ヶ岡遺跡(つがる市)	土偶(結髪土偶)	1点	⑦
遺跡不明(岩手県立博物館蔵)	仮面(土製仮面)	1点	⑦
道地遺跡(青森県七戸町)	岩偶(晩期)	1点	⑦
道前遺跡(青森県田子町)	岩偶(晩期)	1点	⑦
是川中居遺跡(八戸市)	岩偶(晩期)	3点	⑦
観音林遺跡(五所川原市)	岩偶(晩期)	1点	⑦

## Ⅱ部-遺跡のアイウエオ順の索引

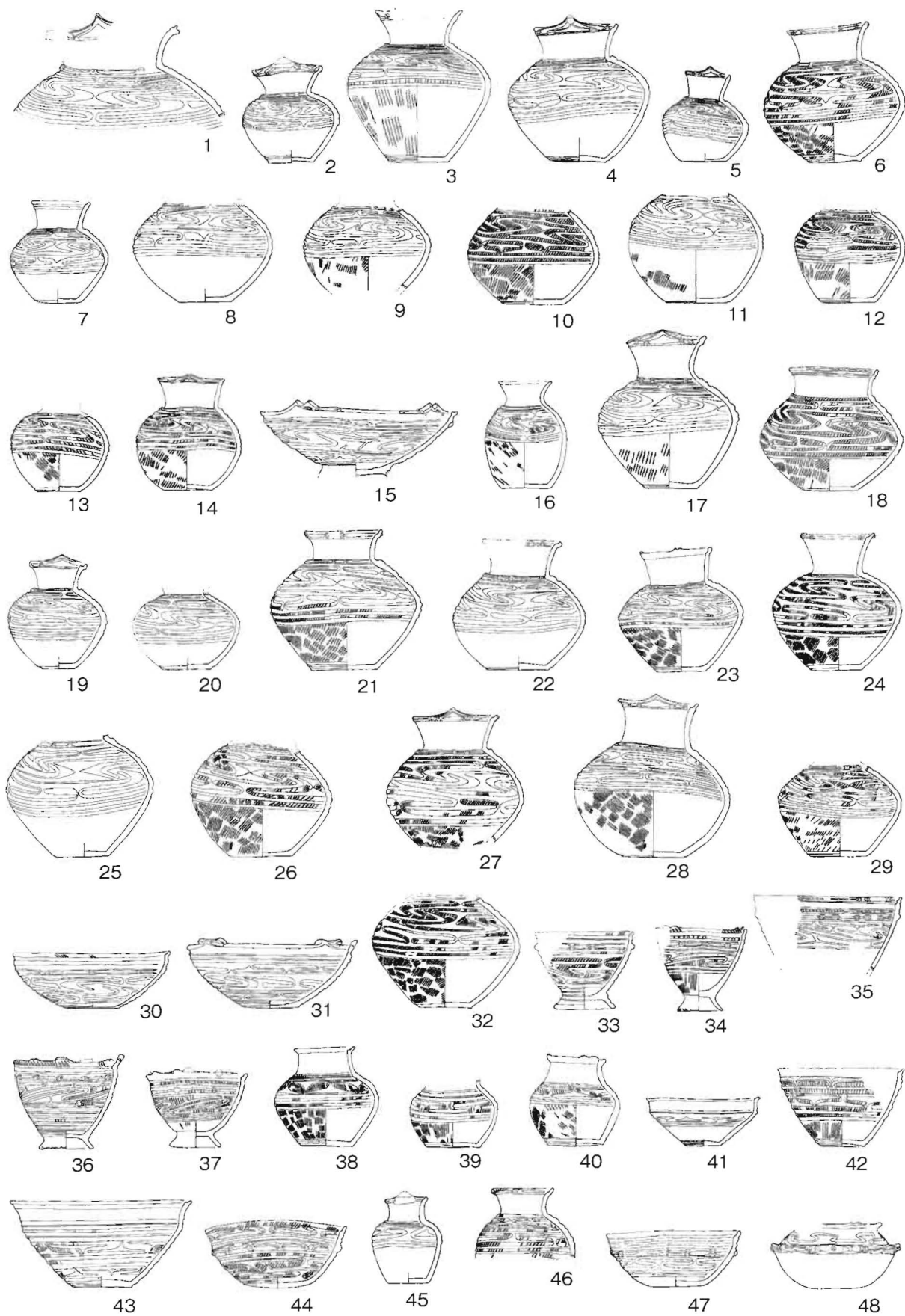
<b>アイウエオ順</b>			
青鹿長根遺跡(青森県三戸町)	土器(晩期)	1点	⑤
明戸遺跡(十和田市)	土器(晩期)	257点	⑤
伊保内(岩手県九戸村)	仮面(土製仮面)	1点	①
今津遺跡(青森県外ヶ浜町)	仮面(土製仮面)	1点	①
今津遺跡・青森県埋蔵文化財調査センター調査区(青森県外ヶ浜町)	土器(晩期)	27点	④
今津遺跡・平館村調査区(青森県外ヶ浜町)	土器(晩期)	22点	②
今津遺跡・弘前大学調査区(青森県外ヶ浜町)	土器(晩期)	226点	②
今津遺跡・弘前大学調査区(青森県外ヶ浜町)	製塩土器(晩期)	8点	②
今津遺跡・弘前大学調査区(青森県外ヶ浜町)	土器(後期)	1点	②
今津遺跡・弘前大学調査区(青森県外ヶ浜町)	円板状土製品	6点	②
今津遺跡・弘前大学調査区(青森県外ヶ浜町)	土偶	2点	②
今津遺跡・弘前大学調査区(青森県外ヶ浜町)	ミニチュア(超小型土器)	2点	②
宇鉄遺跡(青森県外ヶ浜町)	土器(晩期)	30点	⑤
宇鉄遺跡(青森県外ヶ浜町)	石刀(晩期)	3点	⑤
大久保遺跡(青森県五戸町)	顔面付土器(中期)	1点	⑦
大曲Ⅲ号遺跡(青森県鰺ヶ沢町)	土器(弥生)	1点	⑤
桂ノ沢遺跡(北秋田市)	土偶(遮光器土偶)	1点	⑤
亀ヶ岡遺跡(つがる市)	土器(晩期)	41点	④
亀ヶ岡遺跡(つがる市)	土偶(結髪土偶)	1点	⑦
(伝)亀ヶ岡遺跡(つがる市)	仮面(土製仮面)	1点	①





土器（晩期）	2点	天王寺遺跡（大崎市）	⑤
土器（晩期）	1点	土井Ⅰ号遺跡（青森県板柳町）	④
土器（晩期）	34点	豊岡遺跡（岩手県岩手町）	④
彩文土器（晩期）	1点	永根貝塚（宮城県松島町）	⑦
土器（晩期）	107点	二枚橋（2）遺跡（むつ市）	①
土器（晩期）	108点	野口貝塚（三沢市）	④
土器（晩期）	42点	野里遺跡（岩手県一戸町）	①
土器（晩期）	1点	宮田遺跡（青森市）	⑤
土器（晩期）	6点	薬師遺跡（弘前市）	⑤
土器（晩期）	5点	薬師遺跡（弘前市）	⑦
土器（晩期）	2点	八幡崎遺跡（平川市）	④
彩文土器（晩期）	1点	遺跡不明（愛知県陶磁資料館蔵）	⑦
製塩土器（晩期）	8点	今津遺跡・弘前大学調査区（青森県外ヶ浜町）	②
土器（弥生）	1点	大曲Ⅲ号遺跡（青森県鯉ヶ沢町）	⑤
土器（弥生）	3点	湯ノ沢遺跡（弘前市）	⑤
<b>土偶</b>			
土偶	2点	今津遺跡・弘前大学調査区（青森県外ヶ浜町）	②
土偶（遮光器土偶）	1点	桂の沢遺跡（北秋田市）	⑤
土偶（結髪土偶）	1点	亀ヶ岡遺跡（つがる市）	⑦
土偶	20点	観音林遺跡（五所川原市）	①
土偶（晩期）	4点	杉沢遺跡（青森県三戸町）	⑥
土偶（遮光器土偶）	1点	高梨遺跡（岩手県岩手町）	⑦
土偶（遮光器土偶）	1点	長者屋敷遺跡（八幡平市）	⑦
土偶	151点	二枚橋（2）遺跡（むつ市）	①
土偶（遮光器土偶）	2点	野口貝塚（三沢市）	⑦
土偶	5点	野里遺跡（岩手県一戸町）	①
土偶（中期）	1点	堀合Ⅱ号遺跡（平川市）	⑦
土偶（遮光器土偶）	1点	薬師遺跡（弘前市）	⑦
<b>仮面</b>			
仮面（土製仮面）	1点	伊保内（岩手県九戸村）	①
仮面（土製仮面）	1点	今津遺跡（青森県外ヶ浜町）	①
仮面（土製仮面）	1点	（伝）亀ヶ岡遺跡（つがる市）	①
仮面（土製仮面）	1点	虚空蔵遺跡（青森県南部町）	①
仮面（土製仮面）	1点	千苺（1）遺跡（五所川原市）	①
仮面（土製仮面）	1点	五月女落遺跡（五所川原市）	①
仮面（土製仮面）	1点	鳥舌内（青森県南部町）	①
仮面（土製仮面）	20点	二枚橋（2）遺跡（むつ市）	①
仮面（土製仮面）	1点	羽黒平遺跡（青森市）	①
仮面（土製仮面）	1点	山井遺跡（岩手県一戸町）	①
仮面（土製仮面）	1点	遺跡不明（岩手県立博物館蔵）	⑦
<b>土製品</b>			
ミニチュア（超小型土器）	2点	今津遺跡・弘前大学調査区（青森県外ヶ浜町）	②
ミニチュア（超小型土器）	3点	観音林遺跡（五所川原市）	⑦
ミニチュア（超小型土器）	11点	杉沢遺跡（青森県三戸町）	⑥
円板状土製品	6点	今津遺跡・弘前大学調査区（青森県外ヶ浜町）	②
円板状土製品	5点	杉沢遺跡（青森県三戸町）	⑥
匙形土製品	1点	野里遺跡（岩手県一戸町）	①
匙形土製品	1点	杉沢遺跡（青森県三戸町）	⑥
匙形土製品	1点	観音林遺跡（五所川原市）	⑦
蓋形土製品	1点	杉沢遺跡（青森県三戸町）	⑥
中空土製品	1点	野里遺跡（岩手県一戸町）	①
<b>岩偶</b>			
岩偶	1点	観音林遺跡（五所川原市）	①
岩偶（晩期）	1点	観音林遺跡（五所川原市）	⑦
岩偶（晩期）	3点	是川中居遺跡（八戸市）	⑦
岩偶（晩期）	2点	杉沢遺跡（青森県三戸町）	⑥
岩偶（晩期）	1点	道地遺跡（青森県七戸町）	⑦
岩偶（晩期）	1点	道前遺跡（青森県田子町）	⑦
<b>岩版</b>			
岩版（晩期）	1点	杉沢遺跡（青森県三戸町）	⑥
岩版（晩期）	1点	薬師遺跡（弘前市）	⑦
<b>石刀（石剣）</b>			
石刀（晩期）	3点	宇鉄遺跡（青森県外ヶ浜町）	⑤
石刀	4点	杉沢遺跡（青森県三戸町）	⑥
石刀・石剣	19点	観音林遺跡（五所川原市）	①
石刀・石剣	41点	是川中居遺跡（八戸市）	①
石刀・石剣	116点	二枚橋（2）遺跡（むつ市）	①
<b>石製品</b>			
ボタン状石製品	1点	杉沢遺跡（青森県三戸町）	⑥
円板状石製品	7点	杉沢遺跡（青森県三戸町）	⑥
<b>石器</b>			
石錐	6点	杉沢遺跡（青森県三戸町）	⑥
石匙	11点	杉沢遺跡（青森県三戸町）	⑥
石鏃	25点	杉沢遺跡（青森県三戸町）	⑥
石斧（超小型）	1点	杉沢遺跡（青森県三戸町）	⑥
石斧（磨製）	3点	杉沢遺跡（青森県三戸町）	⑥
敲石	1点	杉沢遺跡（青森県三戸町）	⑥
磨石	2点	杉沢遺跡（青森県三戸町）	⑥
凹石	5点	杉沢遺跡（青森県三戸町）	⑥
不定形石器	11点	杉沢遺跡（青森県三戸町）	⑥
<b>石皿</b>			
石皿	1点	杉沢遺跡（青森県三戸町）	⑥

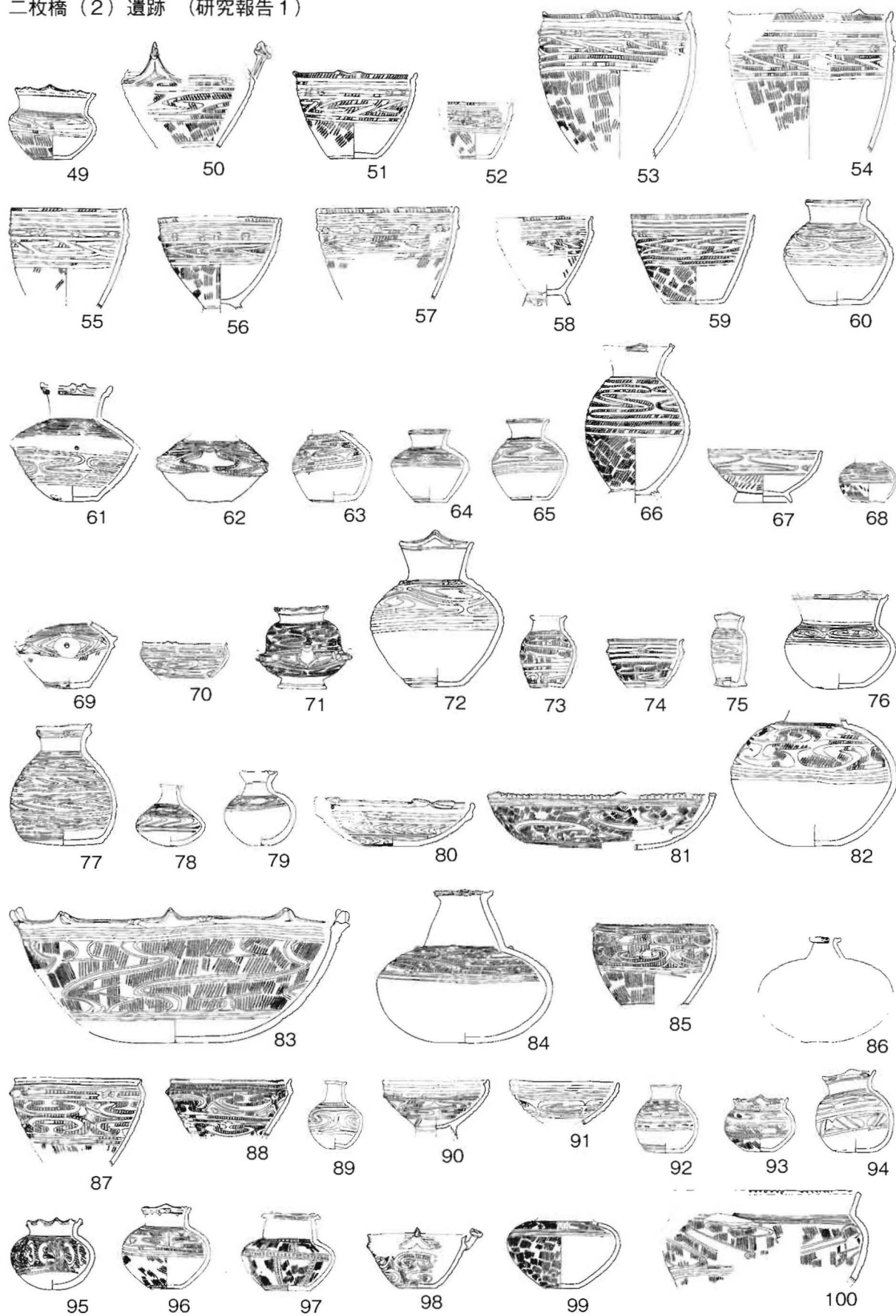
二枚橋（2）遺跡（研究報告1）



土器

土器 二枚橋（2）遺跡

二枚橋（2）遺跡（研究報告1）



土器

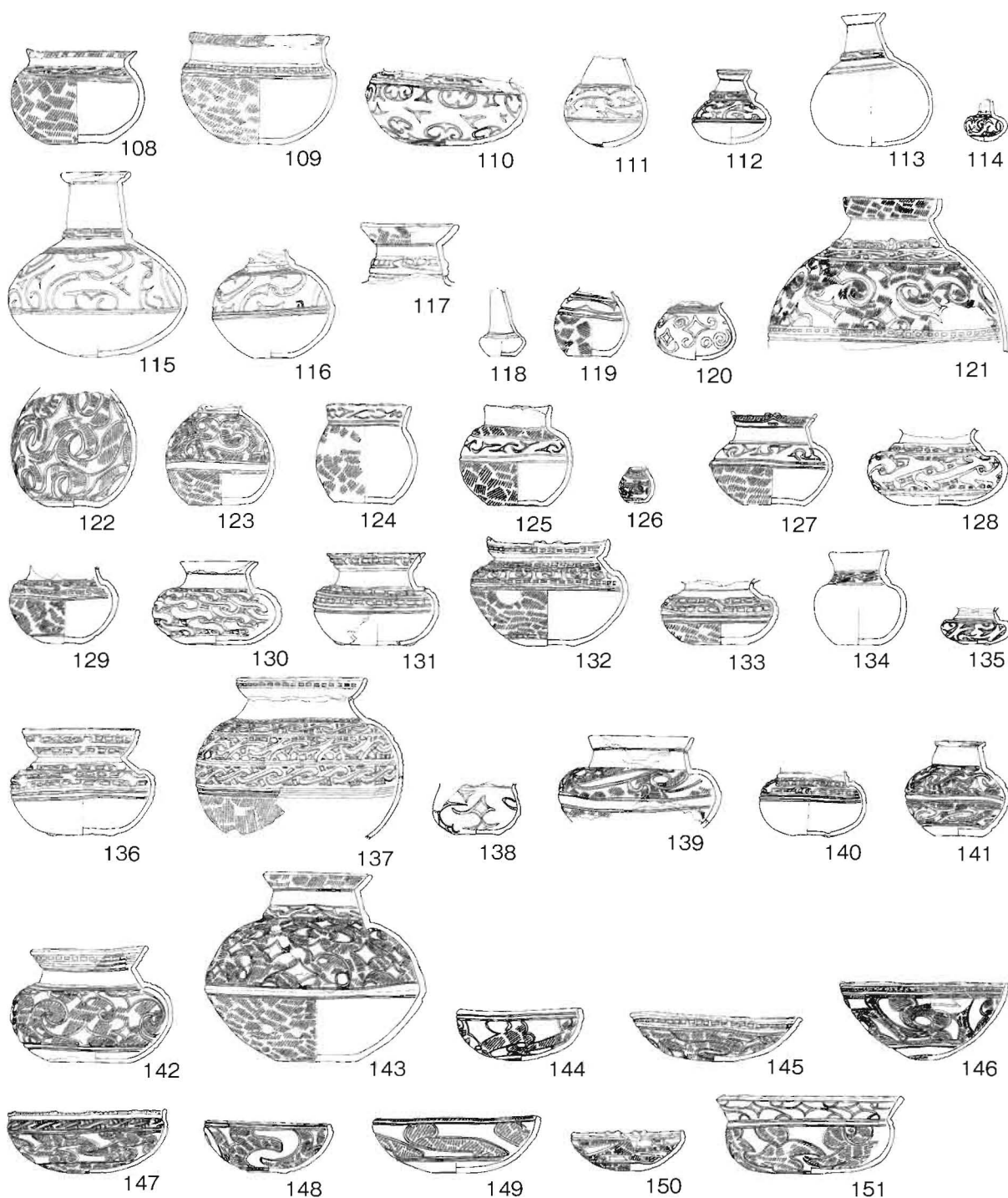
土器 二枚橋（2）遺跡



二枚橋（2）遺跡（研究報告1）



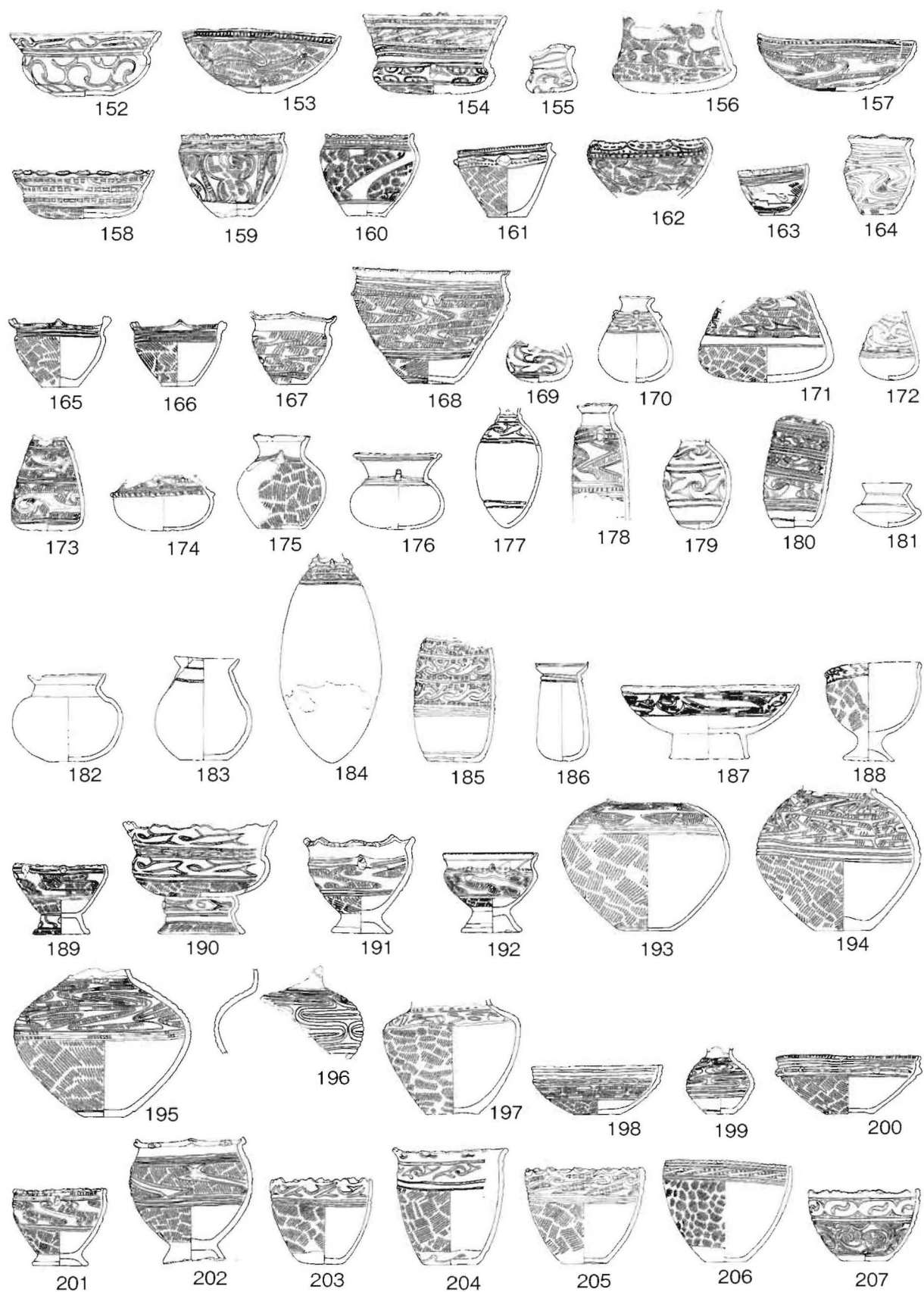
是川中居遺跡（研究報告1）



土器

土器 二枚橋（2）・是川中居遺跡

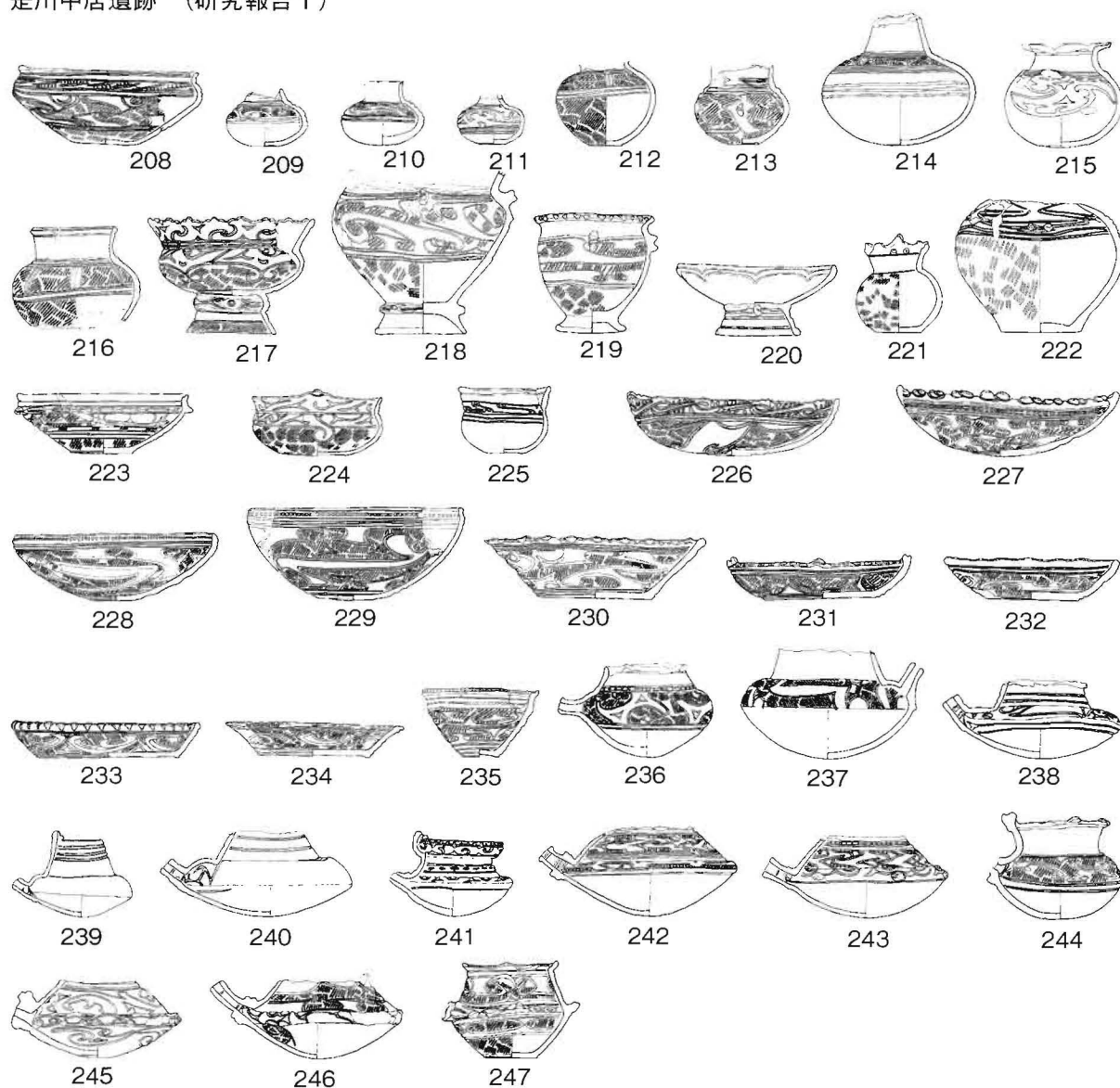
是川中居遺跡（研究報告1）



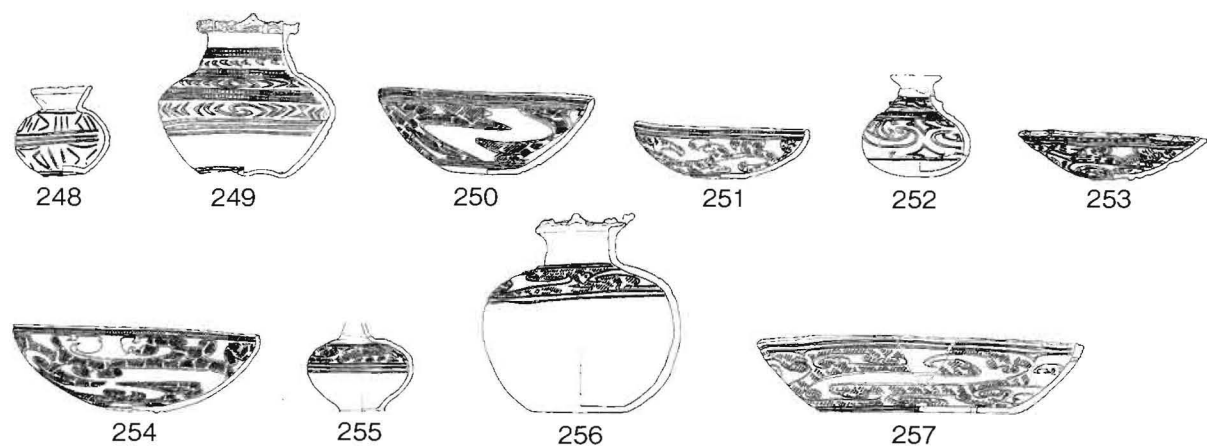
土器

土器 是川中居遺跡

是川中居遺跡（研究報告1）



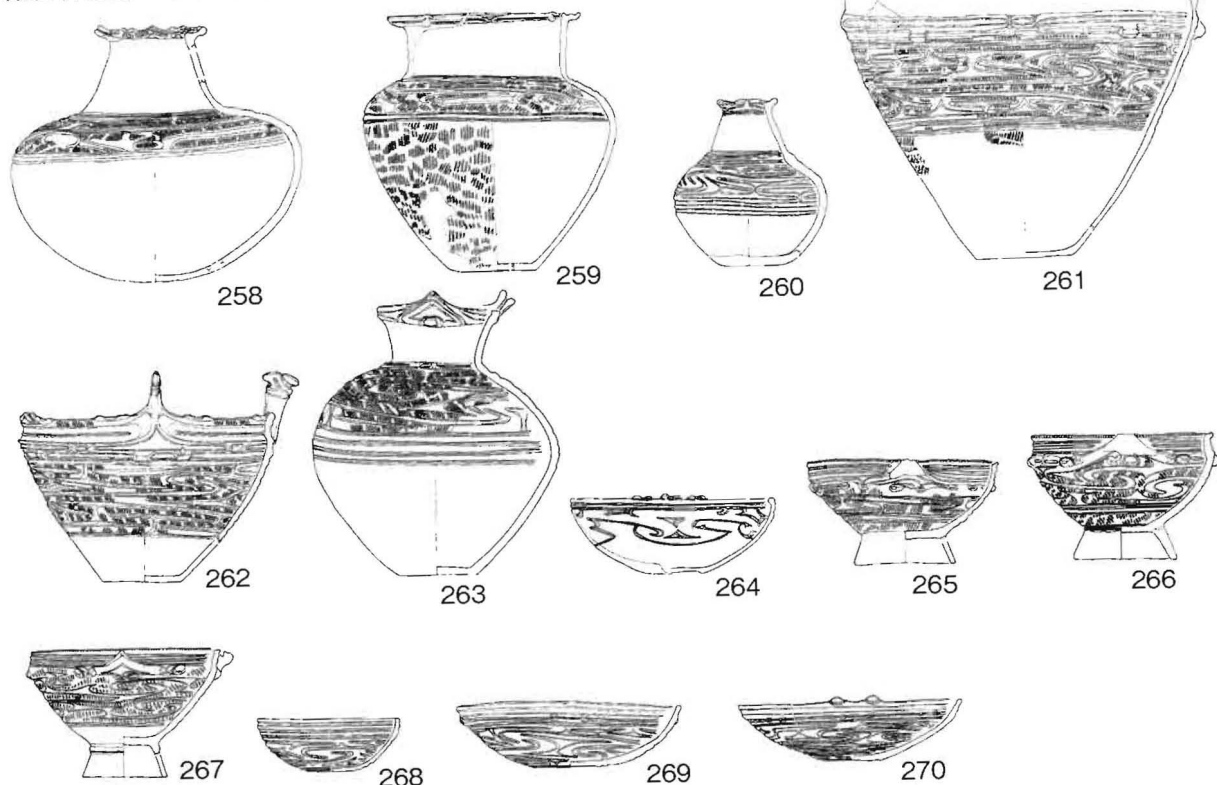
觀音林遺跡（研究報告1）



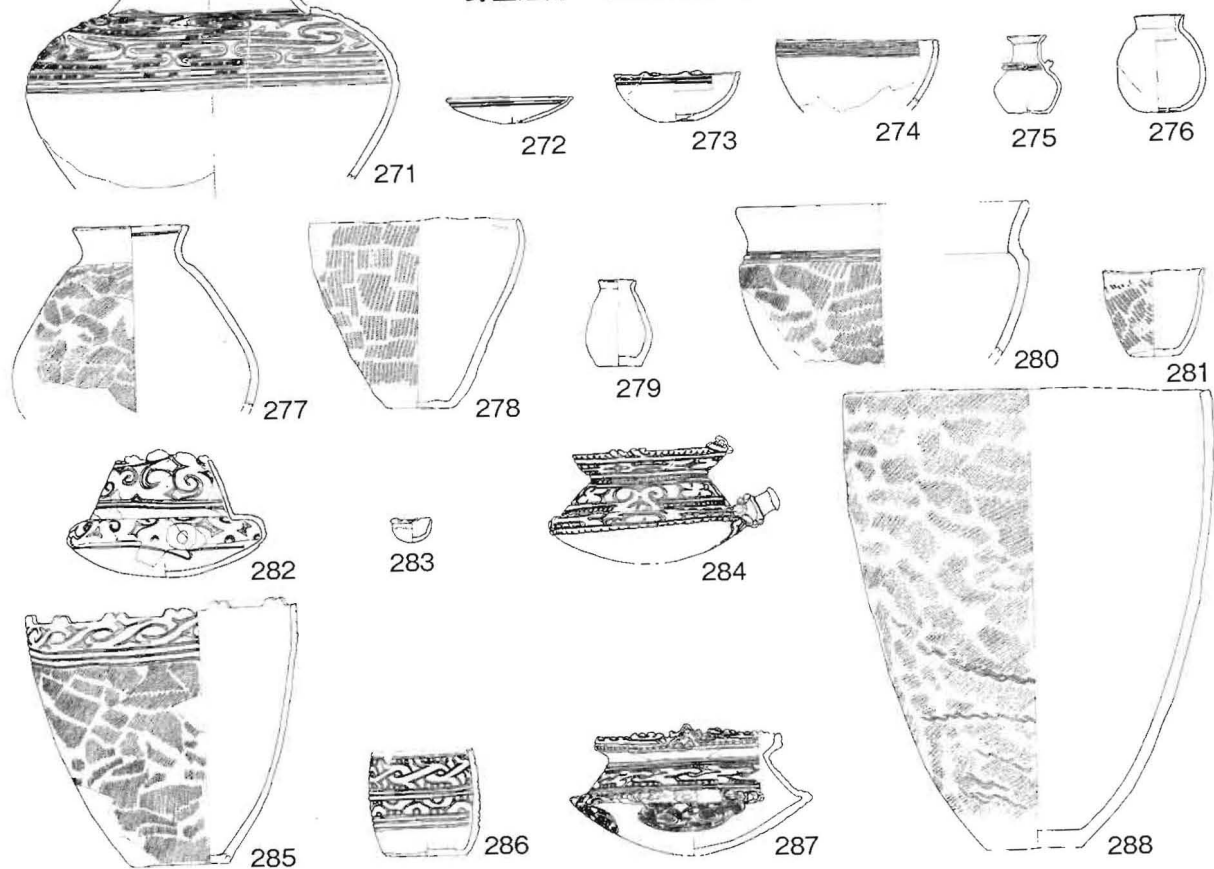
土器 是川中居・觀音林遺跡



觀音林遺跡 (研究報告 1)



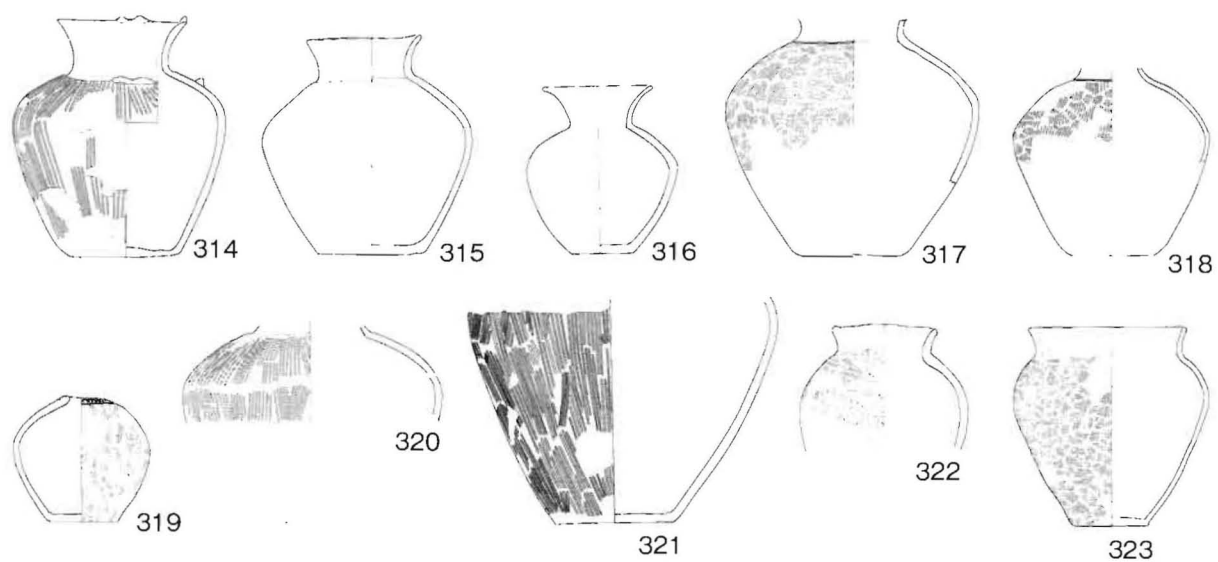
野里遺跡 (研究報告 1)



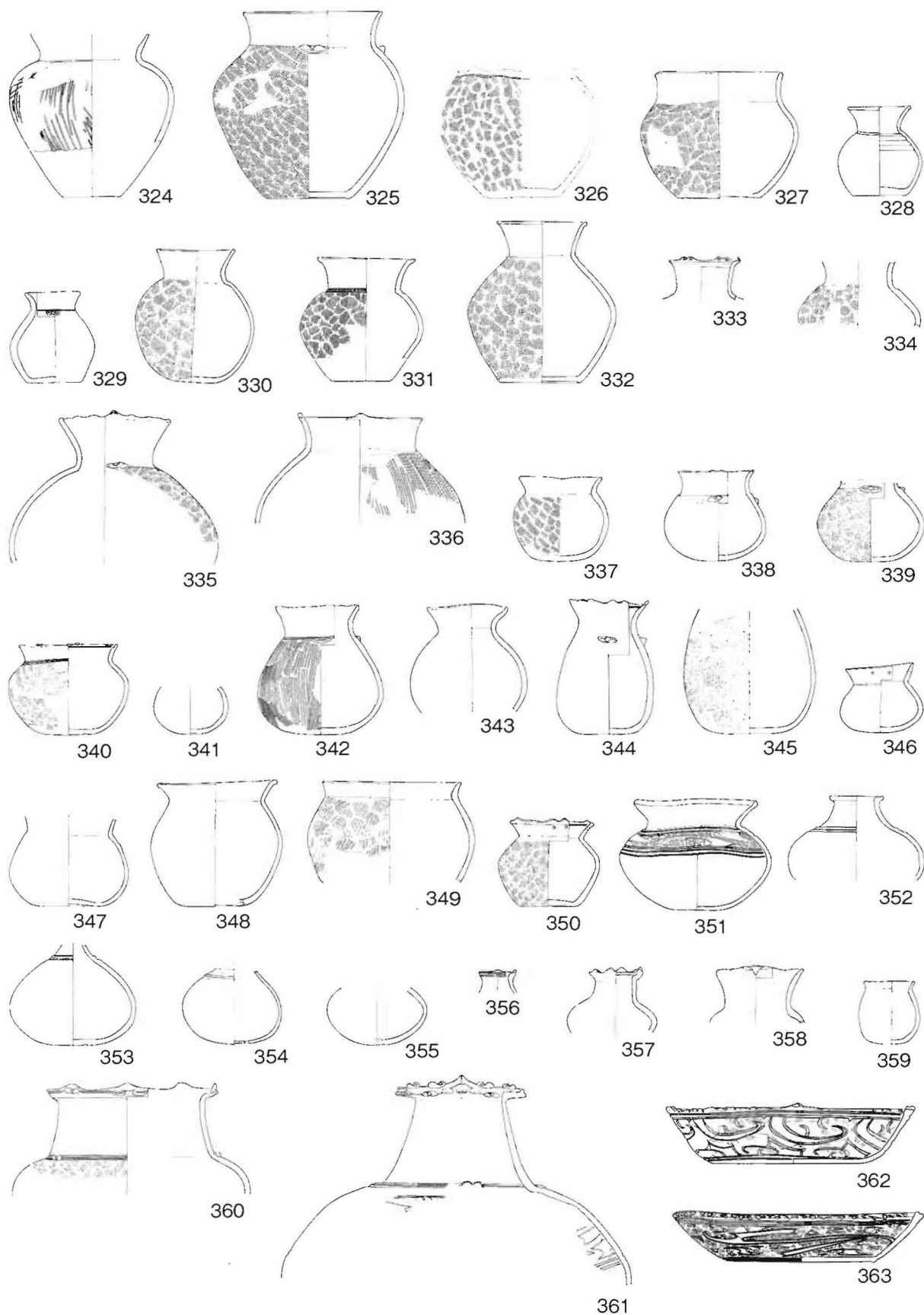
野里遺跡 (研究報告1)



今津遺跡 (弘大調査区) (研究報告2)



今津遺跡（弘大調査区）（研究報告2）

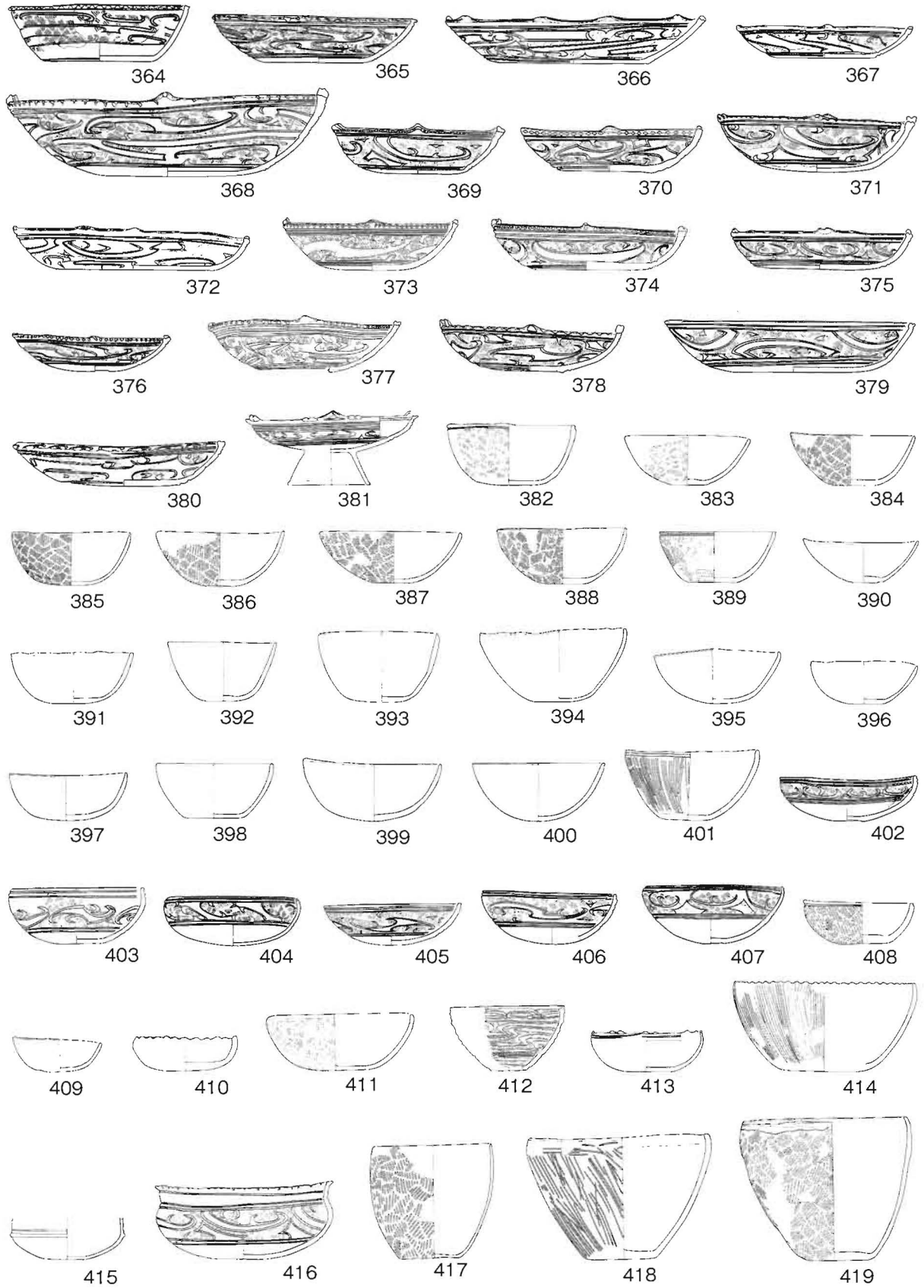


土器

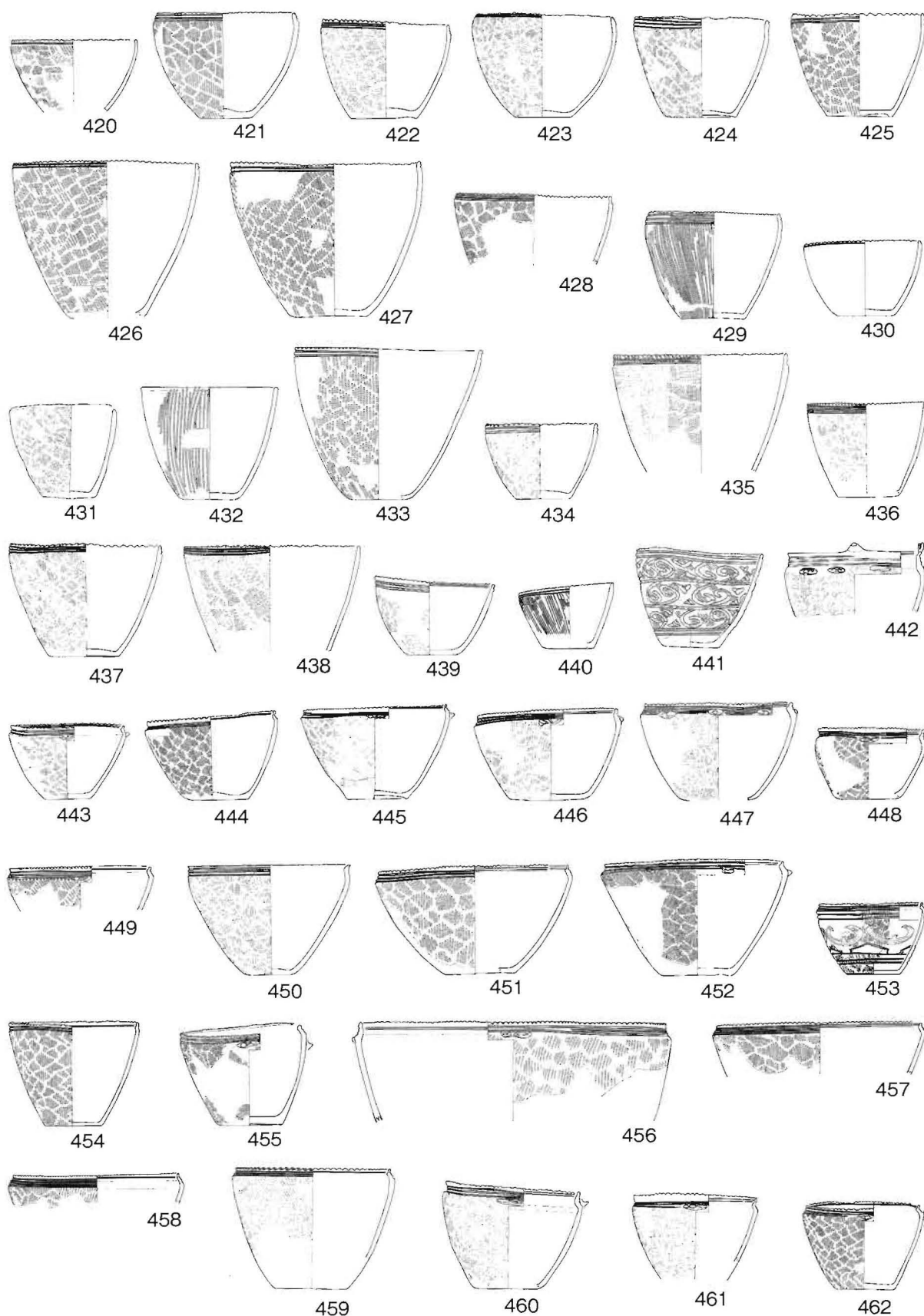
土器 今津遺跡



今津遺跡（弘大調査区）（研究報告2）

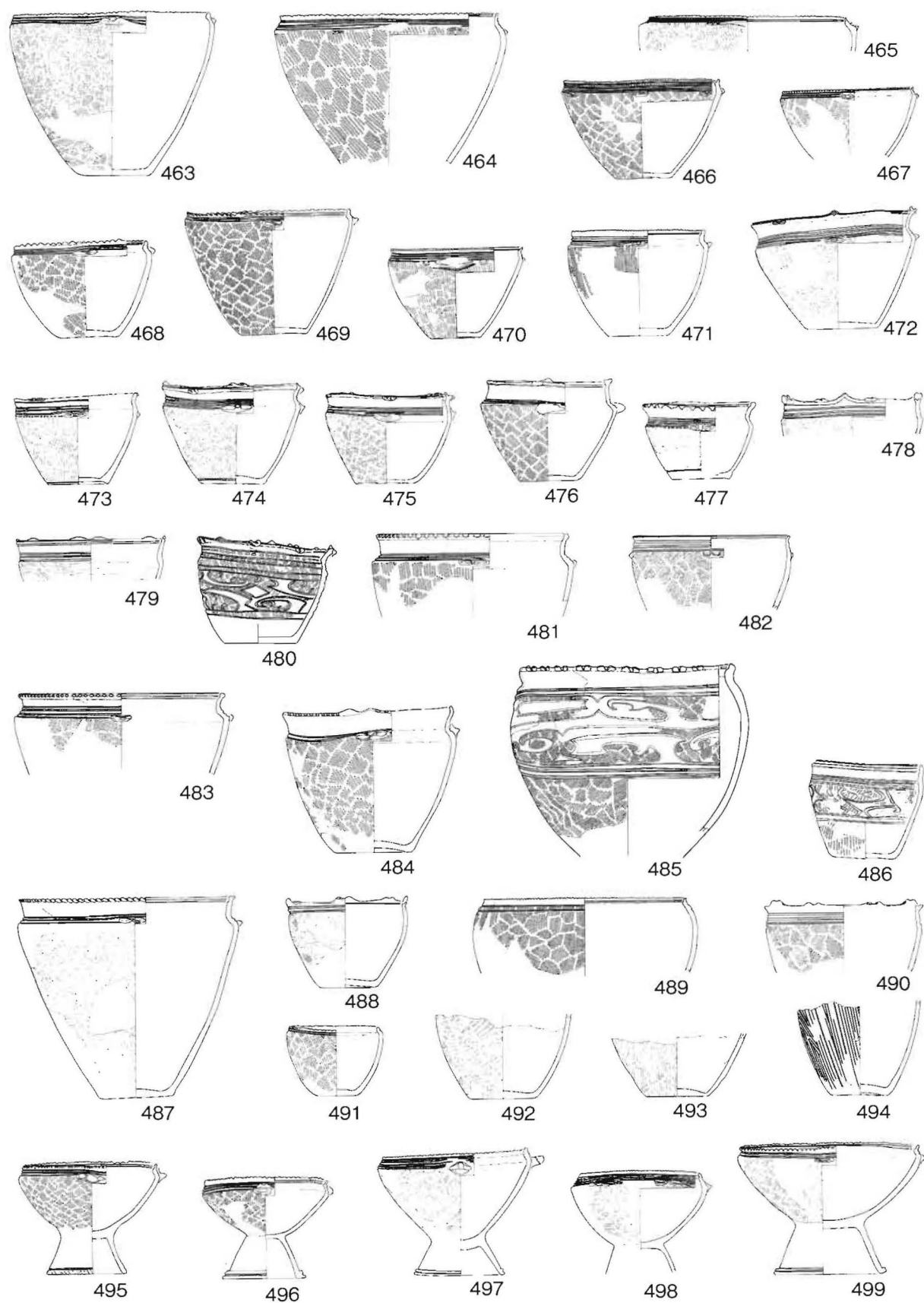


土器 今津遺跡



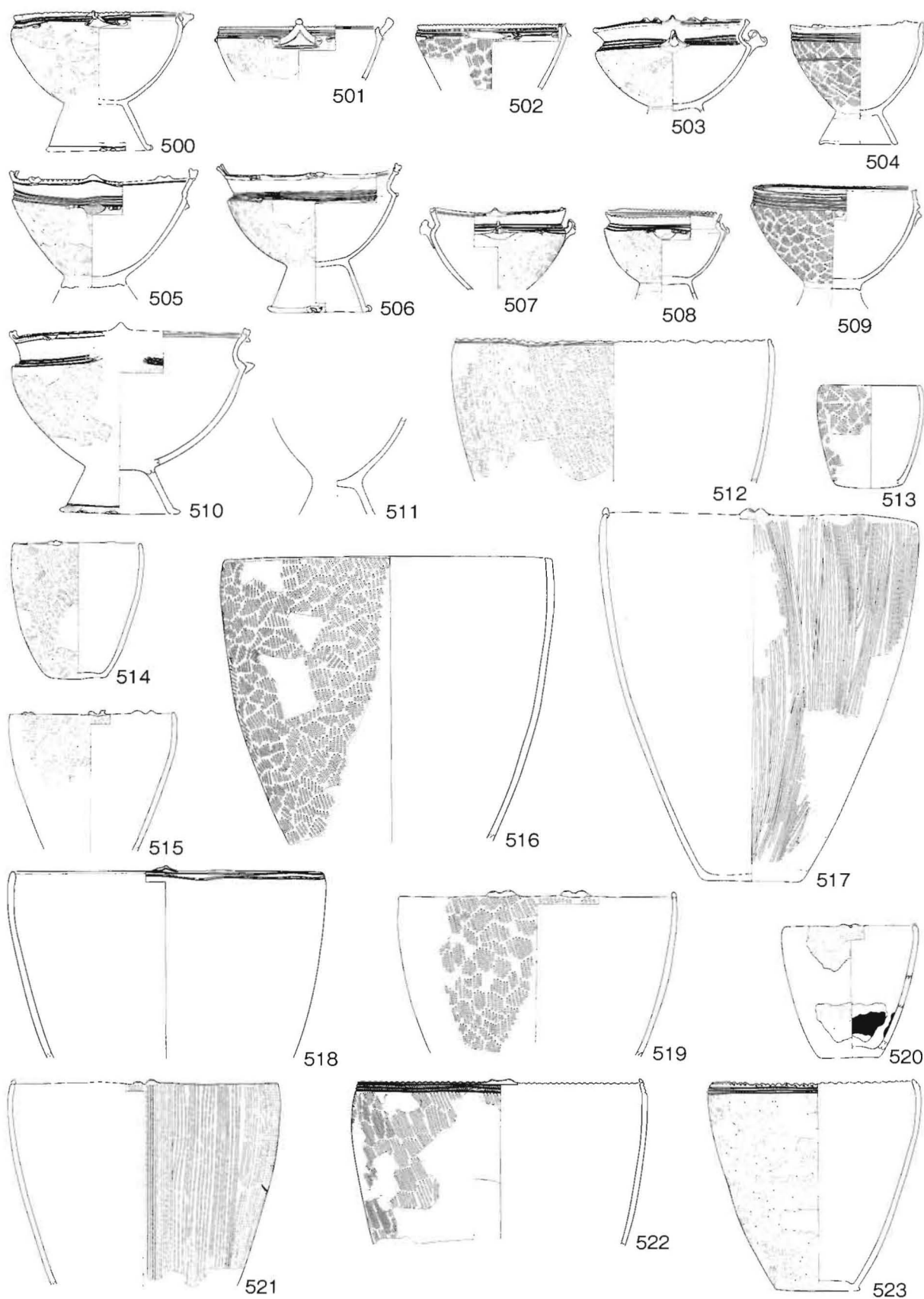
土器

今津遺跡（弘大調査区）（研究報告2）



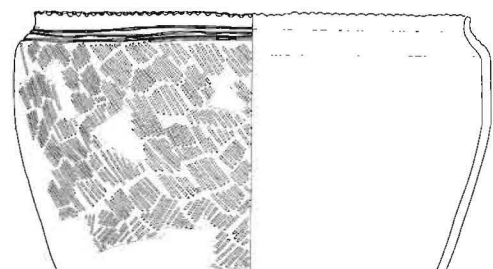
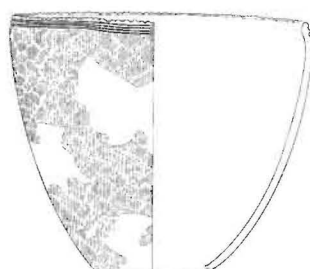
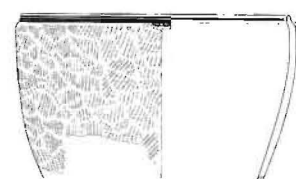
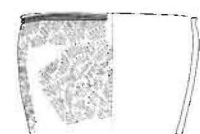
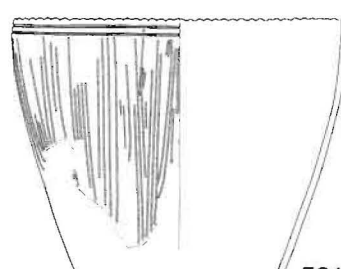
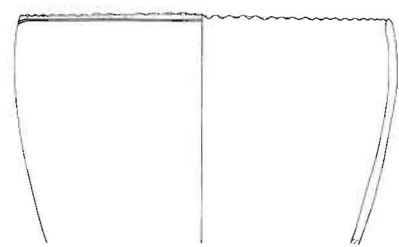
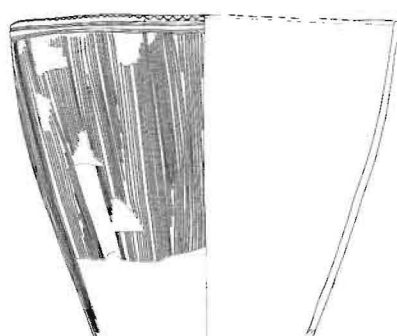
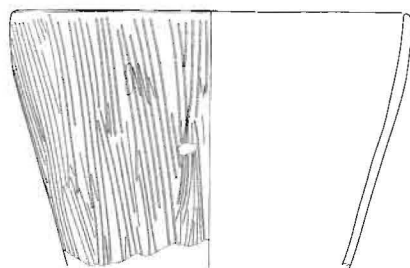
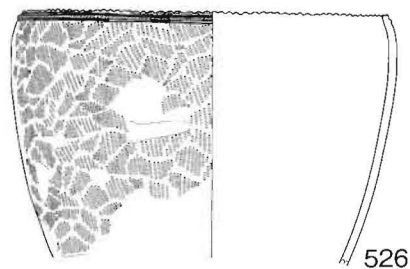
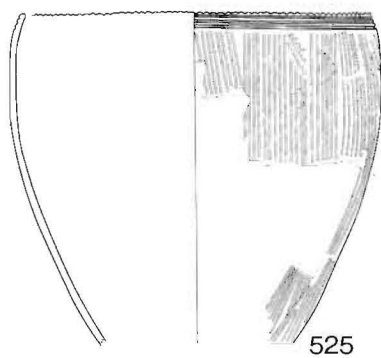
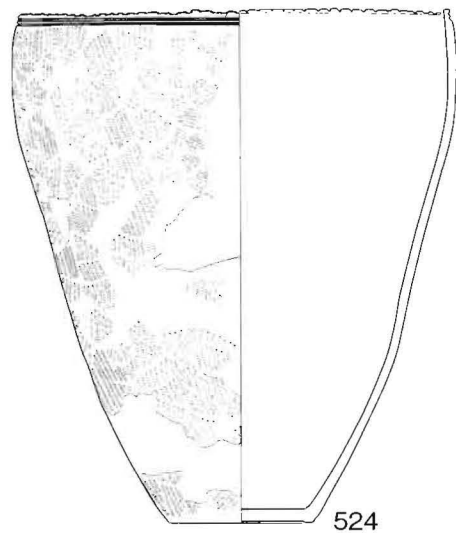
土器 今津遺跡



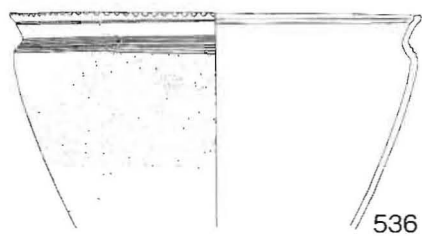


土器

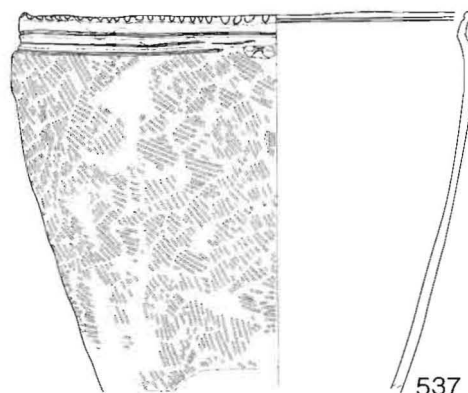
土器 今津遺跡



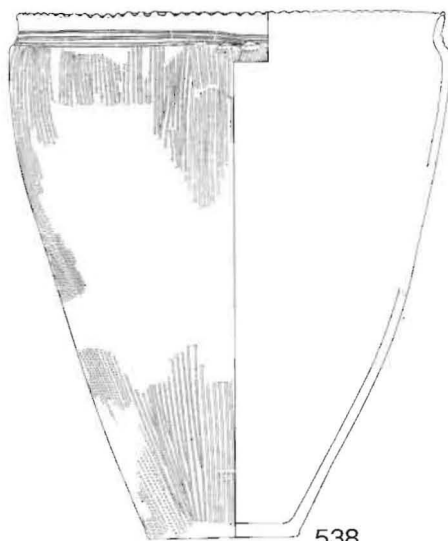
今津遺跡（弘大調査区）（研究報告2）



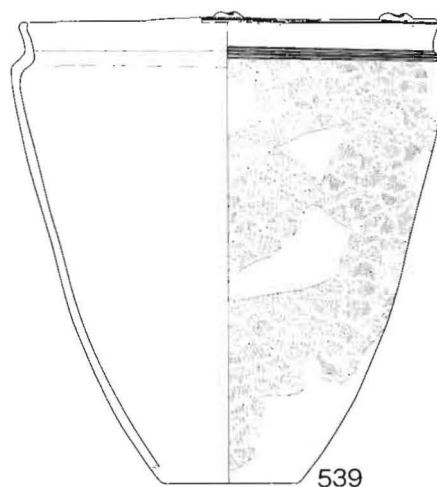
536



537



538

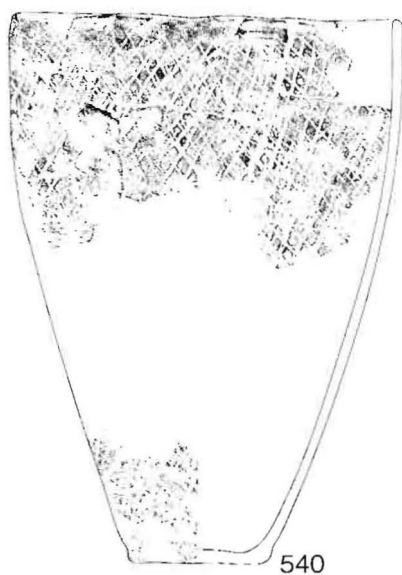


539

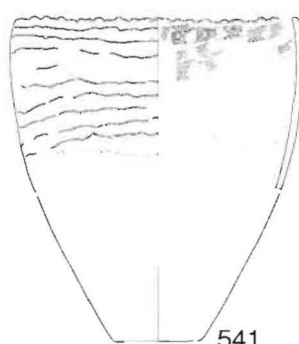
土器

今津遺跡（弘大調査区）（製塩土器）（研究報告2）

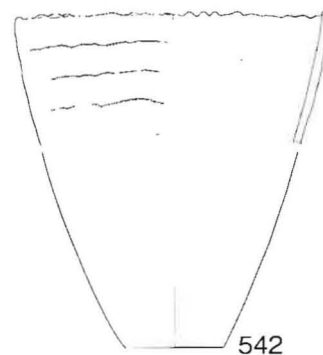
今津遺跡（弘大調査区）  
（後期）（研究報告2）



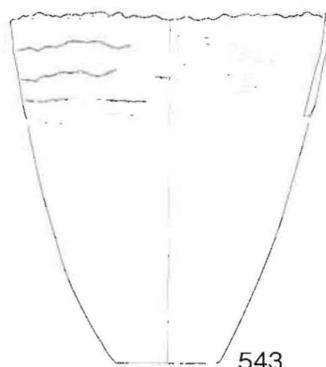
540



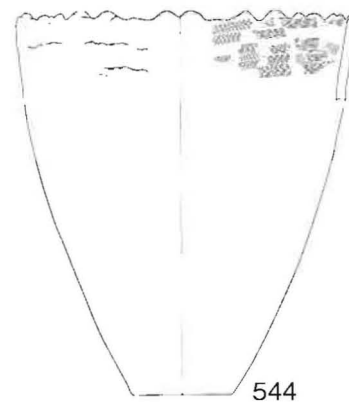
541



542



543

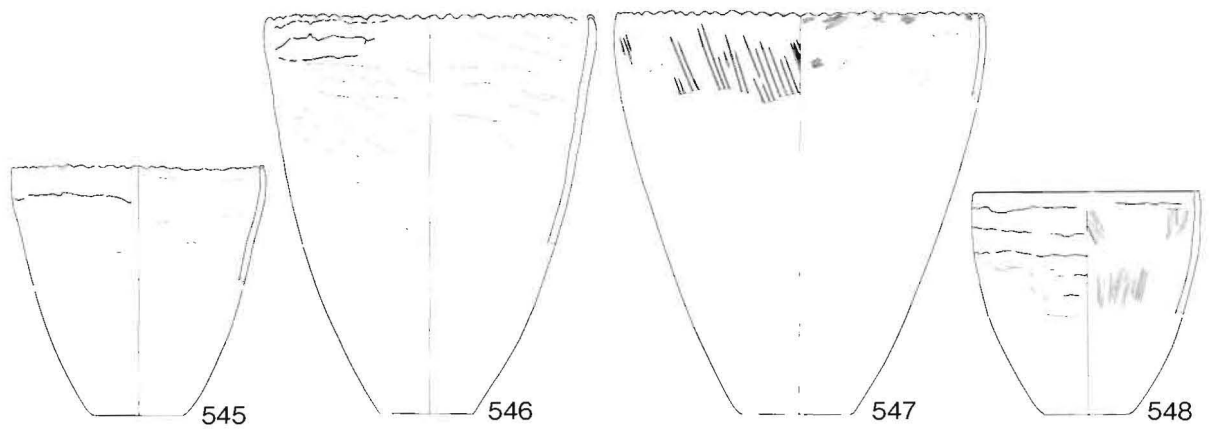


544

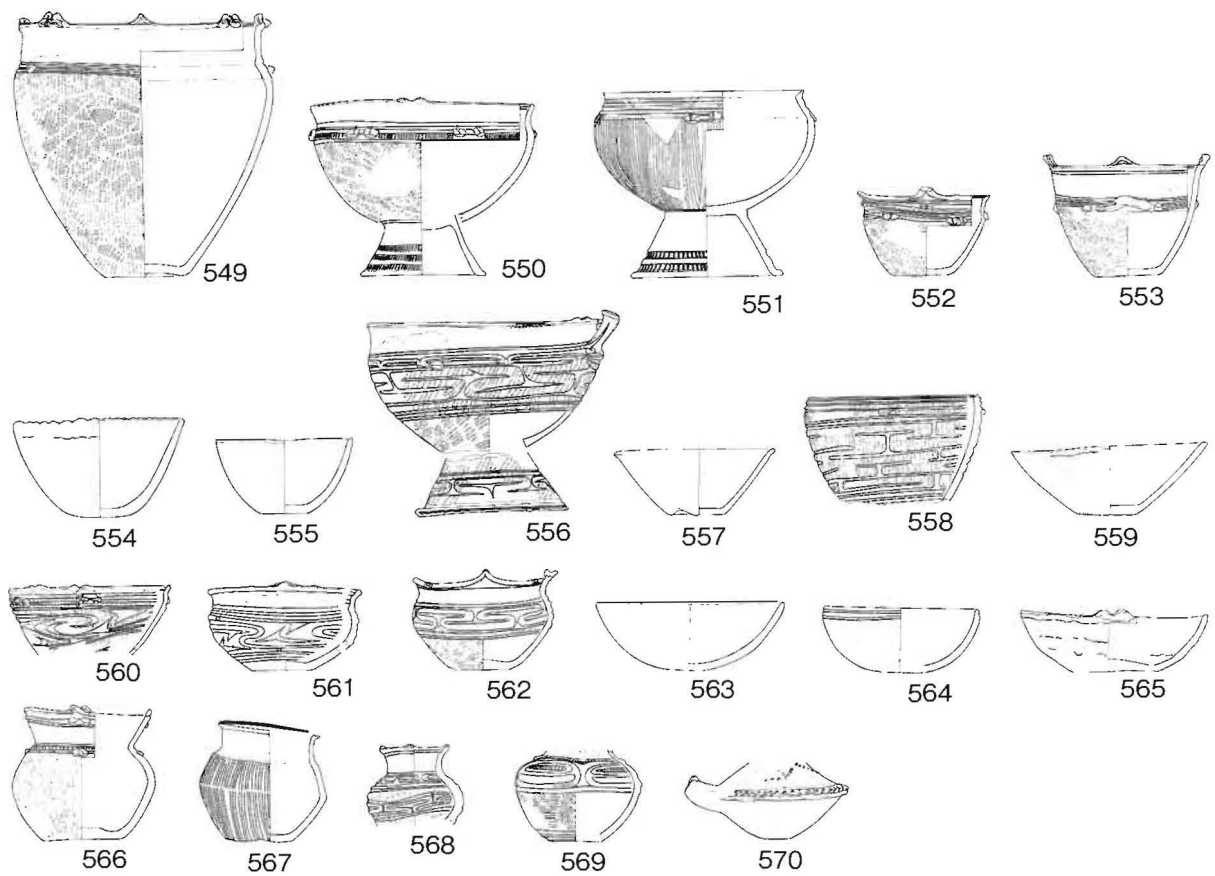
土器・製塩土器 今津遺跡



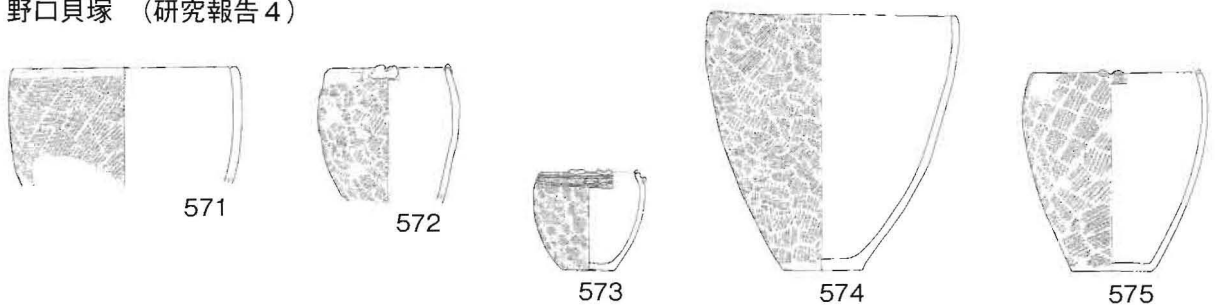
今津遺跡（弘大調査区）（製塩土器）（研究報告2）



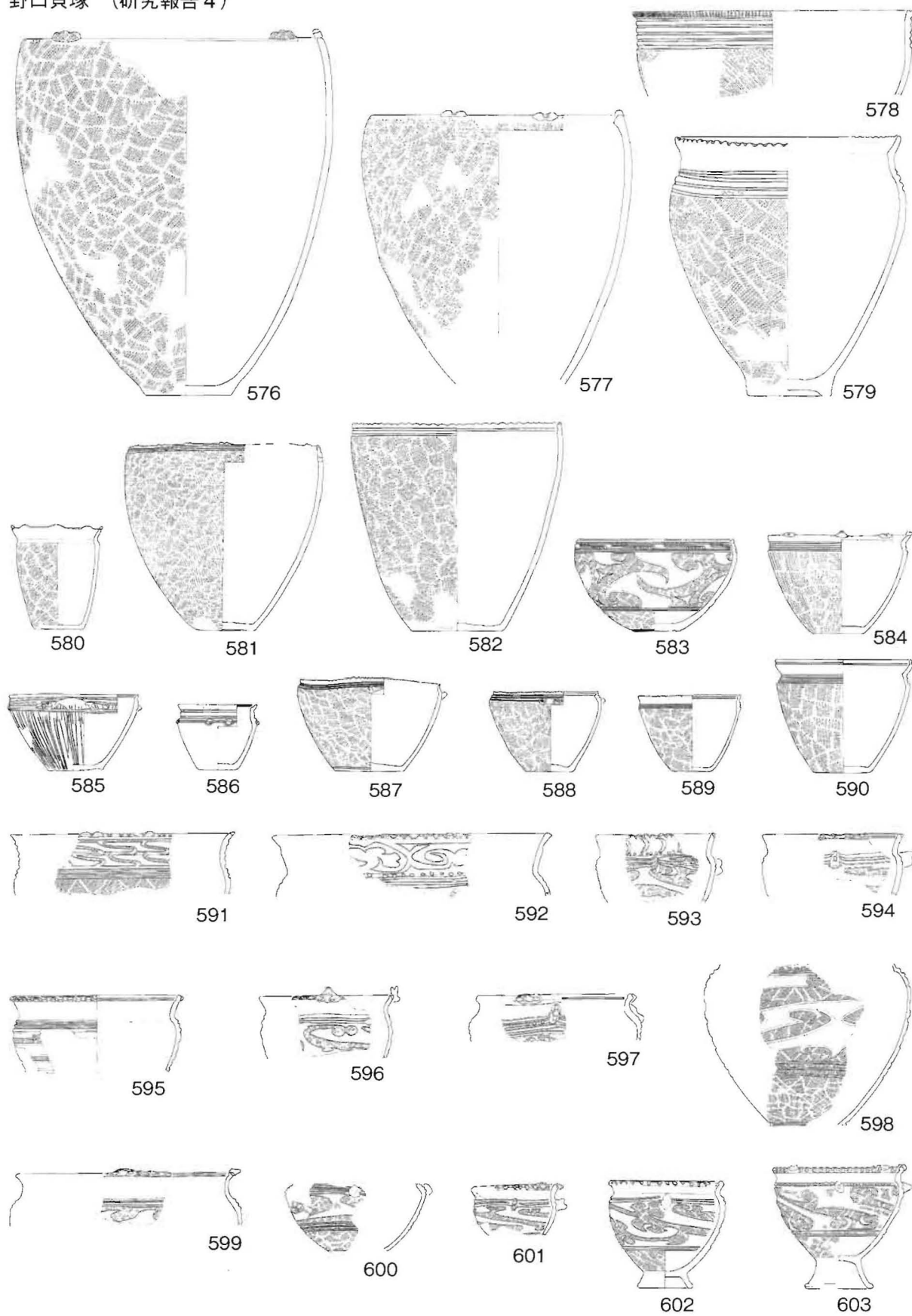
今津遺跡（平館村調査区）（研究報告2）



野口貝塚（研究報告4）

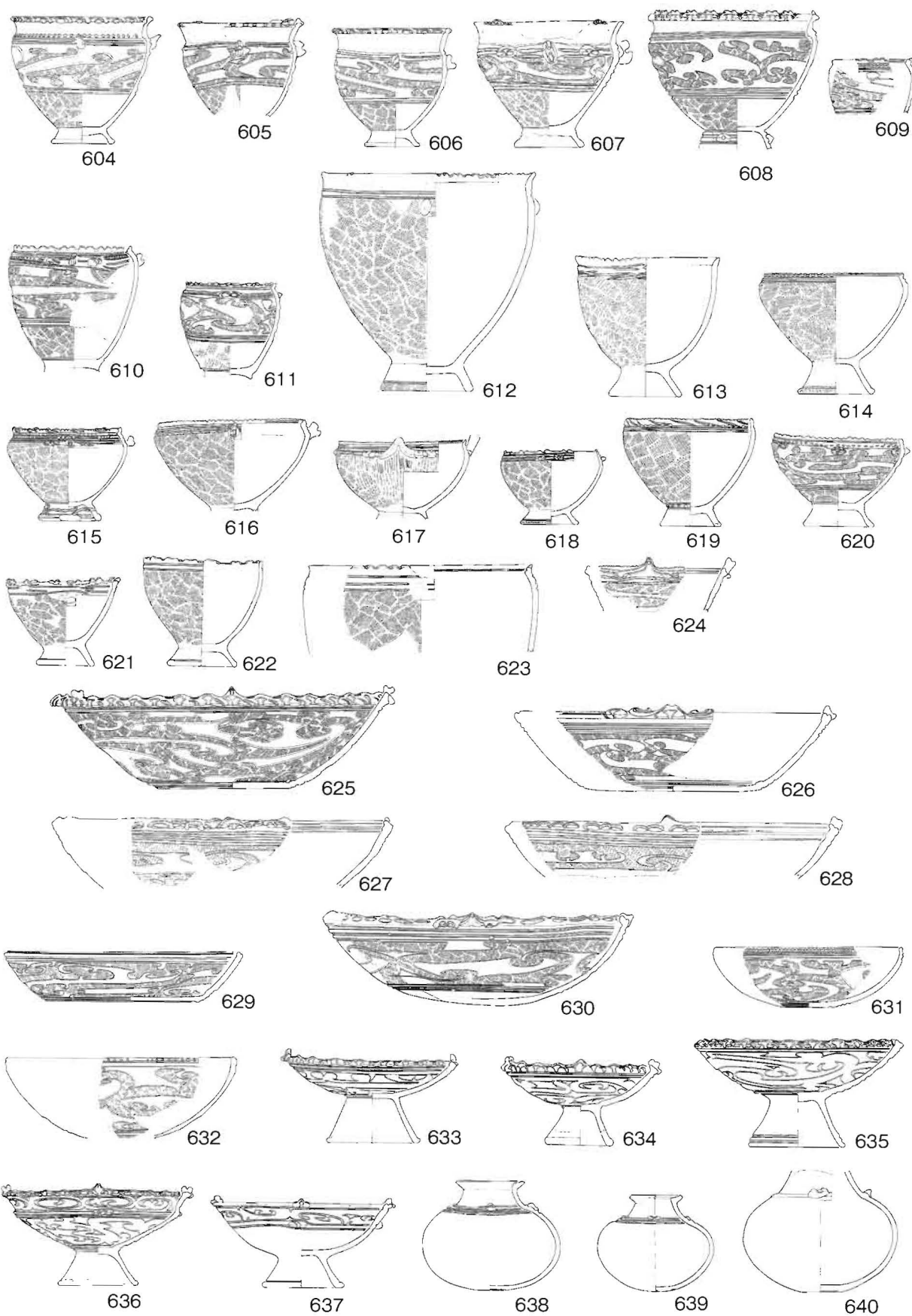


土器・製塩土器 今津遺跡・野口貝塚



土器

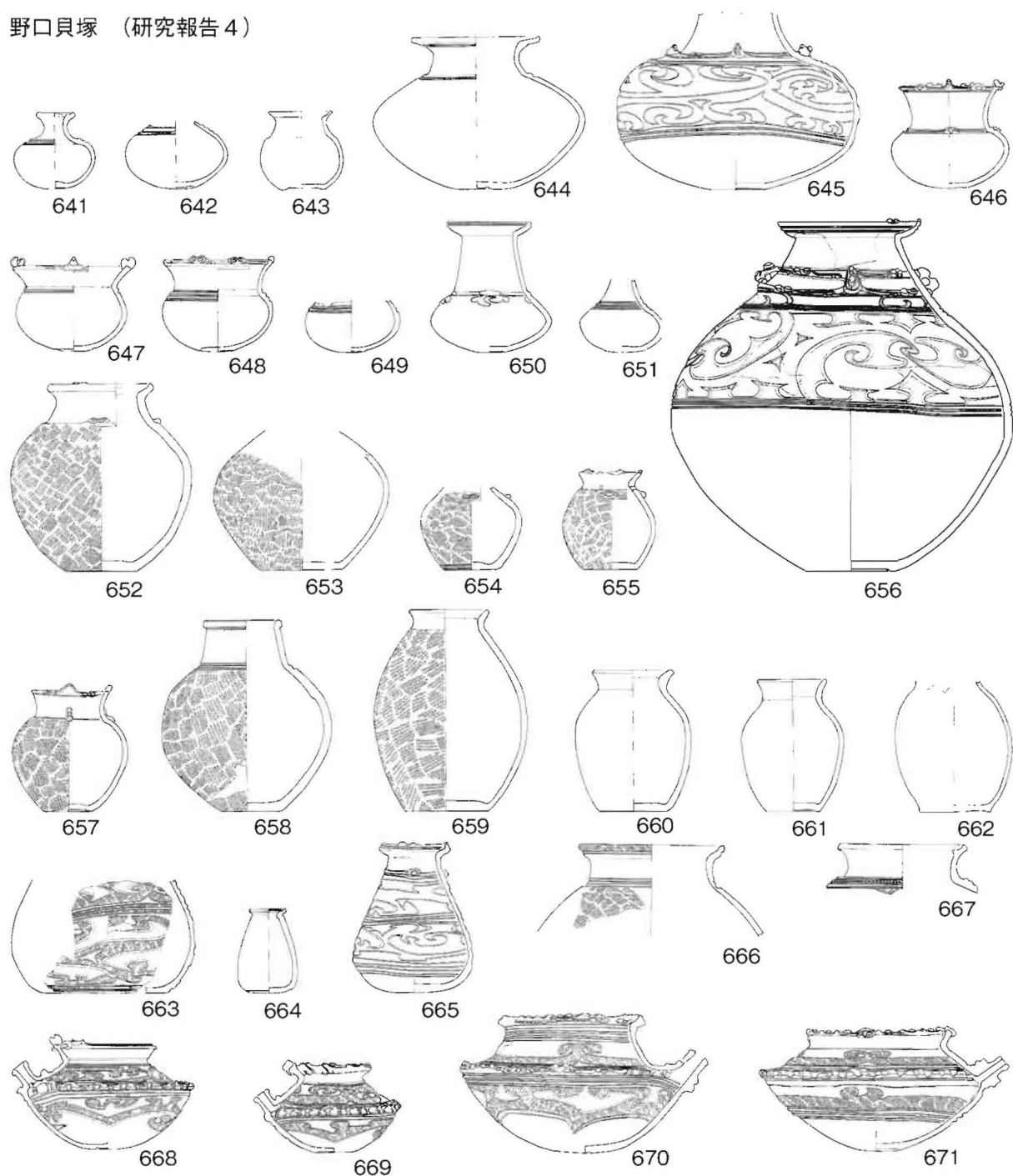
野口貝塚 (研究報告 4)



土器 野口貝塚



野口貝塚（研究報告4）

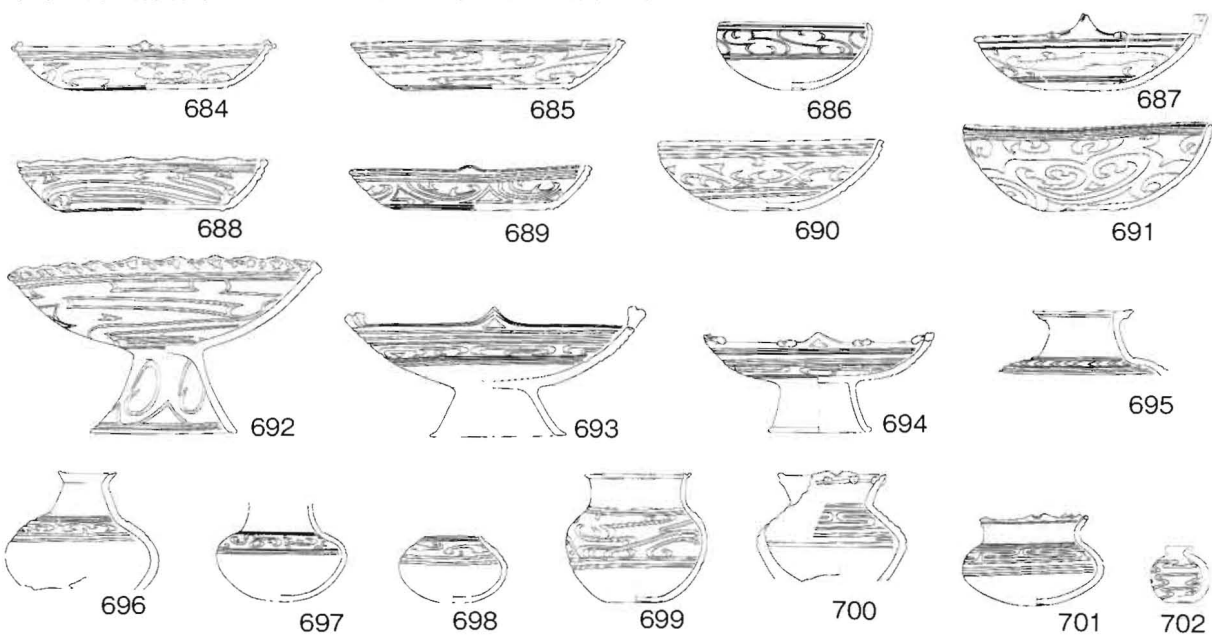


今津遺跡（青森県埋文センター調査区）（研究報告4）

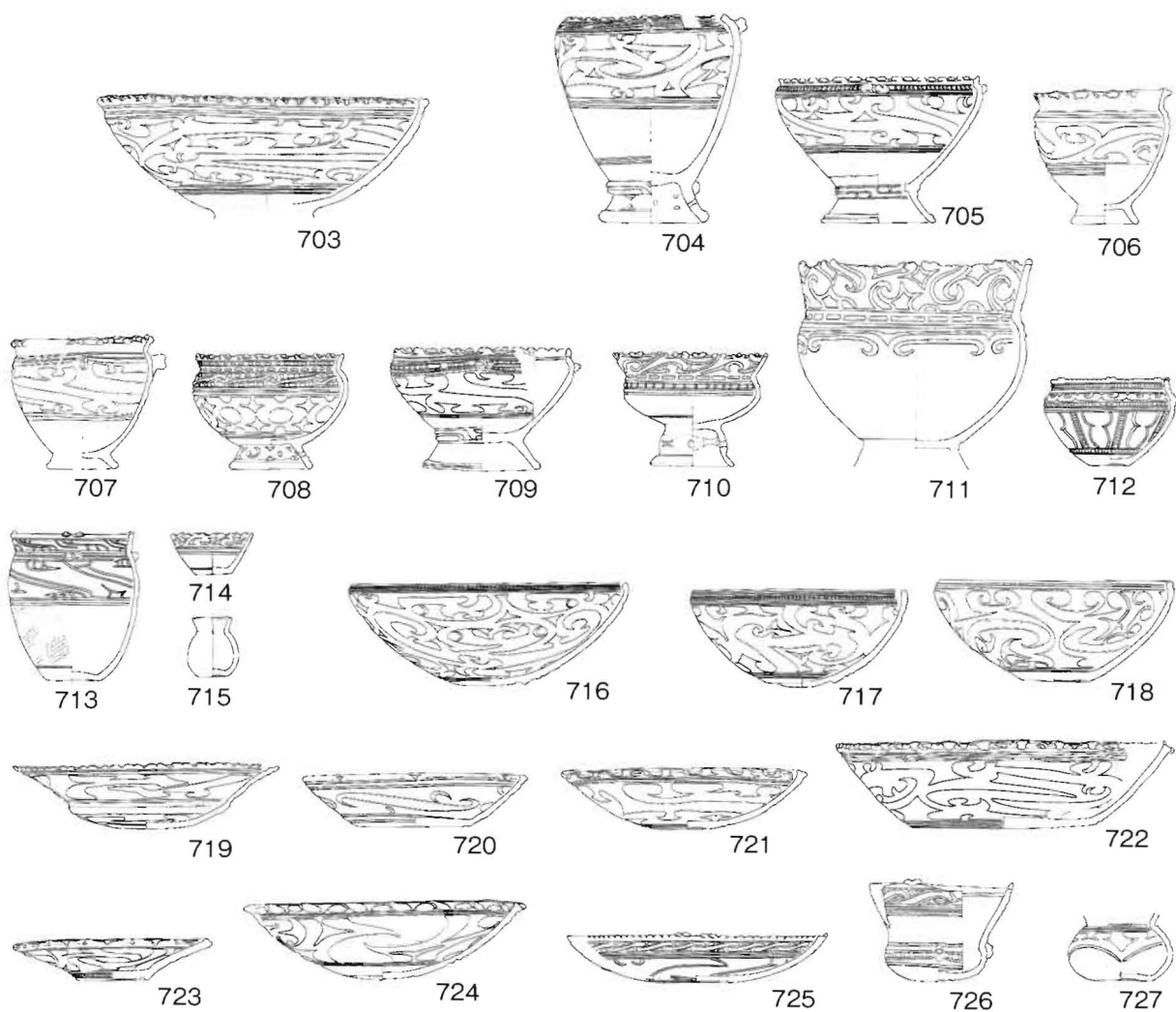


土器 野口貝塚・今津遺跡

今津遺跡（青森県埋文センター調査区）（研究報告4）



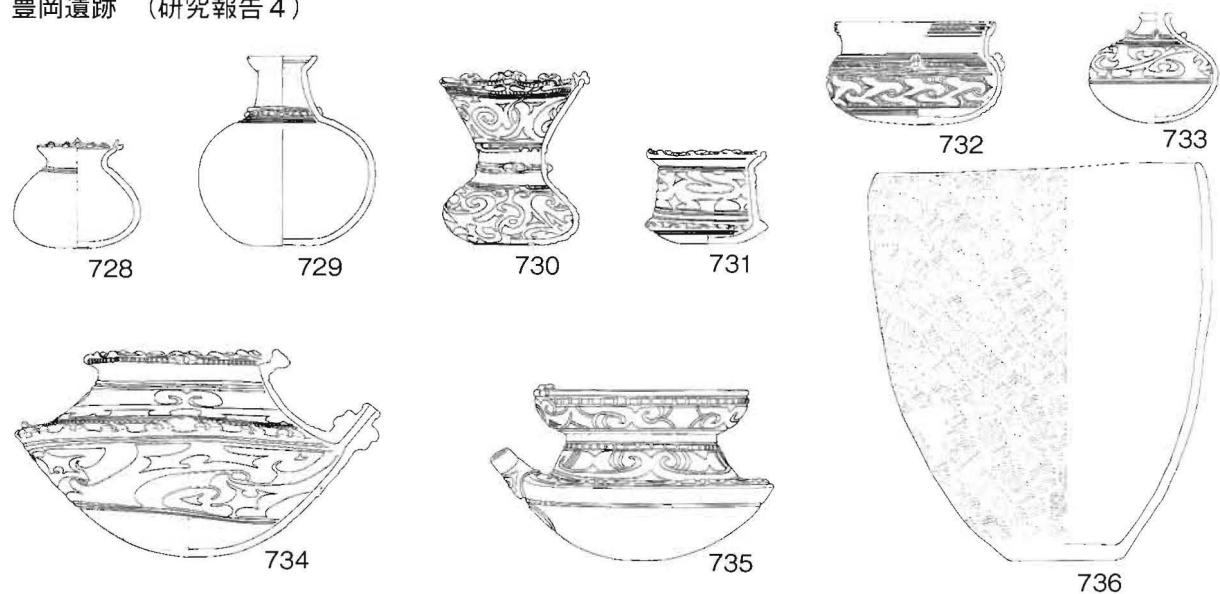
豊岡遺跡（研究報告4）



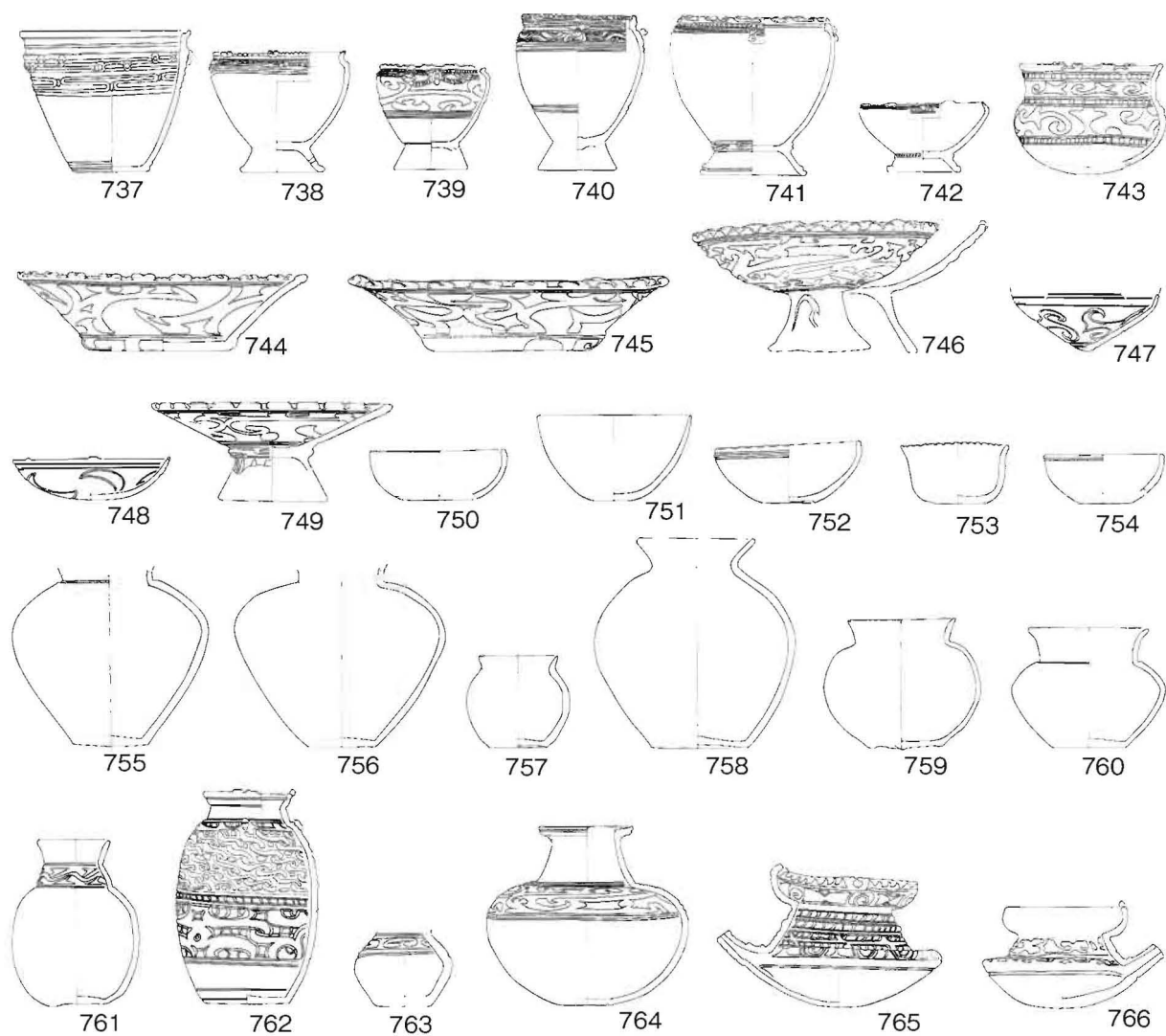
土器

土器 今津・豊岡遺跡

豊岡遺跡 (研究報告 4)



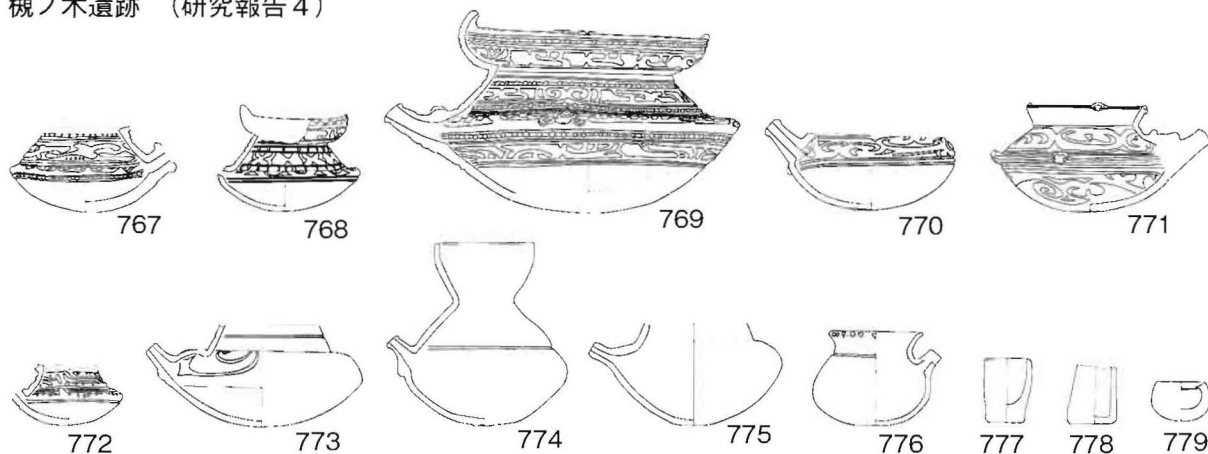
槻ノ木遺跡 (研究報告 4)



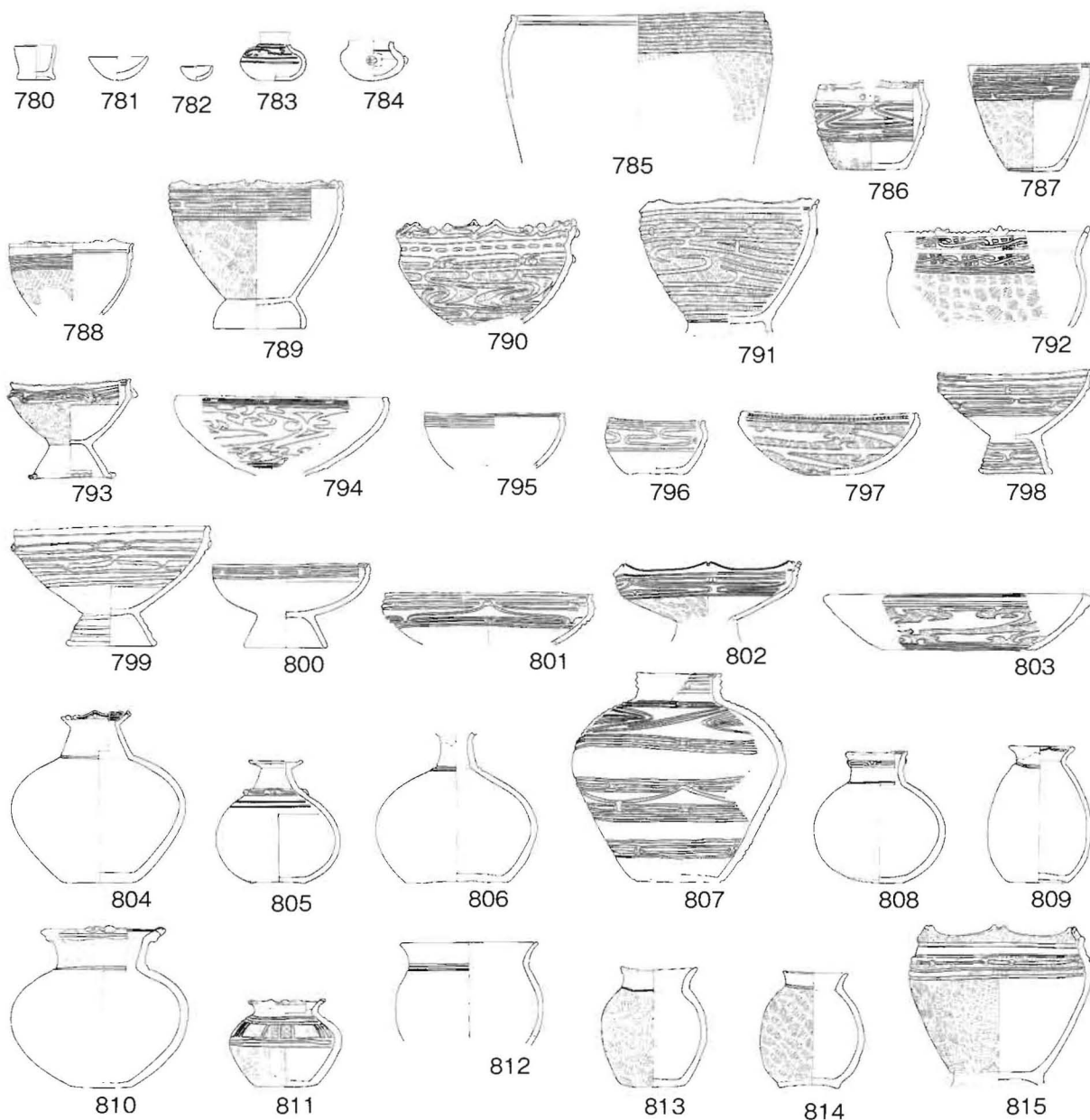
土器



槻ノ木遺跡 (研究報告4)



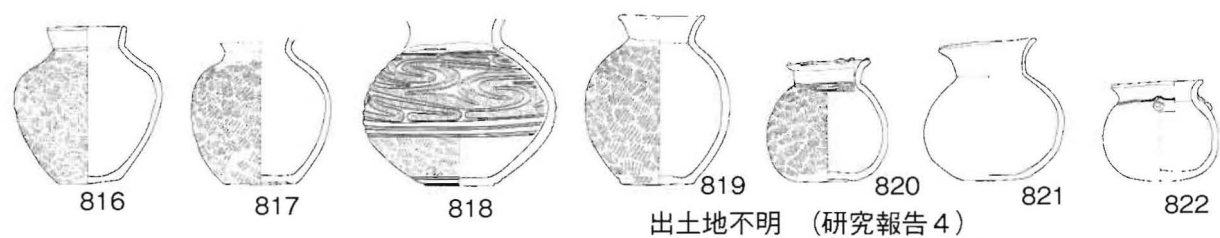
亀ヶ岡遺跡 (研究報告4)



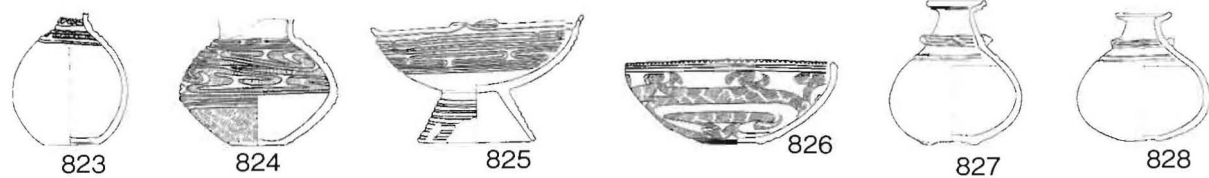
土器

土器 槻ノ木・亀ヶ岡遺跡

亀ヶ岡遺跡 (研究報告 4)

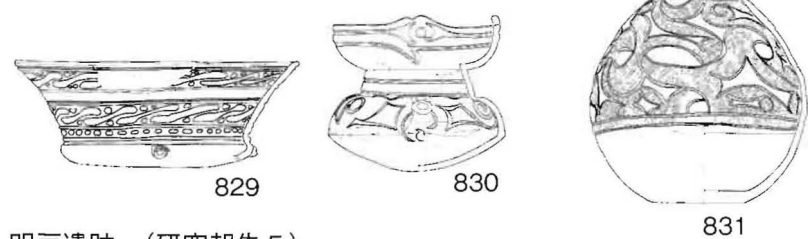


出土地不明 (研究報告 4)

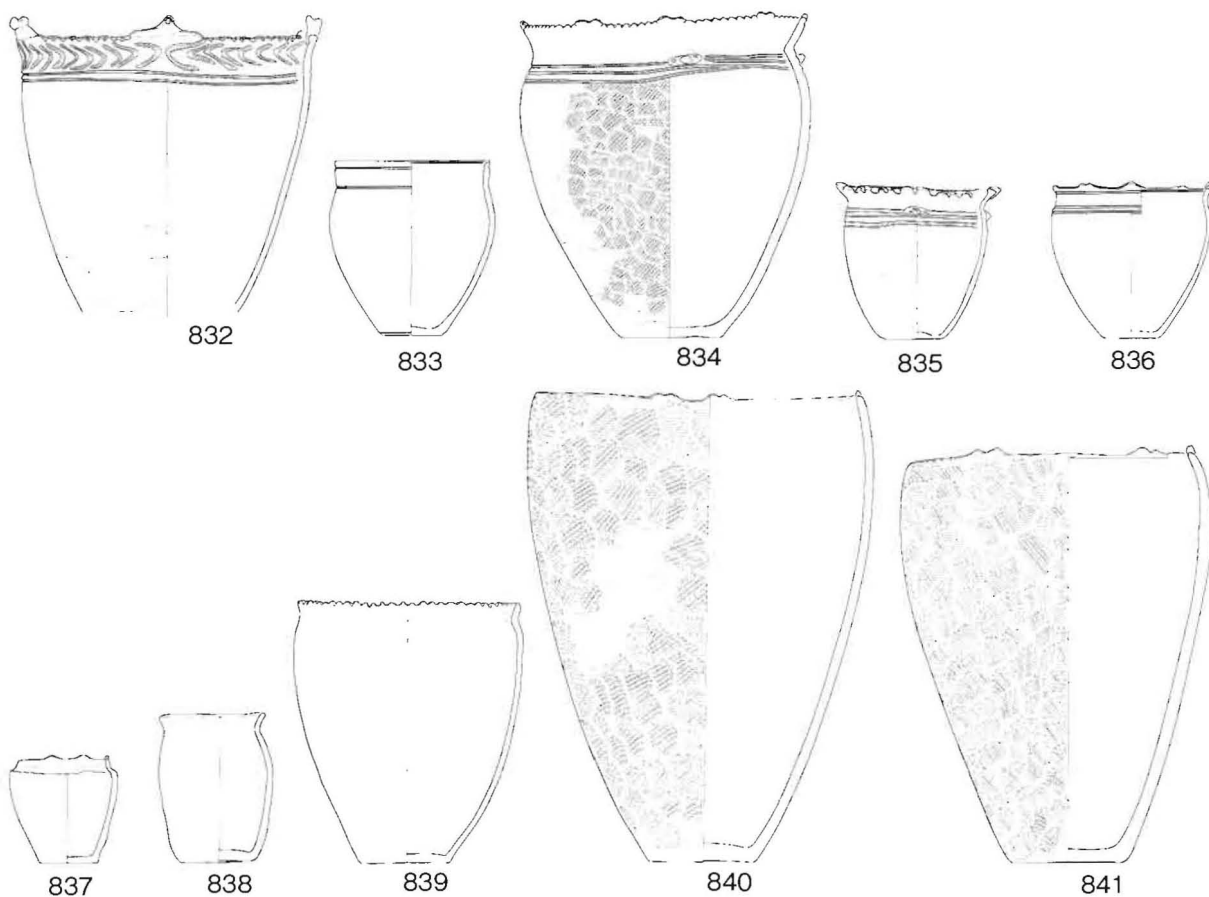


土井 I 号遺跡 (研究報告 4)

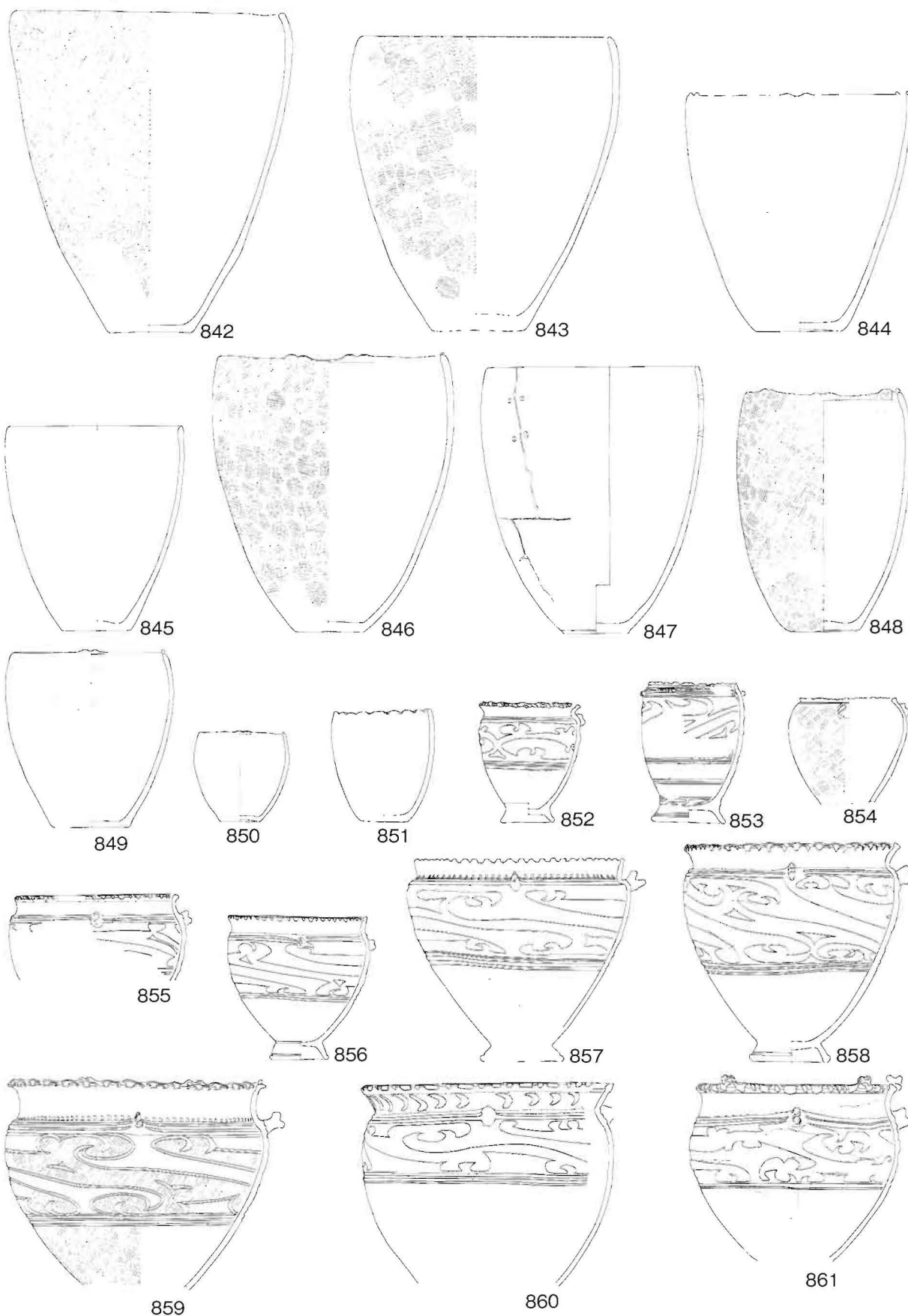
八幡崎遺跡 (研究報告 4)



明戸遺跡 (研究報告 5)



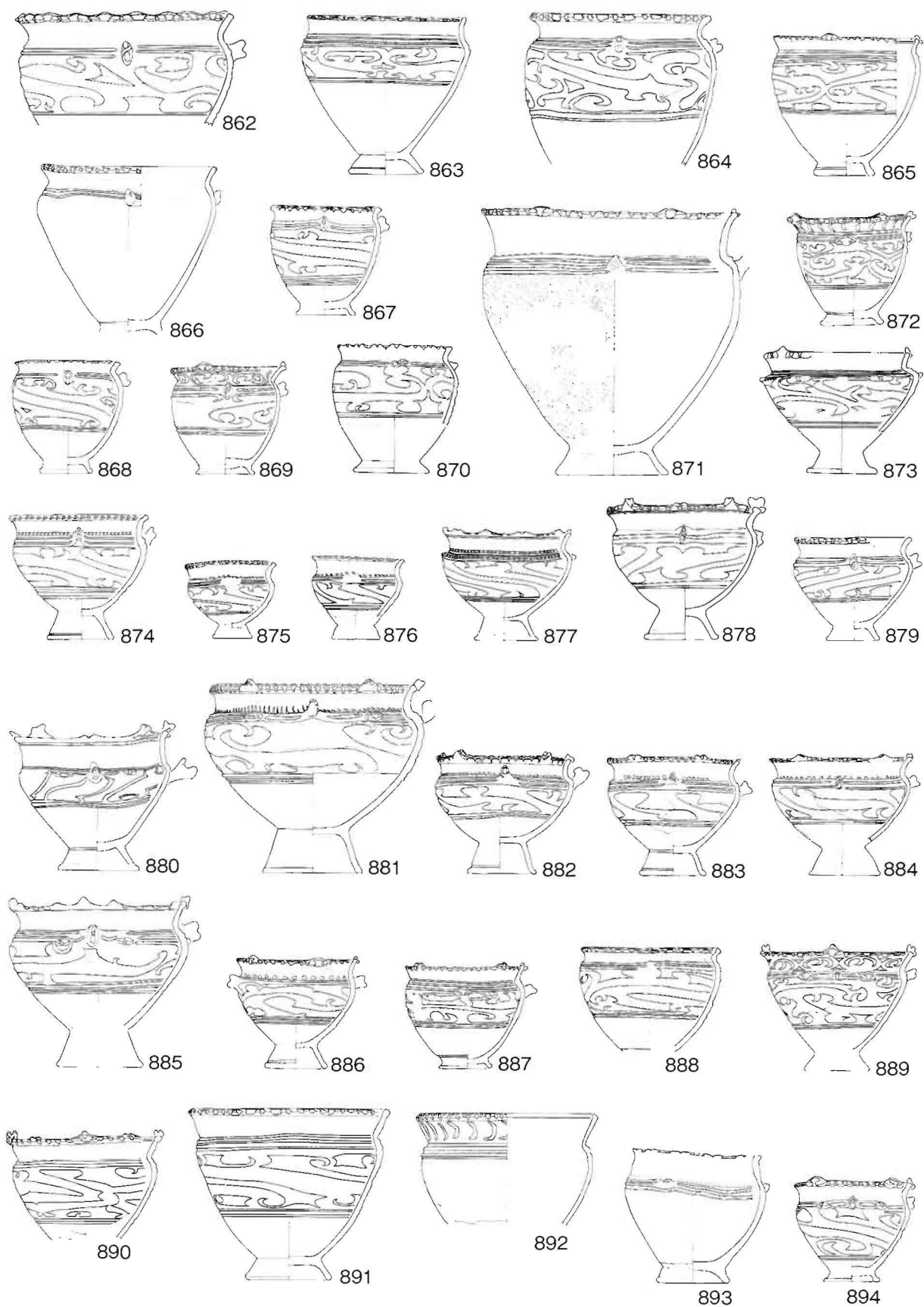
土器 亀ヶ岡・八幡崎・土井 I 号・明戸遺跡

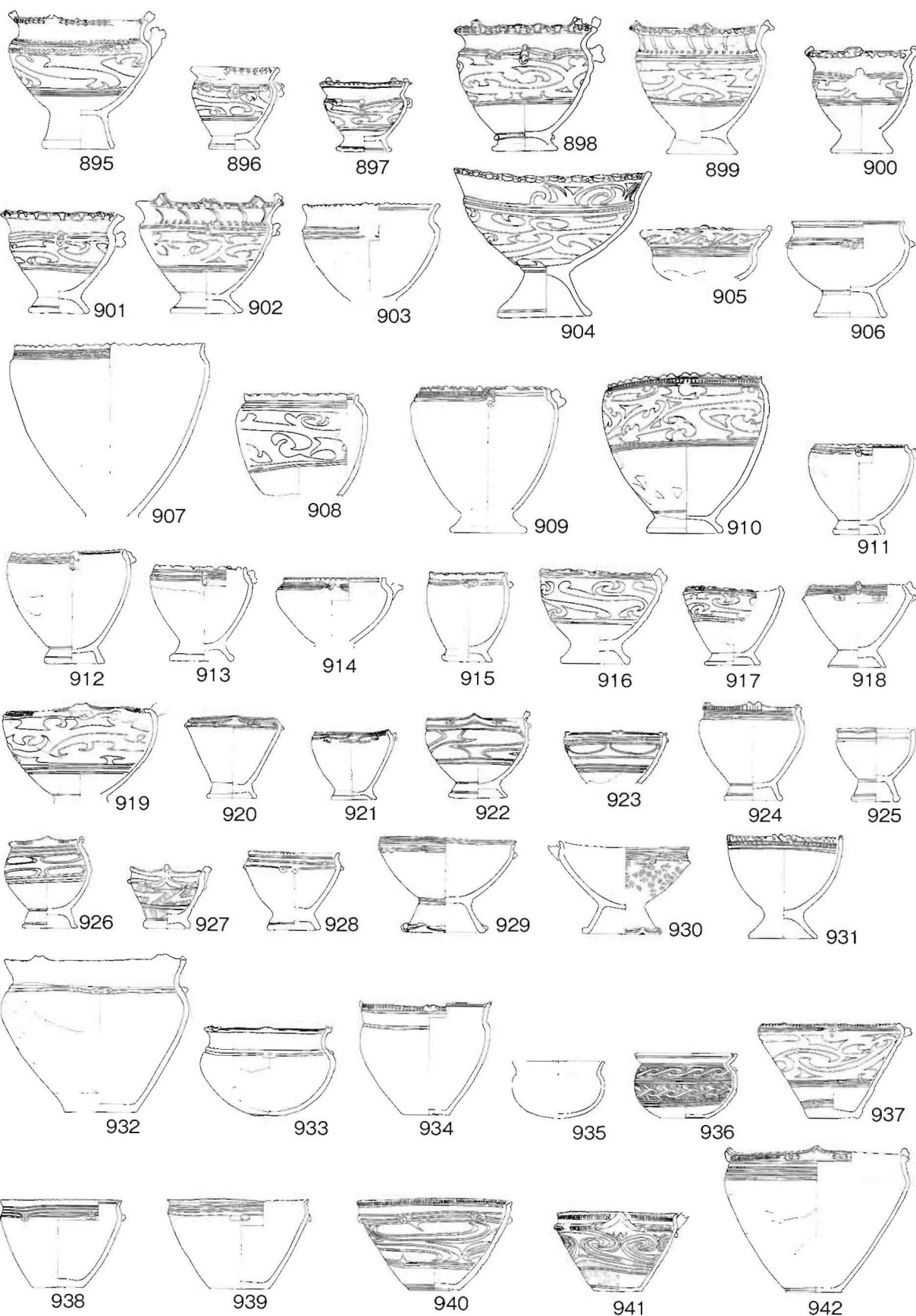


土器

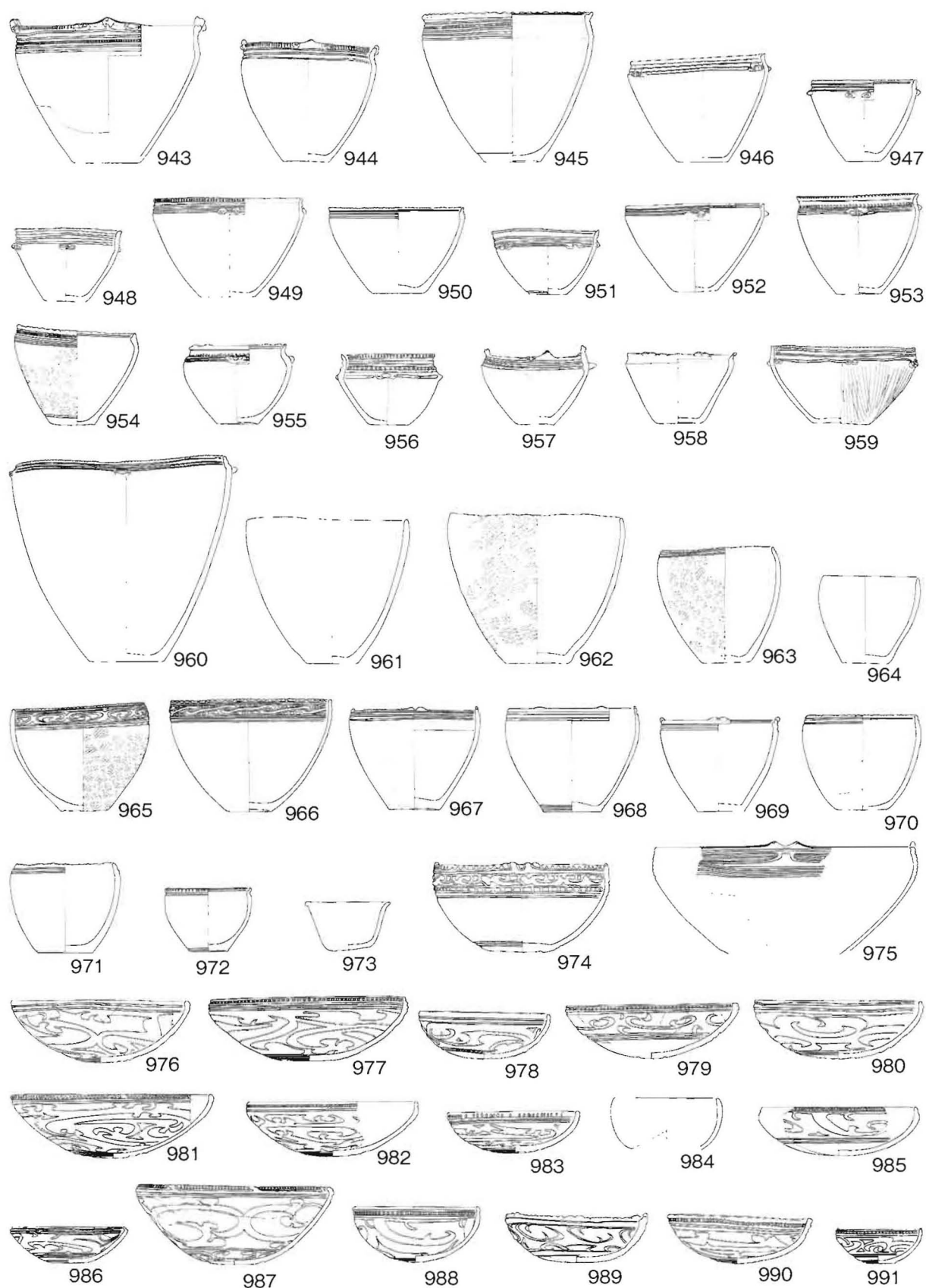
土器 明戸遺跡





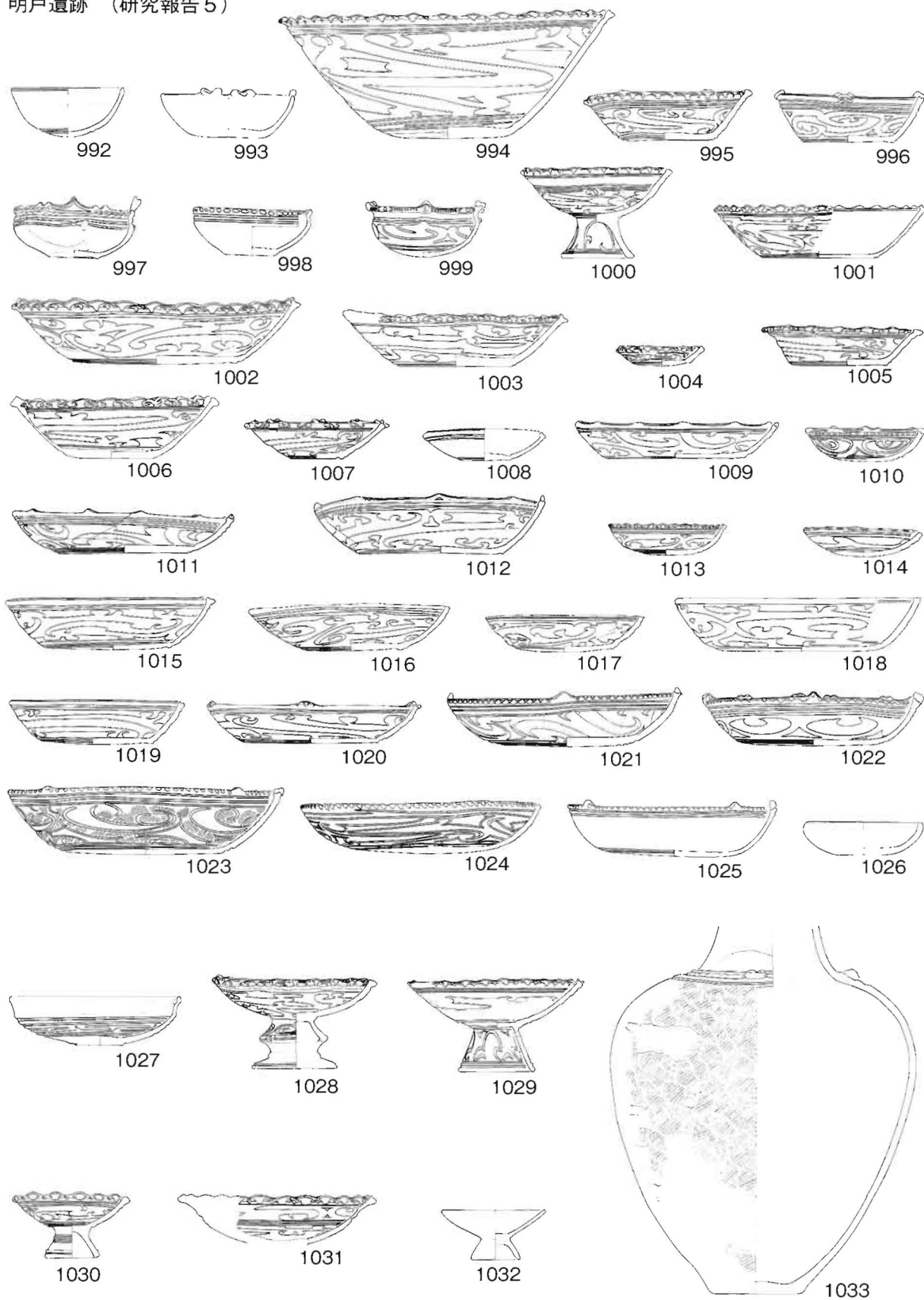


土器 明戸遺跡



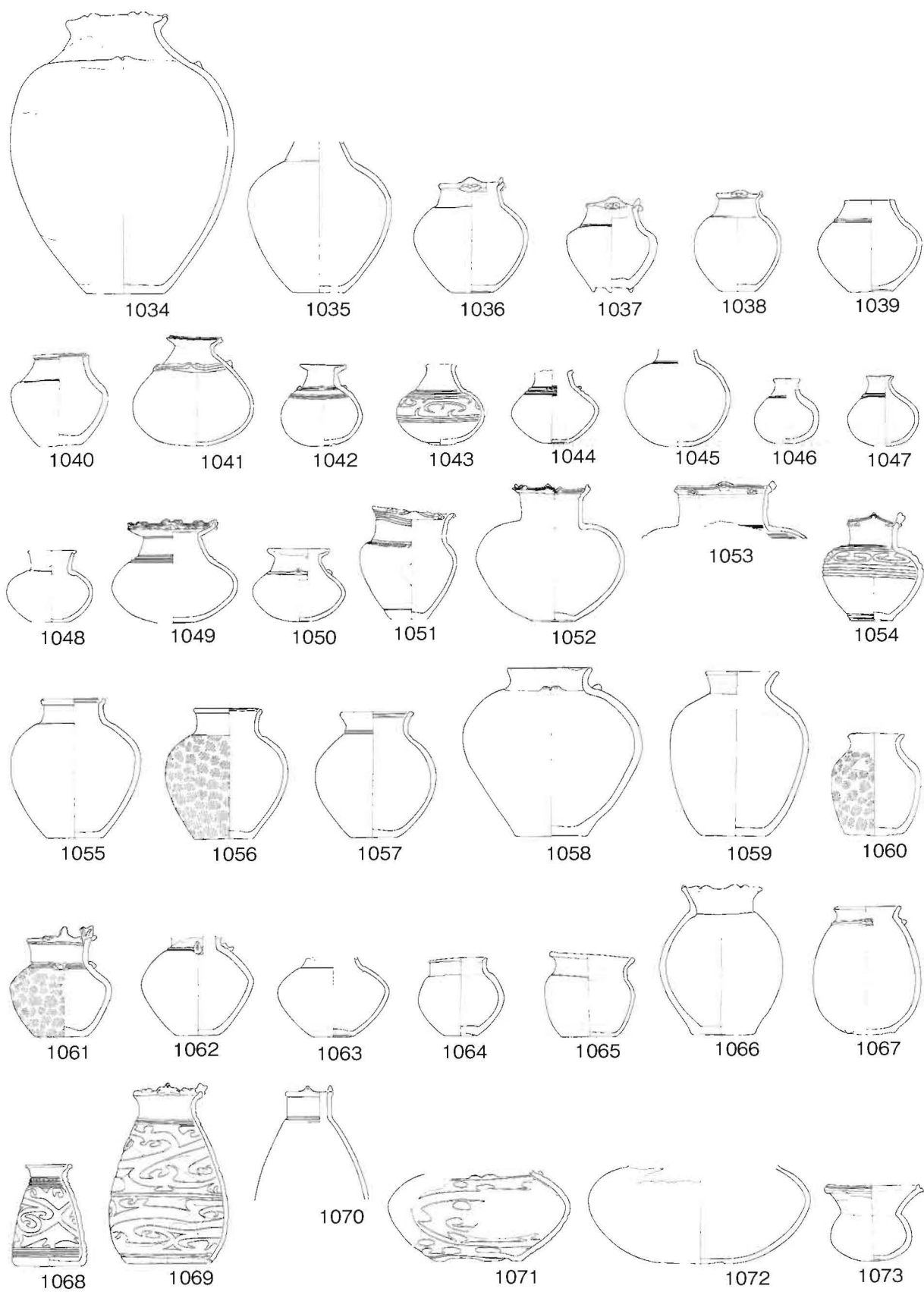
土器

明戸遺跡 (研究報告 5)



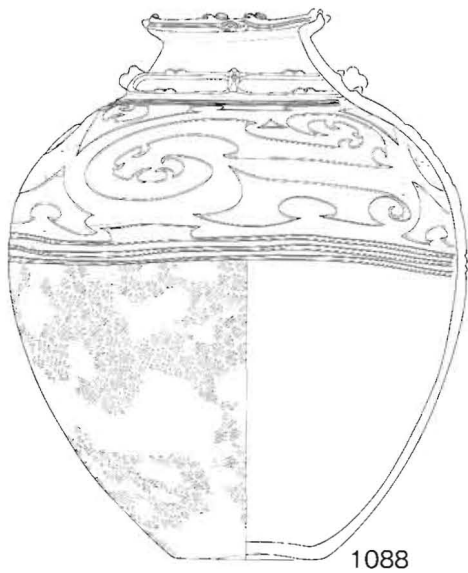
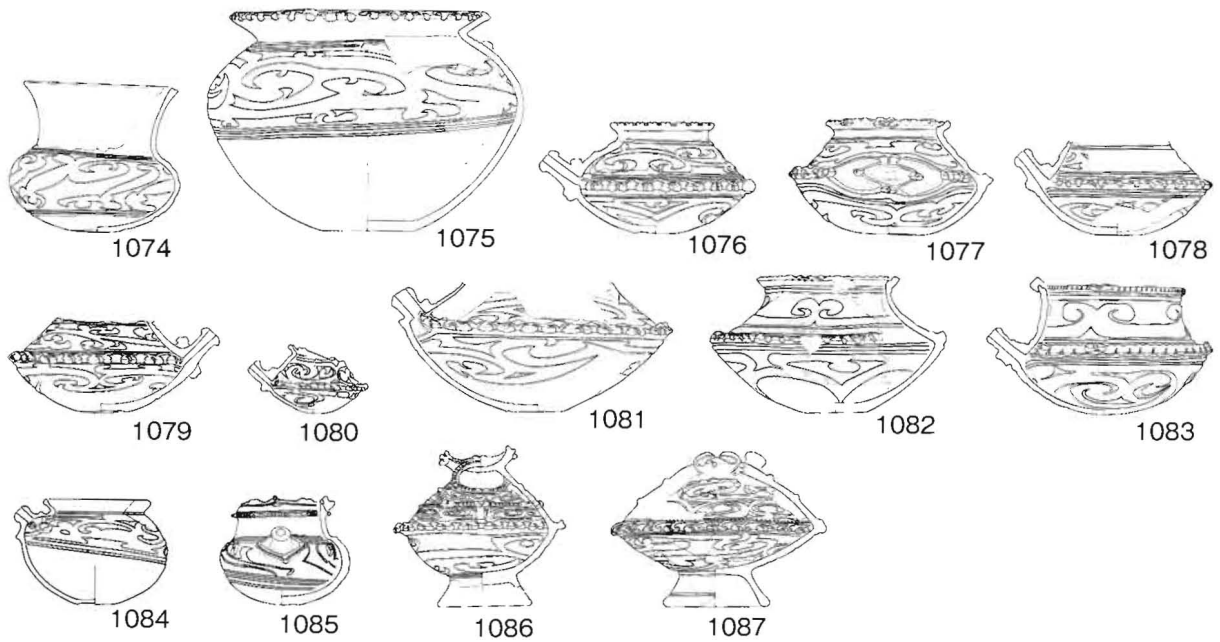
土器 明戸遺跡



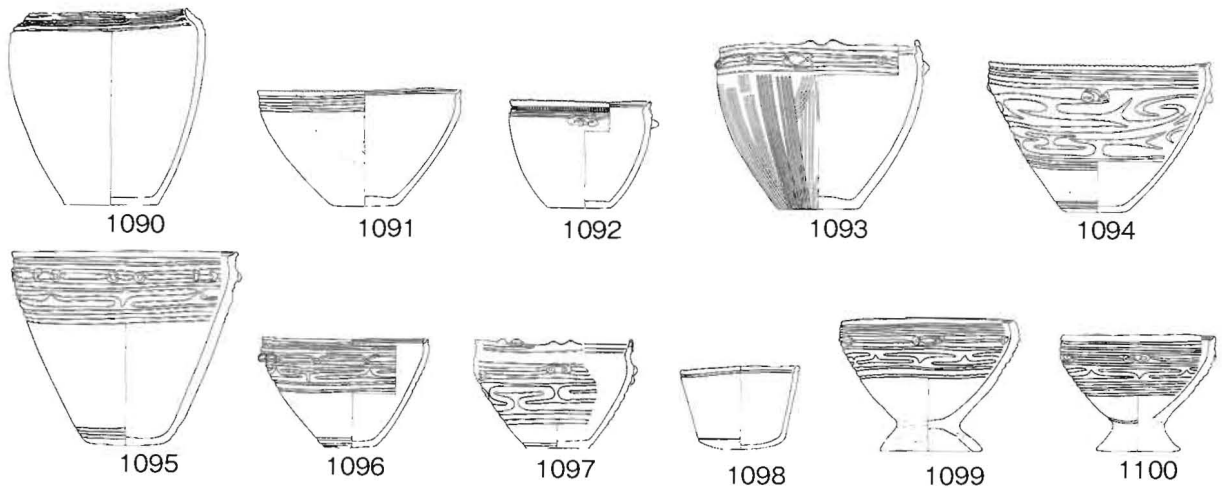
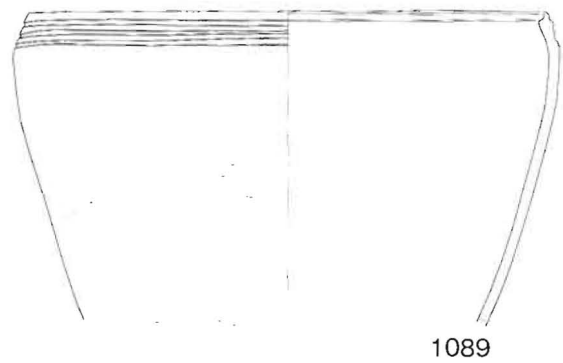


土器

明戸遺跡 (研究報告 5)

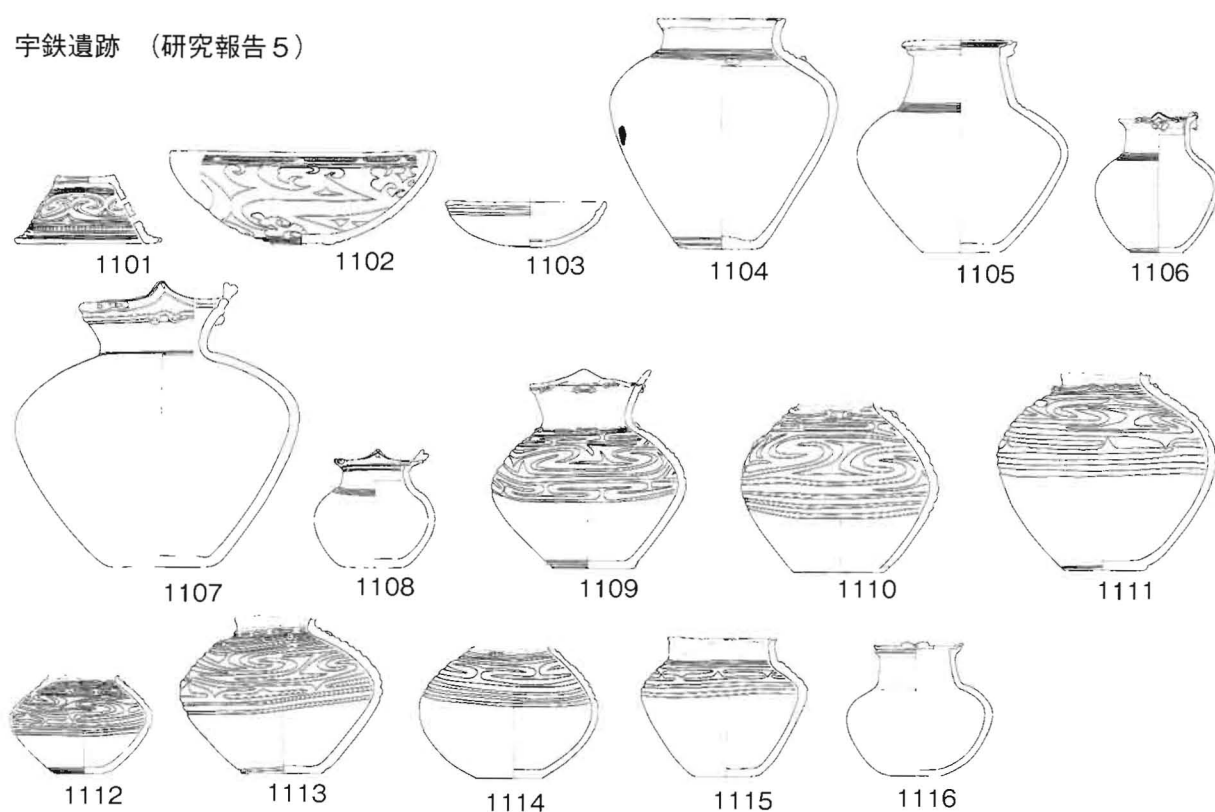


宇鉄遺跡 (研究報告 5)

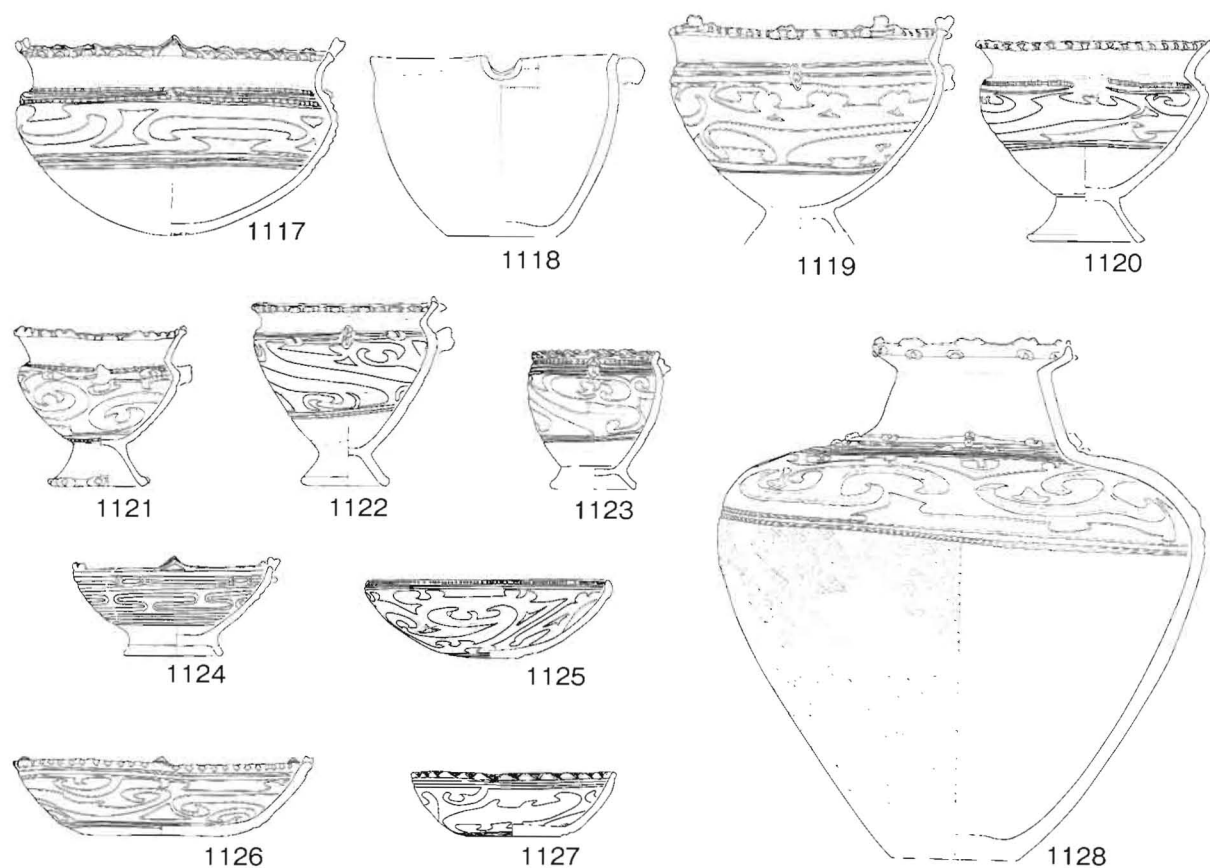


土器 明戸・宇鉄遺跡

宇鉄遺跡（研究報告5）

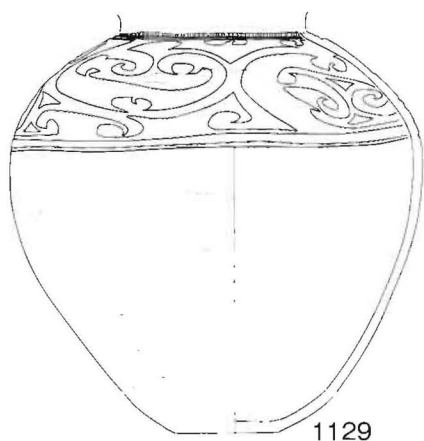


滝端遺跡（研究報告5）



土器 宇鉄・滝端遺跡

滝端遺跡 (研究報告5)



1129



1130



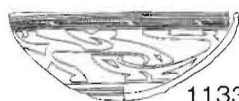
1131



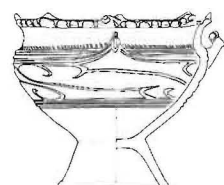
1132

千曳遺跡 (研究報告5)

寺下遺跡 (研究報告5)



1133



1134



1135

陣場川原遺跡  
(研究報告5)



1136

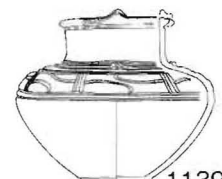
薬師遺跡 (研究報告5)



1137



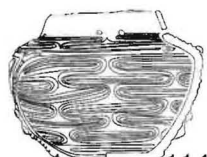
1138



1139



1140



1141



1142

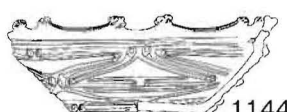
湯ノ沢遺跡 (研究報告5)

大曲皿号遺跡  
(研究報告5)

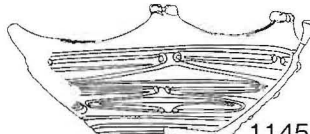
青鹿長根遺跡  
(研究報告5)



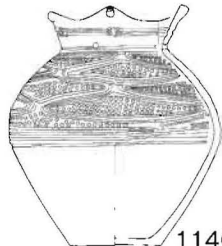
1143



1144



1145



1146

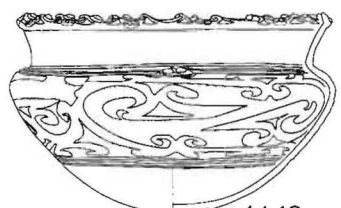


1147

宮田遺跡  
(研究報告5)

天王寺遺跡  
(研究報告5)

北小松・西岩田遺跡 (研究報告5)



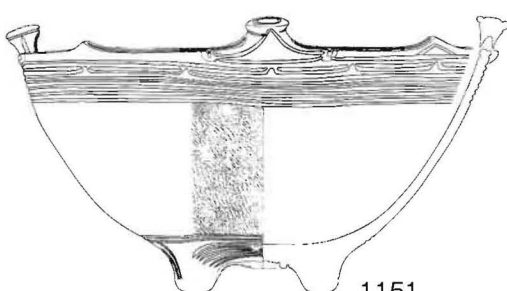
1148



1149



1150



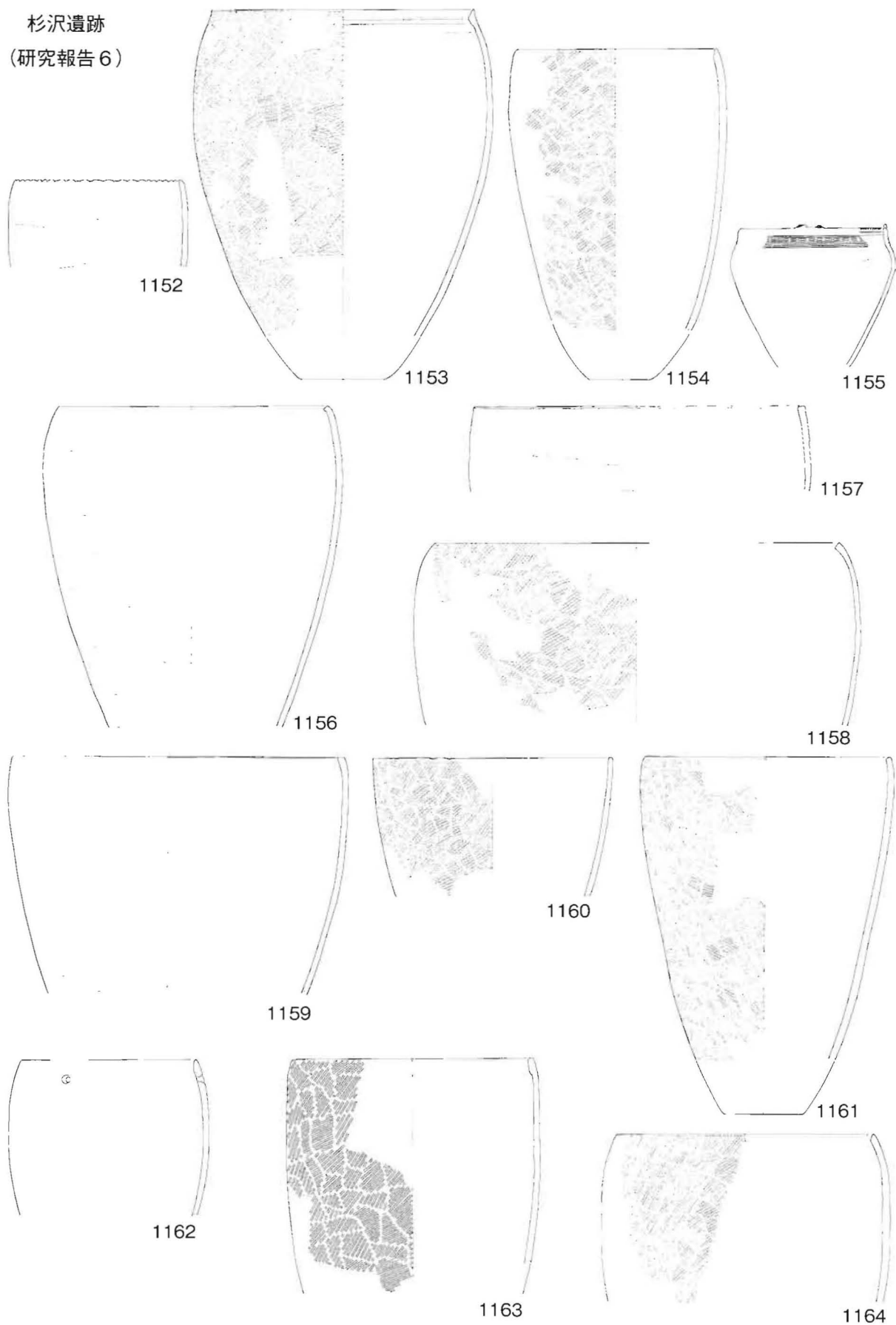
1151

土器 滝端・寺下遺跡など

土器



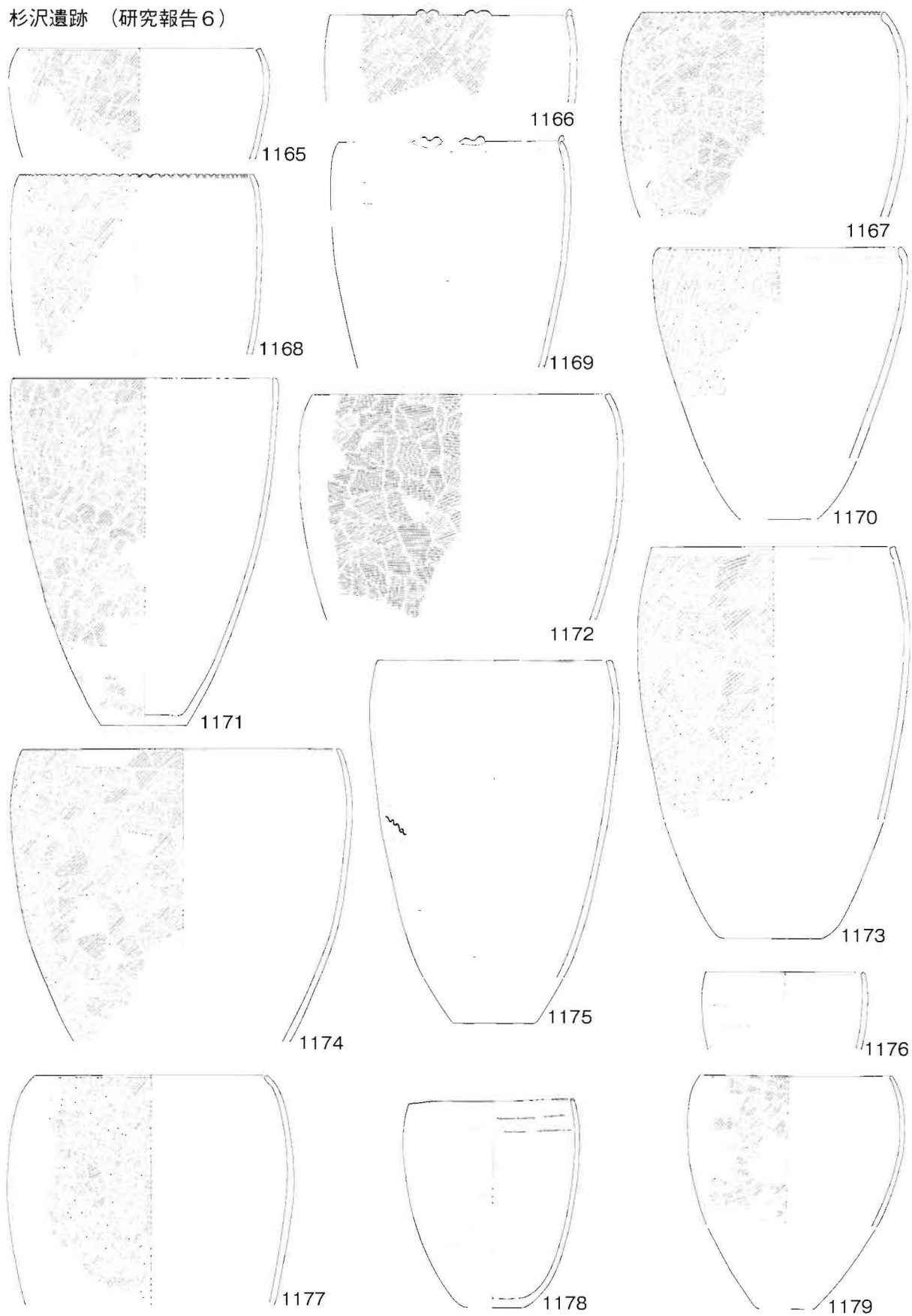
杉沢遺跡  
(研究報告 6)



土器

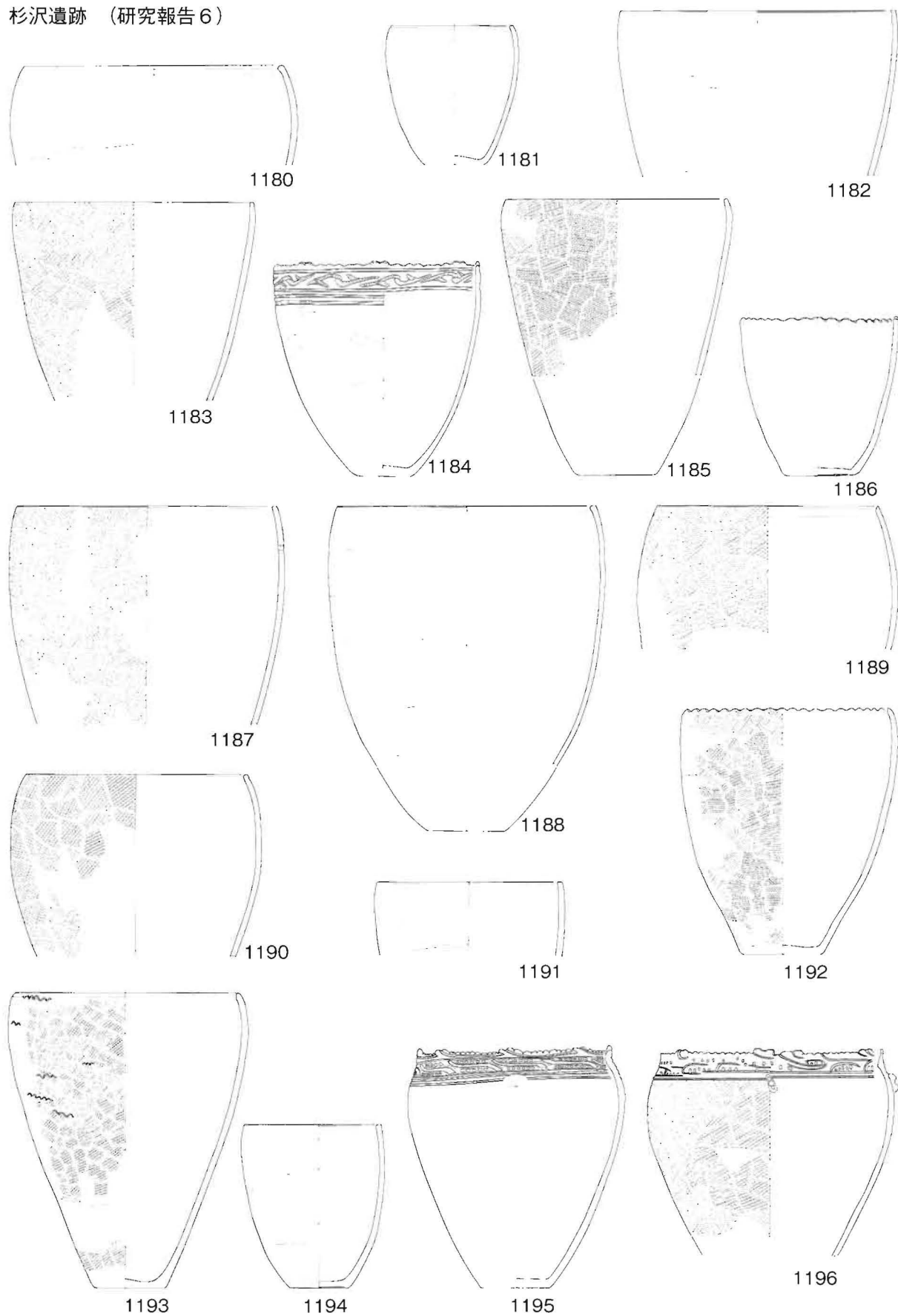
土器 杉沢遺跡

杉沢遺跡 (研究報告6)



土器

土器 杉沢遺跡



土器 杉沢遺跡

杉沢遺跡  
(研究報告6)



1197



1198



1199



1200



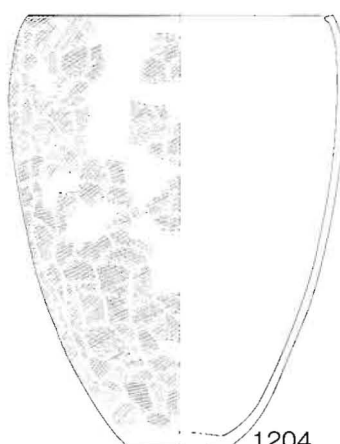
1201



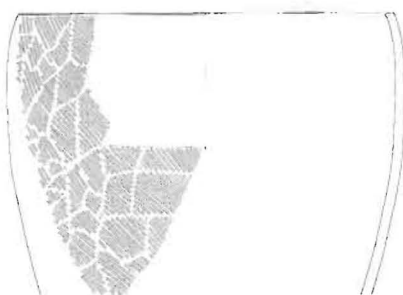
1202



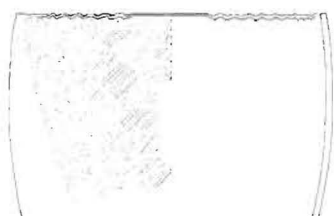
1203



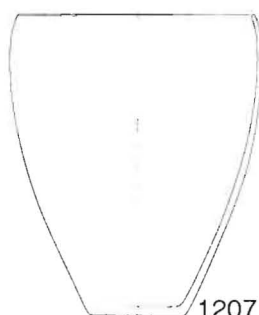
1204



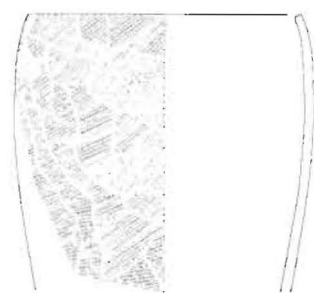
1205



1206



1207



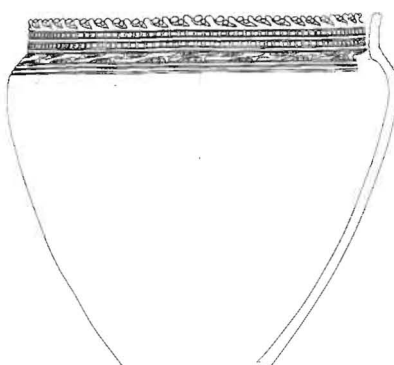
1208



1209



1210



1211



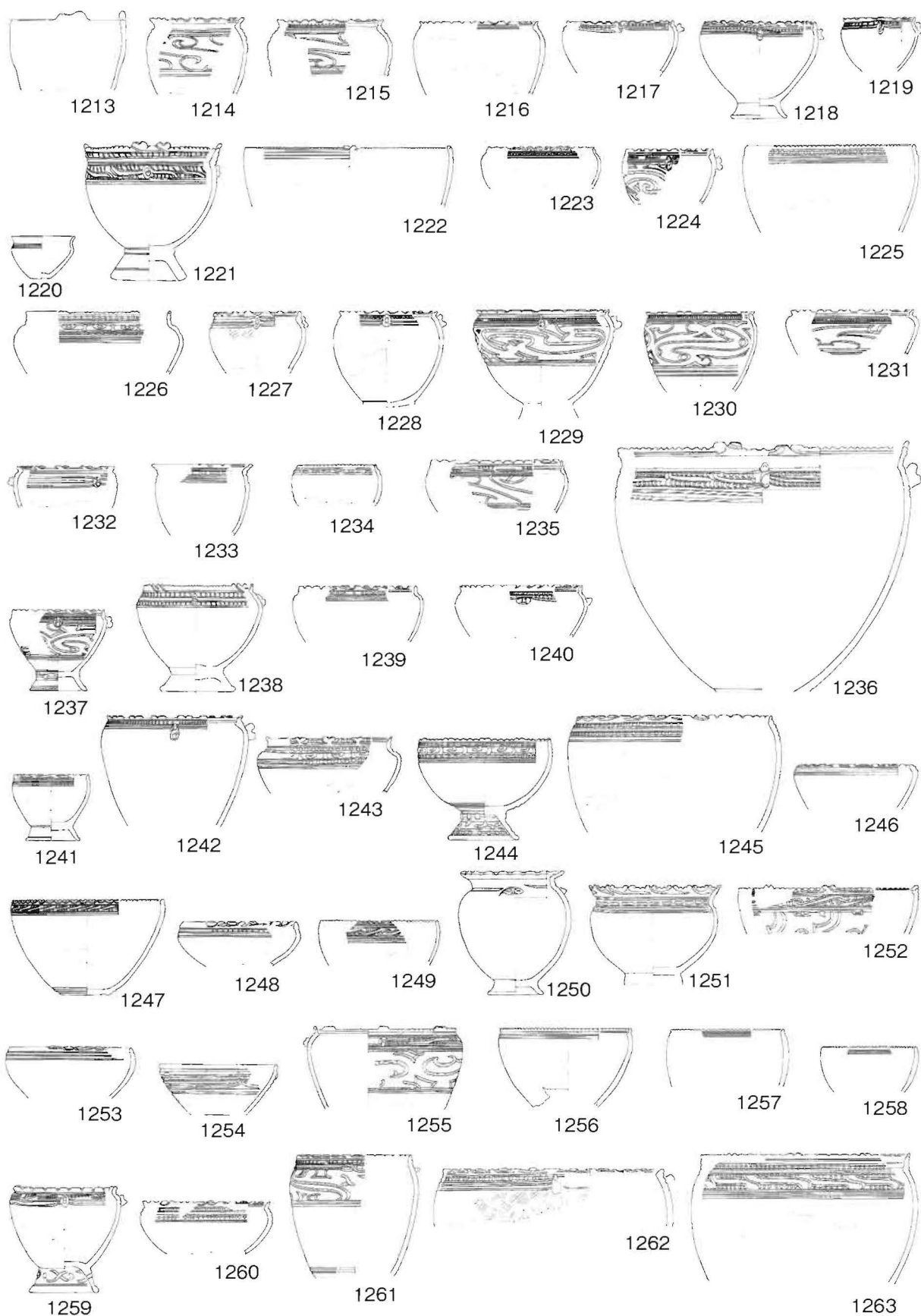
1212

土器

土器 杉沢遺跡



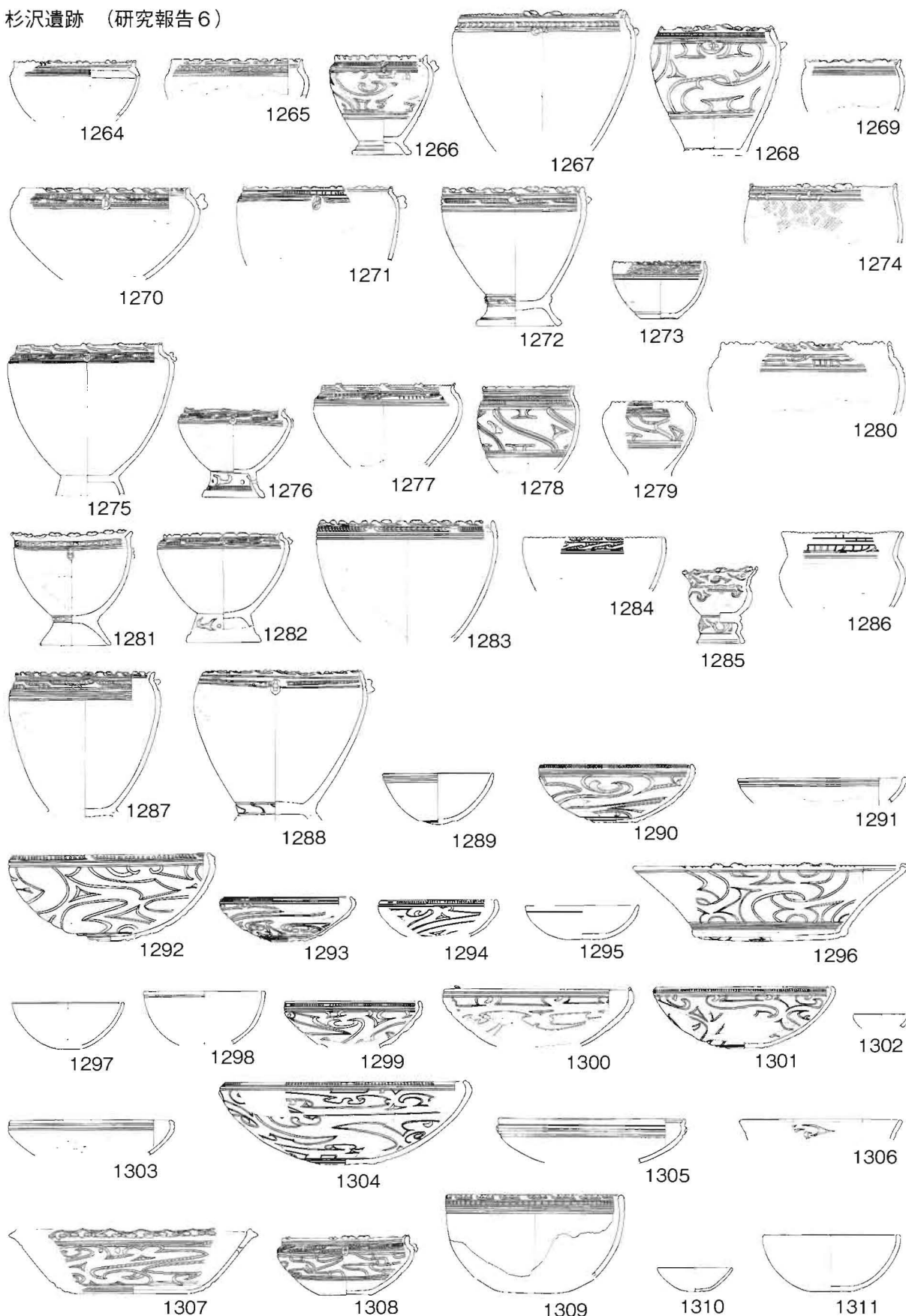
杉沢遺跡 (研究報告6)



土器

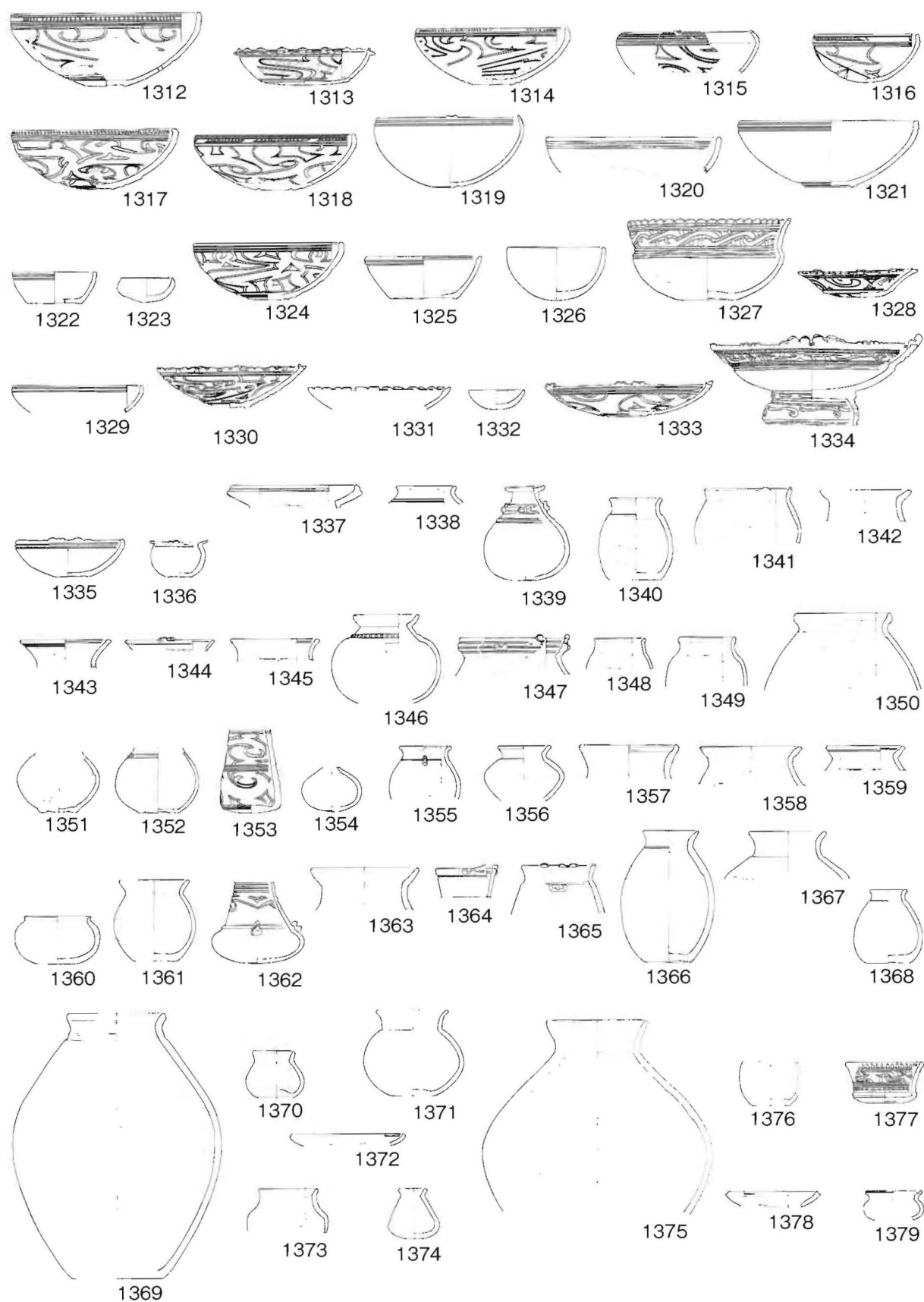
土器 杉沢遺跡

杉沢遺跡 (研究報告6)

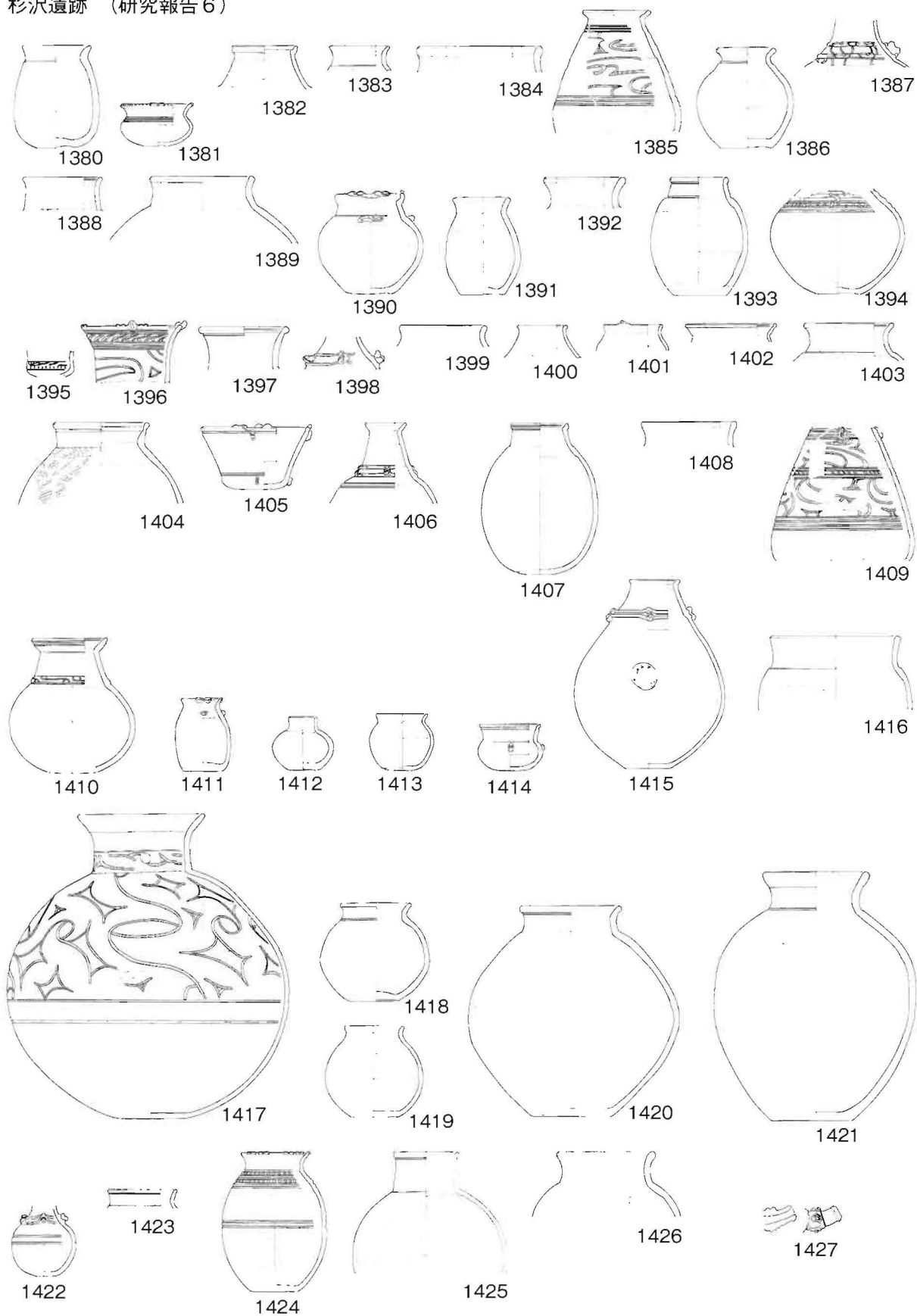


土器

土器 杉沢遺跡



杉沢遺跡 (研究報告 6)

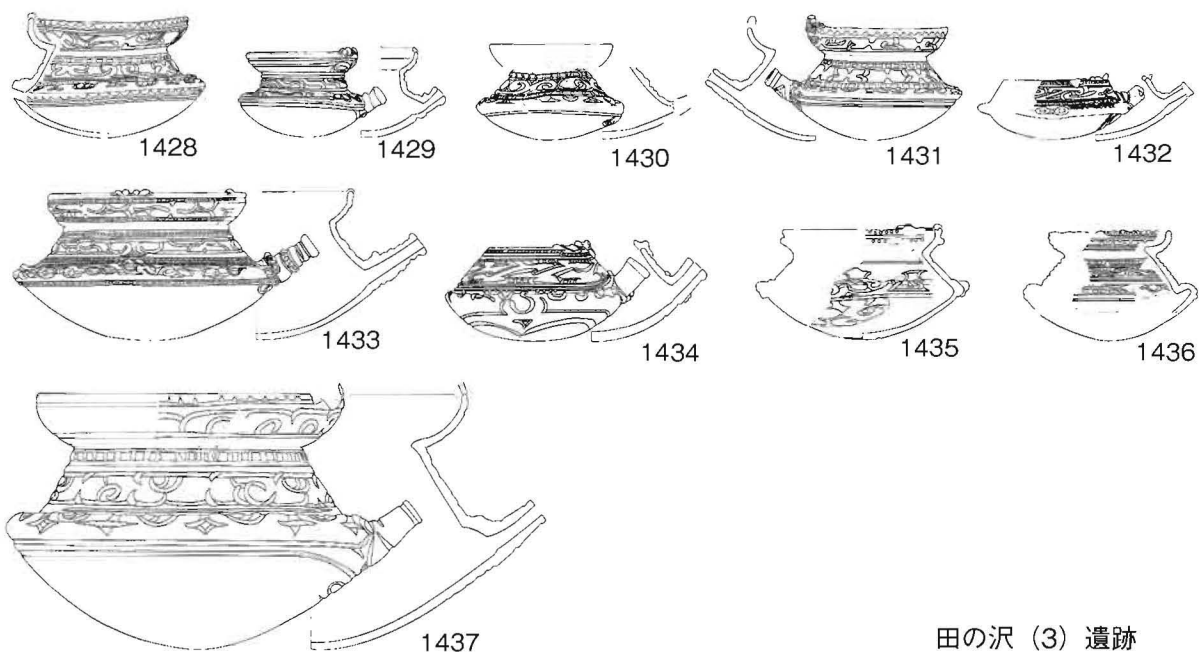


土器

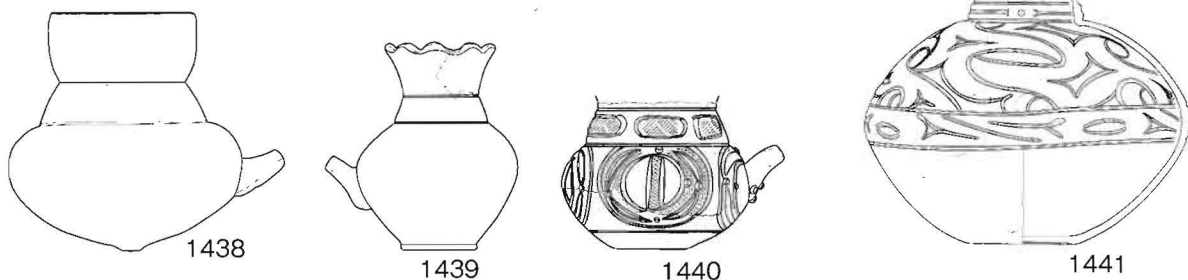
土器 杉沢遺跡



杉沢遺跡（研究報告6）

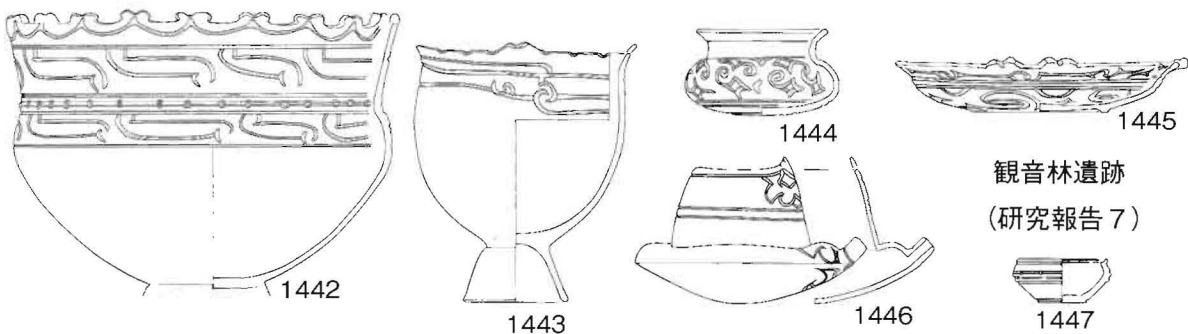


杉沢遺跡（後期）（研究報告6）



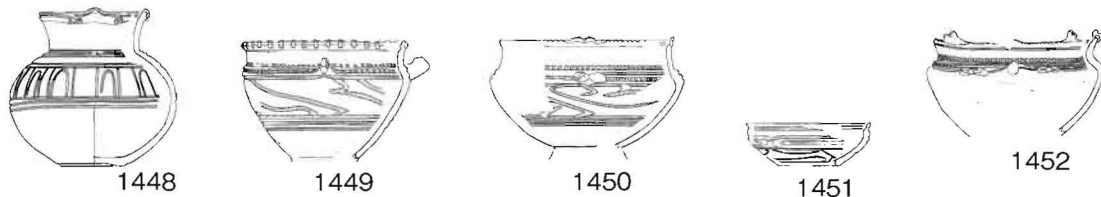
田の沢（3）遺跡  
（研究報告7）

薬師遺跡（研究報告7）



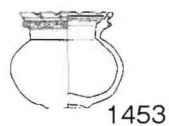
観音林遺跡  
（研究報告7）

杉沢遺跡（三戸町資料）（研究報告7）



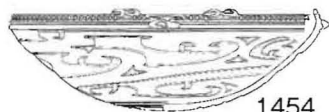
土器 杉沢・田の沢（3）遺跡など

里浜貝塚  
(研究報告 7)



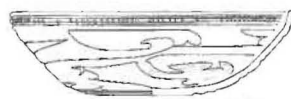
1453

出土地不明 (彩文)  
(研究報告 7)



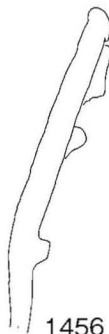
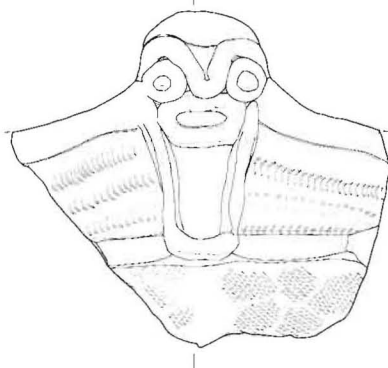
1454

永根貝塚 (彩文)  
(研究報告 7)



1455

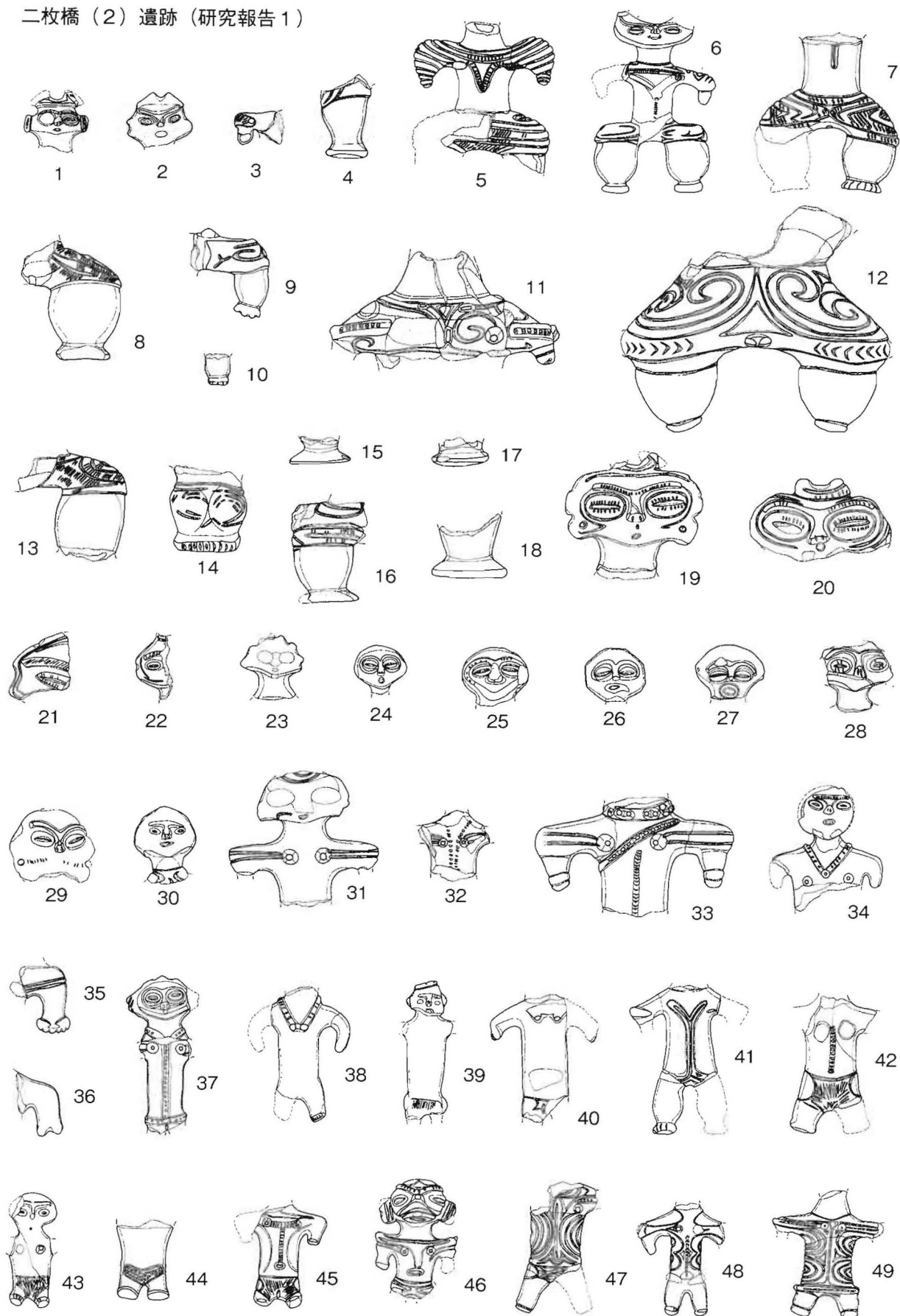
大久保遺跡 (研究報告 7)



1456

土 器

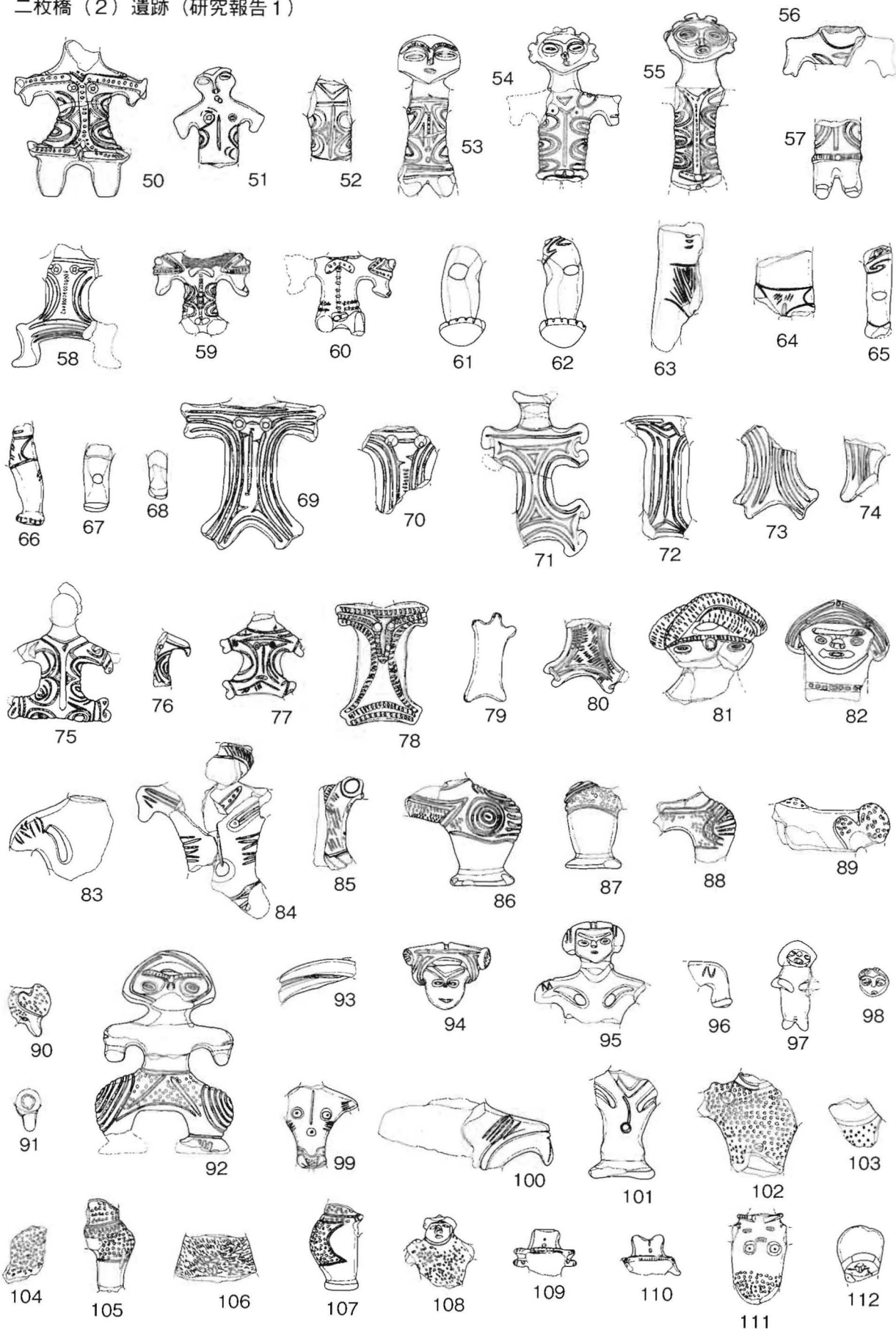
二枚橋 (2) 遺跡 (研究報告 1)



土 偶  
仮 面  
土 製 品

土偶 二枚橋 (2) 遺跡

二枚橋 (2) 遺跡 (研究報告 1)

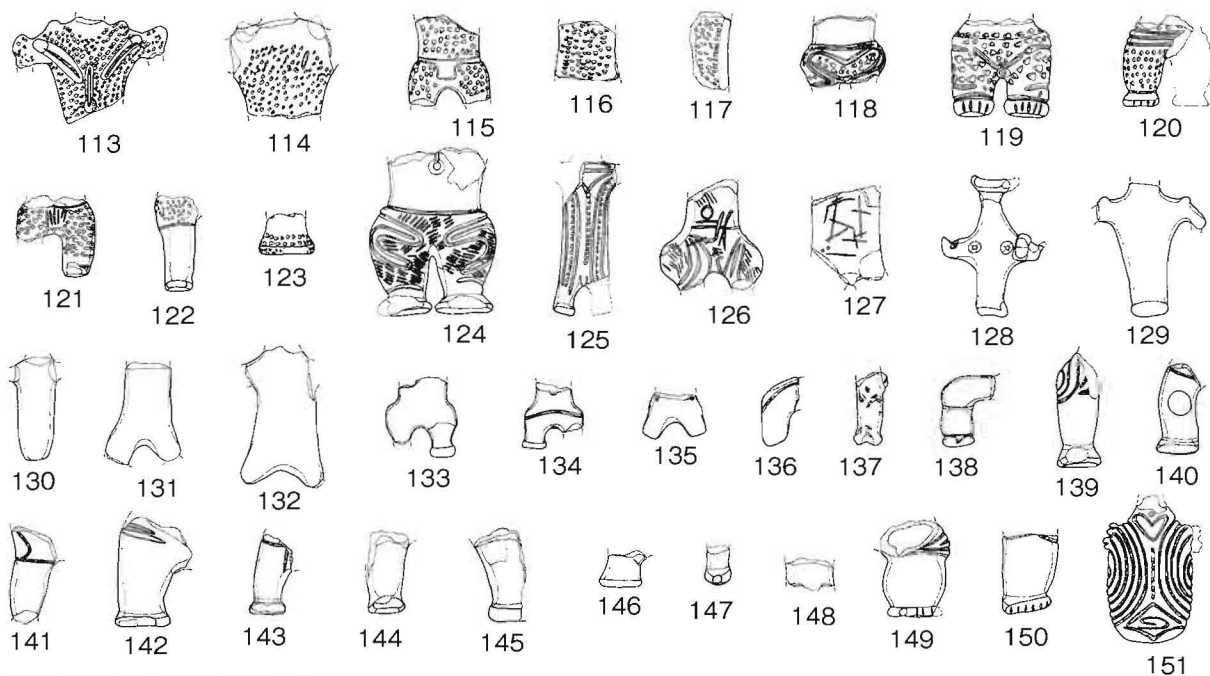


土偶  
面  
土製品

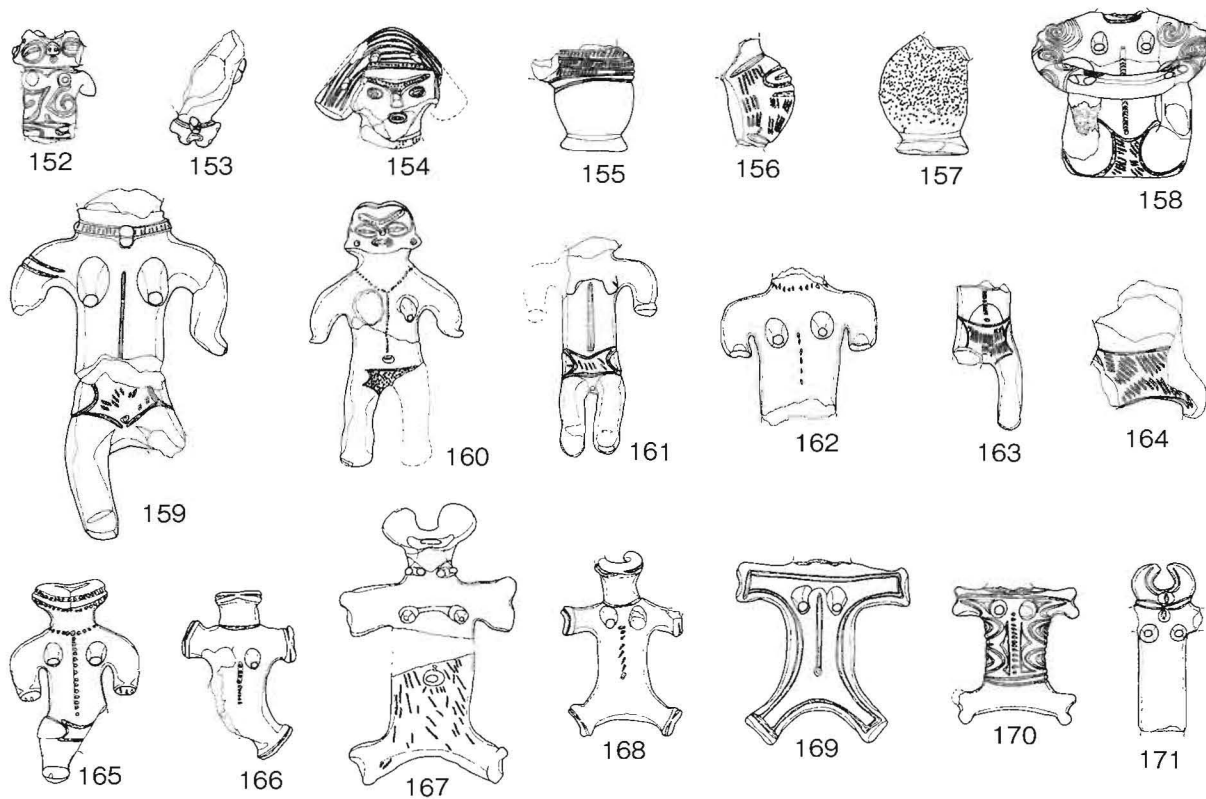
土偶 二枚橋 (2) 遺跡



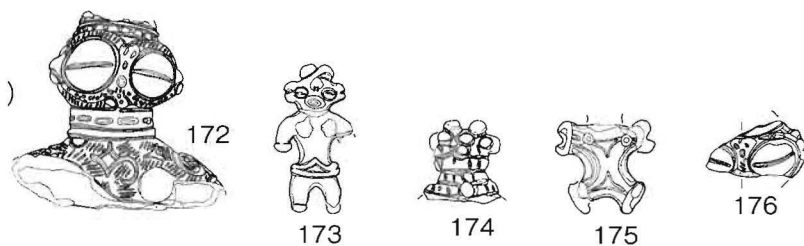
二枚橋 (2) 遺跡 (研究報告 1)



觀音林遺跡 (研究報告 1)



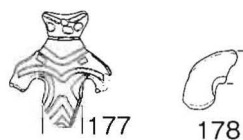
野里遺跡 (研究報告 1)



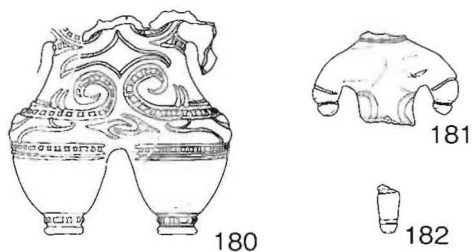
土偶 二枚橋 (2)・觀音林・野里遺跡

土 偶  
仮 面  
土 製 品

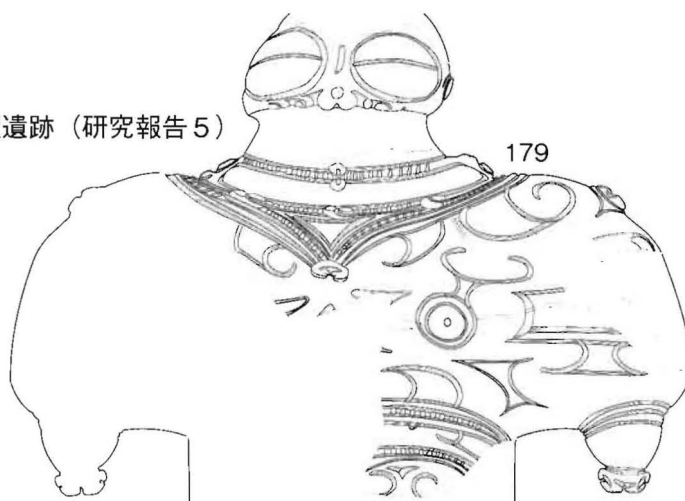
今津遺跡（研究報告2）



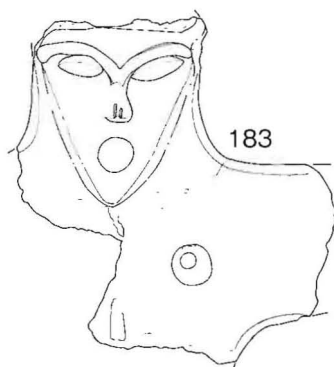
杉沢遺跡（研究報告6）



桂の沢遺跡（研究報告5）



掘合Ⅱ号遺跡（研究報告7）



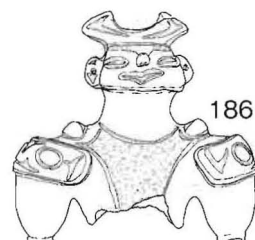
高梨遺跡（研究報告7）



長者屋敷遺跡  
（研究報告7）

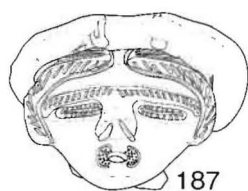


薬師遺跡（研究報告7）

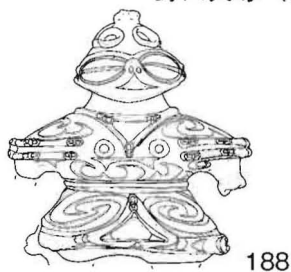


土 偶  
仮 面  
土 製品

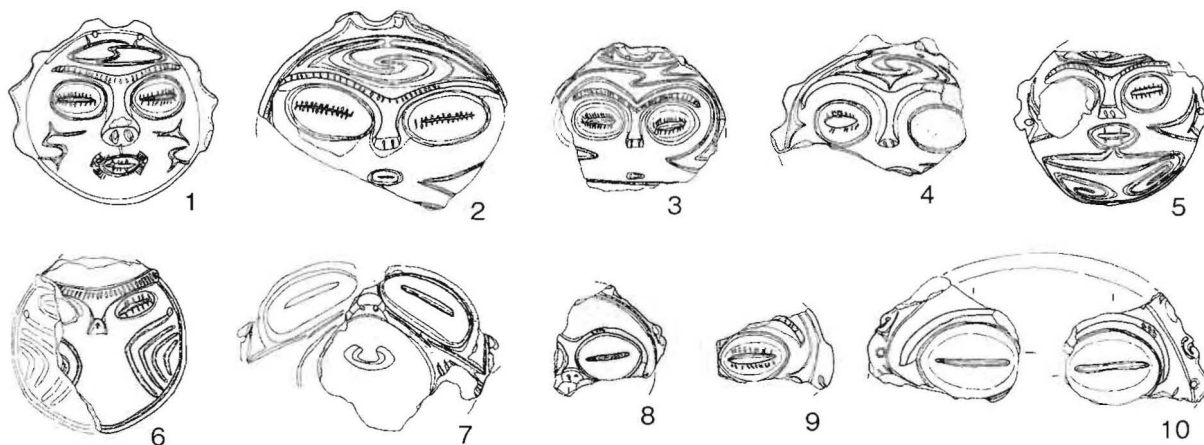
亀ヶ岡遺跡（研究報告7）



野口貝塚（研究報告7）

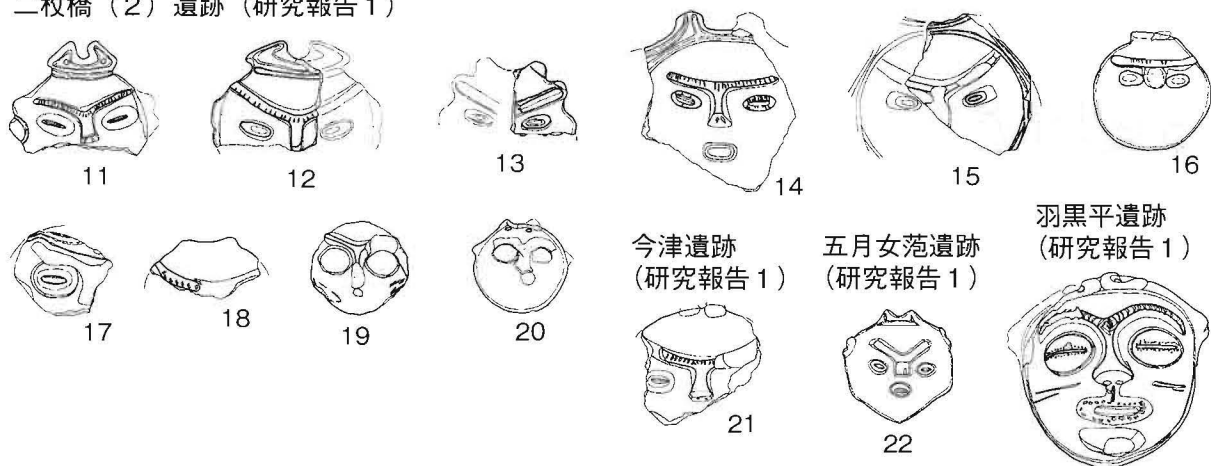


二枚橋（2）遺跡（研究報告1）



土 偶      今津遺跡など、      仮 面      二枚橋（2）遺跡

二枚橋（2）遺跡（研究報告1）



（伝）亀ヶ岡遺跡  
（研究報告1）

鳥舌内  
（研究報告1）

千苅（1）遺跡（研究報告1）

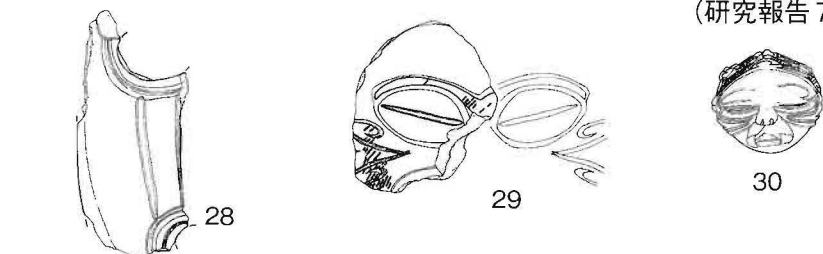
伊保内（研究報告1）



虚空蔵遺跡（研究報告1）

山井遺跡（研究報告1）

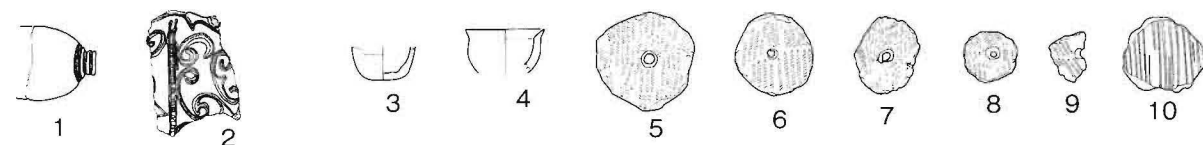
出土地不明  
（研究報告7）



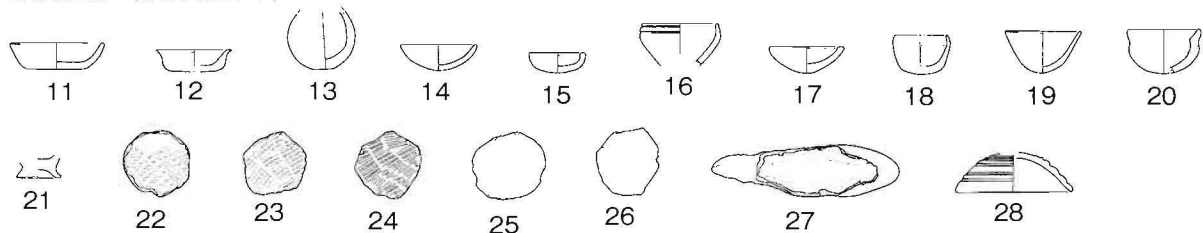
土 偶  
仮 面  
土 製品

野里遺跡（研究報告1）

今津遺跡（研究報告2）



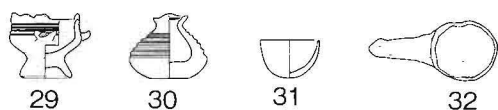
杉沢遺跡（研究報告6）



観音林遺跡（研究報告7）

匙形土製品 1・27・32

蓋形土製品 28



中空土製品 2

ミニチュア（超小型土器）

円板状土製品 5～10・22～26

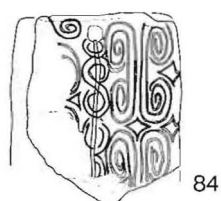
3・4・11～21・29～31

仮面 二枚橋（2）遺跡など、土製品 野里遺跡など

杉沢遺跡 (研究報告6)



薬師遺跡 (研究報告7)



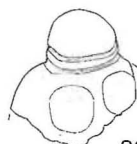
84

道地遺跡  
(研究報告7)



85

道前遺跡  
(研究報告7)



86

観音林遺跡  
(研究報告7)

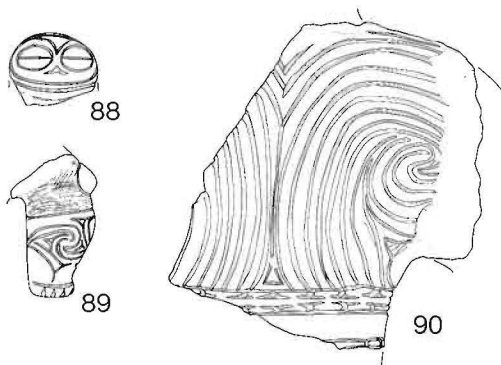


87

石器・岩偶など 杉沢遺跡など



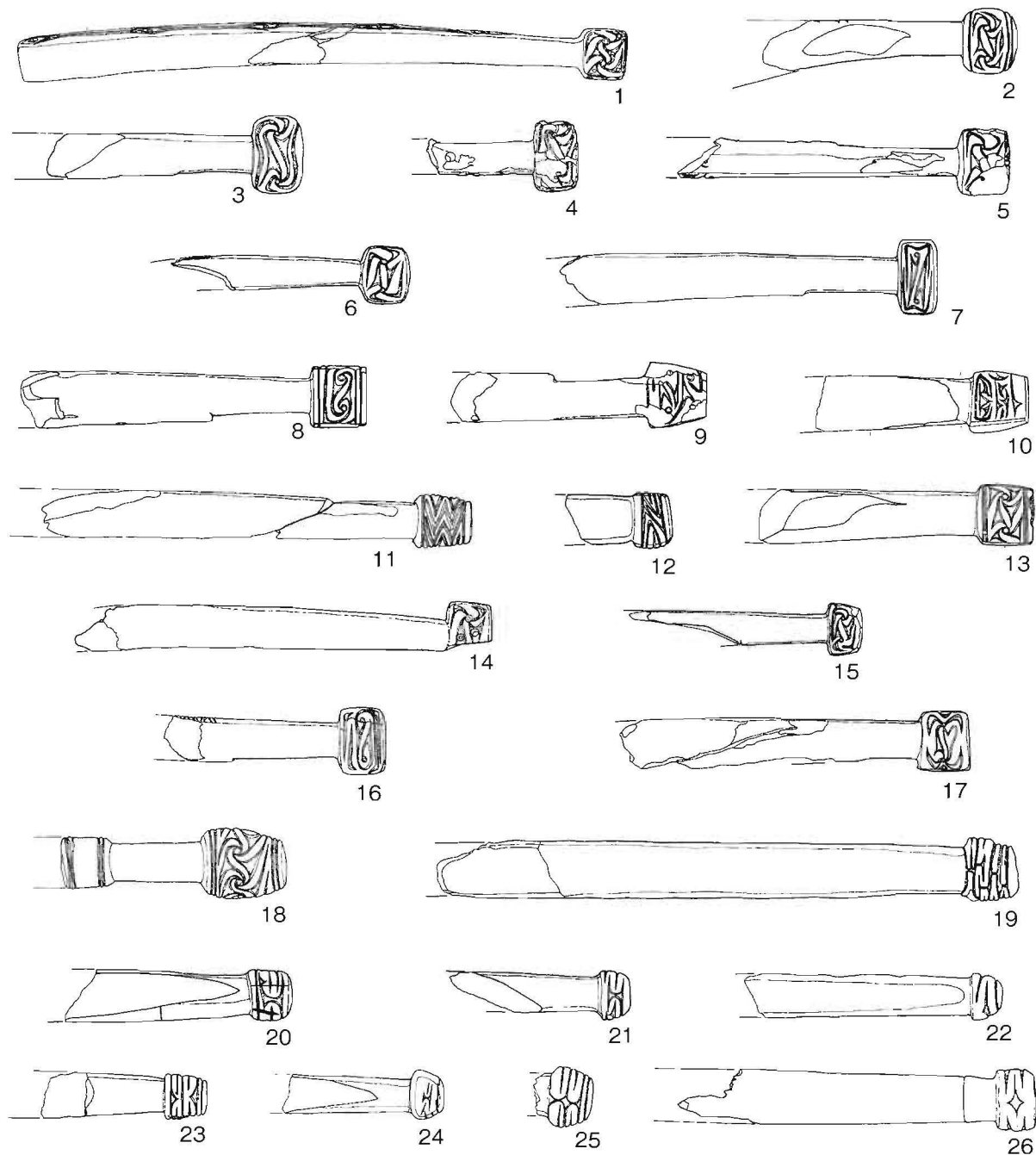
是川中居遺跡（研究報告 7）



石鏃 1～25  
石錐 26～31  
石匙 32～42  
不定形石器 43～59  
石斧（磨製）60～62  
凹石 63～67  
敲石 68  
磨石 69・70

石皿 71  
岩偶 72・73・85～90  
岩版 74・84  
ボタン状石製品 75  
円板状石製品 76～82  
石斧（超小型）83

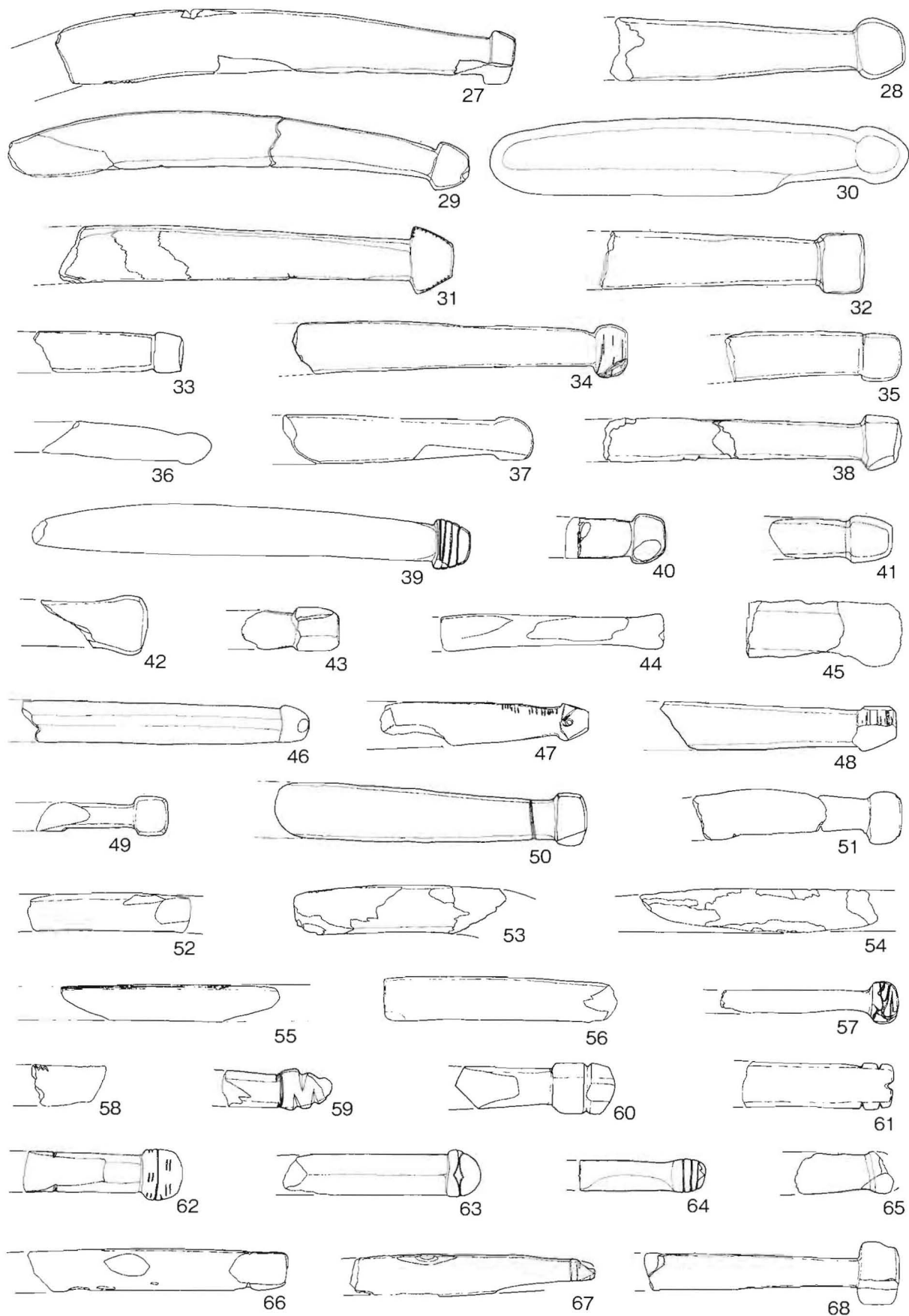
二枚橋（2）遺跡（研究報告 1）



石器  
岩偶  
石製品

岩偶 是川中居遺跡、石刀 二枚橋（2）遺跡

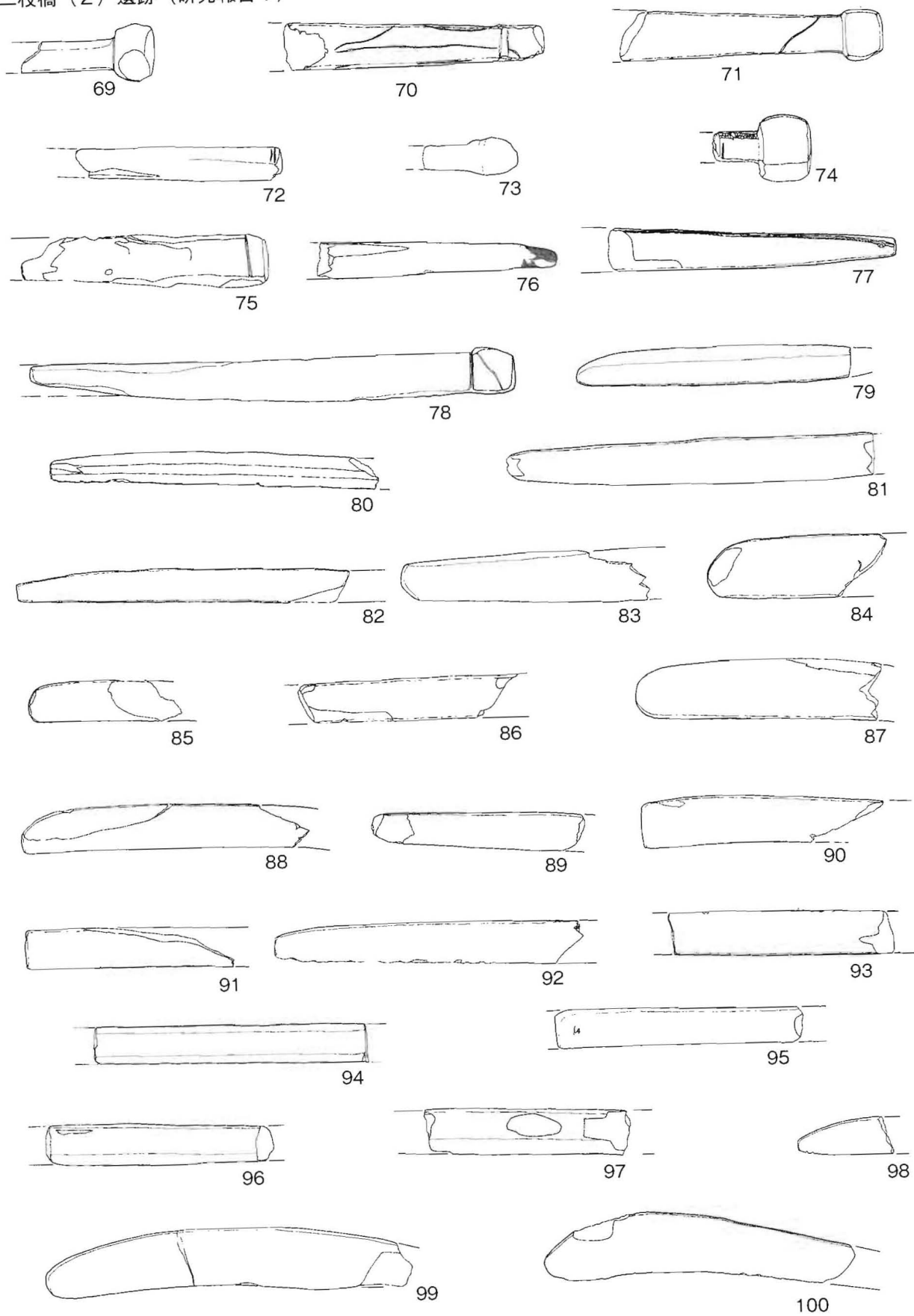
二枚橋（2）遺跡（研究報告1）



石器  
石刀  
石製品

石刀 二枚橋（2）遺跡

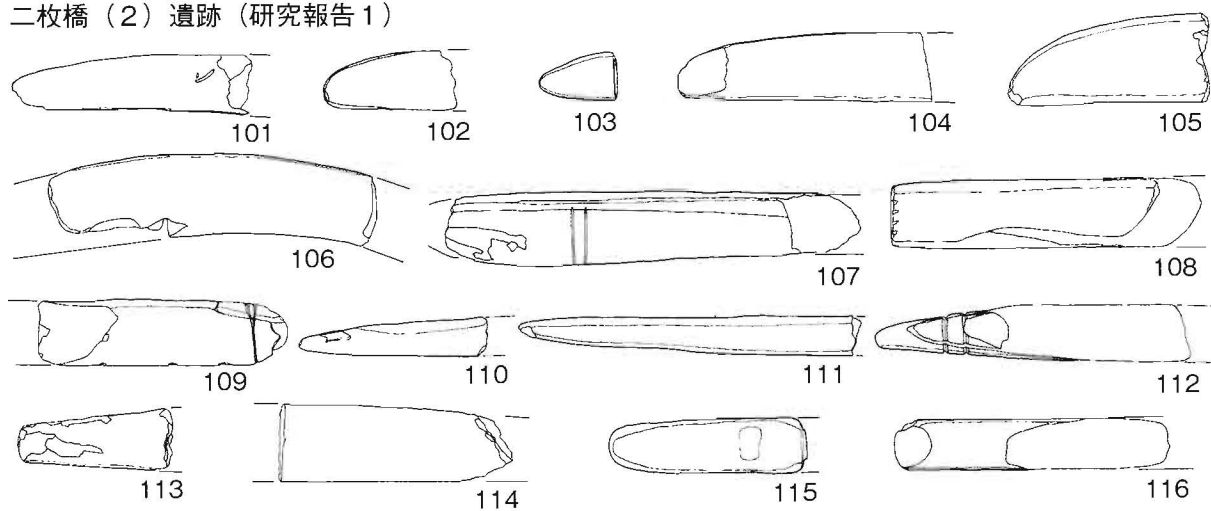
二枚橋 (2) 遺跡 (研究報告 1)



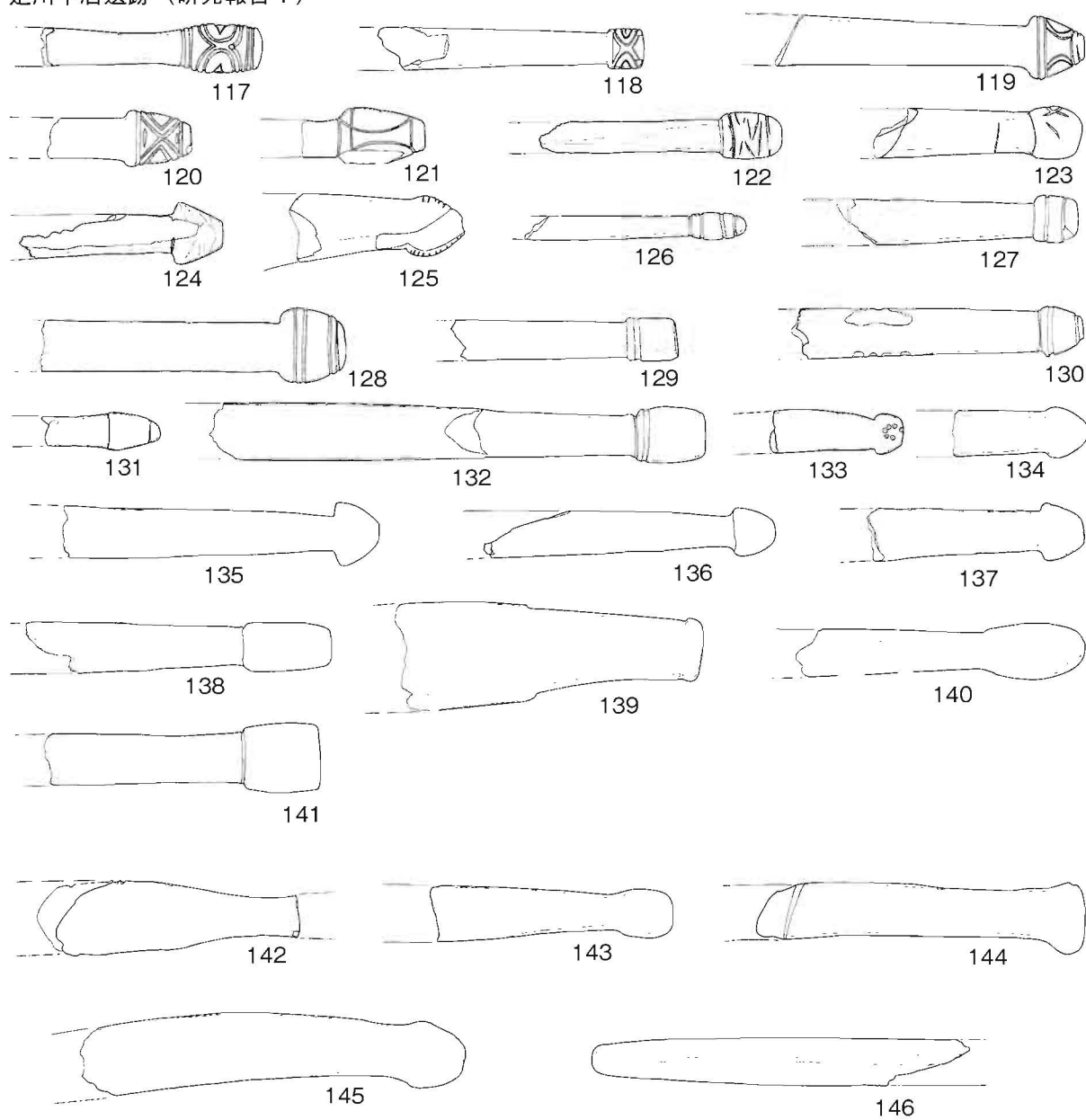
石器  
岩偶  
石刀  
石製品

石刀 二枚橋 (2) 遺跡

二枚橋（2）遺跡（研究報告1）



是川中居遺跡（研究報告1）

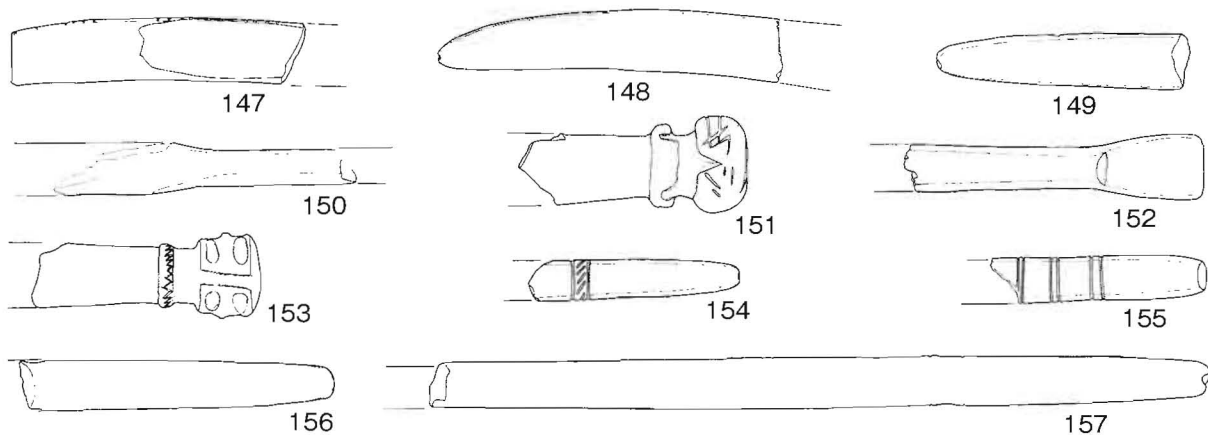


石器  
石刀  
石製品

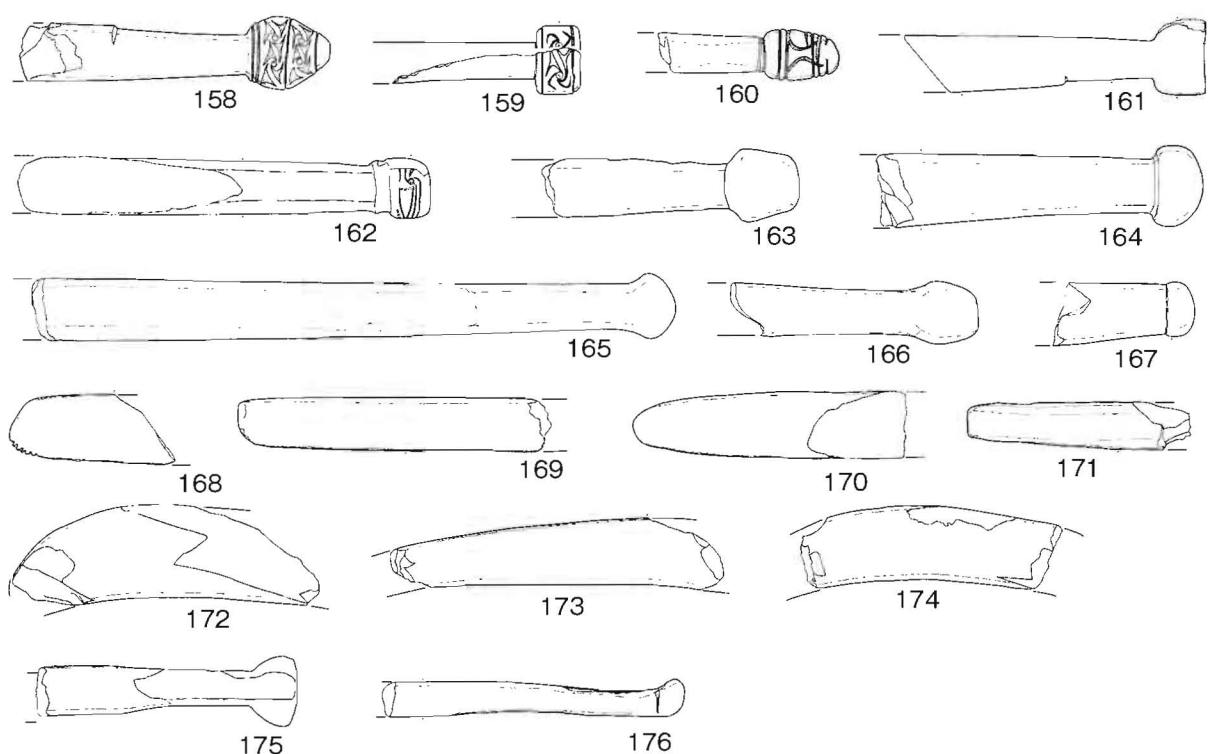
石刀 二枚橋（2）・是川中居遺跡



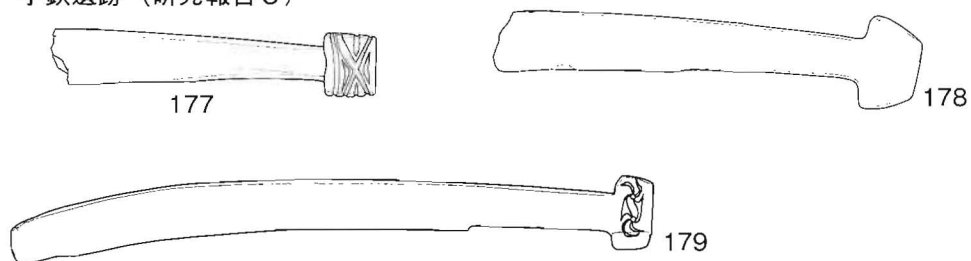
是川中居遺跡（研究報告1）



観音林遺跡（研究報告1）



宇鉄遺跡（研究報告5）



杉沢遺跡（研究報告6）



石刀 是川中居遺跡など

石器  
岩偶  
石刀  
石製品

## 編集後記

今年は研究報告を2冊まとめることができた。私は面白かったが一緒に仕事をする学生は大変であったろう。よくみんな頑張ったものである。とくに3年生の五十嵐さんは上級生の研究を応援して毎日頑張ってくれた。1年生の佐藤千絵さんも頑張って、(1年生のくせに)亀ヶ岡文化の壺を1個資料紹介したし、編集にも大いに協力してくれた。学生にはずいぶん無理をさせたので、その代わり一緒に、市立函館博物館・北方民族資料館、東京国立博物館、山梨県(釈迦堂遺跡博物館・山梨県立考古博物館・山梨県埋文センター・銚子塚前方後円墳)、長野県(井戸尻考古館・尖石縄文考古館・長野県立歴史館・森将軍塚前方後円墳)、愛知県(名古屋城・名古屋市博物館・徳川美術館・愛知県陶磁資料館・瀬戸蔵ミュージアム)、北秋田市森吉山麓遺跡群(森吉山ダム関連)、八戸市縄文学習館・青森県立郷土館、宮城県(東北大学文学部考古陳列室・東北歴史博物館・多賀城跡・多賀城市文化センター・瑞巖寺・里浜貝塚・大木貝塚・雷神山前方後円墳・東北福祉大学芹沢圭介美術工芸館)、岩手県(一戸町御所野縄文博物館・天台寺・浄法寺歴史民俗資料館)、弘前市大森勝山ストーンサークルなどを見て歩いた。そのほか五所川原の立佞武多も見たし、津軽国定公園十二湖の青池にも行った。毎年登ろう登ろうと思っていた岩木山頂にもついに登った。

この研究報告7ができたなら、編集に参加してくれた学生と、四国の土佐市居徳遺跡出土の亀ヶ岡式土器を見に行く約束をしていたが、もう3月である。残念ながら行けそうもない。定年後に一人で四国まで土器を見に行くのはなんとなく淋しい。どうせ行くなら四国88カ所の霊場を遍路してくるか、それもまた面白そうである。

(藤沼 邦彦)

**亀ヶ岡文化雑考集  
(付・研究報告索引)**

(弘前大学人文学部日本考古学研究室研究報告7)

2008年3月31日発行

編集 藤沼邦彦・秋山真吾・宮本明日香・五十嵐 愛・佐藤千絵

発行 弘前大学人文学部日本考古学研究室

弘前大学人文学部附属 亀ヶ岡文化研究センター

〒036-8560 青森県弘前市文京町1番

電話 0172-36-2111(代表)

印刷 川口印刷工業(株) 青森営業所

〒030-0802 青森市本町4-9-15 2階

TEL 017-721-6520



宮城県 里浜貝塚